

第10回
芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査
調査報告書

2020年3月
公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

目次

はじめに

- I. 芸能実演家・スタッフの実態調査の意義と目的 1
- II. 第10回調査のトピックス-10年後の展望 2

第1部 芸能実演家編

- I. 調査集計結果の概観 16
- II. 調査設計・調査回答者について 28
- III. 分析結果詳細 33

(1) 経済状況・景況感について

<活動の状況>

- B-2 (a) 昨年1年間に行った活動 33
- B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数【ベース：各活動にたずさわった人】 34
- B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数（ジャンル別） 35
- B-3 仕事の機会について2～3年前との比較【ベース：各活動にたずさわった人】 39
- B-3 仕事の機会について2～3年前との比較（ジャンル別） 40

<教える仕事の状況>

- B-4 (a) 教える仕事【ベース：各活動にたずさわった人】 44
- B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の数【ベース：各活動にたずさわった人】 45
(学校等に雇われて教えている)
- B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の数【ベース：各活動にたずさわった人】 46
(自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている)
- B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の数の推移 (1) (学校等に雇われて教えている) 47
- B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の数の推移 (2) (自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている) 48
- B-5 現在勤めて（雇われて）教えている学校、教室の種類 (MA) 49

<収入と費用>

- B-6 (a) 昨年1年間の個人収入（ジャンル別） 50
- B-6 (a) 昨年1年間の個人収入（年代別） 51
- B-6 (a) 昨年1年間の個人収入（第9回調査との比較） 52
- B-6 (a) 昨年1年間の個人収入（年代別平均、過去の調査との比較） 53
- B-6 (b) 自らが負担した必要経費の割合 54
- B-7 昨年1年間の活動別収入の割合 55
- B-7 昨年1年間の活動別収入の割合（ジャンル別） 56
- B-8 昨年1年間の収入形式 59
- B-8 昨年1年間の収入形式（ジャンル別） 60
- C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA) 63
- C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費（小ジャンル別） (MA) 64
- E-7 万一の場合や老後に対する備え (MA) 65
- E-7 万一の場合や老後に対する備え（小ジャンル別） (MA) 66

(2) 仕事環境について

<傷害（ケガ）・病気・症状の状況>

- C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験（傷害（ケガ）） 67
- C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験（小ジャンル別）（傷害（ケガ）） 68
- C-3 (b) 昨年1年間に医師の治療が必要となった、仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験 69
- C-3 (b) 昨年1年間に医師の治療が必要となった、仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験（小ジャンル別） 70
- C-4 昨年1年間に経験した仕事上の傷害（ケガ）治療費等の負担状況 (MA) 71
- C-5 仕事の原因と考えられる病気・症状の治療費等の負担状況 (MA) 72

<仕事とインターネットの活用>

- B-9 自分の活動のプロモーションに、インターネットやSNSなどを活用しているか (MA) 73

<契約書について>

- B-10 (a) 実演の録音・録画にかかる契約書 74

<コンテンツの二次利用と使用料>

- B-10 (b) インターネットで利用するための音楽・映像への参加、出演にかかる契約書 75
- B-11 参加したCD、放送番組、劇場用映画がインターネットで利用される場合の状況 (MA) 76
- B-12 インターネットで利用するための音楽、映像作品がインターネット以外で利用された場合 77

(3) 仕事や生活に対する考え方	
C-6 (a) 10年後も今の仕事を続けていると思うか	78
C-6 (b) 10年後、今の仕事を続けていないと思う主たる理由 (3LA)	79
D-1 (a) 仕事に対する考え方について	80
D-1 (a) 仕事に対する考え方について (ジャンル別)	81
(4) より良い活動を続けていくために	
C-1 仕事上の問題点 (MA)	86
C-1 仕事上の問題点 (小ジャンル別) (MA)	87
D-2 技術・技能を向上させるための必要条件 (3LA)	88
D-3 安心して活動していくための必要条件 (3LA)	89
D-4 協会、連盟、協議会などの統括団体に期待すること (3LA)	90

第2部 スタッフ編

I. 調査集計結果の概観	92
II. 調査設計・調査回答者について	97
III. 分析結果詳細	
(1) 経済状況・景況感について	
B-1 (a) 昨年1年間に行った仕事 (MA)	101
B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数【ベース：各仕事にたずさわった人】	102
B-1 (c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数【ベース：各仕事にたずさわった人】	103
B-2 仕事の機会について2～3年前との比較【ベース：各仕事にたずさわった人】	105
B-3 (a) 昨年1年間の個人収入	108
B-3 (b) 自らが負担した必要経費の割合	110
B-4 昨年1年間の活動別収入の割合	111
C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)	114
E-7 万一の場合や老後に対する備え (MA)	115
(2) 労働環境について	
B-5 (a) 雇用形態	116
B-5 (b) 契約形態で最も多いもの	117
B-5 (c) 昨年1年間で仕事が入らずスケジュールが空いた日数	118
< 傷害 (ケガ)・病気・症状の状況 >	
C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (傷害 (ケガ))	119
C-3 (b) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (病気・症状)	120
C-4 昨年1年間に経験した仕事上の傷害 (ケガ) 治療費等の負担状況 (MA)	121
C-5 仕事の原因と考えられる病気・症状の治療費等の負担状況 (MA)	122
(3) 仕事や生活に対する考え方	
C-6 (a) 10年後も今の仕事を続けていると思うか	123
C-6 (b) 10年後も今の仕事を続けていないと思われる主たる理由 (3LA)	124
D-1 仕事に対する考え方について	125
B-6 仕事に関してあてはまること	131
B-7 (a) 「働き方改革」での仕事環境の変化	133
(4) より良い活動を続けていくために	
C-1 仕事上の問題点 (MA)	135
D-2 技術・技能を向上させるための必要条件 (3LA)	136
D-3 安心して活動していくための必要条件 (3LA)	137
D-4 協会、連盟、協議会などの統括団体への期待 (3LA)	138

巻末資料 調査票・集計結果

調査票 【芸能実演家編】	140
調査票 【スタッフ編】	155
調査票発送協力団体一覧 (分野別区分)	169

はじめに

I. 芸能実演家・スタッフの実態調査の意義と目的

芸団協では、1974年から5年ごとに実演家の活動と生活についての実態調査を実施してきました。最初に出された調査報告書は、当時の正会員団体27の協会の実演家が対象で、報告書も45ページの薄い冊子でしたが、「はじめに」には、芸団協の先達たちが、なぜ実態調査に取り組んだか、その思いがつまっています。

「……わが国の芸能文化を作り上げている芸能人の生活実態とその意識を私たち自身がまず正しく知ること、その在るがままの姿と、そのなかにあるいろいろな問題点を社会へ伝達することが、私たちの責任である」

以来45年、今回の調査で10回目を数えます。芸団協正会員団体が増加し、また映像関係のスタッフの協会の協力を得るようになったことを受けて、第10回調査は73団体の協力を得て実施しました。5年に1回、芸能実演家に対する唯一の大規模調査として、調査結果は、国や地方公共団体が芸術振興策を策定する際に参照されたり、芸術系大学で学生に将来のキャリアを考えさせるための文献として用いられたりしてきました。第7回の2004年からは、実演家とスタッフの設問用紙を分けて調査を実施するようになり、報告書タイトルも『芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査』となりました。また第7回調査では、アニメーターを対象とした調査にも取り組みました。これは、わが国のコンテンツ産業の中で重要な位置を占めるアニメーション産業を支えるアニメーターの実態が掴めていないことから現状把握を試みたものです。2001年に文化芸術振興基本法、2003年に知的財産基本法、そして2004年にはコンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律が施行され、文化芸術をとりまく諸制度が変わろうとしている背景がありました。その後、日本アニメーター・演出協会の発足により、より広範囲のアニメーターを対象とした調査体制が整い、アニメーション制作者実態調査も別途、継続的に行われるようになりました。

我が国には、伝統的な芸能から、明治以降に欧米から移入され定着した実演芸術、マスメディアの発達によって発展、普及したものまで、古今東西、様々なルーツを

もつ実演芸術が多種多様に共存しています。その担い手である組織も、実演家の活動の場も多様で、その全容を把握するのは、容易ではありません。実際、個人を対象とした調査だけでなく、芸能を担う様々な組織の状況や人々の文化享受の傾向、文化産業の動向などもあわせて見ていかなければ、今日の実演家、スタッフの姿は明確な輪郭を持ち得ないでしょう。

本調査は、我が国の実演芸術の一側面を伝えることしかできません。それでも、実演家やスタッフがどのような活動に従事しているのか、どのような意識で仕事に取り組んでいるのか、冒頭に掲げたような実演家自身の責任感に基づき、「5年に1度、数字で把握できる」ことの意味は大きく、今日の我が国の実演芸術の状況を伝える一調査として活用し得るものであると考えています。

本報告書では、多くのページで5年前の第9回調査結果を参考として示しており、項目によっては、過去数回の調査結果も合わせて推移を示しています。厳密には、若干、調査手法に変更があり、単純比較が適当でない部分もありますが、経年変化を捉えられるよう示しました。本調査は、芸団協正会員団体等、実演家やスタッフの専門団体に所属している人々を調査対象としています。そのため我が国で活動している芸能実演家、スタッフの全体が対象になっているかということ、協会組織に所属していない若い実演家、スタッフが増えている現状では、ある範囲に限定されていると言えます。しかし、多種多様な実演芸術のかなりの範囲を含み、1974年以来ほぼ一貫して、芸団協傘下の実演芸術の専門家団体等に所属している実演家、スタッフの範囲という枠組みで行われてきた調査として、その傾向、変化の分析をしています。また協会組織の現況を示すことも大切なことであると考えています。

芸能実演家の活動は、舞台等への出演、映画・放送・メディアの仕事、教える仕事（教授業）の3つに大別され、芸能の分野・個人により、それぞれの活動の割合は異なっています。それは我が国の多様な芸能それぞれの成立基盤や発展の歴史が異なるからです。これまでの9回の調査結果から、おおよそのジャンル別傾向は掴めており、本報告書でも多くの分析を8つのジャンルに分け、

その内訳で示しています。

実演芸術にかかわる様々な団体、個々人が、それぞれの立場から本調査の結果を読み込み、それぞれの課題解決に向けて活用していただきたいと願っています。本調

査が、芸能振興の諸方策を講ずるための参考資料として活用され、幅広い方々に実演芸術の実状を理解していただけるようになることを願ってやみません。

Ⅱ. 第10 回調査のトピックス :10 年後の展望

本調査は、調査の集計・分析作業は調査の専門家に依頼していますが、芸能実演家部門とスタッフ部門それぞれにプロジェクト委員会を設置して、様々な分野の現場にいる実演家やスタッフの目から見て、調査票の設問の設計や、まとめ方について検討を加えつつ進めてきました。実演家やスタッフの実感に照らし合わせて見て、説得力のある調査結果になっているのかどうかを大切にしたいからです。

第10回実態調査の設問票は、基本的には5年前の第9回の調査票を土台としており、実演家、スタッフそれぞれに向けた設問と、実演家とスタッフに共通で回答してもらう共通設問から構成されています。実演家部門の調査票は、調査対象を「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇・メディア」「洋舞」「演芸」「演出・制作等」の8ジャンルに分類して異なる色の調査票とし、どのジャンルからの回答かが分かるようにして集計・分析しています。

スタッフ部門については、映像系もライブ系も同一の設問票で調査しています。回答者の負担感を考慮し、設問はできるだけ少なくするよう努めました。今日の状況の変化を実演家やスタッフがどう受け止めているか把握したいという意向も強く、実演家対象の質問には、インターネットの影響について問う設問を追加しました。また、実演芸術に携わる実演家やスタッフが、自分の仕事の将来をどのように展望しているのかを問うために、「10年後も今の仕事を続けていると思いますか」という設問を実演家・スタッフの両方に追加しました。

以下に、実演家、スタッフが「10年後も今の仕事を続けていると思いますか」という設問への回答結果の集約と、プロジェクト委員による受け止め方についてまとめます。

「10年後も今の仕事を続けていますか」

「10年後も今の仕事を続けていますか」という問いに対して、実演家全体では約3分の2が「はい」と答えており、「スタッフ」では、「はい」と「いいえ」が、ほぼ半数ずつという結果です。

「いいえ」と回答した人に、続けていないと思われる理由を選択肢から3つまで選ぶ形で尋ねたところ、実演家では、「年齢的に現役でなくなると思うから」が最も多く(64.6%)、次いで「体力的に続けられないと思うから」(47.3%)、3番目の理由は「収入が低いから」(19.3%)となっています。スタッフでも最も多かったのは「年齢的に現役でなくなると思うから」(83.6%)、次いで「体力的に続けられないと思うから」(53.6%)ですが、3番目は「弟子、生徒の数が減っているから」(27.3%)という結果です。

実演家、スタッフともに、10年後も「年齢」を考えて「体力」が持つだろうかという不安が大きいことが見てとれますが、ジャンルや年齢など、回答者の属性とのクロス集計をしていくと、実演家やスタッフが感じている不安の実像が、もう少し見えてきます。

10年後の展望、実演家にとっての不安

まず、実演家についてですが、回答者の平均年齢が53.4歳で、50歳以上が過半を占めているため、60代、50代の中高年が「年齢」「体力」に不安を持つのは頷けます。実際、「いいえ」すなわち続けていると思えないと回答した割合は、70歳以上では「はい」の回答を上回っています。そのほかの年代別の回答を見てみると、「20～29歳」で「いいえ」が37.6%と「60～69歳」に次いで多い割合になっており、30代、40代になるにつれ「いいえ」の割合が減って、50代で再度「いいえ」の割合が増えています。20代については、この道が本当に自分に合っている仕事なのか確信が持てないのだろうと推測されます。これは、一般企業への新卒就職者においても、3年以内離職者の割合が約3割と言われており、20代で自分がこの仕事を続けていけるか不安に感じることは、実演家に限ったことではなさそうです。しかし、収入が仕事に応じて支払われる不安定さや、収入の低さが顕著なジャンルでは、不安に思う傾向は給与所得者より強まると考えられます。

＜実演家 8 ジャンル別、続けられないと思う理由＞

ジャンル別に、「いいえ」と回答した人があげた理由を見てみると、8 ジャンルそれぞれに特徴があることがわかります。

「邦舞」では、「年齢」「体力」に次いで3 番目の理由が「弟子、生徒の数が減っているから」(46.6%) となっています。活動別収入の割合についての設問 B-7 の結果から、教授業が中心のジャンルであることが明らかで、弟子、生徒の減少が問題と感じられていると推察されます。「邦舞」の回答者のプロフィールを見ると4 分の3 が女性であり、60 歳以上が45.5%で、1 年間の個人収入は「100 万円未満」が最も多く、世帯主である割合は49.7%となっています。収入の活動別内訳を集約してみると39.0%が芸能活動以外からの収入です。こうしたことを考え合わせると、舞踊家として生計をたてている人の割合はごく限られているジャンルです。続けられない理由として4 番目、5 番目に「この分野の仕事が先細りだと思うから」(17.2%)、「収入が安定しないから」(15.5%) という回答があがっています。問 B-1 (a) で、所属先として「芸を継承する流派、一門、社中」が93.3%という最も高い割合となっていますが、各流派等の慣行に従ってキャリアを重ねてきたけれども「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」(問 C-1 35.2%) という悩みがあるように推察されます。

「邦楽」も、「続けられないと思う」理由として「年齢」「体力」をあげている人が大半で、3 番目に多い理由は「邦舞」と同じく、「弟子、生徒の数が減っているから」(33.7%) です。やはり教授業が多いジャンルです。「邦楽」の中には、いろいろな小ジャンルが含まれていますが、4 分の3 が女性であり、60 歳以上が7 割近くで、1 年間の個人収入は「100 万円未満」が最も多く、世帯主である割合は37.3%と8 ジャンル中最も低く、活動別収入の総計では、64%が芸能活動以外からの収入となっており、邦楽演奏家として生計をたてている人は限られているジャンルと考えられる点で「邦舞」と類似しています。このような伝統的な芸能のジャンルでは、師弟関係が大事にされているので、先生が協会に所属していると、職業的に実演家として活動していない弟子でも協会員になっている場合が多く、協会員所属という範囲で集約すると職業の実演家が少ないという結果になります。

「伝統演劇」は、具体的には「能楽」「歌舞伎」「文楽」「組踊」(ここでは小ジャンルと呼ぶことにします) を対象としており、それぞれの実演家の仕事の仕方、活動パターンも異なるため、「伝統演劇」として総合すると、小ジャンルの特性が見えにくくなる恐れがあります。今回の調

査では、問 A-1 (b) への回答内訳をみると、「能楽」が146 人、「歌舞伎」が28 人、「人形浄瑠璃・文楽」が11 人、「組踊」が2 人となっていますので、「能楽」の特徴が「伝統演劇」の傾向として表れやすいと考えられます。「伝統演劇」で「10 年後も今の仕事を続けていますか」の設問に「いいえ」と答えた人が、その理由として「年齢」(80.3%)、「体力」(62.1%) に次ぐ3 番目にあげたのは、「弟子、生徒の数が減っているから」(22.7%) でした。「教える仕事」を7 割が行っているジャンルなので、「邦舞」「邦楽」と同様の理由が考えられます。「自分にくる仕事が減っているから」という回答も18.2%と高めです。

「洋楽」は、「はい」と回答した割合が8 ジャンル中2 番目に多いジャンルです。続けられないと思う理由として最も多かったのは、他ジャンル同様「年齢」(77.8%) ですが、「体力」をあげた人は33.3%と8 ジャンル中最も低く、3 番目にあげられていた理由は「自分にくる仕事が減っているから」(19.0%) でした。「洋楽」は、8 ジャンル中、「芸能活動以外の仕事」をしている人の割合が最も少なく(問 B-2 (a)、問 B-7)、実演家としての仕事だけで生計を立てている人が多いジャンルです。「洋楽」の中にもいろいろな小ジャンルが含まれており、「洋楽」全体を総合すると「舞台、コンサート、ライブなど」への出演から得ている報酬の方が「教える仕事」からの報酬より割合としては高いですが(問 B-8)、教授業をしている人が7 割以上います(問 A-2 (a))。ステージ出演、教授業ともに仕事の依頼の動向が気になるのだと思われます。

「洋舞」では、続けられないと思う理由として、やはり「年齢」(71.7%) と「体力」(57.6%) が高いのですが、「収入が低いから」が26.7%、「弟子、生徒の数が減っているから」が23.7%となっています。「洋舞」では携わっている仕事として9 割近くの人が教授業をしていると回答し、最も比重の大きい仕事としても約半数が教授業を選んでおり、8 ジャンルの中で群を抜いて教授業の比重が高いジャンルです。活動別収入の内訳も「教える(指導・教授) 仕事」(53.4%) で、8 ジャンル中で最も教授業からの収入が高くなっています。P.47、48 に示すように、実演家1 人あたりが教える生徒数は、過去20 年の推移を見ると減少傾向にあり、教授業から得られる収入は容易には増加させにくい状況があるのではないかと推察されます。

「現代演劇・メディア」では、続けられないと思う理由として「年齢」(41.7%) が最も多いとはいえ、「体力的に続けられないと思う」(18.1%) よりも、「収入が安定しないから」(30.6%)、「収入が低いから」(26.4%)、

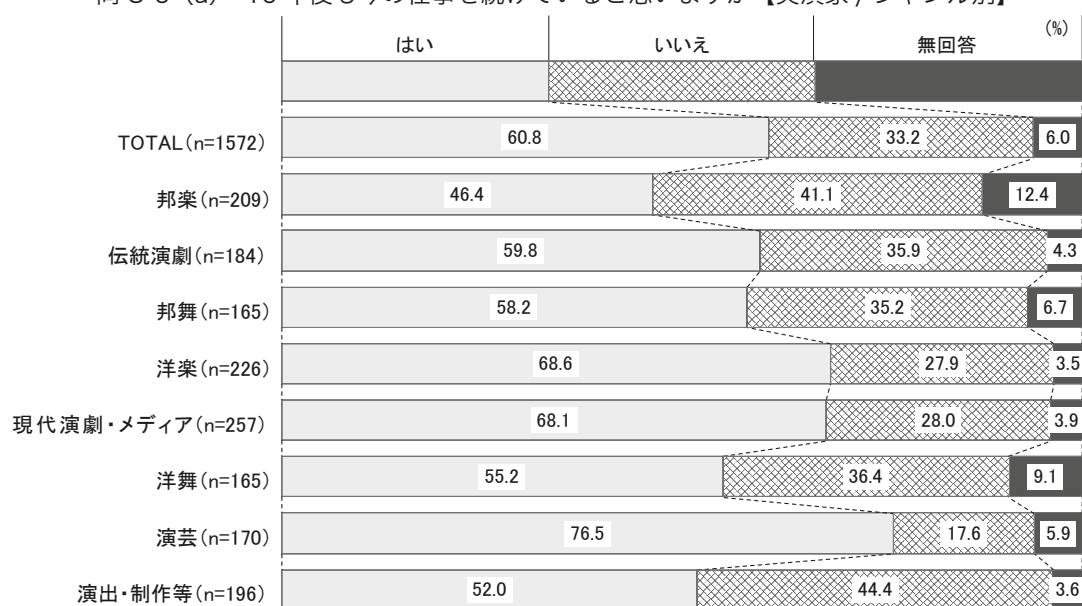
「所属先の事業の先行きが不透明だから」(19.4%)の方が理由として多く選ばれています。仕事上の問題点として、このジャンルは「仕事が単発で継続して仕事がない」「仕事のスケジュール調整がむずかしい」という選択肢が、他ジャンルより高い割合で選択されており(問C-1)、体力的な不安より、仕事を得ることの困難を感じている人が多く、関係性の中で仕事を得られたり得られなかったりするジャンルの特性がうかがわれます。また、「介護など、家族の事情で」(12.5%)が他ジャンルに比べて多いのが目立っています。

「演芸」は、「いいえ」と回答した割合が8ジャンル中

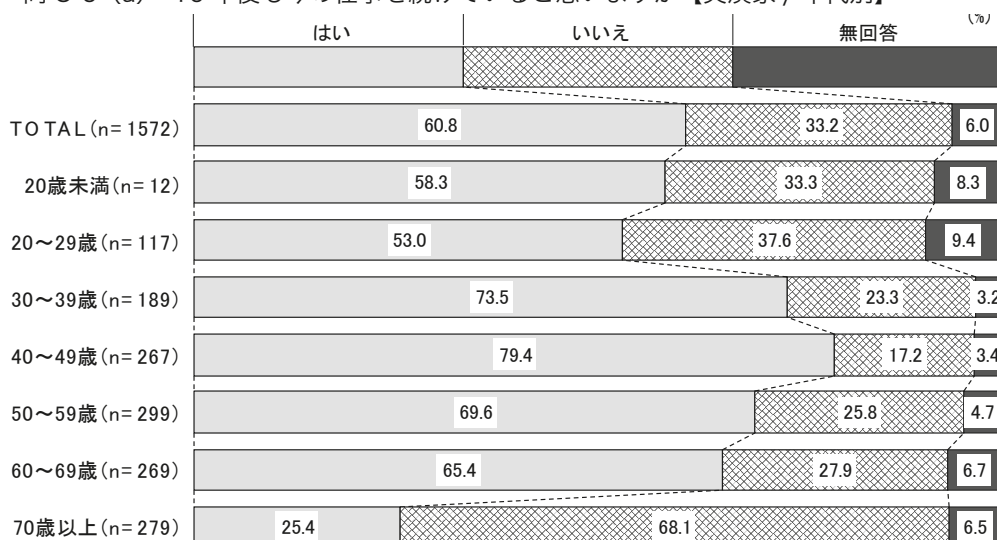
最も少ないジャンルです。つまり、10年後も現在の仕事を続けているだろうと予測する実演家が大多数となっています。

これは、演芸部門の協会に所属している実演家は、同じ伝統芸能系であっても「邦楽」「邦舞」とは違って、プロの実演家に入門して修行し、プロとして活動をしている人に限られているので、そうした調査対象の特徴によると考えられます。続けられないと思う人は少数派ですが、理由としては、やはり「年齢」や「体力」の割合は高くなっています。3番目に「収入が安定していないから」(33.3%)があげられており、8ジャンルの中では

問 C-6 (a) 10 年後も今の仕事を続けていると思いますか【実演家 / ジャンル別】



問 C-6 (a) 10 年後も今の仕事を続けていると思いますか【実演家 / 年代別】



* 20 歳未満はサンプル数 30 未満だが参考として示している

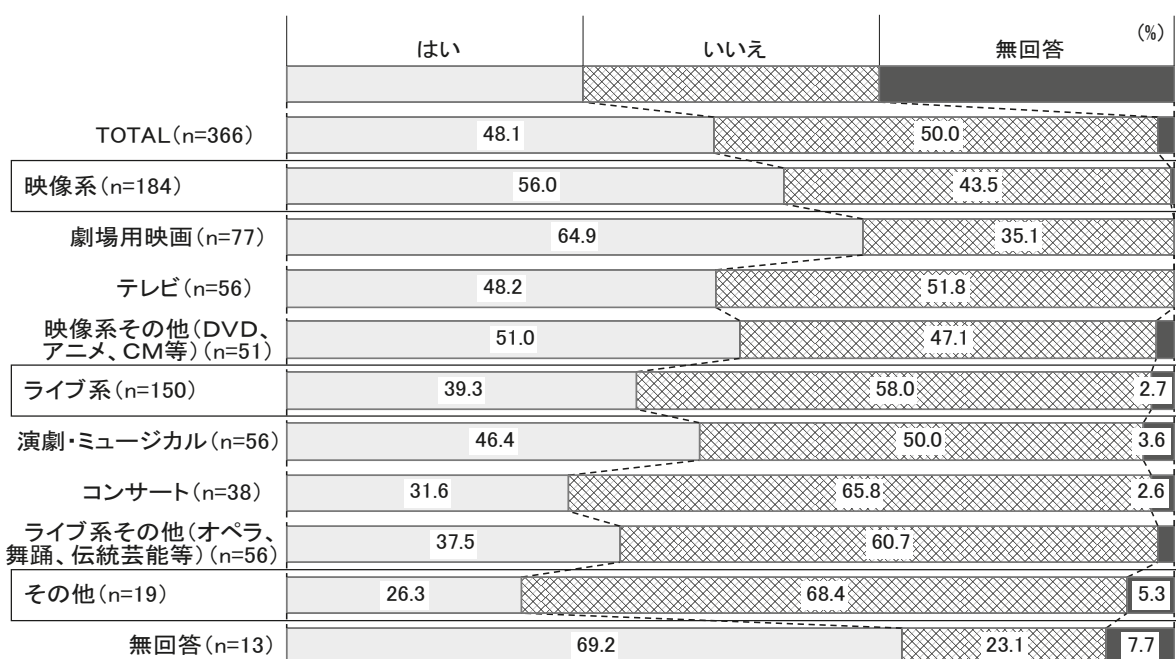
最も高い割合となっています。

「演出・制作等」では、「年齢的に現役でなくなるから」という回答は36.8%と、ジャンルの中では最も低い割合で、「体力的に続けられない」の40.2%よりも低いです。「収入が低いから」(33.3%)、「所属先の事業の先行きが不透明だから」(26.4%)、「関連する他の仕事に移行したいから」(14.9%)が、他ジャンルより多くなっています。これは、演出家や制作に従事する人達が、潜在的に、キャリアアップ、キャリアシフトを希望しているからではないかと推察されます。

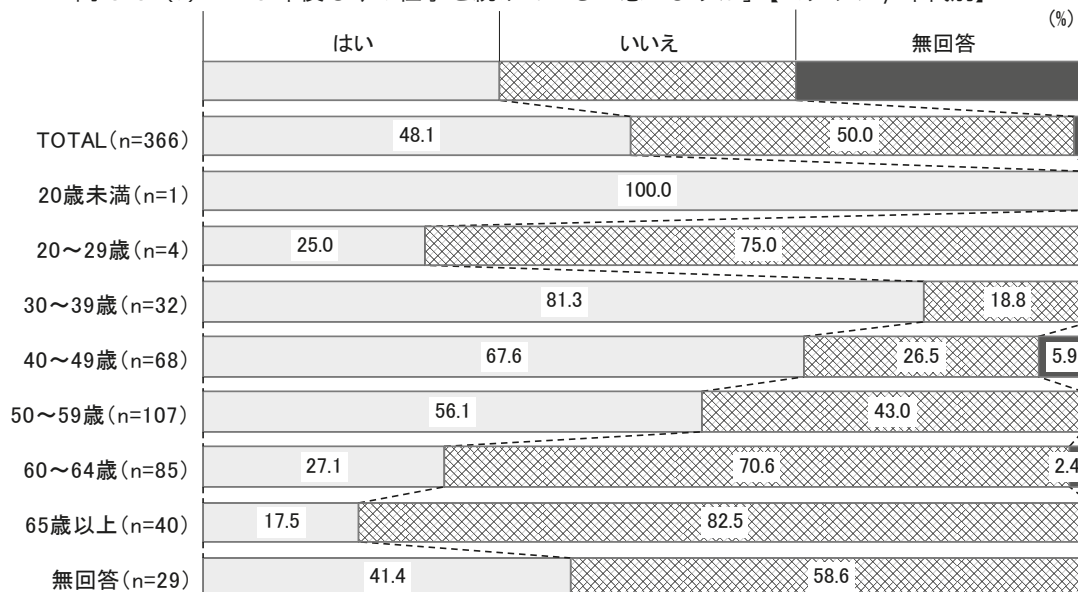
スタッフの10年後の展望

スタッフの回答の分析にあたっては、問 A-1 (b) で回答された最も比重が大きい活動分野を元に映像系とライブ系にジャンルを分けて分析しています。「10年後も今の仕事を続けていますか」という問いに対して、「スタッフ」全体では、「はい」と「いいえ」がほぼ拮抗していましたが、「映像系」では「はい」と「いいえ」が56.0%対43.5%と、継続見通しの方が上回っているのに対し、「ライブ系」では39.3%対58.0%と、継続できないという見通しの方が上回っています。

問 C-6 (a) 「10年後も今の仕事を続けていますか」【スタッフ / ジャンル別】



問 C-6 (a) 「10年後も今の仕事を続けていますか」【スタッフ / 年代別】



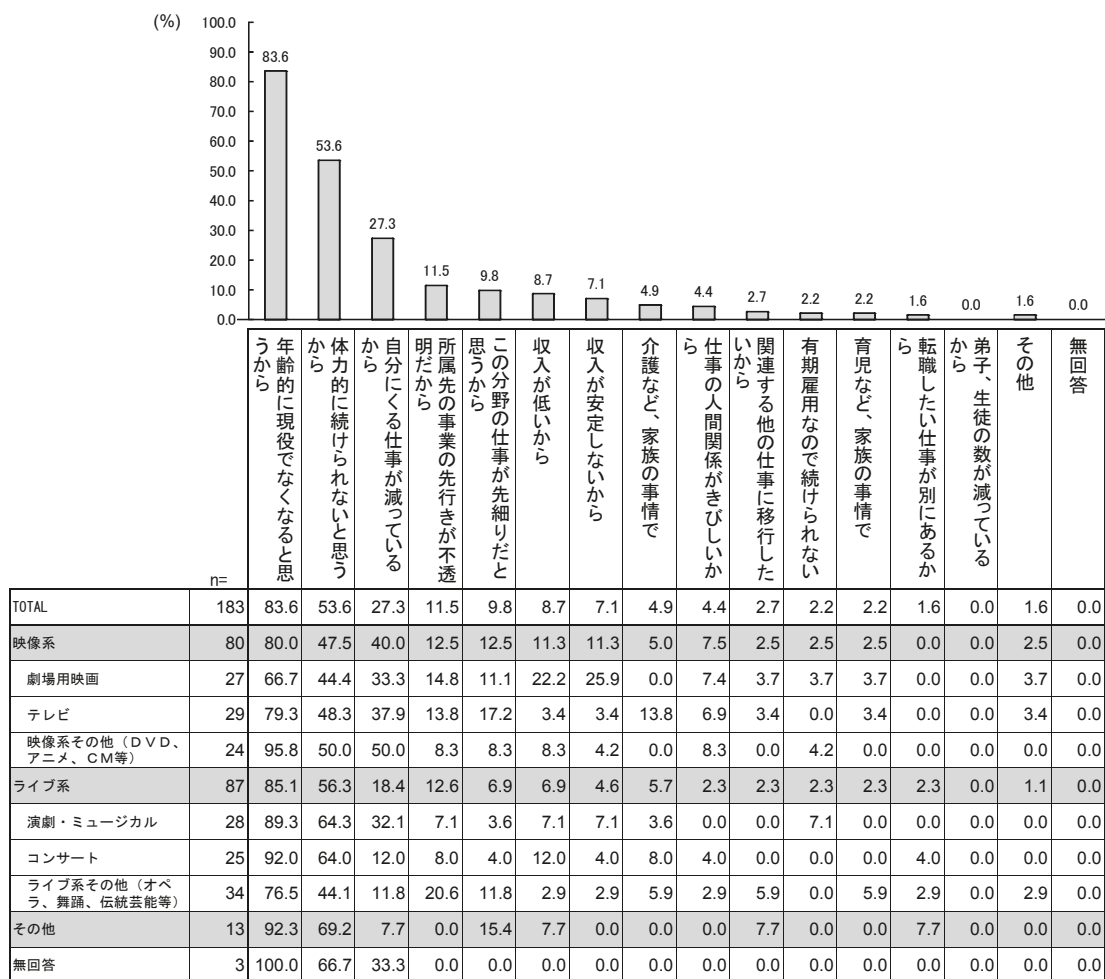
* 30歳未満はサンプル数30未満だが参考として示している

年代別に見てみると、29歳未満はサンプル数が少ないので考慮しないとしても、30代、40代、50代と、年齢が上がるにしたがって、10年後続けていると思う割合が減っています。「60～64歳」では、「はい」と「いいえ」が約3対7、「65歳以上」では約2対8となっています。これは、実演家部門では、「60～69歳」で「はい」対「いいえ」が7対3になっているのと対照的で、年齢や体力に不安を感じながらも、実演家は生涯現役でいることが可能なのに対し、「スタッフ」は、年齢と体力の

限界を強く感じていると共に、スタッフ会社等に雇用されて働いている立場の人が多くことにも起因していると思われます（問B-5参照）。

続けていないと思う理由についての回答を見ると「年齢」（83.6%）、「体力」（53.6%）が多いですが、3番目には「自分にくる仕事が減っているから」（27.3%）となっています。仕事が少なくなっていることに対する危機感、特に映像系に強いようです。

問C-6（b） 10年後も今の仕事を続けていないと思われる主たる理由（3LA）【スタッフ／ジャンル別】



* サンプル 30 以下は参考値として表示

実演家部門

上原 真佐輝(箏曲演奏家・日本三曲協会)

「邦楽」の集計結果を見て、まず注目したのが、平均年齢66.8歳と全ジャンルの中で最も高く、芸歴も45.6年と極めて長いことです。そして7割以上が女性で、1年間に行った活動、活動日数、活動別収入の割合などを見ていくと、演奏家としての活動で生活しているのではない人が多いということ。委員会の折にも言及したのですが、プロの演奏家というよりは、師範といっても副業として少し教授業をしているくらいという人が邦楽部門の協会員には多く含まれています。同じ音楽でも、「洋楽」は音楽以外の仕事をしている人が少ないという結果が出ているので、同じ調査対象に入れてしまってよいのだろうかという疑問に思ってしまうほどでした。そうした違いはありますが、だからといって邦楽演奏家みんなが副業的なのかというと、数は少なくとも忙しく活動しているプロはいますし、演奏家としてやっていきたいという若い人もいます。インターネットの活用について集計結果では、活用している人が半分程度と、邦楽は活用者が少ないジャンルでしたが、演奏家としてがんばって

いきたいという若手は、ちゃんとネットを使った情報発信はしています。

「協会組織に期待すること」を問う質問で、「邦楽」では「次世代の育成に取り組むこと」が1位に来ていました。それだけ、後継者育成が重要だと思いつつながら困難も感じている証ではないかと思います。教授業に関する質問の結果からは、回答した41人のうち半分近くが、「小・中学・高校」で教えているというのですが、それだけ学校で指導をしながら「次世代の育成に取り組むこと」ができていないと感じているというのは、プロを目指す人を指導できていないということなのでしょう。そういう中で、「10年後も今の仕事を続けていますか」という設問は、われわれ邦楽演奏家にとっては、何とも回答しにくい問いかけだったように思います。高齢の実演家が多いジャンルですが、世代交代も始まっていて、これから、若手演奏家が活躍できるようになっていくくれたらよいのですが。

西川 扇与一(舞踊家・日本舞踊協会)

10年後という設定が絶妙であると考えます。

日本舞踊は戦後大変な活況を見せていた芸能であり、その時代を謳歌した方々が長く活躍（実演家でありつつ指導者として活動）され、近年引退や鬼籍に入られることで大きな世代交代の時期になっています。引き継いだ世代の人々も世間で言えばかなりの高齢であり、その下の世代もシニア世代と言えるでしょう。この人たちにとっての10年後は最早「終活」的な意味合いが色濃くなると考えられます。調査結果にあるように、仕事の多くは教授業です。日本舞踊に携わる人の多くは「町の師匠」であり「趣味人」や「主婦の副業」というのが実情でありましょう。雇われて教えている人もいますが、多くは、自身の門下からの月謝収入がこの芸能

からの収入であり、学校・養成所・カルチャーセンター・芸妓見番などに正式に雇用されているのは一握りの恵まれた部類の方々であると思われます。ひいては、実演家としての収入だけを生業とされている方は皆無に等しいのが現状でありましょう。未来を担う世代(20から30代)にとっての10年後は、舞踊人口の減少が著しい現状から、彼らにとって明るいものではないでしょう。

この現状を打破し、未来に日本舞踊という芸能を存続させていくには、まず「本物を鑑賞できる機会」を増やし、興味を持った観衆に「習い事」としての日本舞踊を復活・定着させていくことが重要であると考えます。日本の気候風土に則して発展してきた「日本舞踊」が失われることのないよう願って止みません。

桂 文華(落語家・上方落語協会)

プロジェクト委員会を通じて、他の伝統芸能の実態を聞かせて頂き、噺家は舞台上で演じることによるお客さんの入場料で暮らしを立てていることが、恵まれているのだと考えさせられる機会でした。これから状況は刻々と変わっていきますので、演じる技術面だけでなく、落語という舞台芸能の認知度をもっともっと上げて、新規に

落語ファンを増やすことや、噺家全員がプロとしての自覚を強め、後進の育成を先を見据えて考える必要があると思いました。新作落語の著作権や古典落語のアレンジの著作権、ネット配信についてなど、まだまだ難しいことがあるようですが、末永く落語が庶民の娯楽として有り続けることを願うばかりです。

桂 歌春(落語家・落語芸術協会)

「10年後も続けているであろう」との回答が他の部門に比べて一番多かったのが演芸部門であることは、楽観的に言えば現状で満足している、悲観的に言えば他につぶしがきかない、と言えると思います。定年も無く、専門的に生業としてやってきた事なので、他のことが想像できない人が多いと思います。それでも「収入が安定していない」から続けられないと感じている人もいますよね。幸い、近年は演芸ブームなどで需要も多く経済的にも安定しているように見えますが、一旦、不況や大災害、疫病などで世間が自粛ムードになると、最初にし

わ寄せを受ける立場です。そして身体だけが資本です。健康で続けていかなくてはなりません。安心して続けられるには社会保障制度の充実がいちばんでしょうが、実現までは長い長い年月が必要です。それまでは日々の暮らしに追われるのが現状か、と思います。

寄席、演芸は、昨今は若手の台頭により、客足が伸びているようです。演芸部門の将来を展望するなら、後進の育成は欠かせないと思います。それには、場数を踏めることが大事ですから、出演機会がたくさんつくられていくことを願っています。

早川 恵美子(舞踊家・日本バレエ協会)

今回初めてこの調査の委員会に参加させていただき、バレエ界だけでなくどのジャンルでも同じような問題を抱えていることが明確になりました。時代の流れでしょうか。舞台上で踊ることだけで生活してゆける人は皆無に近いと思います。劇場が少なくなり、企業のスポンサーが得られない、興行として成り立たないなどは昔もあまり変わりませんでした。それでもTVやイベントの仕事が収入源になっていました。今、バレエを生業とする人たちは自身のスタジオを開設したり、スポーツクラブ等の教師、あるいは先生の助手などで関連した仕事に就いていますが、それも少子化の影響で先行きが不安に感じられます。また、誰もが手軽に安い料金でレッスンで

きるなど、趣味の方が増加したことは決して悪いことではないと思いますが、SNSやYouTubeなどの普及により、簡単に映像で見ることもできるようになったことのメリットとデメリットなどを考えると、これから真の芸術、芸能がどのような形で継承されてゆくのかなどを考えてしまいます。優れたバレエの映像をお手本に研究ができる反面、映像を見た目だけでコピーすることは、本当に振付の真の意図まで伝えられることとは異なるからです。実演家の経済的な問題、本物の芸の伝承は現在の日本では両立しないものと思いますが、これからも引き続き大きな課題となるのではないのでしょうか。

大場 泰正(俳優・日本俳優連合)

「今の仕事に満足している」と思うかどうかという設問に対し、「現代演劇・メディア」の数値が、全ジャンルの中で一番低いということが気になりました。「そう思う（満足している）/まあそう思う」の合計が55.2%というのは、確かに高いとは言えません。

この不安感、不満足の原因ですが、やはり第一の問題は、仕事の有無に関することだと思います。簡単に言えば、仕事があれば10年後も続けられるし、仕事がなければ続けたくても続けられないということ。「教える仕事」や「芸能に関連するその他の活動」など活動日数が増えているものもありますが、舞台やメディアは、キャスティングされて初めて出演できるもので、安定的に仕事をすることの困難は自明のことかもしれません。

それでも68.1%の人が「10年後も今の仕事を続けていると思う」と回答しています。

「自分の仕事は世の中から評価されている」「自分の持つ能力を十分活用することができる」「自分の仕事にプライドを持っている」等、仕事に対する強い肯定感に支えられているのだと考えます。

今回の調査ではインターネット関連の設問を新たに加

えました。その結果、「映画・放送・メディアへの出演、演奏」の活動日数が前回より減って平均46日/142人。その内数として「インターネットTVで配信される独自番組への出演」が平均24.2日/17人。

配信番組に出演した人が142人中17人と、まだまだ関わっている人数が少ないものの、メディア出演全体の平均日数が46日ということを考えれば、配信番組の平均が24.2日というのは既にかなり高い数字だと思います。次回5年後の調査では確実に数が増えるのではないのでしょうか。

このことをどう捉えるか。

個人的には、演劇やライブと同じく、映画館の大スクリーンで映画を観る醍醐味は決してなくならないし、なくしてはいけないと思います。その一方で、近年の（ネットフリックスに代表される）配信作品の質の高さ、豊富な予算を考えれば、実演家としては大いに歓迎すべきで、むしろ前向きに捉えたいです。もちろんプロジェクト委員会でも度々話されたバリューギャップの問題など、条件面の改善は望まれるのですが。

植田 克己(ピアニスト・日本演奏連盟)

「10年後の展望」について続けられないと思う理由として「体力」を挙げた人が8ジャンル中で洋楽部門が一番少なかったこと、また出演から得ている報酬の方が「教える仕事」からの報酬よりも割合として高いこと、そして自分にくる仕事が減っている、と感じているところに括目しました。

年齢に伴う体力減少は、演奏技術の維持と発展、練習量や本番での集中力維持と密接な関係ですし、そこに現れる出来不出来は評価に直結することなので、誰にとっても重要で厄介、むしろ避けられない問題です。スポーツ選手が一線で活躍できる期間は実演活動よりもずっと短いと思いますが、近年その年齢は以前に比べてかなり高くなっているようです。自己管理と科学的なトレーニングの効果が合わさって助長しているのでしょう。実演家も同様に取り組んで演奏レベルを保持することは大事ですが、楽器演奏に関しては明らかに最近の方がその活躍する年齢層がずっと上がっています。今の日本の生活様式が洋風化し、洋楽分野で体の使い方、感覚などで一体化し易いとも考えられます。また教育の方法がかなりシステムティックに編纂されていて、合理的な練習方

法を保持しやすいというのは穿ち過ぎでしょうか。

洋楽では、実演家として生計を立てている人が多いと思いますが、これについては実演の仕方が多岐に富んでいること、その編成に合わせて大劇場から小ホール、小さな会場、ライブハウス、サロンなど、本番の場が近年とても増えていることから考えられることです。達者な演奏家が増えてきたことに加え、実演家の長年の活躍による経験則が生きて、味わい深い表現も多く聴かれるようになってきて、ファンを増やしているとも考えられます。

お客様の楽しみ方も増えています。実演の他にもテレビ、ラジオ、インターネットで放送、放映される数も飛躍的に多くなっていて、またそれらの機器の発達も相俟って演奏家の活躍の場が広がり、音楽が暮らしの中に浸透していると言えます。それらの活動を助けてくれるスタッフ、専門職種の人々も次第に増えて、近年は人材を教育、育成する機関も多くなって、裾野が次第に広がっています。

弟子、生徒の減少はどのジャンルでも突き当たる問題です。近年言われ続けている少子化に反して、教授者の

数は増え続けています。そもそも子どもたちの興味の範囲は一つの分野に留まらず、その選択肢は拡がり続けています。一つの習い事、お稽古ごとに辛抱し続ける前に、他の分野に変わりやすい理由かも知れません。教授者、音楽教室の増加も相俟って全体として生徒の争奪戦的な様相を見せています。

ただ先にも触れたように、洋楽は学校教育に位置付けられていたり、子供に対する教授方法の研究も進んだりして、ある段階からは総じて継続して学びやすいジャンルと言えます。しかしながら近年は音楽大学に進学して専門的に学ぼうという人がかなり減少し、特に音大の

代表格だった声楽とピアノの志願者がかなり減っています。ピアノは洋楽の中では基本の楽器と位置付けられますし、声は人間生活そのものと密着しています。それらをコントロールできるようになるまでは、困難な勉強の道を取りたがらないのでしょうか。その結果非常勤で教える先生方の雇用継続の困難さが各大学で起きているようです。逆に大学進学に関しては管楽器が横ばい乃至少しずつ増加傾向なのは注目に値します。前に挙げた、学校教育からの流れや集団での活動の面白さに触発されて、さらに継続、発展させたいと考えているとも考えられます。

高島 基明(ベーシスト・日本音楽家ユニオン)

音楽家は一般にフィジカルなピークは10代までですが、内面の充実によって長く活動できるとされています。「10年後について」を読むと「続けていると思う」という回答が「洋楽」は他ジャンルより多いとは言え、経済的な状況の見通しの不安も反映されているように思えます。

教授業についても、過去の調査からわずかながら減少傾向ですが、後進の演奏家や一般の愛好家が増えるには憧れとなる存在が露出していることが大事だと思います。その意味でメディアへの露出やコンサート、ライブでの実演が深く関わってくるはずです。

インターネット活用に関しては、各種 SNS は告知ツールとして活用されていても、コンテンツ作成時や二次利用に関するところはまだまだです。今回の調査が公表さ

れて権利がクリエイターに公正に還流されるシステムの構築が進展することを願っています。

第10回実態調査では、調査に拾われていない対象者もありますが、各ジャンルの特徴が読み解ける報告書になっていると思います。インターネットについてはコンテンツのダウンロード購入以外にサブスクリプションサービスが始まって利用者が広がっている状況です。伝統芸能では「アーカイブ」としての利用も期待されていくでしょう。今回の調査ではインターネットでのコンテンツ提供に関わっている実演家がまだ少ないのですが、一つのメディアで作成したものが他のメディアで利用される状況の把握もまだまだなようです。今回の調査が今後の進展に寄与することを願っています。

スタッフ部門

小川 洋一(日本映画撮影監督協会)

第10回 実態調査の実施に当たり、過去5年間の映像業界における話題の一つに、2017年公開の映画『カメラを止めるな』があるでしょう。総製作費 約300万、2館の上映から口コミによって上映館が拡大し、異例の大ヒット。2019年1月時点で31.2億の興行収入をあげ、賛否両論の意見で話題をさらいました。デジタル製作になってから大小ピンキリの製作状況の中で、設問の一つである「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」の回答が、自分がこの実態調査に最初に参加した15年前の第8回調査では映像系の平均が60.6%、その5年後の第9回調査はで57.9%、そして今回 第10回では60.3%となっており、15年前から報酬の額は上がるどころか年々下がってきていることが見て取れます。

そして、労働環境で「昨年1年間に経験した仕事上の傷害(ケガ)治療費等の負担状況」では、「自分で負担した」が第8回 映像系平均で36.4%、第9回で64.3%、今回で33.3%。「労災保険が適用された」が、第8回で18.2%、第9回で14.3%、今回で33.3%。「仕事が原因と考えられる病気・病状の治療費の負担状況」では、「自分で負担した」が第8回で94.7%、第9回で91.7%、今回が86.4%。「労災保険が適用された」が、第8回で

0%、第9回で4.2%、今回が4.5%と、フリーランスの労働環境の悪さと長年改善されていない事が指摘されます。

近年、中小企業庁・公正取引委員会からの「消費税の転嫁拒否」の調査および業務の「発注書」の交付の有無の調査、2019年の経済産業省による「映画制作現場での労働実態調査」、その調査を基に経済産業省・現場製作・スタッフとのワーキンググループの開催と、ようやく動くべきところが動くようになってきましたが、まだまだ認識は程遠く、文化庁、経済産業省、厚生労働省が枠を超え一体化して取り組んでくれる事を願うとともに、この実態調査が活用され一助となることを切に願う次第です。

また、芸団協が実施する実態調査の課題として、協会・連盟・協議会等の職能団体に新規入会してくるスタッフが少なく、各団体が高齢化している中で、職能団体に所属していないスタッフの声をどう聞いていくか。第10回実態調査の対象となったスタッフ回答者の平均年齢は、55.1歳。第9回の平均年齢と同じだったという結果においても、現場最前線の若い声を今後どう聞いていくか、大きな課題の一つだと思います。

村越 義人(日本映画・テレビ照明協会)

今回「映像系」の調査平均年齢は若干下がって54.2歳となりましたが、調査数値も大きく変化はなく、安心して活動していくための必要条件を、「報酬額のアップ」と「就業時間等の条件が良好になること」だと「映像系」が73.4%と高くなり、仕事上の問題点として「同じ仕事でも報酬が下がっている」が62%、そしてその「交渉力が弱い」が46%近い結果でした。報酬や待遇など、フリーランス同士を雇用側で安易に競わせて制作費を押さえようと、無理なスケジュールや機材車の依頼、運用のための運転等までが照明部の仕事とされる場合がありますが、適切な報酬と撮影時間等をしっかりと把握し、実行させるための各方面の底上げ活動が必要と思われます。こうした動きは韓国の映画社会でも進んできていますが、44.6%が「交渉の後押し」を統括団体の役割として期待しています。一団体だけでなく、職能団体が丸

となって関係各所への改善運動を実行できるよう願っています。

仕事上でのケガでの治療負担は未だに自己負担率が33.3%もあり、仕事が原因での病気の治療費自己負担は86.4%と、5年前からは若干下がってはいますが、労災認定での処理は34%にとどまっています。日本映画・テレビ照明協会では、会員向けに、保険料の安価な団体保険と業務災害補償保険を一年かけて設立しました。この保険のお陰で、フリーランスの会員数も増えました。さらに、第三者への対人・対物、借用機材への請負賠償責任保険も同様に、働く側での安心材料の一つになり結果を得られたことは、雇用契約書等の無い不透明な雇用形態で労災処理ができない実態を、少しでも改善する可能性があると思われます。

映像系スタッフとして活動が続けて行くために、テレ

ビ系ドラマと劇場用映画とで使われる撮影機材がほとんど同じになってきた昨今、映像照明技術者として交流を惜しまず、情報交換等の必要性をお互いが認識し、協力し合って、質の高い照明技術を若いスタッフに伝授していく必要があるでしょう。劇場用映画スタッフも光源の

変化と共に照明機材を効率的に使うための操作方法等、より専門的な知識等を身につけるため、フリーランスも研鑽、研修の機会に積極的に参加して自らも学ぶということも必要だと考えています。

石丸 耕一(日本舞台音響家協会)

今回の調査で印象に残ったのは、前回の調査から「格差が広がった」という点です。第9回調査で、舞台技術に従事する人たちの収入が他業種に比べて低いことや、男女の格差、労働環境の問題等が、今後の改善点として挙げられていました。

今回の調査では、前回の調査の報告を踏まえて環境の改善を行ってきたところと、そうでないところの格差が広がっていることが、調査結果から読み取れます。改善を進めているところは、第9回の調査報告を大切に受け止めているということもあるし、2012年に「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」(劇場法)が制定された意義を大切に受け止めているということもあると聞き及

びます。

今回の調査で就労環境が改善されていない、収入や社会的地位の向上が改善されていないと回答しているところは、現場で個々に聞き取りをすると、男女間のパワハラやセクハラ、女性のチーフクラスへの昇進の阻害、産休や育休の取得に理解を示さない、といった旧世紀の体質や意識から脱却していないケースが多々あることが見えてきます。

私たちの就労環境の改善や社会的地位と収入の向上を目指すのであれば、まず私たち自身の意識改革を普遍化していく必要があるように感じます。

岩城 保(日本照明家協会)

芸能実演家・スタッフの仕事や生活の実態について、政治家や有権者が具体的に知る機会はありません。その意味で、この規模でのこういった定期的な調査は、政治家による文化政策の決定や、文化芸術に関心のある有権者が投票行動を選択する上での極めて重要な判断材料となるものであり、時代や情勢の変化も反映されるよう、継続して行われるべきだと感じます。

また、報告書の冒頭にある通り、この調査は協力を得られた職能団体の会員を対象としているため、実際の現場の状況とは異なっている可能性に注意する必

要があるわけですが、もしも芸能実演家やスタッフたちが、2020年の新型コロナウイルスのような大きな感染症流行や、あるいは災害等といった「外的要因」による大きな損失を被った時に、その補償や補填策を行政や公的機関に求めようとするのであれば、なおさらこのような調査を行う意義をしっかりと一人ひとりが理解し、自らの業務や生活実態がより社会的に認知されるよう意識的に協力し合うことが求められるということを、調査の過程を通じて感じました。

船引 悦雄(日本舞台監督協会)

この1年間、実態調査プロジェクト委員会で私たちが話し合ってきた前提が、今般の新型コロナウイルスの騒動で大きく崩れてきたように思われます。私たちの業界だけでなく、社会全体が如何に脆弱な基盤の上に成り立っていたのか明らかにされたように思います。

この状況の中で10年後を考えると、果たして、若いスタッフが希望を持って仕事が続けられるであろうかと危惧を覚えてしまいます。多くの仲間たちから、進行中や携わる予定だった公演が中止された、延期されたという嘆きを聞きました。勿論、それらの仕事をするによって得られるはずだった収入が補償されることはありません。

スタッフの業界が今も組織化されず、労災・社会保険に加入している会社に所属しているのは極々少数で、多くがフリーランスの立場で、日雇いであったり公演ごとであったり、ごくあいまいな口約束で仕事をしています。雇用する側も、恒常的に必要な社員を養っていくだけの体力もなく、必要な時に必要な人数のスタッフを補

充することで、かろうじて組織を継続させているのではないのでしょうか。結局、いろいろな要因で起こる障害に耐え得るだけの体力が制作・主催する組織に不足していることによる影響が、現場に押し付けられているように感じます。

現場のスタッフが対抗するには、他人にないスキルを持つしかないと思います。技術の習得とともに、人を使うこと、時間をうまく使うこと、予算をやりくりすること、目の前の問題を素早く解決すること、それらを習得するための教育と自己鍛錬が、生き残るためには必要です。とくに舞台監督は、その在り様が個人のパーソナリティーに拠っているところが大きいので、仕事の仕方をどのように伝えていくかが重要な課題だと思います。

このような調査が、多くのスタッフにとって、自らが置かれている状況に目を向けることもできずに日々の生活に追われている現状を少しでも改善に向けて動き出すためのキッカケになることを願っています。

調査を終えて

第9回の実態調査の後、さまざまなジャンルの実演家やスタッフ、アニメーターが登壇して「アニメーターや実演家の育ち方」と関するシンポジウムを開催し、それぞれの分野でプロの実態は如何なる状況かということ話をしました。実演家においては、どの分野も舞台やメディア出演だけで生計を立てているような人はごく少数だということがわかりました。隣の芝生は青いと言いますが、それまで自分の分野だけが「キビシイ」のではないかと思っていたのが、各ジャンルの状況を聞いてみると何処も大変だと知り、安堵するような気持ちも混じりながら、しかし慰め合っただけでもいられない、どうしたものかと考え込んだのでした。

その後、公共劇場、舞台技術スタッフの就労環境の調査を実施し、「10年後もこの仕事を続けていると思いますか」という設問に対し、若い世代の多くからも「いいえ」との回答が集まり衝撃を受けました。意欲と才能があり、努力を続けても将来の展望が描けないという状況では実演芸術の継承と発展は危うい。そんな危機感から、今回の実態調査では、実演家も含めて「10年後」の展望を問いかけてみました。その結果、自分の仕事にプライドを持ち、世の中から評価されていると感じながらも、先行きへの不安は少なくなく、スタッフではほぼ半数が、実演家では約3分の1が「続けないと思う」という結果でした。そして活動していくための必要条件として「報酬額や就業時間など仕事の条件がよくなること」が、実演家、スタッフともに筆頭にあげられています。仕事の諸条件が悪化していることの裏返しと考えられ、芸術を支える基盤が弱まっているのではないかという危機感は払拭できないでいます。

実演家については、才能や努力だけでなく、ある程度の運にも恵まれた人が活躍できる世界。その中で限られた人だけが喝采を得られるという構造そのものは、昔からさほど変わっていません。でも舞台で脚光を浴びなくても、教授業を通して、お稽古をする人々に憧憬され尊敬されるような実演家が、愛好者のすそ野を広げ、芸術を支えてきました。それが少子高齢化や娯楽の多様化、生活スタイルの変化によって「教える仕事」の状況も、かつてとは変わってきているようです。ジャンルや人によって異なるとはいえ、「キビシイ」という声が聞かれます。一方、インターネットの普及によるコンテンツの利用拡大は、仕事の機会を多少広げているようですが、

報酬の増加には必ずしも結びついていないという実態が浮かび上がっています。

スタッフ部門に関しては、調査に入る前から、創造現場には女性スタッフが大勢いるのに、職能団体の会員には女性は少なく、若手も職能団体に所属しないことが課題として指摘されてきました。「協会に所属することで、どんなメリットがあるのか？」という問いかけがあちこちで繰り返され、直截的なメリット・デメリットだけが問われるので本当にいいのかと提起しつつも、協会組織の役割の再考と改革の課題は明快な解決策を示せないまま、今回、「統括団体に期待すること」という設問をいれました。実演家はジャンルによってもかなり回答がばらついていますが、スタッフ部門では、「仕事環境、制度改善につながる情報発信等をしてくれること」「次世代の育成に取り組むこと」「仕事をしていく上で必要な専門情報を提供してくれること」が上位3つの回答でした。ヒアリングでも、とりわけフリーランスのスタッフにとっては「安全、保険、税金」にかかわる制度づくり、情報提供が重要だとの指摘があがっています。

そうした期待に応えるべく調査結果を活用しようと、報告書のまとめに入ろうとした矢先に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、短期間のうちに様々なジャンルの実演芸術の公演が、多数、中止、延期という事態に陥りました。公衆衛生を守るため致し方ないこととはいえ、実演家やスタッフ、芸術団体やエンタテインメント産業全体にその影響は及び、経済的損失は莫大です。実演家やスタッフの大多数は、いわゆるフリーランスで、雇用されている人はごく一部のため、雇用保険による休業補償の対象外です。プロがプロとして活動している状況を伝え、その地位向上に資するようというのは、この実態調査が始まった原点ですが、今こそ、そうした実演家やスタッフの立場を発信する基盤として、各ジャンルの協会が頑張らねばならない時と思います。芸団協は、ここ数年、文化省の創設を掲げ、諸外国に比して貧弱な文化予算の大幅拡大を要望してきましたが、この調査、そしてこの間、実演芸術が受けた打撃を直視した時に、この国の脆弱な芸術文化基盤に抜本的な対策が今こそ必要と痛感しています。フリーランスの実演家やスタッフが、安心して仕事ができるような環境整備に向けて、具体的なしくみづくりに向けて本報告書の内容も活用されることと信じています。

第 1 部

芸能実演家編

I. 調査集計結果の概観

■ 中高年齢層の占める割合の増加—回答者の属性分析から

実演家部門の調査対象および調査方法についてはP.28で説明している通りですが、本調査は、原則として実演家やスタッフの専門団体に所属している人を母集団としています。したがって、調査協力団体の傘下にいない実演家も含めた実演家全体の傾向を示すものではないことにご留意ください。

芸能実演家の回答者の年齢構成は、平均年齢が53.4歳、50歳以上で53.9%を占めています。5年前の第9回調査と比較すると、平均年齢は54.0歳から若干下がっており、50歳以上が占める割合も59.6%から53.9%へと下がっていますが、第8回の53.7%、第7回調査の53.4%よりは高く、50歳以上の占める割合の方が50歳未満より多い状況が続いています。(P.XX 参照)

平均年齢0.6ポイント減の要因は、ひとつには第9回調査と比較して8つのジャンル(「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇・メディア」「洋舞」「演芸」「演出・制作等」)それぞれの割合が変わっていることに起因していると考えられます。平均年齢が比較的若い「洋舞」の実演家が占める割合が8.2%から10.5%に増え、逆に高齢でも活躍し続ける「邦楽」の回答率が15.3%から13.3%へと、邦楽実演家の占める割合が若干下がっているのです。もうひとつの要因は、大きく平均年齢が下がったジャンルがあることです。

ジャンル別の平均年齢の変化を見ていくと、「邦舞」が第9回の65.6歳から56.4歳へ、「現代演劇・メディア」が51.6歳から44.5歳へ、「演出・制作等」が48.5歳から47.9歳へと、3つのジャンルで若返っています。「邦舞」

で大きく平均年齢が下がったのは、第9回では、高齢でも活躍している実演家が多い沖縄の舞踊家に、芸団協会員団体傘下以外も対象として調査票を送付して多数の回答を得ていましたが、今回の調査では、沖縄の舞踊家、演奏家も会員団体傘下に限定して調査票を送付したことが要因の一つではないかと推測されます。「現代演劇・メディア」の平均年齢の低下は、20歳未満の子どものモデルからの回答の割合が前回より多く、平均年齢を大きく押し下げたことが要因と考えられます。しかし、ほかの5ジャンルは平均年齢がすべて上昇していて、実演家全体の平均年齢は微減にとどまっています。

ジャンル別の特徴としては、日本古来の芸能分野、すなわち「邦楽」「邦舞」「伝統演劇」は60歳以上の割合が高く、特に「邦楽」においては70歳以上で現役である実演家が39.7%となっているのが目立ちます。一方、「洋楽」「洋舞」は、50歳未満の割合が比較的高い傾向がありますが、「洋舞」では、50歳未満の割合は第8回では50.8%、第9回では45.9%であったのが、今回は40.6%と、減少傾向にあります。「洋楽」でも第8回で51.1%、第9回で51.4%、今回は41.2%と過半数を割っています。

日本社会全体で少子高齢化傾向にありますが、少なくとも調査対象となっている実演家集団においては、参入してくる若年層の数を上回るほど、実演家のリタイアがなく、生涯現役で活動し続ける実演家が多いという特徴が、顕著になっていると言えます。

■ 活動分野と仕事の内容—過半数が教える仕事に携わり、企画・制作等との兼務も多い

携わっている分野を複数回答で求めたところ、最も多かったのが「放送(テレビ、ラジオ)・スタジオ録音、スタジオ録画」の19.8%で、次いで「日本舞踊」(14.0%)「現代演劇・新劇」(12.7%)、「オーケストラ」(12.0%)、「能楽」(10.2%)、「室内楽」(10.1%)でした。ほかは全て10%未満で分散しています。しかし、最も比重の大きいもの、回答1つに限定すると、「放送(テレビ、ラジオ)・スタジオ録音、スタジオ録画」は2.4%にとどまり、10%を超えているのは「オーケストラ」(10.2%)のみで、「日

本舞踊」(9.4%)「能楽」(9.3%)が続きます。(問A-1(a)、(b))

現在、仕事で行っていることを複数回答で求めたところ、「教える、指導する」が55.5%と最も多く、次いで「楽器を演奏する」(29.8%)、「踊る、舞う」(28.4%)となっていますが、「企画をたてる、制作をする」(24.5%)、「主宰・運営・経営をする」(24.3%)も比較的高い割合となっています。最も比重の大きいものに絞りこむと、「教える、指導する」が最多で19.7%、「楽器を演奏する」が

17.4%、「劇やドラマを演ずる」が11.5%となっています。いずれか一つに絞ったときに「企画をたてる、制作をする」が4.5%、「主宰・運営・経営をする」が3.6%となっていることを考慮すると、実演家として演奏したり演じたりという仕事をしつつ、制作や運営を兼務している人

が5人に1人くらいの割合でいることになります。また、回答した実演家等のおよそ5人に1人が、教授業が主たる活動と回答していることになります。(問 A-2(a), (b))

■ 実演家のキャリア形成

【芸歴】 技能習得に年数がかかるジャンルが多く、プロになったら生涯現役

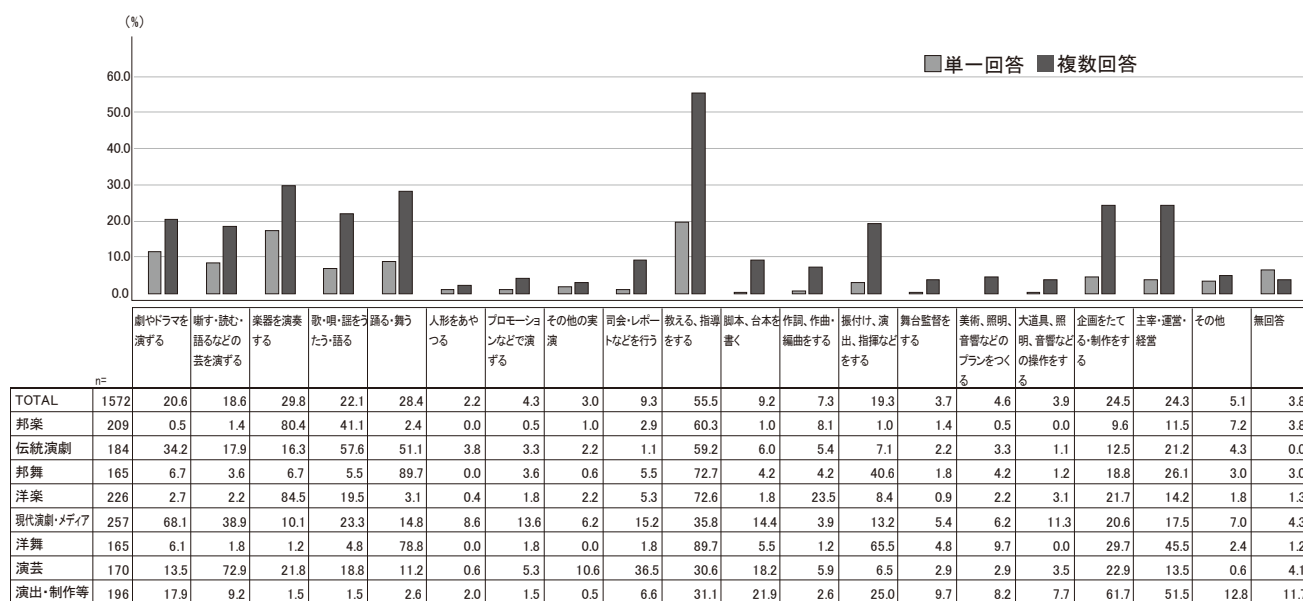
今の活動分野に関わり始めてからの芸歴、活動年数を尋ねた質問から、芸歴の平均は36.5年でした。出演料、報酬を得るようになってからの平均年数は25.9年でした。(第9回調査では、それぞれ37.0年、26.6年)。

ジャンル別にみると、芸歴の平均が最も高いのは「邦舞」で、47.5年。芸歴「61年以上」が24.2%と最も多くなっており、「51年から60年」の層も24.2%と高い割合でいます。次いで「邦楽」が平均45.6年、「51年から60年」が23.9%、「41年から50年」が21.1%となっています。「伝統演劇」では、平均は42.7年と、第9回調査の40.7年から上昇していますが、前回は活動歴「41年から50年」の層が24.9%と最も割合が大きかったのに対して、今回は「31年から40年」が20.7%、次いで「41年から50年」が20.1%と、芸歴年数の層がやや分散しています。最も

平均芸歴年数が短かったのは「現代演劇・メディア」で24.2年。第9回調査では30.4年だったのに比べ短くなっていますが、内訳をみると「5年以下」「6年から10年」の割合が高くなっており、モデルエージェンシー協会傘下の子どもモデルの回答が前回より多く含まれていることが影響していると考えられます。「演出・制作等」も、平均年数28.8年から25.8年に短くなっています。その他のジャンルの平均芸歴年数は、「洋楽」が34.7年から37.7年に、「洋舞」が35.7年から39.3年に、「演芸」が30.6年から32.5年に上がっています。

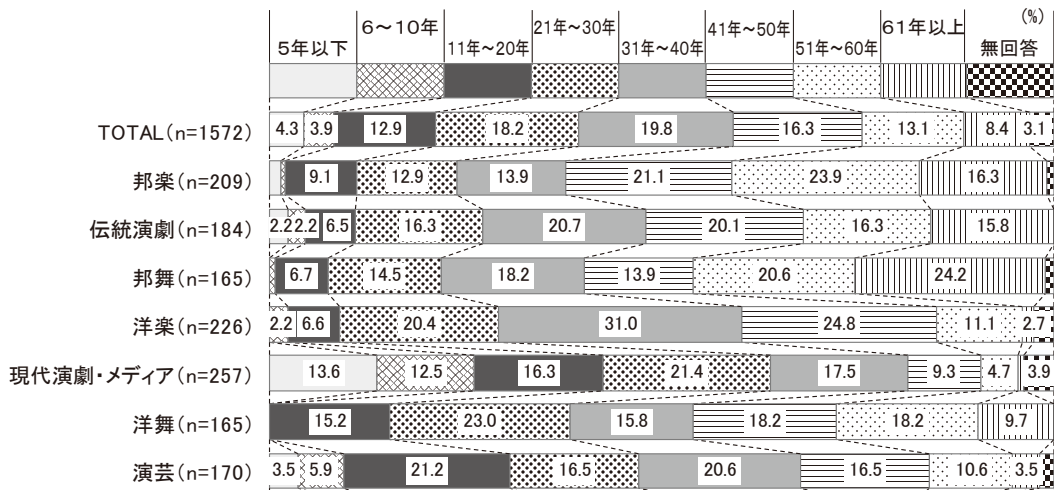
芸歴から、「出演料・教授料を得るようになってからの芸歴・活動年数」を引いたものは、報酬を得ないでの修行期間と考えられ、全ジャンル平均では10.6年ですが、最も長いのが「邦舞」(19.8年)、次いで「邦楽」(18.8年)、「洋舞」(14.5年)です。逆に最も短いのが「演芸」(2.4年)、「現代演劇・メディア」(3.6年)です。(問 A-4 (a), (b))

問A-2 (a) (b) 仕事で行っていること



※表の数値は複数回答 (a) を表示 (単位=%)

問 A-4 (a) 活動分野に関わりはじめてからの芸歴・活動年数



問 A-4 (a) (b) 問 E-1 活動分野に関わりはじめてからの芸歴・活動年数と、報酬を得ようになつてからの年数および年齢

	年齢				(a)活動分野に関わり始めてから				(b)報酬を得ようになつてから				(a)-(b)の差			
	平均値	中央値	最小値	最大値	平均値	中央値	最小値	最大値	平均値	中央値	最小値	最大値	平均値	中央値	最小値	最大値
TOTAL	53.4	54	2	93	36.5	37	1	85	25.9	25	0	76	10.8	9	0	75
邦楽	66.8	68	21	91	45.6	48	4	84	26.8	28	0	73	20.1	20	0	75
伝統演劇	60.1	63	9	93	42.7	42	3	80	31.8	31	0	70	10.7	6	0	45
邦舞	56.4	59	22	91	47.5	50	9	85	27.7	27.5	0	70	20.2	19.5	0	59
洋楽	50.3	51	26	80	37.7	38	10	70	27.3	28	0	60	10.7	10	0	29
現代演劇・メディア	44.5	44	2	88	24.2	23	1	66	20.6	20	1	60	3.5	2	0	28
洋舞	48.6	54	20	85	39.3	40	12	72	24.8	25	1	55	14.4	15	0	32
演芸	56.0	57	23	92	32.5	33	2	78	30.1	30	1	76	2.8	1	0	27
演出・制作等	47.9	46	22	84	25.8	25	1	70	19.3	18	1	60	6.9	3	0	50

【動機】 何よりも「やりたい」という本人の意思。環境の影響が大きいジャンルも

現在の仕事をするようになった動機を複数回答で求めたところ「とにかくやりたくて」が最も多く 41.5%となっています。次いで「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が 32.4%。その次に多いのが「先輩、友人、その他の影響を受けて」で 17.8%です。

しかし、ジャンル別に見てみると、動機にはばらつきがあります。

「演芸」は、「とにかくやりたくて」が 60.0%と突出しており、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が 34.7%と、意欲と自信が強い動機となっています。「ごくあたり前の職業につきたくなかったから」24.7%、「有

名になりたい、目立つことがしてみたいと思ったから」20.0%、「実力しだいで高収入を得られるようになるから」12.9%という理由も、全体平均より高い率で選択されています。

一方、環境が大きな要因となっていると推察されるジャンルがあります。

「伝統演劇」では、「その分野の芸を世襲している家で生まれ育ったから」が 28.8%と最も多く、次いで「世襲ではないが、家庭環境で自然に入った」が 25.0%、「とにかくやりたくて」が 21.7%、「先輩、友人、その他の影響を受けて」が 20.7%となっており、家庭環境や周囲の影響が大きいようです。

「邦楽」「邦舞」では「世襲ではないが、家庭環境で

自然に入った」がそれぞれ 30.6%、38.8%と最も多く、次いで「とにかくやりたくて」（「邦楽」23.0%、「邦舞」27.3%）となっています。「邦舞」では、3 番目に多いのが「自分の素質や才能を活かせると思ったから」（24.8%）、「その分野の芸を世襲している家で生まれ育ったから」（18.8%）と続いており、家庭環境や周囲の影響のなかで、意欲や自信をもつようになったことがうかがえます。

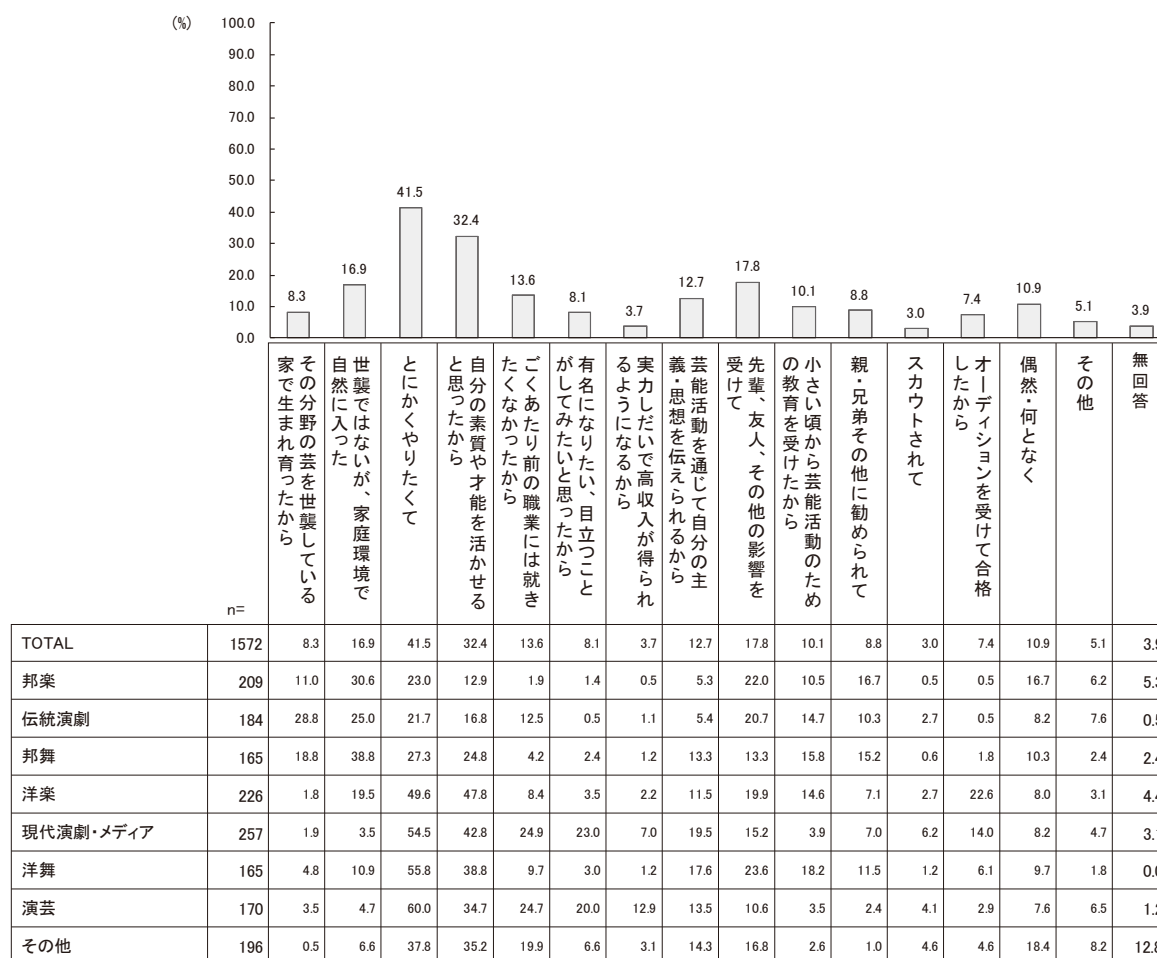
「洋楽」で最も多いのは、「とにかくやりたくて」が 49.6%、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が 47.8%と続きます。3 番目に「オーディションを受けて合格したから」が 22.6%と続いています。この選択肢を選んだのは 8 ジャンルの中で「洋楽」が最も高くなっています。「先輩、友人、その他の影響」「世襲ではないが家庭環境で自然に入った」もそれぞれ 19.9%、19.5%で、周囲の環境も重要な要因になっていると推察されます。

「現代演劇・メディア」は、「とにかくやりたくて」が 54.5%、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が 42.8%、「ごくあたり前の職業につきたくなかったから」24.9%、「有名になりたい、目立つことがしてみたいと思ったから」23.0%と、「演芸」と傾向が似ています。

「洋舞」は「とにかくやりたくて」が 55.8%と、「自分の素質や才能を活かせると思ったから」が 38.8%で、3 番目に多かったのは「先輩、友人、その他の影響を受けて」23.6%となっています。

「小さい頃から芸能活動のための教育を受けたから」の選択肢を最も多く選んだのが「洋舞」（18.2%）です。次いで「邦舞」（15.8%）、伝統演劇（14.7%）、「洋楽」（14.6%）となっています。これらは、小さい頃からの稽古、訓練が大きな意味をもつジャンルであるのがうかがわれます。（問 A-3）

問A-3 現在の仕事をするようになった動機（MA）



【技能の習得】 ジャンルによって異なるプロへの道筋

どのように今の活動分野の技能を身に着けたかを複数回答で求めたところ、最も多かったのが「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」が41.3%で、次いで「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が36.1%、「専門学校・教室・養成所などで教育を受けた」が24.2%、「劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身に着けた」が20.9%となっています。

この中で最も重要だったと思うものの1つに絞り込むと、こちらも1位、2位は「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」(29.2%)と「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」(17.1%)ですが、3位は「劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身に着けた」(12.5%)でした。

ジャンル別に見てみると、それぞれの技能の習得の道筋に特徴があるのが伺われます。

「演芸」は「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」が65.9%と突出していて、ほかの選択肢の比率が小さいのに対し、「現代演劇・メディア」は、最も多いのは「劇団・

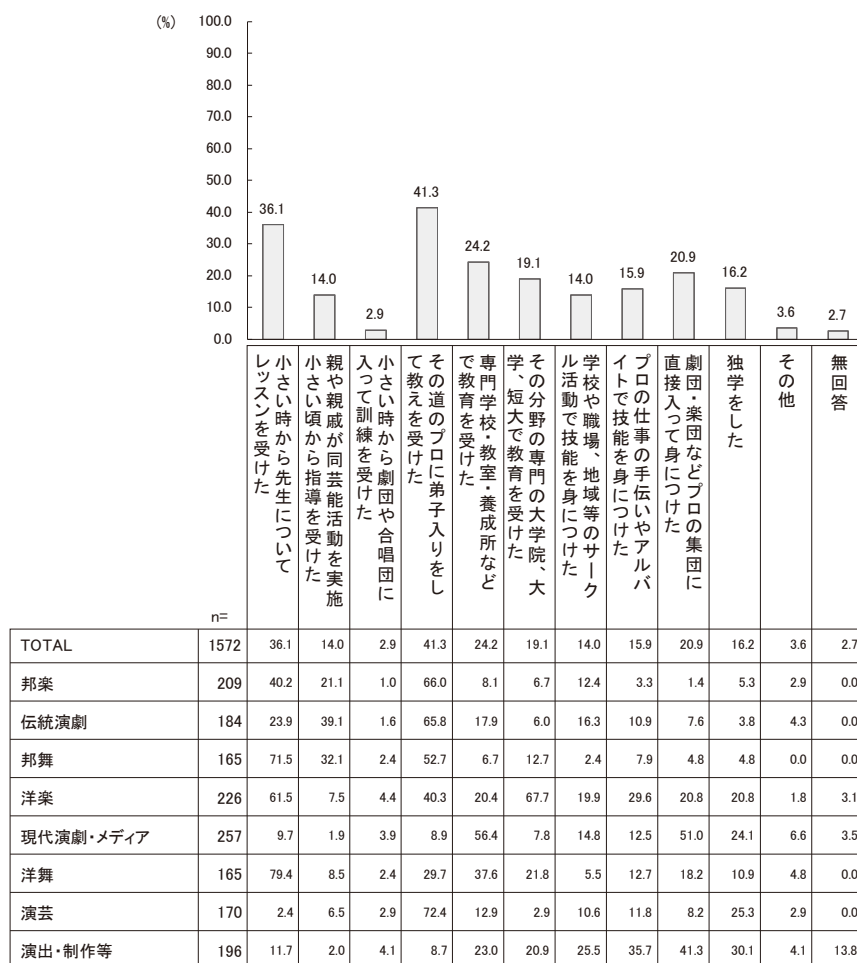
楽団などプロの集団に直接入って技能を身に着けた」が38.1%で、次いで「専門学校・教室・養成所などで教育を受けた」で26.8%です。

「洋楽」は「その分野の専門の大学院、大学、短大で教育を受けた」が26.1%、次いで「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が22.6%となっています。

「洋舞」は「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が47.9%で最も多くなっています。

「邦楽」「伝統演劇」は、「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」が最も多く、それぞれ53.6%と48.9%ですが、2番目に多いのは「邦楽」は、「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」で22.0%となっているのに対し、「伝統演劇」の2番目は、「親や親戚が同じ芸能活動をしていて小さい時から指導を受けた」が21.2%です。「邦舞」は、「小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた」が37.0%で最も多く、「その道のプロに弟子入りして教えを受けた」は1番目で33.9%となっています。(問 A-5 (a), (b))

問 A-5 (a) 活動分野の技能習得方法 (MA)



活動の状況について

■ ライブ出演、教授業、メディア出演の割合・日数、収入の面から

芸能実演家の仕事の場合は、舞台などのライブの公演への出演、メディアへの出演・撮影・録音、教える仕事の3つに大別されます。出演、収録には、それぞれに稽古、リハーサル等があるほか、個々人で研鑽をつむことも欠かせません。

昨年1年間に行った活動について複数回答で求めたところ、最も多かったのは「舞台、コンサート、ライブ、ショー、イベントなどへの出演」で、回答者の76.5%が行ったと回答しています。2位に多くの実演家が行っていたのが「舞台等への出演のための稽古（リハーサル、移動日を含む）」(67.1%)、3位が「教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）」(61.1%)の順で、4位が「技能を維持するための研鑽、トレーニングなど」(45.4%)、5位が「映画・放送・メディアへの出演・演奏」(27.3%)です。

これを日数ベースで見ると順位が変わります。全ジャンルの平均活動日数で最も多いのは「技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など」が144.1日で、次いで「教える仕事」が102.3日です。舞台などへの出演は58.3日で、そのための稽古が84.4日となっています。「映画・放送・メディアへの出演、演奏」は26.7日でしたが、その内数として今回初めて「インターネットTVで配信される独自番組への出演」についても尋ねましたが、活動日数の平均は

11.7日でした。

これを8ジャンルごとに見ていくと、舞台などへの出演が最も多くなっているのは「演芸」で、平均値が135.7日。次に多いのが「伝統演劇」で86.0日です。舞台のための稽古、リハーサル等に費やしている日数が一番多いのが「洋舞」(150.9日)で、次いで「洋楽」(106.8日)となっています。

「教える仕事」が多いのが、「洋舞」(194.1日)、「邦舞」(121.7日)です。

「映画・放送・メディアへの出演」が最も多いのが「現代演劇・メディア」で46.0日です。(問B-2 P.33～38)

これを、収入源の面から見てみます。全ジャンルを総合すると「舞台出演」からが最も多く30.0%、「教える仕事」が23.6%で続きます。芸能以外からの収入も少なくありません。「年金」が10.7%、「不動産、その他の事業経営」からの収入は全体で2.7%、「それ以外の収入」は15.1%となっています。

ジャンル別に昨年1年間の活動別収入の内訳をみると、「舞台出演」が最も多いのは「演芸」(63.9%)、次いで「洋楽」(51.9%)「伝統芸能」(43.6%)です。「教える仕事」が多いのが「洋舞」(53.4%)、「邦舞」(42.6%)で、「映画・放送・メディアへの出演」が最も多いのが「現代演劇・メディア」(18.9%)となっています。(問B-8 P.56～58)

■ 景況感

仕事の機会について2～3年前との比較でいうと、いずれの仕事も「変わらない」が多数派ですが、「舞台」「メディア」への出演が減ったと感じている傾向が強く、「教える仕事」で増加していると感じている人の割合の方が多い傾向にあります。

ジャンル別にみると、「舞台」中心の「演芸」では、舞台などへ出演が「大幅に減った」と回答している人の割合が最も高く、主たる活動で減少傾向を感じている状況があります。

「メディアへの出演」が中心の「現代演劇・メディア」では、「メディアへの出演」が大幅に減ったと感じている傾向が強く出ています。

「教える仕事」が中心の「洋舞」「邦舞」では、いずれも減ったと感じている傾向より「増えた」と感じている

傾向の方が強いです。(問B-3 P.39～43)

昨年1年間に行った活動（複数回答）の回答を第9回と比較すると、1番多く選択されている「舞台、コンサート、ライブ、ショー、イベントなどへの出演」が76.9%から76.5%へ、2位の「舞台等への出演のための稽古（リハーサル、移動日を含む）」が68.2%から67.1%へ、3位の「教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）」が63.1%から61.1%へ、4位「技能を維持するための研鑽、トレーニングなど」46.0%から45.4%へ、5位「映画・放送・メディア等への出演」が28.8%から27.3%へと、実演芸術の主たる仕事とそれを支える稽古、トレーニングなどの活動を行ったと回答した人の割合がすべて微減となっています。一方、「企画・プロデュース・制作」が17.3%から22.3%へ増加しているのははじめ、「振

付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など」「芸能に関するその他の活動」も若干増加、「芸能活動以外の仕事」が23.5%から24.6%に増えています。実演以外

■ 収入と費用の負担

芸能実演家の昨年1年間の個人収入は、「300万円未満」までの所得層で5割程度を占めています。最も多い層は「200万円から300万円未満」で第9回と変化はありませんが、「200～300万円未満」(17.4%)、「100～200万円未満」(16.5%)、「300～400万円未満」(13.0%)、「400～500万円未満」(8.7%)でも、第9回調査よりも第10回調査の割合の方が上回っています。それよりも高い所得層では、「500～600万円未満」「600～700万円未満」で、第9回調査を下回っているのを始め、高額所得層では、若干、前回調査より割合が低くなっています。

ジャンル別にみると、「邦楽」「邦舞」は、「100万円未満」の所得層が最も多く（それぞれ34.0%、24.2%）、洋舞も「100万円未満」と「100～200万円未満」の所得層が共に20.0%となっています。「現代演劇・メディア」は「100～200万円未満」の所得層が24.5%と最も多く、「演芸」は「200～300万円未満」が20.0%と最も多くなっています。個人収入が300万円未満の人と300万円以上の人の割合を比較したところ、300万円以上の実演家が多いのは、「伝統演劇」(59.8%)、「洋楽」(67.7%)、「演出・制作等」(47.4%)の3ジャンルのみでした。

年代別にみると、「20～29歳」「30～39歳」は「100～200万円未満」で、「40～49歳」は「200～300万円未満」で、割合が最も高くなっています。第9回では「40～49歳」の中堅では「500～600万円未満」の割合が最も高く、若年層と比べると年齢に応じて徐々に収入が上がっている傾向がありましたが、今回は、「30～39歳」は最も多い所得層が1階層下がり、「40～49歳」も2階層下がり、高年齢層の所得が下降傾向にあります。

昨年1年間の個人収入を過去調査と比較すると、今回の第10回調査では「20～29歳」で平均年収は過去の調査の平均を上回っていますが、「30～39歳」で第9回調査の平均収入より若干下回っています。「40～49歳」では第8回、第9回の平均収入を若干上回りましたが、「50～59歳」では、第9回の平均収入より大きく下回っています。「50～59歳」の平均収入がほかの年代の収入を上回るといった傾向は過去の調査結果と同じですが、高年齢層での収入の伸びが鈍化している傾向が見て取れます。(問B-6(a) P.50～53)

芸能実演家の所得水準は、収入だけでなく必要経費の

の、実演芸術に関連するそのほかの仕事や、実演芸術以外の仕事に携わった実演家が増加したと言えます。(問B-2 P.33)

額も影響するため、第9回調査から、総収入に対する必要経費の割合について尋ねています。最も多かったのは「給与所得だけで確定申告はしていないので、所得控除の対象になった必要経費はない」という回答で21.2%、次いで「20%未満」が10.9%、「確定申告はしていない」が10.3%となっており、回答は分散しています。ジャンル別にみると、「邦楽」で「確定申告はしていない」の割合が28.2%、「邦舞」では16.4%と、ほかのジャンルと比較して高くなっています。(問B-6(b) P.54)

収入の形式についてみると「仕事に応じて支払われる報酬」が「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」を上回っていて、月給、年俸など予め決められた報酬を得ていない人の割合が高いです。著作権や著作隣接権などに由来する収入の割合は、全体の平均値で1.4%に過ぎません(問B-8 P.59)

個人負担となっている仕事上の必要経費について複数回答で問うた設問では、「交通費」(54.3%)が最も多く、次いで「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」(53.3%)、「整髪料、化粧品」(44.7%)と並んでいます。第9回との比較では、上位5位のうち「交通費」が「衣裳など」を抜いて1位の順位が入れ替わっています。ジャンル別にみると、「邦舞」では「衣裳」「整髪料、化粧品」「交通費」などに加えて「ノルマのチケットの売れ残りの自己負担」「技能習得などに支払う授業料」「会場使用料」「共演者に対する出演料、謝礼」など、8項目で高い割合で自己負担があるとなっています。「演芸」も「衣裳」「整髪料、化粧品」「交通費」のほかに「チラシ、プログラム印刷費」「会場費」「共演者に対する出演料、謝礼」などの項目で高く、「伝統芸能」「洋舞」でも「ノルマのチケットの売れ残りの自己負担」が高くなっています。これらのジャンルは実演家が個人で舞踊会や落語会、演奏会などの発表の機会を持つことが多く、そのための個人負担が大きくなっていると考えられます。一方、公演の費用は主催する所属団体・組織で負担するとみられるジャンル「現代演劇・メディア」では「会場の使用料」「チラシ等印刷費」の負担割合が少なく、チケット売れ残りの負担の割合も低めになっています。「洋楽」「邦楽」では、「機材、楽器・道具の購入費、修理費等」や「楽譜代・資料代」が高くなっています。(問C-2 P.63)

芸能実演家の仕事環境について

■仕事上でのケガ、病気と治療負担、補償

昨年1年間に、医師の治療が必要となった仕事上のケガと病気の経験率はそれぞれ9.4%、17.0%で、治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が圧倒的に多く、ケガの発生での労災適用はわずか2.7%です。仕事由来の

ケガ、病気であっても自己負担で補償もないという状況は前回までの調査結果と変わっておらず、労災適用率は第9回調査の7.6%から4.9ポイント減少しました。(問C-3,4,5 P.67～72)

■契約書について

レコーディング、放送番組、劇場用映画等に参加、出演する際に、契約書を取り交わしているかどうかについての設問で、「必ず契約を交わしている」は4.5%にとどまっています。「なるべく交わすようにしている」「ときどき交わすことがある」を合わせても、26.3%にとどまります。「参加、出演したことがない」(21.2%)、「無回答」(24.7%)を除いて「必ず交わしている」割合を算出しても、8.3%に過ぎません。ジャンル別にみると「現代演劇・メディア」では「所属事務所等に任せているので自分では確認していない」が33.1%と大きな割合を占めています。

今回、CDや放送番組、劇場用映画といった、従来のメディアとは別に、インターネットで利用するための音楽・映像への参加、出演にかかる契約書の取り交わしについて、新たに尋ねました。「必ず契約を交わしている」はさらに少なく2.6%でした。「参加、出演したことがない」(32.1%)、「無回答」(27.0%)を除いても6%にとどまります。従来のメディアだけではなく、インターネットだけで公開される作品が増えていますが、契約書を取り交わさないのは、同じような状況となりました。(問B-10 (a) P.74)

■コンテンツの二次利用と使用料

今回、インターネットの影響について問うため、実演家に参加、出演したCD、放送番組又は劇場用映画のような従来のメディアがインターネットで二次利用される場合、インターネットで利用するための音楽、映像作品がインターネット以外で二次利用された場合、それぞれについて、使用料・追加報酬の有無についても尋ねてみました。

まず、CDや放送番組等の従来のメディアがインターネットで利用された場合について複数回答で尋ねたところ、「CDや放送番組に参加したことがない」(32.7%)、「無回答」(29.4%)が多いものの、「放送番組がインターネット配信に利用された際に使用料等を受け取ったことがある」(9.3%)、「CDがインターネット配信に利用された際に、使用料等を受け取ったことがある」(4.3%)、「劇場用映画がインターネット配信に利用された際に使用料等を受け取ったことがある」(3.2%)という結果となりました。一方で、「インターネット配信に利用されたが、使用料等を一切受け取ったことがない」は6.1%

あり、さらに、「インターネット配信に利用されたかわからない」(11.2%)、「所属事務所等に任せているので自分ではわからない」(13.4%)というように、実演家は、インターネットにおける二次利用について、十分な対価還元が行われていない状況がうかがわれます。

さらに、インターネットで利用するための音楽、映像作品がインターネット以外で利用された場合についても尋ねています。このような場合も、「参加、出演したことがない」(37.9%)、「無回答」(28.2%)が多いものの、「インターネット以外に利用された際に、使用料等を受け取ったことがある」との回答は6.6%でしたが、「所属事務所等に任せているので自分ではわからない」(12.3%)、「利用されたかわからない」(10.9%)と、状況を把握できていない実演家の方が上回っていました。インターネット・プラットフォーム上では、多数の映像作品が作られるようになってきましたが、今後、実演家への対価還元について注視する必要があるでしょう。(問B-10 (b)、B-11、12 P.75～77)

■仕事上の問題点

芸能実演家が感じている仕事上の問題点を複数回答で問うたところ、最も多いのが「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」(29.1%)で、次いで「仕事のスケジュール調整が難しい」(28.2%)、その次に「報酬その他についての交渉力が弱い」(27.4%)があがっています。ジャンルによって傾向に違いがありますが、実演家が抱えている問題点は多岐にわたっています。一方、今回、「問題があるとは感じていない」という選択肢は第9回の18.6%から16.0%に低下しました。(問 C-1 P.86)

■よりよい活動が続けていくために

実演家としての技術・技能を向上させるためのサポートとして何が必要か、選択肢の中から3つまで選ぶ設問では、「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」「プロのための研修が充実すること」「技術・技能向上のための研修奨励金等があること」「芸能や映像等の作品を発表、公開できる場の確保、充実」「様々な分野の舞台、映像制作に従事する機会があること」の順になっています。第9回調査と2位と4位、5位の順位が入れ替わっていますが、いずれも30%以上の人が選んでおり、稽古や公演、発表等の「場」の確保や研修機会の充実、サポートは、実演家が求める主要な条件であり続けているといえます。(問 D-2 P.88)

安心して活動していくための必要条件として3つまで選択する設問では、「報酬額や就労時間など仕事の条件がよくなること」(44.7%)「発表や公演、出演の機会が

契約関係について、放送番組等に出演する場合について契約書の有無を問うたところ、「全く契約書は交わしていない」が15.5% (第9回の16.3%より0.8ポイント低下)、「マネージャーに任せているので自分では確認していない」12.1% (第9回の10.7%より1.4ポイント上昇)となっており、「必ず契約書は交わしている」は4.4% (第9回の4.9%より0.5ポイント低下)にとどまっています。(問 B-10 (a) P.74)

多くあること」(43.4%)で1位、2位となりました。「報酬や就労時間など仕事条件」が、第9回では38.7%だったのが、6ポイント上昇して1位になったのは、それだけ仕事の諸条件が悪化していると感じられていることの裏返しではないかと推察されます。3番目は前回と同じく「文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること」でした。(問 D-3 P.89)

万一の場合や老後に対しての備えとして、実演家がどう対応しているか複数回答で問うた設問では、「生命保険や損害保険などに加入している」(56.9%)と「国民年金に加入している」(54.6%)が1位、2位となっているのは第9回調査と同じですが、ポイントがそれぞれ3.1ポイント、2.7ポイント下がっています。「備えをする経済的余裕がない」は第9回より1.1ポイント低下しましたが17.8%あります。(問 E-7 P.65)

仕事や生活に対する考え方

■プライドを持ち、今の仕事に満足？

芸能実演家全体でみると、仕事に対する考え方を問う質問では、「自分の仕事にプライドを持っている」は約9割が肯定と、圧倒的に肯定感が勝っています。「自分の仕事は世の中から評価されている」「自分が持つ能力を十分活用することができている」「今の自分の仕事には満足している」も肯定的な回答の割合が6割強です。

「自分がやりたくないと思う仕事は断ることができる」「芸術創造にもワーク・ライフ・バランスを考慮して、稽古、リハーサルの時間の見直し、改革が必要だ」「自分のジャンルについては、これからも後継者が育っていくと思う」という項目に関しても、「そう思う」「まあそう思う」の方が「あまりそうは思わない」「そうは思わない」という人より多いという結果でしたが、先の3項目ほど、強い肯定感は示されていません。

今回、「仕事の間では、弱い立場にたたされることが多く、いわゆるハラスメントにあったことがある」「性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある」という項目に対し、「そう思う」「まあそう思う」「あま

りそうは思わない」「そうは思わない」で選んでももらったところ、「いわゆるハラスメント」では「そう思う」「まあそう思う」の合計は約3割、性差別は約1割となっています。否定派の方が多いとはいえ、3割、1割という数字は看過できない結果です。(問 D-1 P.80～85)

それぞれの分野の協会、連盟、協議会などの統括団体に、どのような役割を期待しているか、選択肢の中から3つまで選ぶ設問では、「仕事の機会を提供すること」「次世代の育成に取り組むこと」「仕事環境、制度改善につながる情報発信等をしてくれる」が上位3つとなっています。ジャンル別にみると、「演芸」は「仕事の機会を提供すること」が67.6%、「邦楽」は「次世代の育成に取り組むこと」が61.7%、「現代演劇・メディア」は「仕事の条件を有利に交渉する後押しとなってくれること」が40.5%と高くなっており、ジャンルによって統括団体に期待することが異なっていることがうかがえます。(問 D-2 P.88)

教える仕事

実演家の6割近くが「教える仕事」を行っており、実演家の5人に1人は教授業をメインの仕事としていますといえますが、教える場は様々です。

継続的に教えていて「学校や教室、養成機関に勤めて教えている」は54.5%、「自分で教室を主宰して弟子をとっている」が66.2%で、「不定期でときどき体験指導などを依頼される」が38.6%ですが、ジャンルによって、教える場には違いがあります。「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」では、自分で弟子をとる割合が8割から9割と圧倒的に高く、「洋楽」では、学校等に雇われている場合と、自分で生徒をとる割合はいずれも7割くらいで、「洋舞」は、自分で生徒をとる割合の方が7割強と高いですが、学校等に雇われて教えているのも6割を超えています。「現代演劇・メディア」と「演芸」では「学校等に勤めて」の方が多くなっています。

「学校や教室、養成機関に勤めて（雇われて）教えている」と回答した人に、どのような学校、教室に勤めているのか複数回答で求めたところ、実演家全体では最も多いのが「民間企業や個人主催の音楽教室、バレエ教室等」(27.4%)、次いで「カルチャーセンター」(25.3%)です。ジャンル別に見てみると、「洋楽」は「大学・大学院」(43.8%)と「民間企業や個人主宰の音楽教室、バレエ教室等」(43.8%)が多く、「短大」(10.7%)も比較的多いです。「洋舞」では「民間企業や個人主宰の音楽教室、バレエ教室等」(60.4%)が最も多くなっています。「演出、制作等」と「現代演劇・メディア」は、いずれも「劇団、舞踊団などの附属養成機関」が最も多く、次いで「専門学校」となっています。「伝統演劇」「演芸」「邦舞」は、「カルチャーセンター」が最も多く、「邦楽」は「小・中・高校」(46.3%)となっています。「カルチャーセンター」は主に愛好者向けと思われますが、それ以外は各ジャンルのキャリア形成の傾向とも呼応しています。

生徒・弟子の数では、実演家1人当たりが「学校や教室、養成機関等」で継続的に教えている生徒数は平均値で39.1人。第9回調査結果(47.7人)から減少しています。ジャンル別で見ると、「邦楽」「伝統演劇」「洋舞」で増加しています。「自分で教室を主宰して」教えている生徒・弟子の数は平均で23.6人。第8回調査は23.1人でしたから微増です。ジャンル別にみると、「邦楽」「伝統演劇」「現代演劇・メディア」は増えていますが、「邦舞」「洋楽」「洋舞」は減少しています。問B-3で見たように、ここ2～3年、「洋舞」「邦舞」の「教える仕事」は増え

ていると感じている人の方が、減っていると感じている人より多い傾向にありましたが、実演家一人当たりの生徒（弟子）の数は、減少傾向にあり、とくに「洋舞」は、20年前の第6回調査からの推移をみると、学校等に雇われて教えている場合も、自分で教室を主宰している場合も、平均の生徒（弟子）数は大きく下降してきています。(問B-4(a)(b)、B-5 P.44～45)

今回の調査では、将来、実演家を目指すようなプロ養成なのか、愛好者向けなのかといった対象者の傾向までは設問に含めていませんでしたが、教授業に就いている実演家数名にヒアリングをしたところ、「習う人が急激に減少しているという実感はないが、愛好者は減っていると感じる」「長年、お稽古を続けようという生徒より、ちょっと体験してみるだけの人が多い」という発言がありました。後継者育成は重要とはいえ、プロ志望者より、愛好者のすそ野を広げることが課題ということは、いずれのジャンルの教授業の人も感じているようです。

伝統芸能では、かつては、いわゆる旦那衆として、実業家や商家の主人などが芸事を嗜み、それが社交の場でもあり、コミュニティとしても一定の機能を果たしてきましたが、そうした「嗜み」を持ち続ける文化から、いろいろな体験を「こと」として消費していく風潮に変化してきているのではないかと、このような見方もあります。旧来のお弟子さんが富裕層中心だったところから、もう少し若い、広く一般の方へシフトしていて、裾野が広がる意味では歓迎すべきこととはいえ、お安い会が開きにくくなり、教授業の収入としてはダウンしている印象があるとのこと。ここ数年は、東京2020五輪に連動する文化プログラムとして、次世代に日本文化を伝えたいという機運があって、伝統芸能の分野の教授業は増えた実感があるようです。けれども体験機会の提供は広がっても、必ずしも継続的にお稽古する子どもたちが増えたということではなさそうです。

洋楽は幼児や子供にたいする教育、教授の方法がかなり発達している分野で、教本の種類も多く、初級、中級と段階的に教授しやすく、しかも楽譜は洋楽のほぼどの分野でも応用が効きます。学校教育でも取り入れられているので、継続しやすく、個人の歌から合唱へ、簡易な器楽のアンサンブルから次第に吹奏楽へのステップアップが図られやすいという特徴もあります。個人でも集団でも楽しめ、メディアを通して身近に感じる機会も多いため、習いたい人も多いでしょう。ただ近年の特

徴として、音楽大学に進学し専門家をめざす人がかなり減少しているとのこと。その一方で、定年後や子育てが一段落した主婦など、社会人大学生が音楽の専門教育を受けるといった例も増えています。洋楽以外でも、中高年になってから趣味として芸能を習い始めるということは少なくなく、カルチャーセンターや民間の教室が、そうした需要に応えているから、少子化の影響が極端な教授

業の減少を招いていないとも言えるでしょう。

現代演劇では、かつては教授業の割合は低かったですが、昨今はワークショップの指導の機会も増え、学校や企業、公立文化施設などが提供する体験機会など、体験の場も多様化しているようです。習う人のニーズも多様化してきた昨今、教える側も、教える対象や求められている場によって、工夫が必要とされているようです。

インターネットの活用

今回、初めてインターネットとの関わりについて、いくつかの設問を設けました。自分の活動のプロモーションに、インターネットやSNSなどを活用しているかを複数回答で尋ねたところ、「インターネットは活用していない」は34.7%にとどまり、回答者の半数以上はインターネットを利用していることがうかがえます。インターネットで利用しているものとしては、最も多かったのが「Facebook」(35.9%)で、次いで「ホームページ、ブログを開設している」(30.4%)、「Twitter」(23.0%)となりました。(問B-9 P.73)

ジャンル別に見ると、最も活用しているのは「洋舞」で、「ホームページ、ブログ」が52.1%と半数を超えていて、次いで「Facebook」(42.4%)、「Instagram」(35.8%)、「LINE」(30.3%)の順で使われています。次によく活用しているジャンルは「演出・制作等」で、最も使われているのが「Facebook」(46.9%)、「Twitter」(38.8%)、「ホームページ、ブログ」(36.2%)となりました。一方、「インターネットは活用していない」という回答が最も多かったのは、「邦楽」(59.3%)で、「伝統演劇」(54.9%)、「邦舞」(37.6%)と続きます。

また、今回の実態調査では、インターネットを活用している実演家に対してインタビューを行いました。インターネットの活用によって、新しい仕事のオファーを得るチャンスとなっている、または協会や団体によるプロモーションが期待できない場合には、自らをプロモーションする場となっている、さらには、インターネット上に映像で実演を残すことによって、アーカイブのような役割を担っているとの話も聞くことができました。

プロモーションに活用できそうだという期待感がある一方で、実演をしているシーンが、無断でSNSに上げられた経験があるとの声も聞かれました。また、自分の実演をアップロードしたにもかかわらず、楽曲を使用したため権利の問題から削除されてしまったことがあると

いう事例もありました。実演家は自身の演技や舞踊、演奏、歌唱を、YouTube、FacebookなどのSNSに上げることができます。しかしながら、実演家に無断でその実演をSNSなどに上げることは、実演家の権利の侵害となります。このことは、他人の音楽を無断で使用して、SNSなどに上げる場合にも同じことが言えます。したがって、例えば自分自身の舞踊をSNSに上げる場合であっても、他人の音楽を無断で使用している場合には、音楽の著作権を侵害することもあるため留意が必要です。実演家にとっては、そうした権利に関する対応が分からずに不安を感じたり、また、自分の活動であっても、所属事務所や集団、仕事の依頼主などの了承を得なければ宣伝ができない立場であることも多々あります。

また、インタビューからは、舞台で演じることを主軸にしている立場から、インターネット活用について不安視する声もありました。昨今は、YouTuberとして視聴される番組を配信して広告収入を得る人もいますが、実演家にとっては、自分自身がYouTuberとして注目されるより、あくまで、生の舞台を観に来てもらうためのプロモーションのツールとして捉えている方が主流のようです。特に、映像と舞台とでは見せ方が全く異なるため、動画として上げることを目的に趣向を凝らした映像作品は、生の舞台作品とは別物になってしまうとのこと。逆に言うと、生で観て感動する本物の芸ならば、インターネットを人に情報を届けるツールとして使いさえすれば、自ずと拡散されて実演への関心が広がる可能性もあるはずだとの声も聞かれました。インターネットを全く活用していないという実演家が3割、宣伝ツールとして使いこなせるか不安という実演家も多そうですが、これだけ生活の延長線上と言えるほどインターネットが身近になってきている現在、どう利用していくか、実演家もさらなる試行錯誤が必要なのだろうと思われます。

Ⅱ. 調査設計・調査回答者について

■ 調査設計

	第 10 回実態調査（実演家部門）
調査地域	全国
調査対象	日本芸能実演家団体協議会加盟団体に所属する個人
調査手法	郵送法
標本抽出	団体名簿による割り当て法*
発送数	6,645
有効回収数	1,572
有効回収率	23.7%
調査期間	2019 年 8 月 10 日～9 月 2 日
調査実施機関	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
調査協力機関	株式会社インテージリサーチ

*正会員団体を 8 つのジャンルに分類し、同一設問ではあるが、用紙の色を 8 種類用意し、ジャンルごとに色を分けて送付。

< 参考 > 第 9 回 調査設計

	第 9 回（実演家部門）
調査地域	全国
調査対象	日本芸能実演家団体協議会加盟団体に所属する個人
調査手法	郵送法
標本抽出	団体名簿による割り当て法*
発送数	6,941
有効回収数	1,603
有効回収率	23.1%
調査期間	2014 年 8 月 1 日～8 月 31 日
調査実施機関	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
調査協力機関	株式会社インテージリサーチ

■ 調査対象の抽出方法の一部変更について

これまでの調査方法を踏まえ、無作為に抽出された実演家、スタッフを調査対象としていますが、抽出母体については一部変更を行っています。本調査は、原則として芸団協正会員団体を構成する実演家、スタッフを、所属団体ごとに「邦楽」「伝統演劇」「邦舞」「洋楽」「現代演劇・メディア」「洋舞」「演芸」「演出・制作等」の 8 ジャンルの分野にわけ、それぞれ少なくとも 100 人以上の回答が得られるように、過去の回収率を参考にして抽出数を割り出してきました。

前回の第 9 回調査では、「現代演劇」部門の実演家への送付については、一般社団法人映像実演権利者合同機構（PRE）に協力をあおぎ、正会員傘下の実演家だけでなく、映像実演にかかわる実演家として同機構に権利委任をしている実演家およそ 4 万余名から無作為抽出を試みました。しかし、PRE に登録されているのは所属事務所の住所がほとんどで、実演家本人に直接届かなかったことから、また、権利委任した人が現在も実演家としての活動を行っているとは限らないことから、現代演劇

部門の回収率が大きく低下し、追加発送を行った経緯がありました。第9回の経験を踏まえ、第10回調査では第8回までの正会員団体の実演家を範囲とする抽出法に戻し、PREの登録名簿は使用しないこととしました。

なお、第9回調査でPREを経由しての発送を行ったことで、第8回調査では「その他」部門に含んでいた日本モデルエージェンシー協会(芸団協加盟は2002年)は、PREに委任しているモデルがほとんどであることから、「現代演劇・メディア」部門に含めるようになりました。第10回調査は、PREは経由していませんが、日本モデルエージェンシーは「現代演劇・メディア」部門の団体として扱いました。第9回、第10回調査の「演出・制作等」には、日本演出者協会と日本新劇製作者協会のほか、劇団等の製作、オーケストラ、バレエ団の事務局を対象として設問票を送付しています。属性が異なるので、第8回調査までの「その他」部門と、第9回以降の

「演出・制作等」は、比較できないことにご留意ください。(協力団体一覧はP.170を参照のこと)

1989年度の調査から、一貫して団体名簿による割り当て法をとってきたとはいえ、実演家等への送付方法は若干変化しています。それぞれの団体で芸団協調査への協力を検討していただき、了承が得られ名簿提供いただいた団体もありますが、名簿の提供はしないけれども必要な通数の発送に協力するという形での発送が増えました。各団体の事務局のご協力がなければ、実演家、スタッフ合わせて8,000通を超える調査票の送付は不可能でした。個人情報収集が難しくなった現在も、45年にわたって継続され、会員団体の皆様に認知されている調査として実施できたことに、歴史の積み重ねを感じました。本調査の意義をご理解くださり、手間を惜しまずご協力くださった多数の方々に、改めて御礼申し上げます。

■ ジャンル別回収率

	第10回 実演家部門		
	発送数	有効回収数	有効回収率
TOTAL	6,645	1,572	23.7%
A 邦楽	923	209	22.6%
B 伝統演劇	762	184	24.1%
C 邦舞	1,039	165	15.9%
D 洋楽	888	226	25.5%
E 現代演劇・メディア	1,014	257	25.3%
F 洋舞	711	165	23.2%
G 演芸	652	170	26.1%
H 演出・制作等	656	196	29.9%

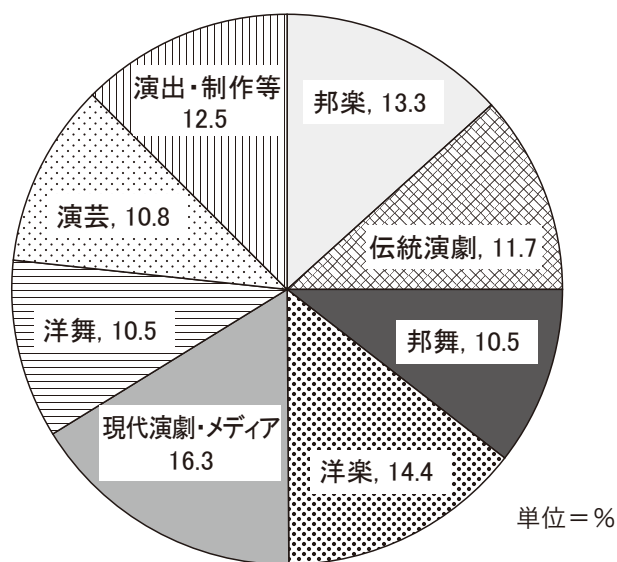
<参考>

	第9回 実演家部門		
	発送数	有効回収数	有効回収率
TOATL	6,941	1,603	23.1%
A 邦楽	885	245	27.7%
B 伝統演劇	710	224	31.5%
C 邦舞	1,050	142	13.5%
D 洋楽	800	249	31.1%
E 現代演劇・メディア	1,606	252	15.7%
F 洋舞	623	131	21.0%
G 演芸	645	163	25.3%
H その他(演出・制作等)	622	197	31.7%

■ 回答者のジャンル構成比について

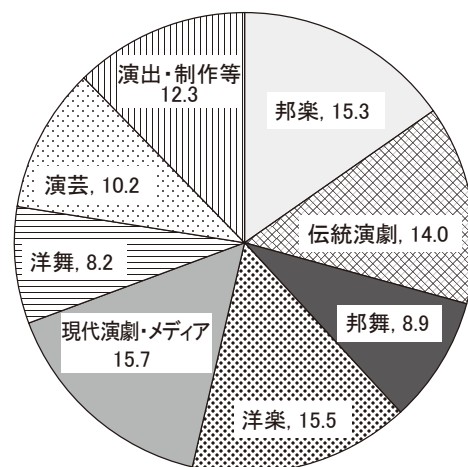
8つのジャンルの回答者数がすべて100を超えるようにと抽出を行っており、割合がほぼ同じになるのが理想です。今回は8ジャンルすべて10%を超えています。今回は「現代演劇・メディア」が16.3%と最も多く、次いで「洋楽」14.4%です。割合が低くとどまったのは、「邦舞」「洋

舞」で、それぞれ10.5%でした。第9回調査と比べると第10回調査では、「洋舞」で回答者の割合が2.3%高くなっているのに対し、「伝統演劇」で2.4%、「邦楽」で2.0%低くなっています。



※ 調査票発送段階で、あらかじめ左図の8つのジャンルに分類している（巻末参照）。
そのため A-1 (b) 「たずさわっている分野のうち最も比重の大きいもの」の回答と若干異なる場合がある。

＜参考＞第9回調査 調査結果

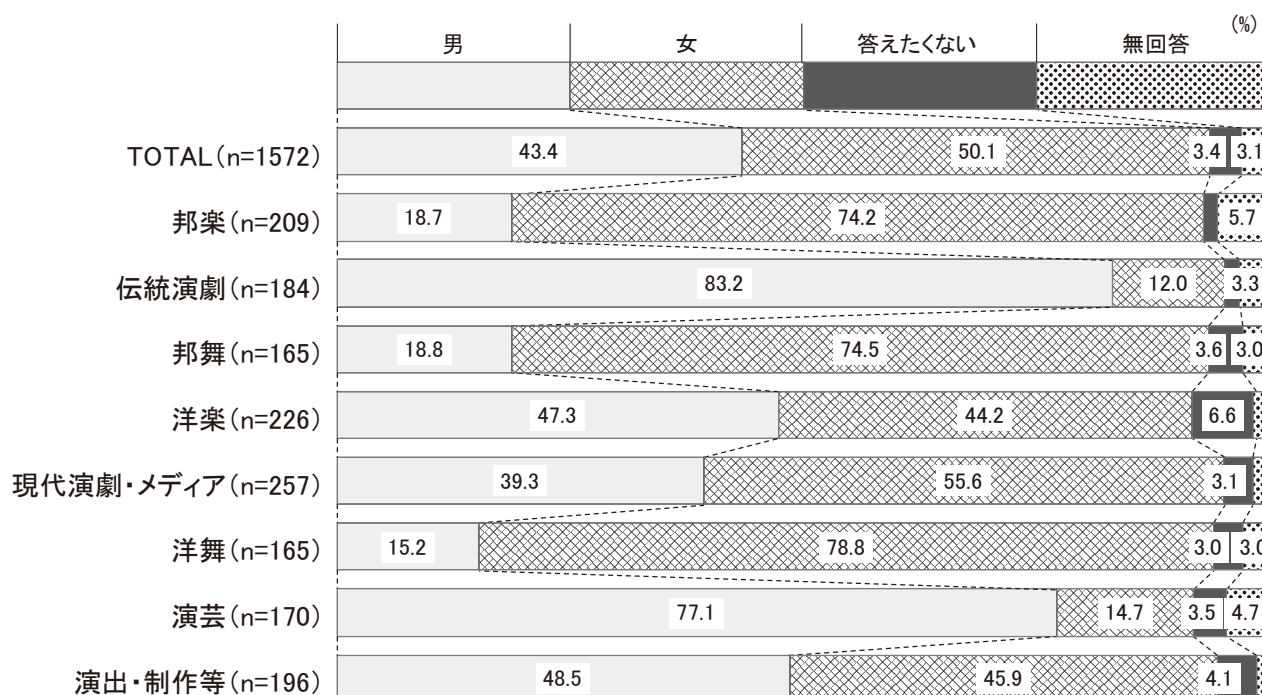


■ E-1 性別

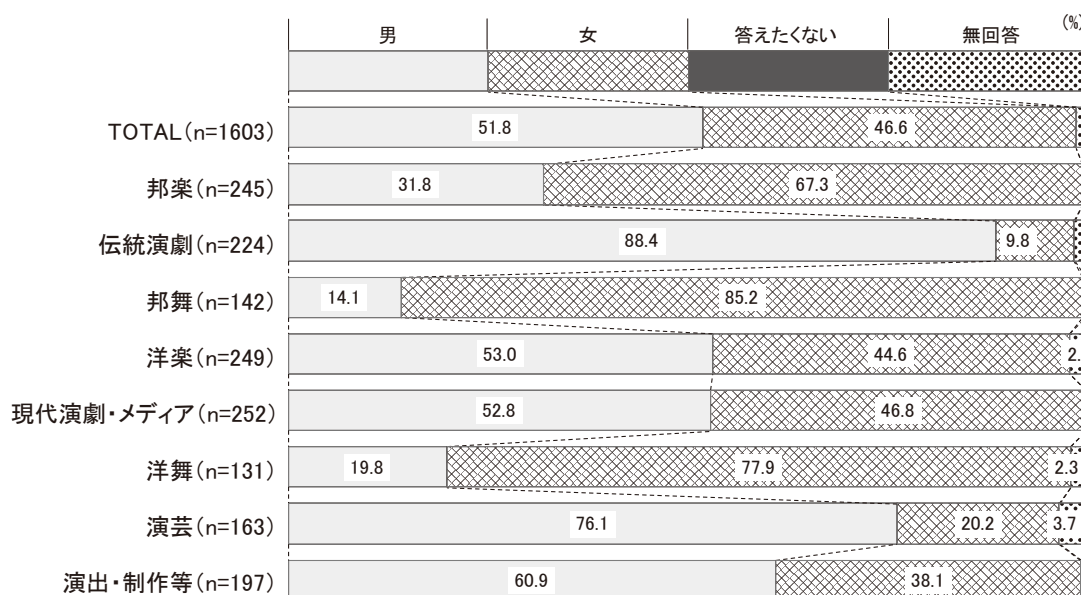
男女の構成比は、「女性」が50.1%、「男性」が43.4%と、「女性」が「男性」を上回っています。今回は、初めて「答えたくない」という選択肢を用意しましたが、3.4%が「答えたくない」を選び、3.1%が無回答でした。第9回調査では、「男性」が51.8%と「女性」を若干上回っていましたが、第8回調査では「男性」が46.4%、「女性」が50.6%で、「女性」のほうが若干割合が高いという結果でした。これは、既述のとおり前回の「現代演劇・メディア」の

対象範囲と異なって、今回は、日本モデルエージェンシー協会の傘下の実演家から多く回答を得ているため、モデルには女性が多いことが反映されていると考えられます。また今回は、前ページにあるように、女性が多い分野である「洋舞」「邦舞」の分野の実演家の占める割合が上がったため、全体として「女性」の割合が上がったことも要因と考えられます。

問 E-1 性別



<参考> 第9回調査 調査結果



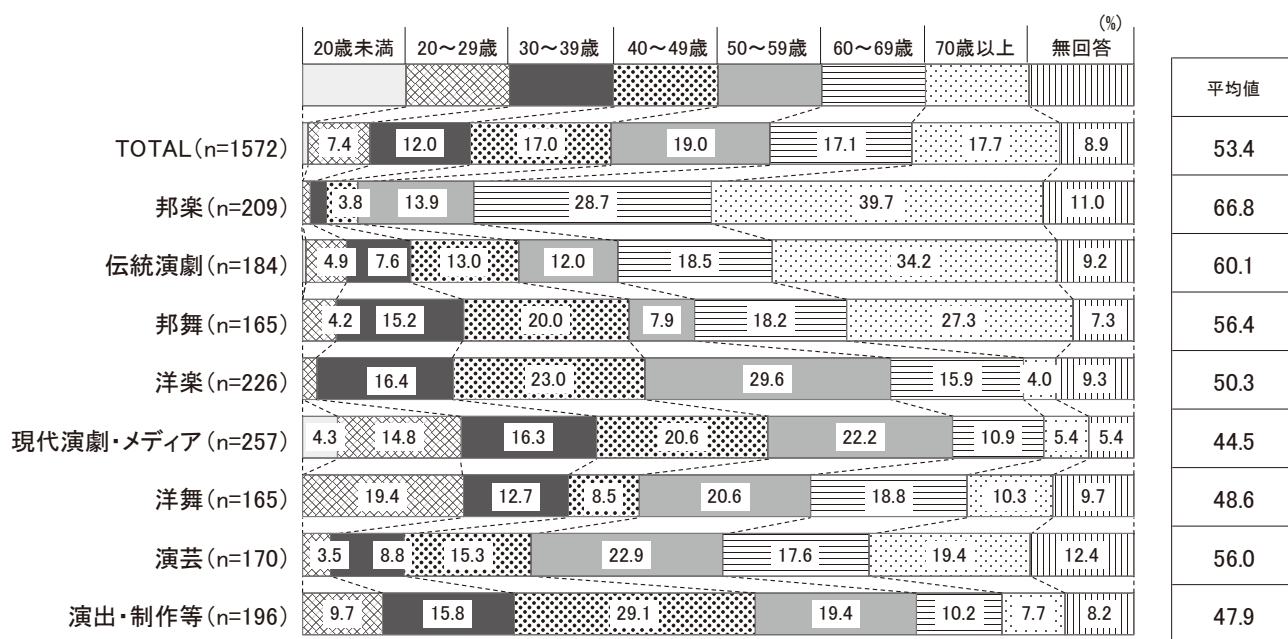
■ E-1 年齢

平均年齢は53.4歳、最も多い年齢層は「50～59歳」（19.0%）です。第9回調査に比べて回答者の平均年齢は0.6歳下がっており、「20歳未満」「20～29歳」「70歳以上」の割合が若干高くなっています。

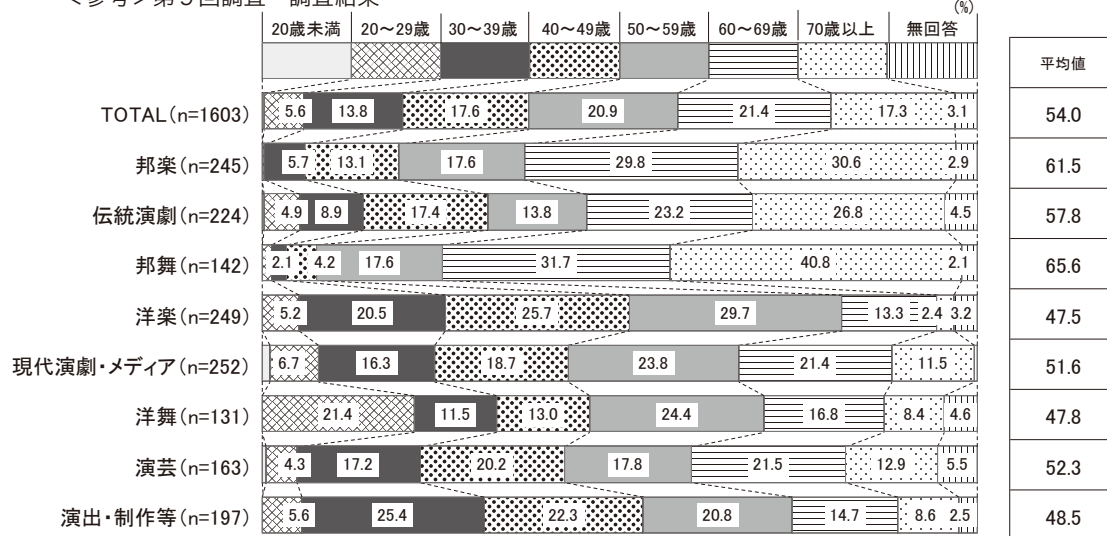
ジャンル別に見ると、「邦楽」で「70歳以上」が第9回では30.6%だったのが39.7%へと高くなっており、平均年齢も61.5歳から66.8歳に上がっているのが目立ちます。一方「邦舞」は、「70歳以上」が40.8%から

27.3%に、「60から69歳」が31.7%から18.2%へと減少し、平均年齢も65.6歳から56.4歳に下がっています。また、「現代演劇・メディア」では、第9回では「20歳未満」が1.2%だったのが4.3%に増加し、「20～29歳」も6.7%から14.8%に増加した結果、平均年齢が51.6歳から44.5歳に低下しています。「演出・制作等」でも50歳未満の割合が若干高まり、平均年齢が48.5歳から47.9歳へと下がっています。

問 E-1 年齢



<参考>第9回調査 調査結果



Ⅲ. 分析結果詳細

以下には、テーマごとに、各設問の回答集計結果を示していきます。「B-1」「C-2」というのは設問の記号です。
(MA) と表示しているのは、複数回答を可とした設問

です。なお設問票のサンプルと回答の集計は巻末 (P.140～) に示してあります。

(1) 経済状況・景況感について

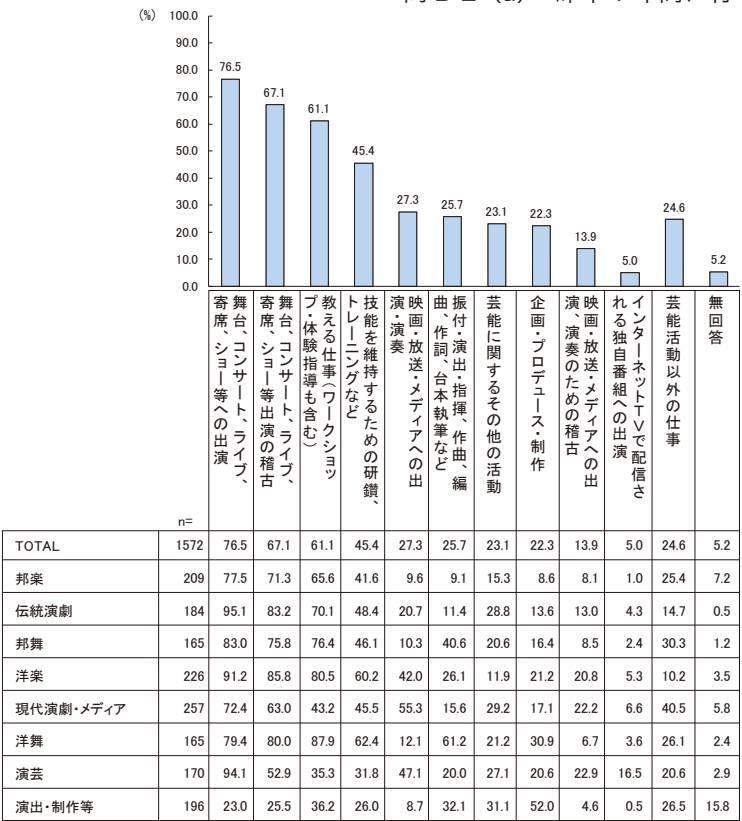
<活動の状況>

● B-2 (a) 昨年 1 年間に行った活動 (MA)

昨年 1 年間に行った活動すべてに○をつけてもらった結果は、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」が最も多く 76.5%、次いで「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベント出演のための稽古」(67.1%)、「教える仕事 (ワークショップ・体験指導も含む)」(61.1%) となっています。

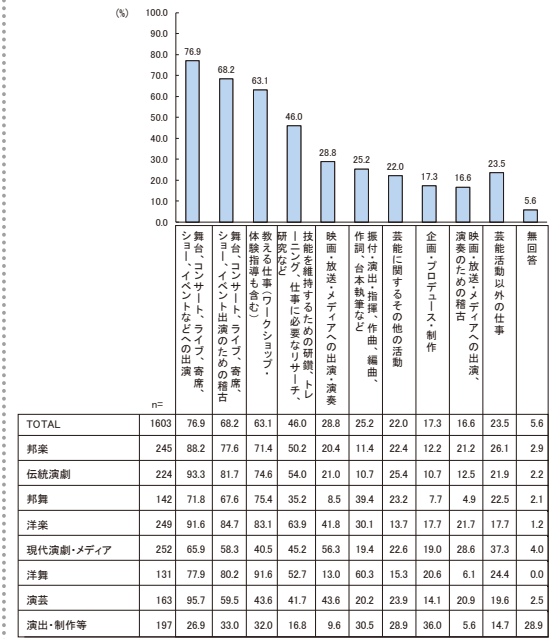
ジャンル別の傾向をみると、「教える仕事」の割合は「洋舞」が 87.9% で最も高く、「洋楽」(80.5%)、「邦舞」(76.4%)、「伝統演劇」(70.1%)、「邦楽」(65.6%) も高めの割合となっています。新項目の「インターネット TV で配信される独自番組への出演」は 5.0% にとどまっています。

問 B-2 (a) 昨年 1 年間に行った活動 (MA)



* 第 10 回調査では、「映画・放送・メディアへの出演、演奏」の内数として「インターネット TV で配信される独自番組への出演」を初めて選択肢に含めました。

<参考> 第 9 回調査 調査結果



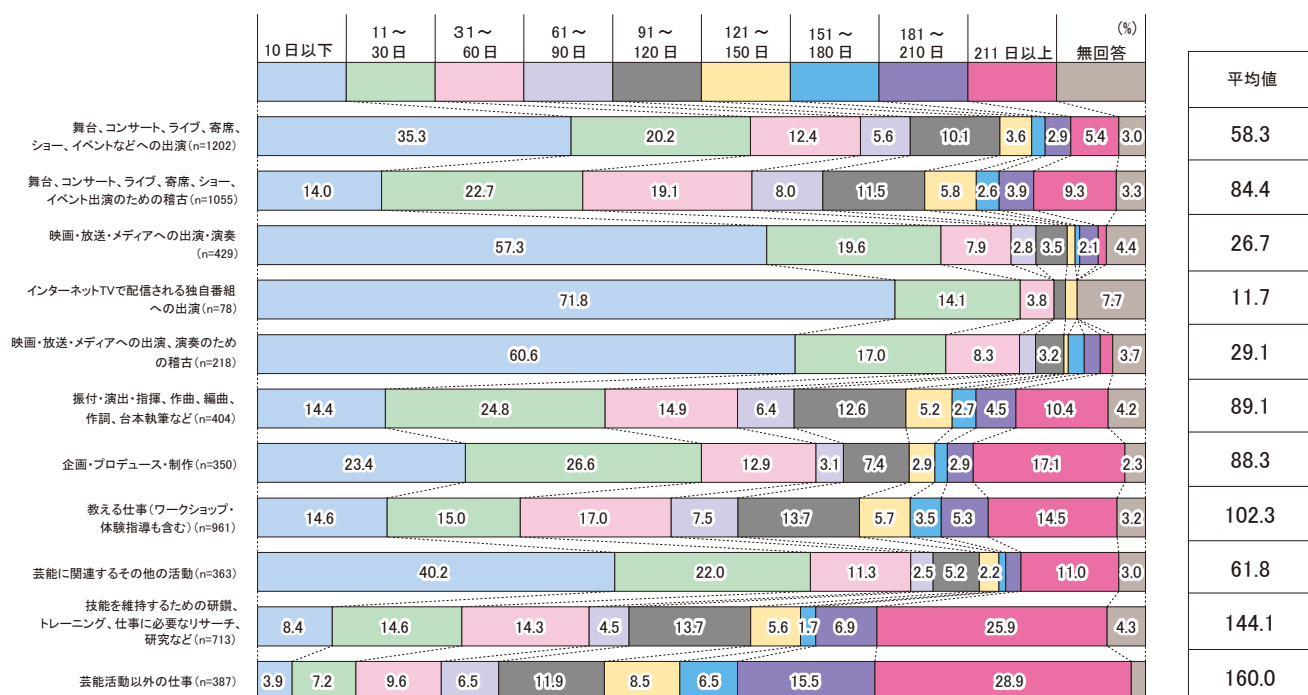
● B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数 【ベース：各活動にたずさわった人】

昨年1年間に費やした芸能に関する活動日数で、平均活動日数が最も多い活動は「技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など」で144.1日、次いで「教える仕事」102.3日でした。「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントへの出演」の平均活動日数は58.3日、「映画・放送・メディアへの出演、演奏」は26.7日です。一方、「芸能活動以外の仕事」

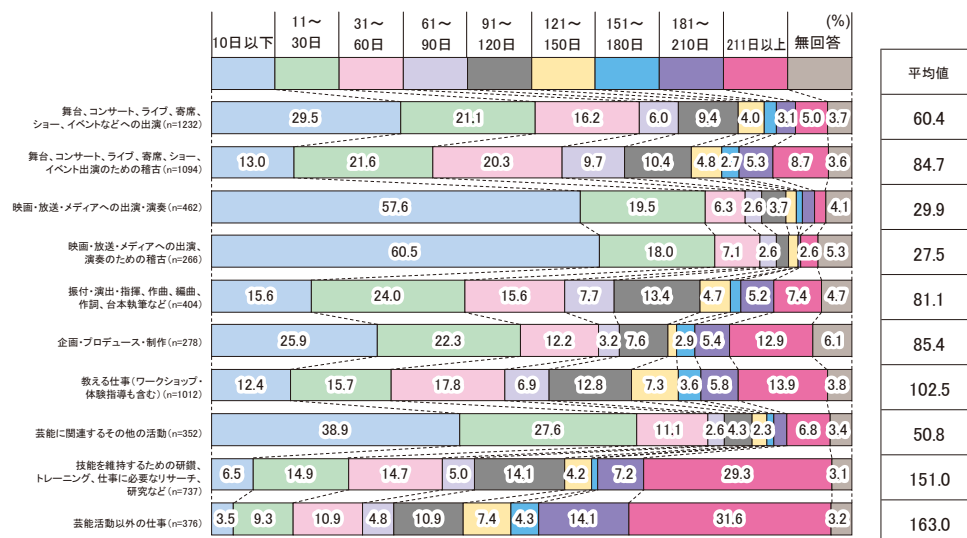
は160.0日です。今回から、選択肢の中に、「映画・放送・メディアへの出演、演奏」の内数として「インターネットTVで配信される独自番組への出演」という項目を追加していますが、11.7日にとどまっています。

第9回調査と比べ、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベント出演」「映画・放送・メディアへの出演、演奏」「教える仕事」に費やした日数が減少しています。

問 B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数 【ベース：各活動にたずさわった人】

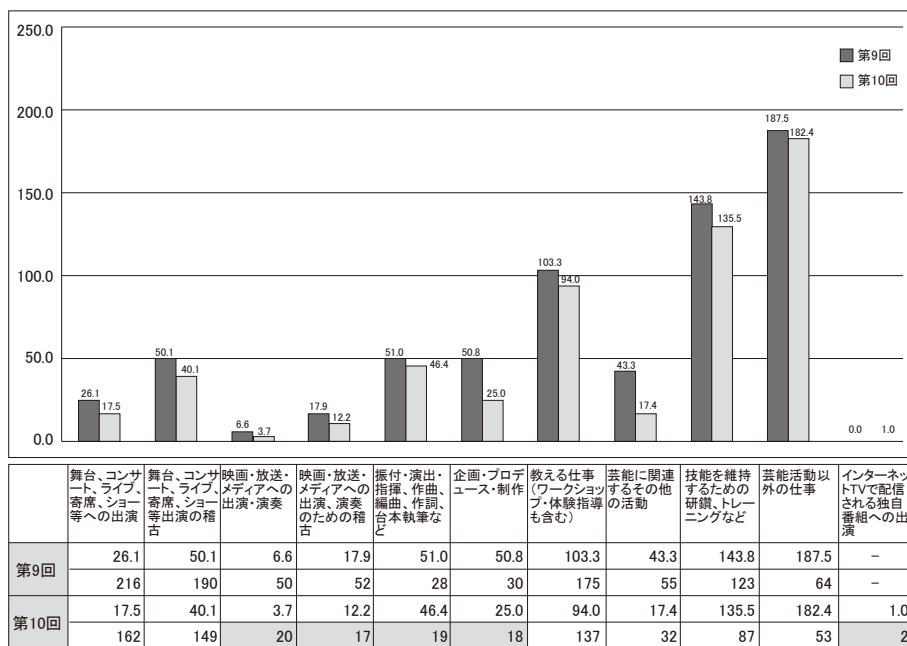


<参考>第9回調査 調査結果



B-2 (b) 昨年1年間に費やした活動日数(ジャンル別)【ベース:各活動にたずさわった人】

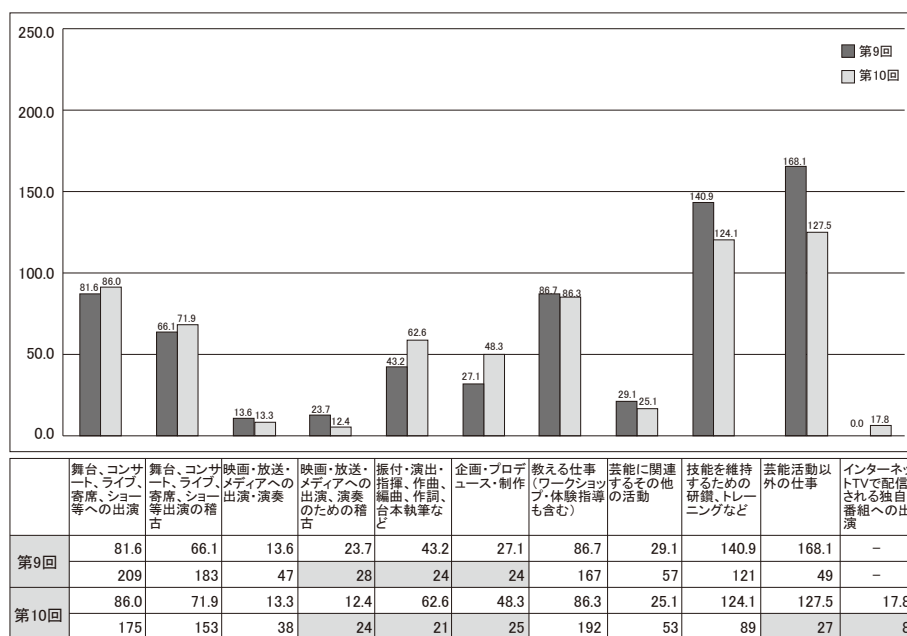
■ 邦楽



上段:平均日数(日)
下段:サンプル数(人)

昨年1年間に費やした活動日数で、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演」は、活動した人は162人と最も多いですが、活動日数の平均は17.5日と少なく、そのための稽古の平均活動日数も40.1日にとどまっています。137人が携わったと回答している「教える仕事」の方が平均日数94.0日と、より多くの日数が費やされています。「芸能活動以外の仕事」を選択している人は少ないものの、平均日数は182.4日と最も多くなっています。第9回調査結果と比較すると、全ての項目で活動日数が減っています。

■ 伝統演劇



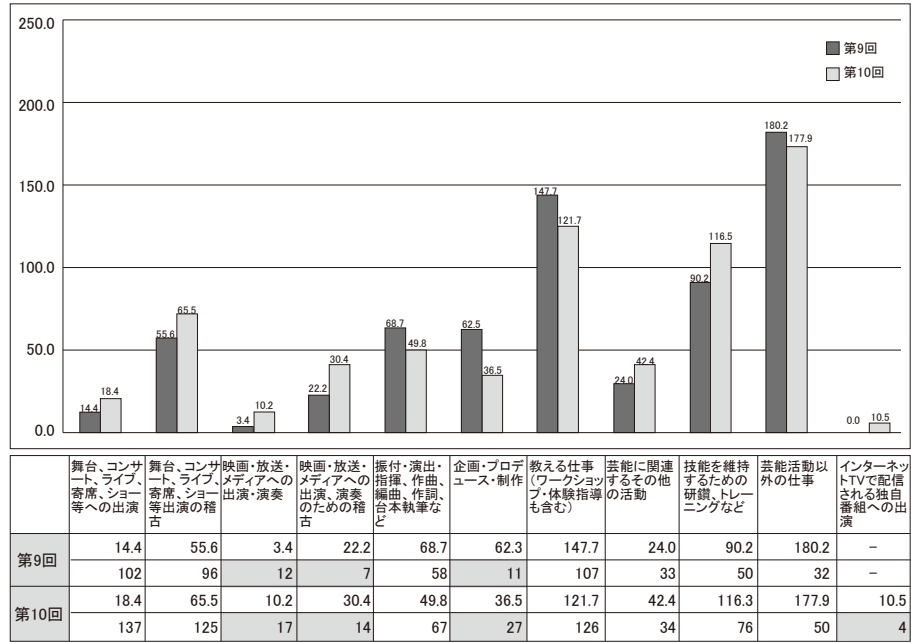
上段:平均日数(日)
下段:サンプル数(人)

最も多くの人が活動したと回答したのが「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演」で、平均活動日数は86.0日。そのための稽古の平均活動日数が71.9日。「教える仕事」をした人も192人と比較的多く、その活動日数の平均は86.3日。「教える仕事」をした人の半数以上が週1日以上、教授業を行っています。「芸能以外の仕事」をしている人は比較的小さいジャンルです。

*数表に網掛けしている箇所は、サンプル数30未満で参考値扱いとする。

**「インターネットTVで配信される独自番組への出演」の選択肢は、「映画・放送・メディアへの出演、演奏」の選択肢の内数として第10回調査のみで尋ねた。

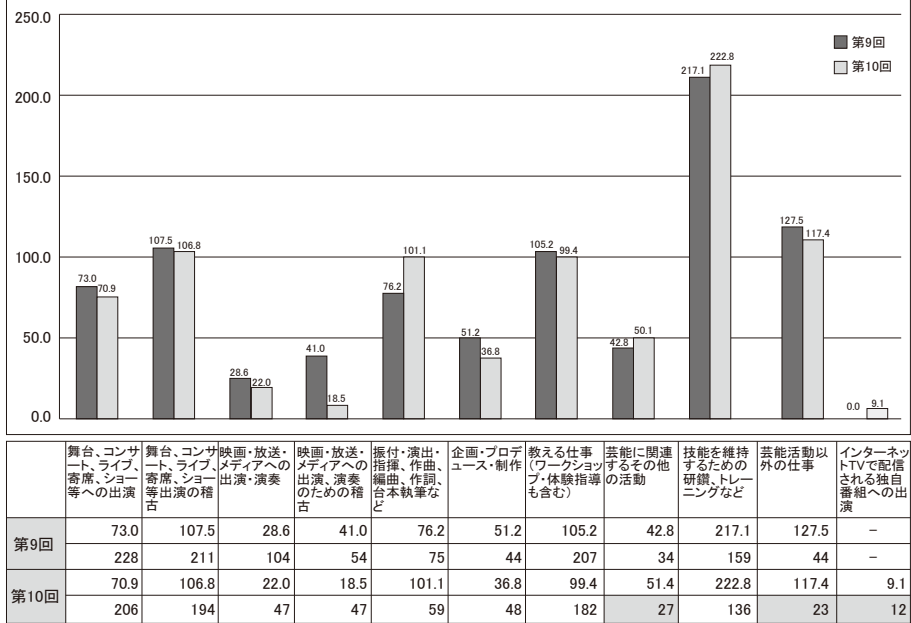
■ 邦舞



上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

最も多くの人が携わった「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演」は、平均活動日数は18.4日と短く、そのための稽古の平均活動日数と合わせても65.5日と、「教える仕事」の平均活動日数121.7日に届きません。教授業に携わるか、「芸能活動以外の仕事」と兼務している人が多いジャンルであることが伺えます。第9回調査と比較すると、「教える仕事」の日数が147.7日から26日減っています。

■ 洋楽

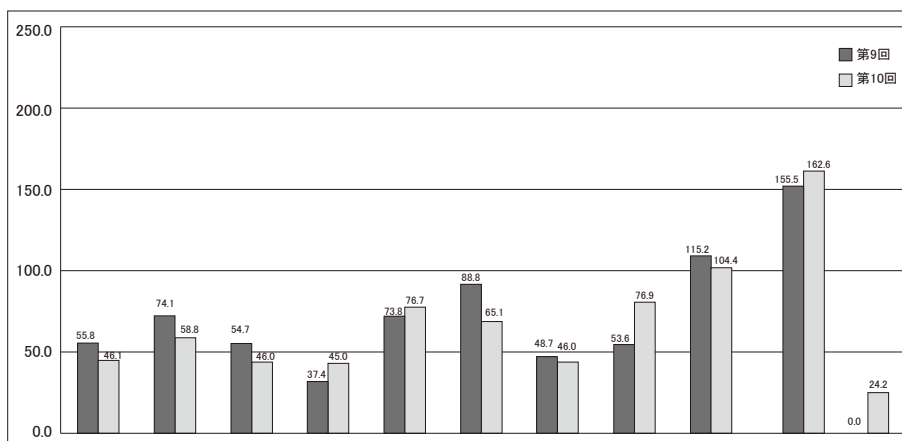


上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

最も多くの人が携わったと回答している「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演」は、平均活動日数が70.9日、そのための稽古が106.8日、次いで多い「教える仕事」が99.4日で、いずれも第9回調査より微減となっています。最も平均活動日数が多かったのは「技能を維持するための研鑽、トレーニングなど」で222.8日（第9回調査では217.1日）。携わった人の人数は限られていますが、今回は、「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など」の活動日数が24.9日増えて101.1日となり「教える仕事」の99.4日を抜きました。「芸能以外の仕事」をしている人が比較的少ないジャンルです。

*数表に網掛けしている箇所は、サンプル数30未満で参考値扱いとする。
**「インターネットTVで配信される独自番組への出演」の選択肢は、「映画・放送・メディアへの出演・演奏」の選択肢の内数として第10回調査のみで尋ねた。

■ 現代演劇・メディア

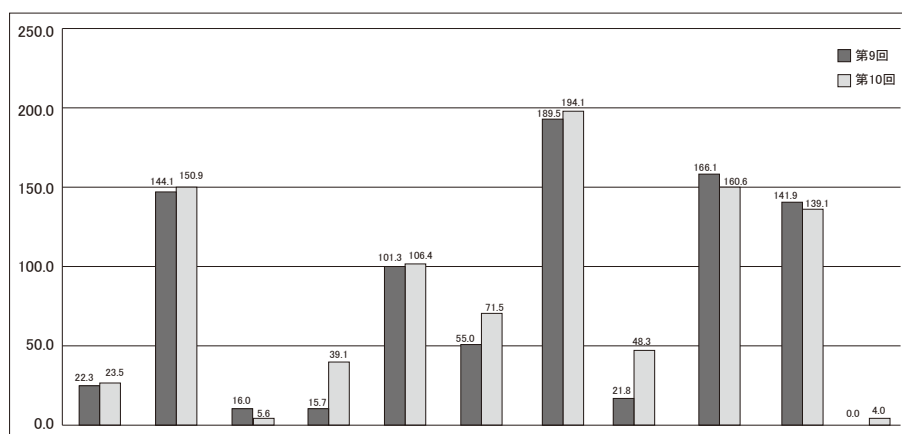


最も多くの方が携わった「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演」は、平均活動日数が46.1日、そのための稽古が58.8日。「技能を維持するための研鑽、トレーニング」も104.4日と多くの日数を費やしていますが、最も平均活動日数が多いのは「芸能活動以外の仕事」の162.6日で、芸能以外の仕事をしている人が比較的多いジャンルです。

	舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演	舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演の稽古	映画・放送・メディアへの出演・演奏	映画・放送・メディアへの出演、演奏のための稽古	振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など	企画・プロデュース・制作	教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）	芸能に関連するその他の活動	技能を維持するための研鑽、トレーニングなど	芸能活動以外の仕事	インターネットTVで配信される独自番組への出演
第9回	55.8	74.1	54.7	34.7	73.8	88.8	48.7	53.6	115.2	155.3	-
	166	147	142	72	49	48	102	57	114	94	-
第10回	46.1	58.8	46.0	43.0	76.7	65.1	46.0	76.9	104.4	162.6	24.2
	186	162	142	57	40	44	111	75	117	104	17

上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

■ 洋舞



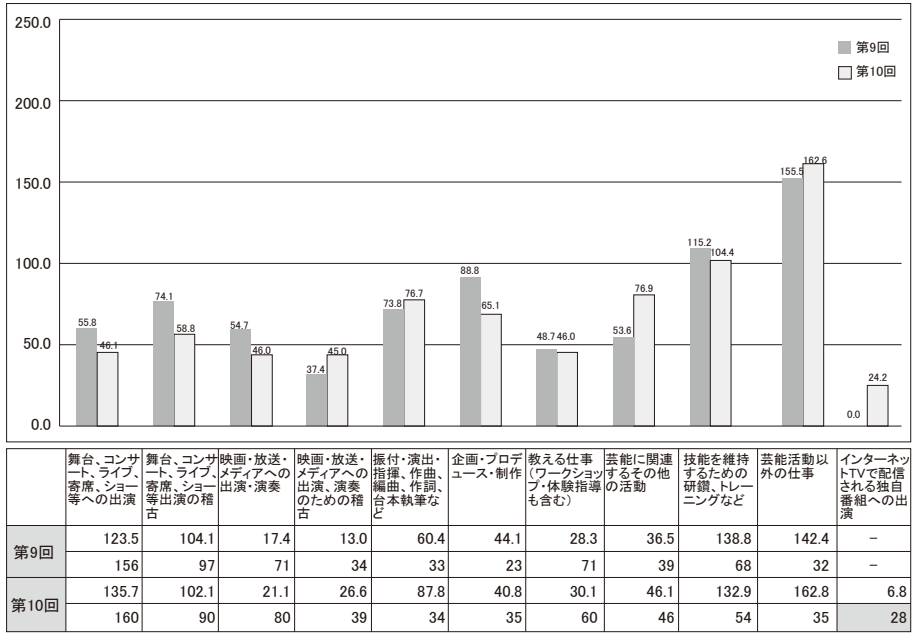
「教える仕事」は、最も多くの方が行ったと回答し、平均活動日数も最も多く194.1日。第9回調査の189.5日より4.6日増加しています。次いで多いのが、「技能を維持するための研鑽、トレーニング」（160.6日）、その次が「舞台、コンサート、寄席、ショー、イベント出演のための稽古」（150.9日）です。教授業が主たる活動のジャンルで、稽古に非常に多くの日数を費やしているジャンルと言えます。

	舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演	舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演の稽古	映画・放送・メディアへの出演・演奏	映画・放送・メディアへの出演、演奏のための稽古	振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など	企画・プロデュース・制作	教える仕事（ワークショップ・体験指導も含む）	芸能に関連するその他の活動	技能を維持するための研鑽、トレーニングなど	芸能活動以外の仕事	インターネットTVで配信される独自番組への出演
第9回	22.3	144.1	16.0	15.7	101.3	55.0	189.5	21.8	166.1	141.9	-
	102	105	17	8	79	27	120	20	69	32	-
第10回	23.5	150.9	5.6	39.1	106.4	71.5	194.1	48.3	160.6	139.1	4.0
	131	132	20	11	101	51	145	35	103	43	6

上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

*数表に網掛けしている箇所は、サンプル数30未満で参考値扱いとする。
**「インターネットTVで配信される独自番組への出演」の選択肢は、「映画・放送・メディアへの出演、演奏」の選択肢の内数として第10回調査のみで尋ねた。

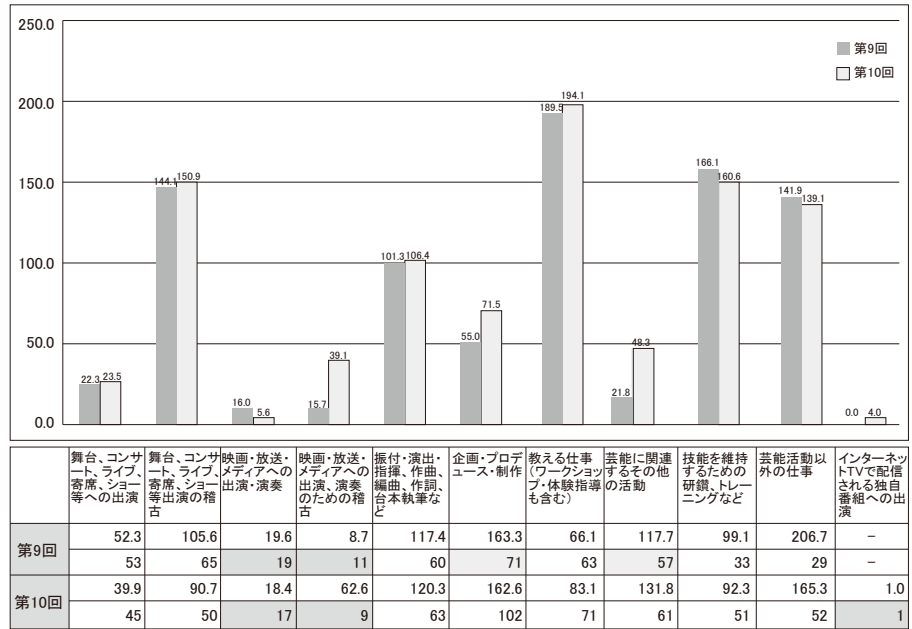
■ 演芸



上段：平均日数（日）
下段：サンプル数（人）

最も多くの人が行ったと回答している「舞台・コンサート、ライブ、寄席、ショー等出演」の平均活動日数が135.7日で、第9回調査より12.2日増加しました。「芸能以外の仕事」の平均活動日数は162.8日と多いですが、携わった人の人数は限られており、舞台、寄席中心で活動している実演家が多いジャンルであることが伺えます。

■ 演出・制作等



*数表に網掛けしている箇所は、サンプル数30未満で参考値扱いとする。
**「インターネットTVで配信される独自番組への出演」「映画・放送・メディアへの出演・演奏」の選択肢の内数として第10回調査のみで尋ねた。

最も多くの人携わったと回答したのが「企画・プロデュース・制作」で、平均活動日数は162.6日。過半数の人が、フルタイムの制作者であることを反映しています。このカテゴリーには、演出家も含まれているため「振付・演出、指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など」の平均活動日数が120.3日と多いほか、実演家として舞台に出演したり、教える仕事にも日数を費やしており、「芸能以外の仕事」をしている人は52人と少ない方ですが、平均活動日数は165.3日と多いです。様々な活動パターンの人が含まれているジャンルであるといえます。

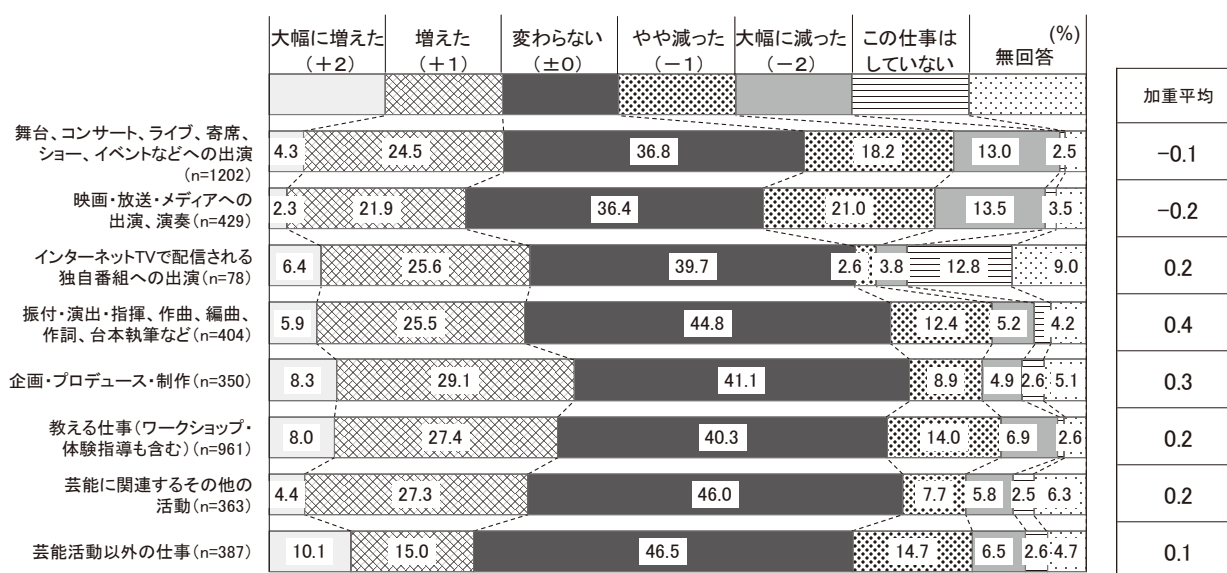
● B-3 仕事の機会について2～3年前との比較 【ベース：各活動にたずさわった人】

2～3年前と比べた昨年1年間の仕事の機会について、「大幅に増えた」を「2」、「増えた」を「1」、「変わらない」を「0」、「やや減った」を「-1」、「大幅に減った」を「-2」として、設問ごとに加重平均の値を算出しています。

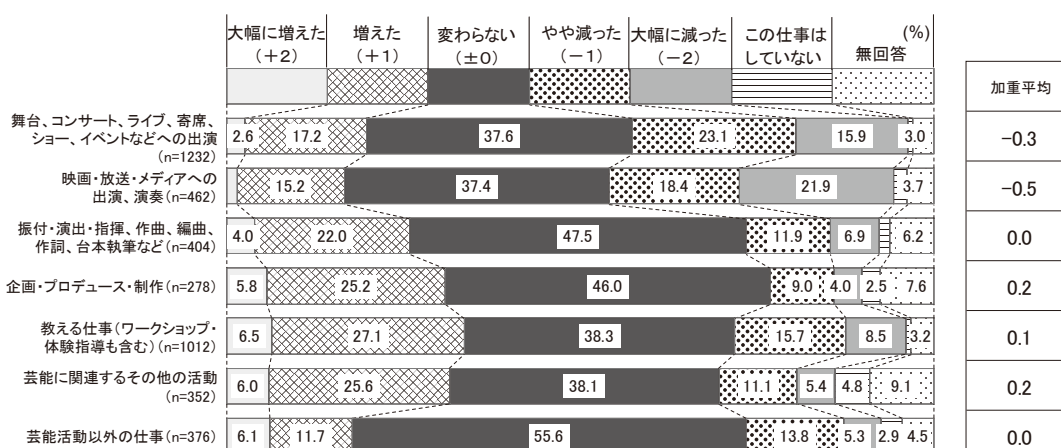
いずれの仕事でも「変わらない」と回答した人が最も割合が多くなっていますが、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」「映画・放送・メディアへの出演、演奏」では「大幅に減った／やや減った」を合わせた割合が3割余を越えていて、「大幅に増えた

／増えた」の合計よりも高いです。加重平均の値は、それぞれ「-0.1」「-0.2」となっています。ほかの全ての項目で「大幅に増えた／増えた」を合わせた割合が「大幅に減った／やや減った」を合わせた割合より上回っており、加重平均はプラスの値となっています。特に差が大きいのは、今回調査で選択肢に追加した「インターネットTVで配信される独自番組への出演」です。「企画・プロデュース・制作」は、「大幅に増えた／増えた」の割合の合計が37.4%で、最も高いです。

問 B-3 仕事の機会について2～3年前との比較 【ベース：各活動にたずさわった人】



<参考>第9回調査 調査結果



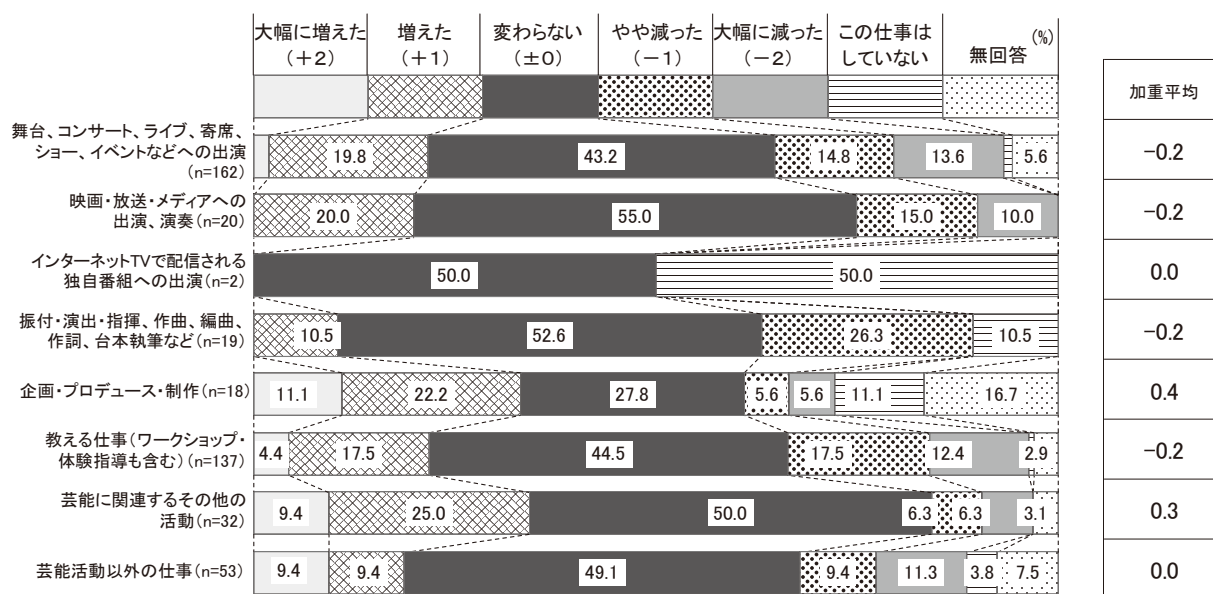
● B-3 仕事の機会について2～3年前との比較（ジャンル別）

【ベース：各活動にたずさわった人】

■ 邦楽

2～3年前と比べた昨年1年間の活動の機会をみると、「舞台への出演」では、「大幅に増えた／増えた」が21.7%であるのに対し、「やや減った／大幅に減った」の合計は28.4%で、加重平均の値は「-0.2」。「映画・放送・メディアへの出演、演奏」も「やや減った／大幅に減った」の方が大きく、加重平均の値は「-0.2」です。「教える仕事」も、「やや減った／大幅に減った」を合わせる

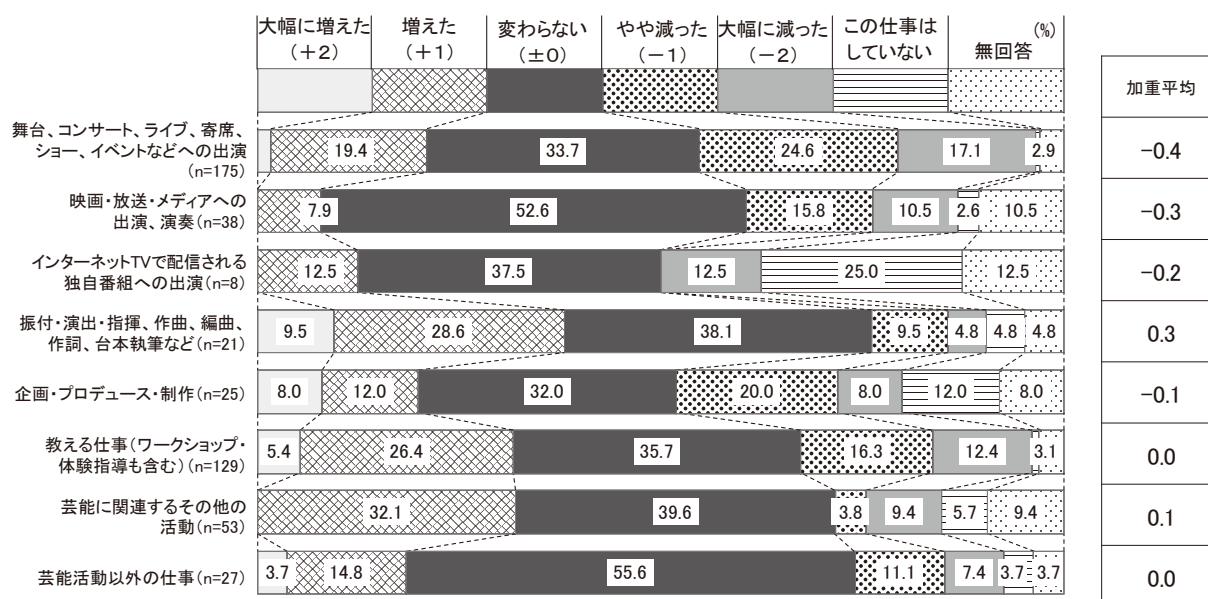
と29.9%で、「増えた／大幅に増えた」の合計21.9%を上回っており、加重平均の値は「-0.2」となっています。一方、「増えた」と感じた人の方が多いのは、回答者数は少ないですが「芸企画・プロデュース・制作」で加重平均は「0.4」となっています。「芸能に関するその他の仕事」も「やや増えた／大幅に増えた」の割合が合わせて34.4%で、加重平均の値は「0.3」です。



■ 伝統演劇

「伝統演劇」では、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」で「大幅に減った」の割合が21.5%で高く、加重平均の値も「-0.4」と最も低

くなっています。「映画・放送・メディアへの出演、演奏」も「-0.3」です。「教える仕事」については、「増えた」と「減った」が拮抗していて、加重平均は「0」です。

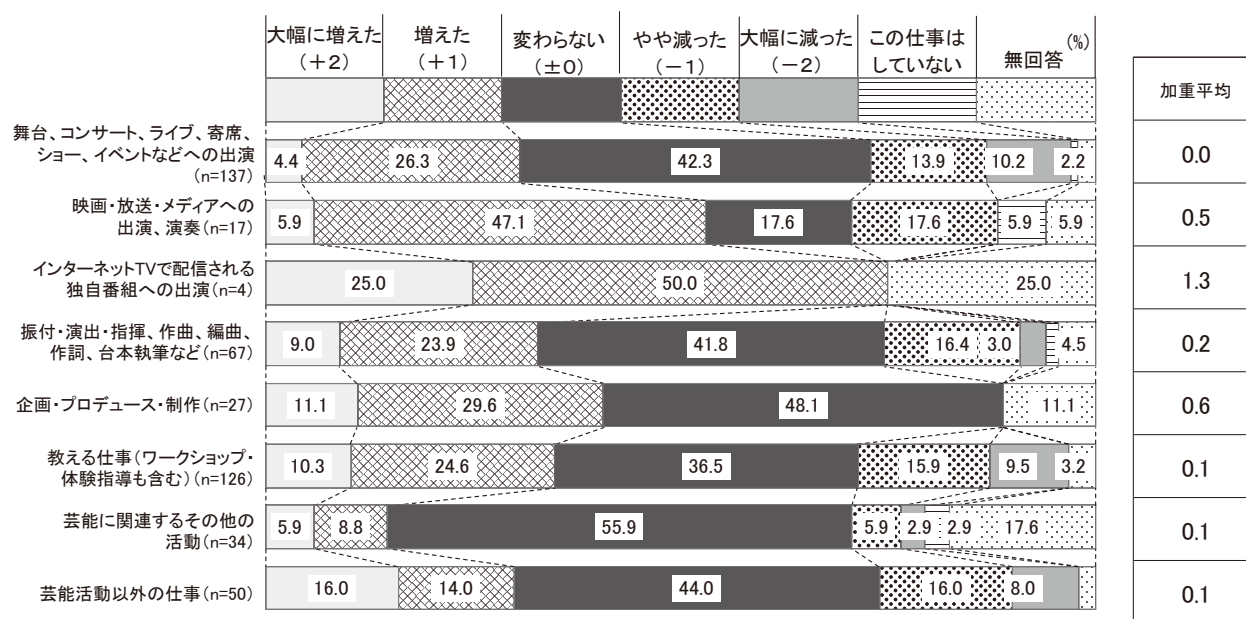


※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

■ 邦舞

【邦舞】「舞台への出演」は、「やや減った／大幅に減った」と「増えた／大幅に増えた」が拮抗しており、加重平均は「0」です。その他の項目は全て加重平均がブ

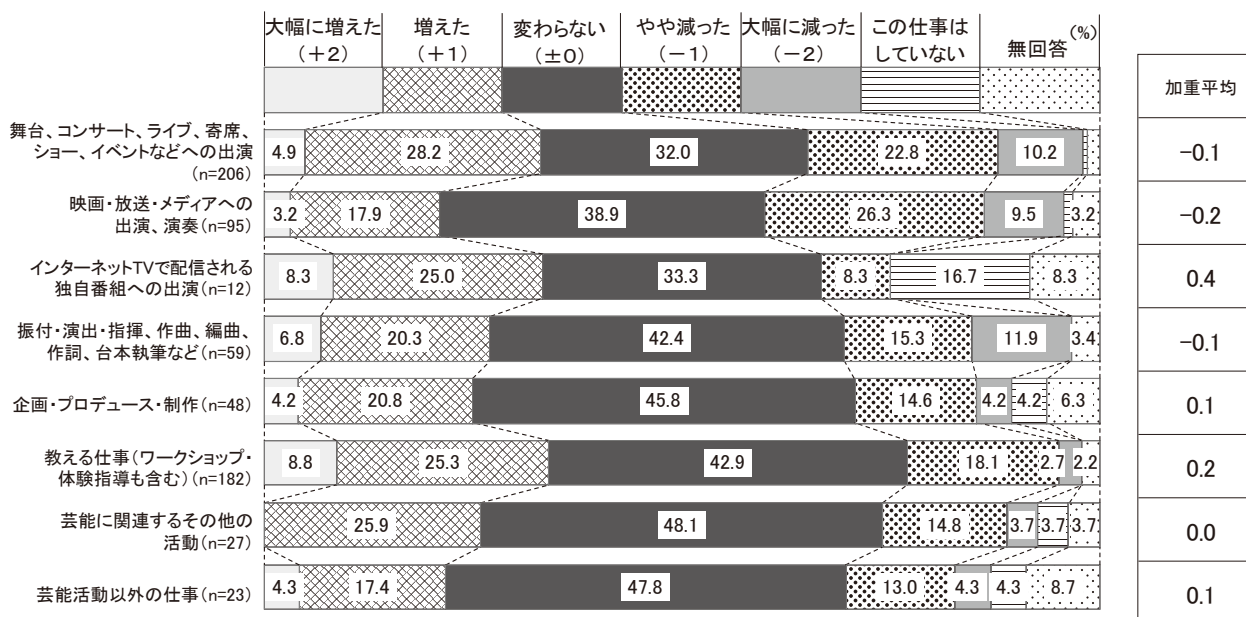
ラスの値を示しており、第9回では仕事の減少傾向を感じていた人の割合が高かったのが、ここ2～3年は反転しているようです。



■ 洋楽

「洋楽」では、「教える仕事」で「大幅に増えた／増えた」が34.1%と高くなっており、加重平均の値は最も大きく「0.2」です。一方「映画・放送・メディアへの出演、

演奏」と「舞台への出演」は、「やや減った／大幅に減った」の合計が、それぞれ35.8%、33.0%で、加重平均も「-0.2」と「-0.1」となっています。

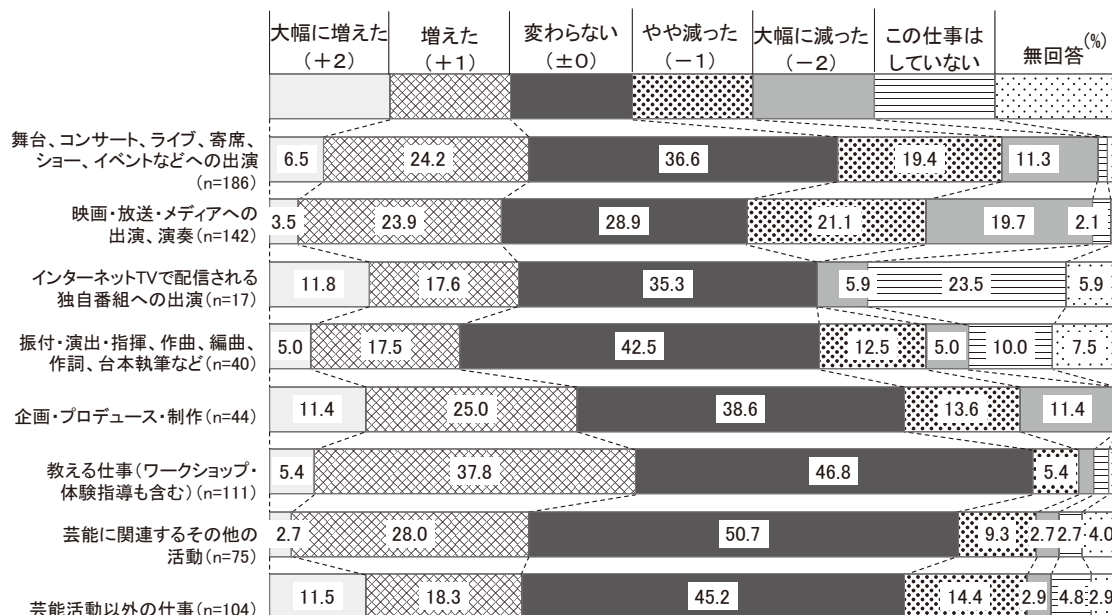


※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

■ 現代演劇・メディア

「映画・放送・メディアへの出演、演奏」で「やや減った／大幅に減った」の合計は40.8%で、加重平均の値も「-0.3」と低くなっています。「舞台への出演」は「増えた」と感じている人と「減った」と感じている人が拮

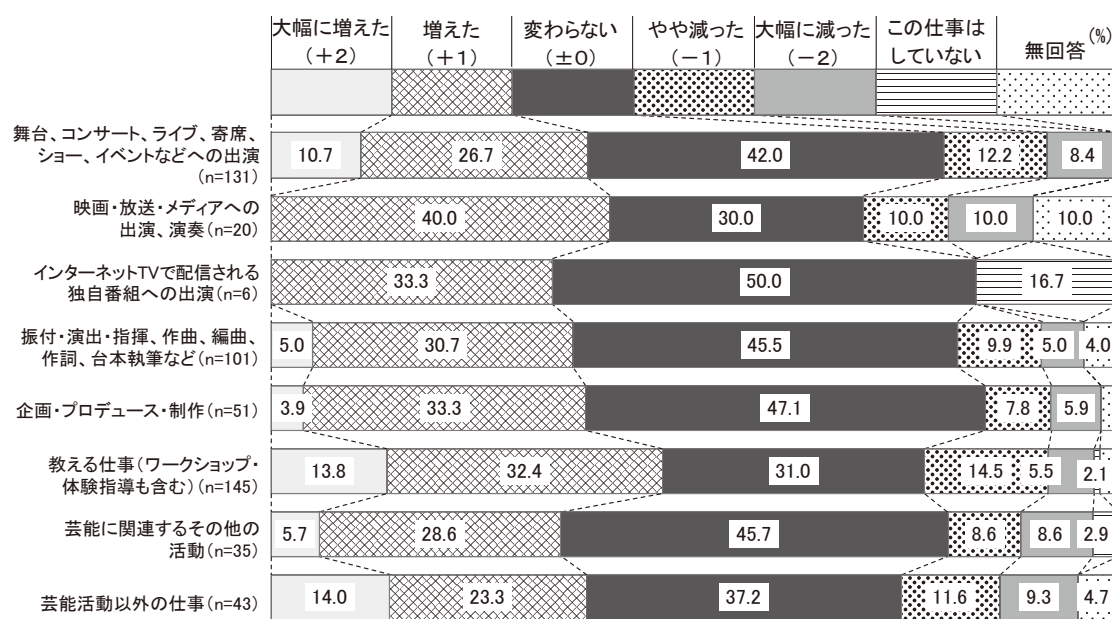
抗していて加重平均も「0」です。「教える仕事」は、「増えた」という人が37.8%と多く、加重平均の値も「0.4」と大きくなっています。索引



■ 洋舞

全ての項目で、加重平均はプラスの値となっています。とりわけ「教える仕事」は、「増えた」が32.4%、「大幅に増えた」が13.8%で、加重平均は最も高い「0.4」です。第9回では、「舞台への出演」は減少したと感じて

いた人の方が多かったですが、ここ2～3年は、「舞台への出演」も、「増えた」が26.7%、「大幅に増えた」が10.7%、加重平均は「0.2」となっています。

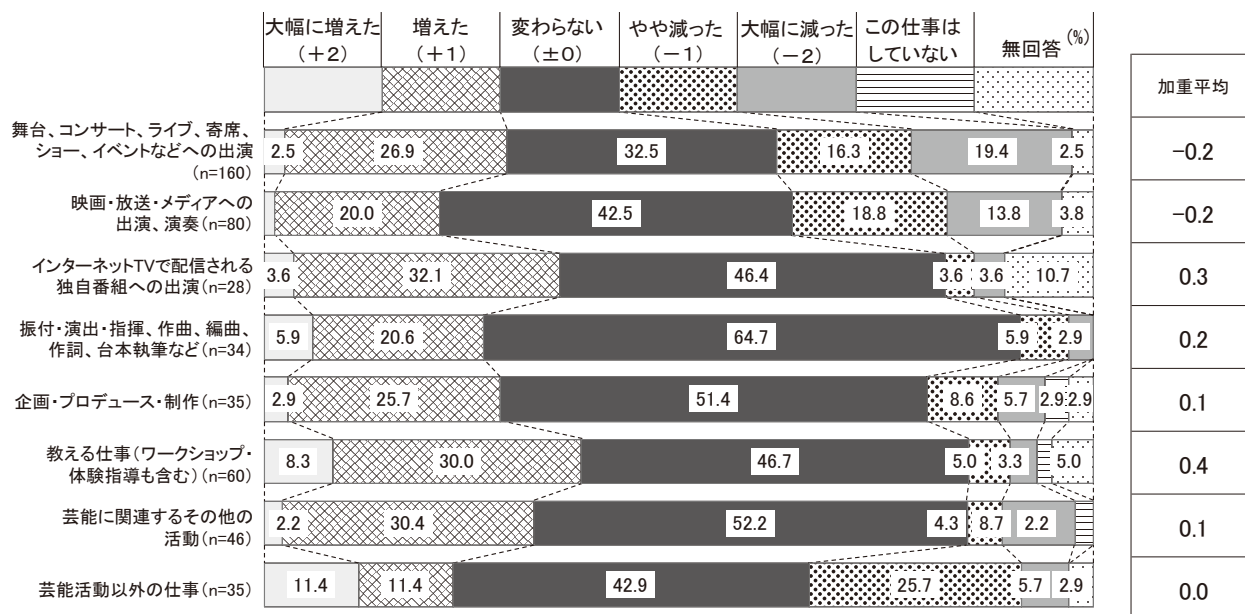


※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

■ 演芸

「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」が「大幅に減った／やや減った」が45.7%と他の項目と比較して高くなっており、加重平均

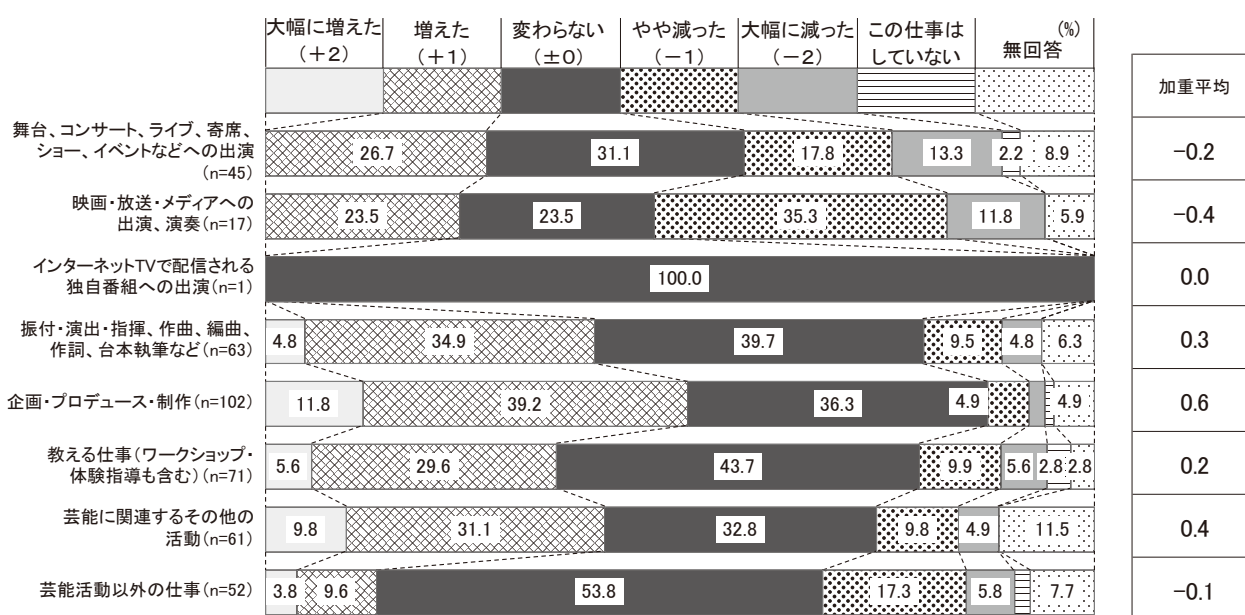
は「-0.2」。「教える仕事」は、「増えた／大幅に増えた」の合計が38.3%あり、加重平均は「0.4」と最も大きな値となっています。



■ 演出・制作等

「企画・プロデュース・制作」の平均値が0.6と、ほかの仕事と比較して大きく振れており、「大幅に増えた／増えた」の合計が51.0%と高くなっていて、加重平均の値も0.6と大きくなっています。「舞台、コンサート、

ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演」と「芸能活動以外の仕事」は減ったと感じている人の割合が高くなっていて、加重平均はそれぞれ「-0.2」と「-0.1」です。ます。



※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

<教える仕事の状況>

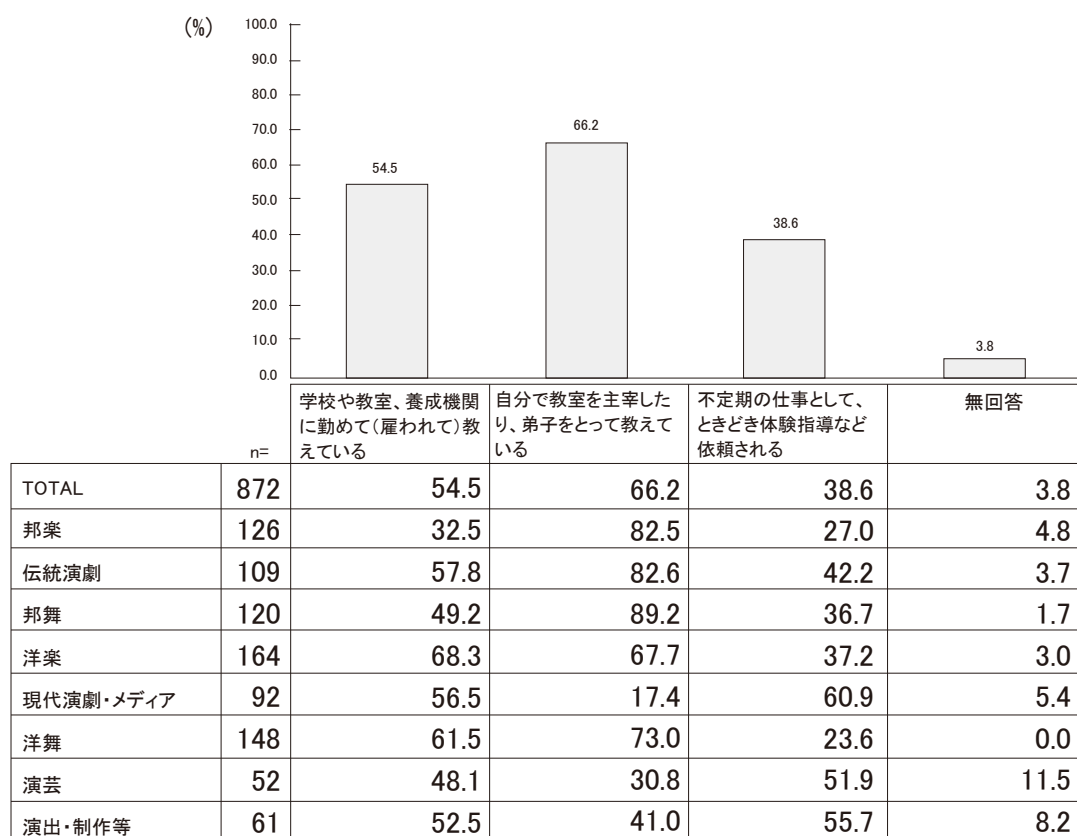
■ B-4 (a) 教える仕事 【ベース：各活動にたずさわった人】

問A-2で「教える、指導をする」に○をつけた人872人に対して、その状況を尋ねたところ、「自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている」が66.2%、「学校や教室、養成機関に勤めて（雇われて）教えている」が54.5%、「不特定の仕事として、ときどき、体験指導などを依頼される」が38.6%でした（複数回答可）。

ジャンル別にみると「自分で教室を主宰したり、弟子

をとって教えている」については、「邦舞」89.2%、「伝統演劇」82.6%、「邦楽」82.5%と、日本の伝統的な芸能で特に高くなっています。一方「学校や教室、養成機関に勤めて（雇われて）教えている」では、「洋楽」が68.3%と、最も高くなっています。「不特定の仕事として、ときどき、体験指導などを依頼される」では、「現代演劇」60.9%、「演出・制作等」55.7%が高くなっています。

問 B-4 (a) 教える仕事 【ベース：各活動にたずさわった人】



■ B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の数（1）

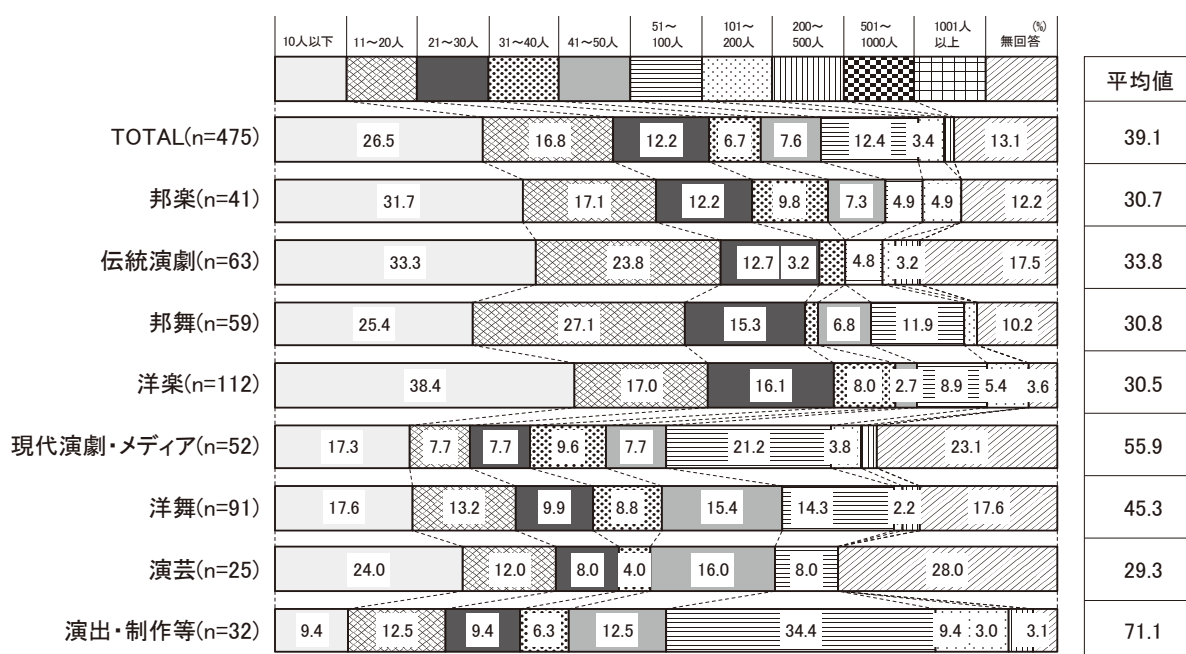
【ベース:各活動にたずさわった人】（学校等に雇われて教えている）

「学校や教室、養成機関に勤めて（雇われて）教えている」場合の、直接教えている生徒（弟子）の数は、平均では39.1人ですが、「10人以下」が26.5%と最も多く、次いで「11～20人」の16.8%で、「51～100人」12.4%と続いています。

ジャンル別にみると、「洋楽」と「伝統演劇」「邦楽」「邦

舞」は、生徒（弟子）の数が少ない傾向がありますが、「演出・制作等」と「現代演劇・メディア」では、「51～100人」が最も多く、「洋舞」では「10人以下」（17.6%）について「41～50人」（15.4%）が多くなっており、傾向が異なることが見て取れます。

問 B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の数（1）【ベース:各活動にたずさわった人】
（学校等に雇われて教えている）



※ サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

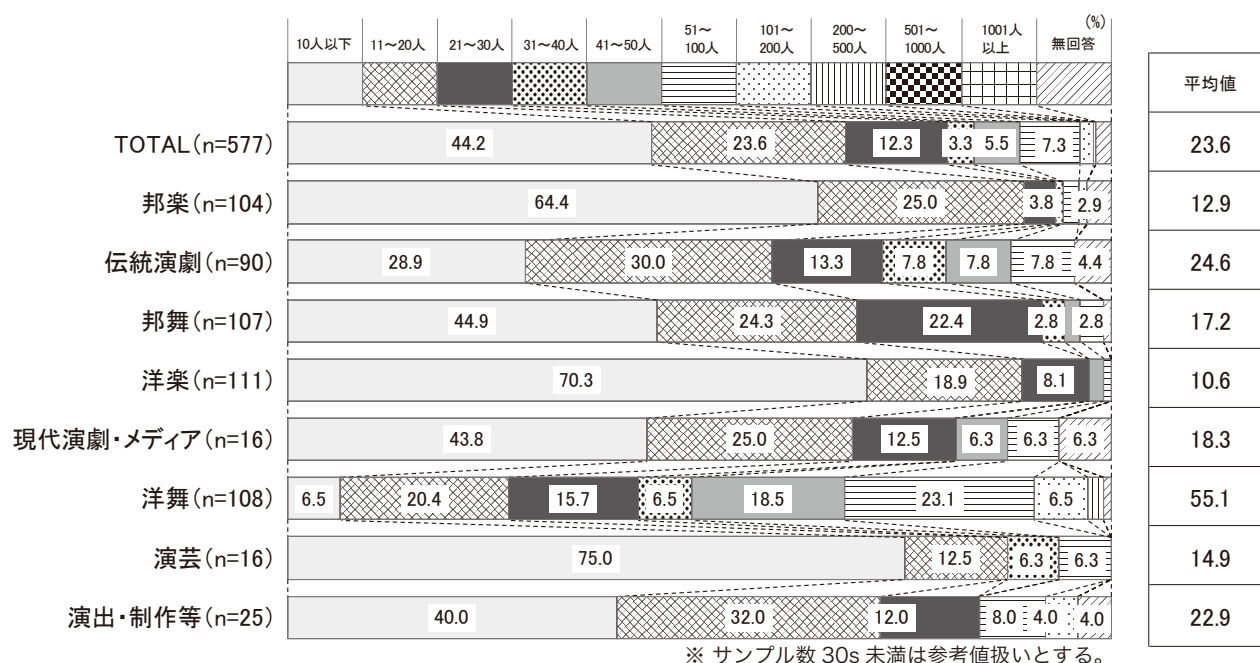
■ B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の数（2）

【携わっている人ベース】(自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている)

「自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている」場合、直接教えている生徒（弟子）の数は、平均で 23.6 人で、学校等に雇われて教えている人数より低いです。「10 人以下」が 44.2% と最も多く、次いで「11 ～ 20 人」の 23.6% が多くなっています。

ジャンル別にみると、「洋舞」は「51 ～ 100」人が 23.1% と最も多く、生徒数の平均も 55.1 人と 8 ジャンルで最も多くなっていますが、次に平均人数の多い「伝統演劇」以外は、すべて「10 人以下」が最も多くなっています。

問 B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の数（2）【携わっている人ベース】
(自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている)

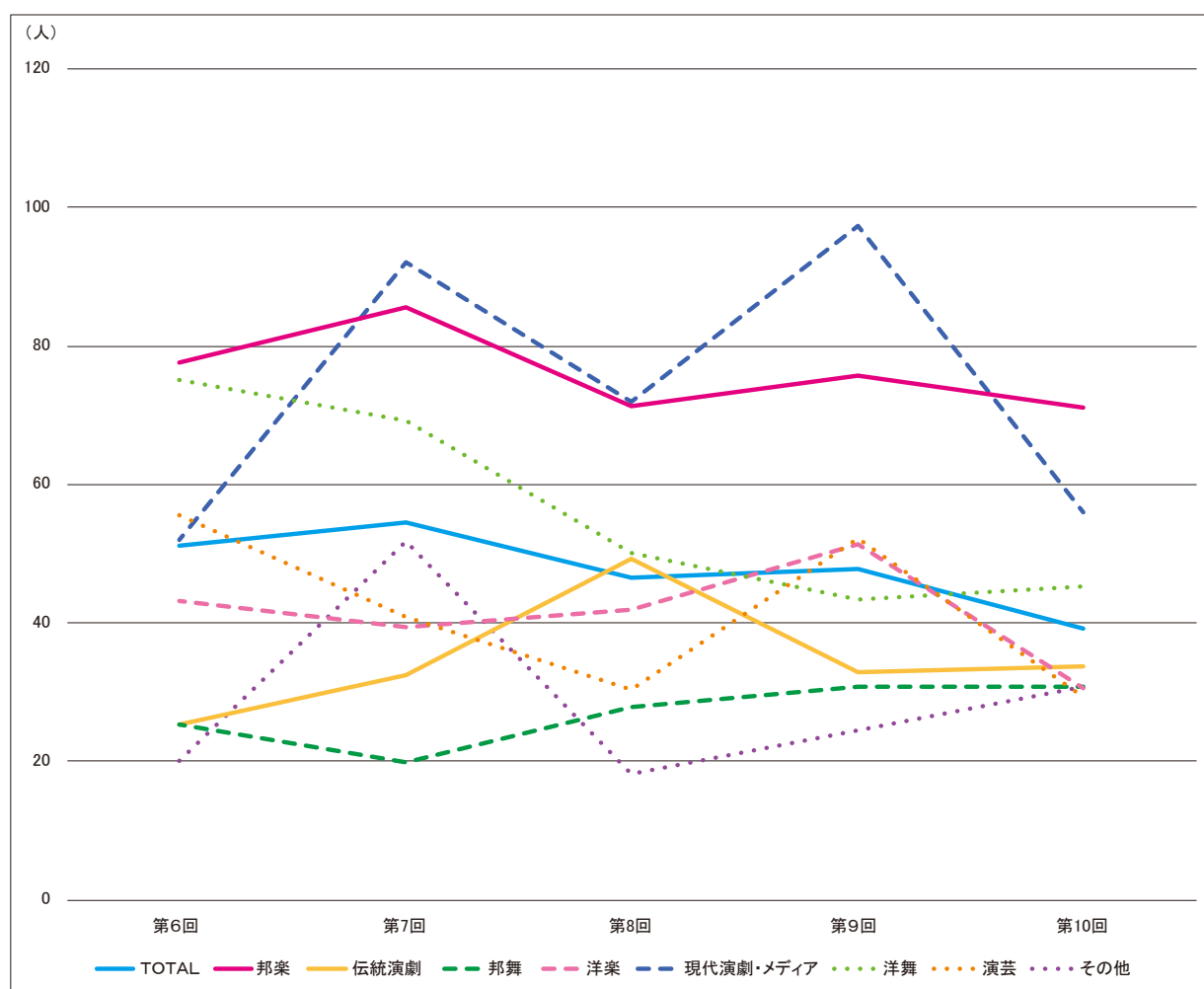


■ B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の推移【経年比較】(1) (学校等に雇われて教えている)

直接教えている生徒（弟子）の平均人数を過去4回の調査と比較してみたところ、回答者全体の平均人数は、なだらかに減少傾向にあります。ジャンル別にみると、「洋舞」は、第9回からの変化を見ると平均人数は微増ですが、過去20年の推移をみると、第6回調査では75.0人だったのが、45.3人へと大きく減少しています。「洋楽」も第8回から第9回にかけては41.9人から

51.4人へと増加していましたが、今回の30.5人は過去最低となっています。一方、「邦楽」は第6回の際は平均20.0人と最も少なく、その後大きく変動もしていますが、今回は30.7人へと増加し、緩やかな増加傾向がみられます。「邦舞」も、第9回と平均人数は同人数ですが、第7回調査以降、緩やかな増加傾向がみられます。

実演家1人当たりの平均生徒数の推移
(学校等に雇われて教えている)



*第8回までの「その他」と、第9回以降の「その他＝演出・制作等」は、対象者の範囲が異なるのが、参考までに示している。

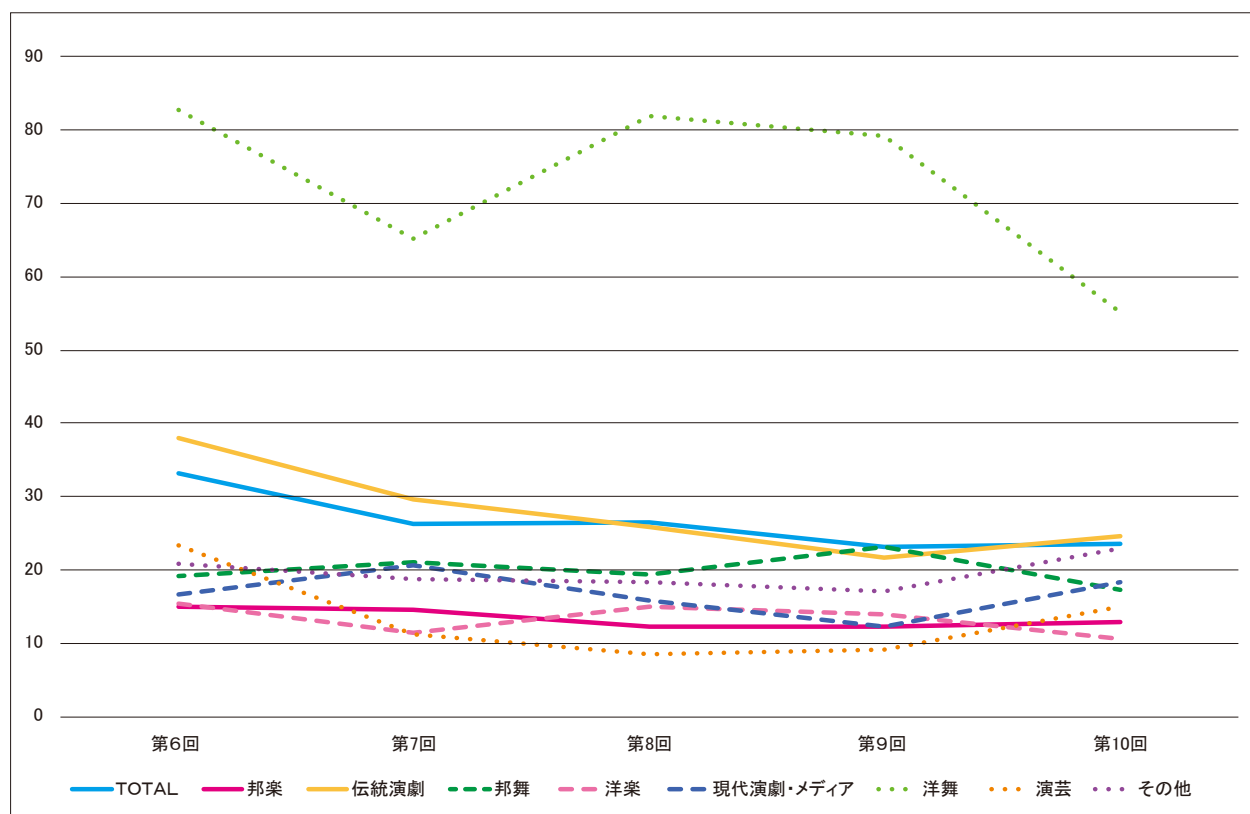
■ B-4 (b) 直接教えている生徒（弟子）の推移【経年比較】(2)

(自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている)

自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている場合の直接教えている生徒（弟子）の平均人数について、第6回調査からの推移を見てみると、「洋舞」は、第9回の79.3人から55.1人に大きく減少しており、過去最

低となっています。ほかのジャンルは、第9回との比較では、「伝統演劇」が21.7人から24.6人へと増加、「邦楽」が12.2人から12.9人へと微増となっていますが、第6回との比較ではいずれのジャンルも減少しています。

実演家1人当たりの平均生徒数の推移
(自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている)



*第8回までの「その他」と、第9回以降の「その他＝演出・制作等」は、対象者の範囲が異なるのが、参考までに示している。

■ B-5 現在勤めて（雇われて）教えている学校、教室の種類（MA）

【ベース：勤めて（雇われて）教えている人】

「学校や教室、養成機関に勤めて（雇われて）教えている」と回答した人に、どんな学校、教室か複数回答で尋ねたところ、実演家全体では「民間企業や個人主催の音楽教室、バレエ教室等」が27.4%、次いで「カルチャーセンター」(25.3%)です。

ジャンル別に見ると、ジャンルによって雇っている主体が異なっていることが分かります。「洋楽」は「大学・大学院」(43.8%)と「民間企業や個人主催の音楽教室、

バレエ教室等」(43.8%)が多く、「短大」(10.7%)も比較的多いです。「洋舞」は「民間企業や個人主催の音楽教室、バレエ教室等」(60.4%)が最も多いです。「演出、制作等」と「現代演劇・メディア」は、いずれも「劇団、舞踊団などの付属養成機関」が最も多く、次いで「専門学校」となっています。「伝統演劇」「演芸」「邦舞」は、「カルチャーセンター」が最も多く、「邦楽」は「小・中・高校」(46.3%)となっています。

問 B-5 現在勤めて（雇われて）教えている学校、教室の種類（MA）

【勤めて（雇われて）教えている人】

(単位：%)

	n=	大学・大学院	短大	専門学校	小・中学・高校	劇団、舞踊団 などの 付属養成機関	民間企業や個人 主催の音楽 教室、バレエ 教室等	公立施設で 開催する 入門講座、 ワークショップ	カルチャー センター	その他	無回答
TOTAL	475	22.9	4.4	6.5	25.1	18.3	27.4	18.3	25.3	7.2	2.3
邦楽	41	9.8	2.4	2.4	46.3	4.9	17.1	24.4	24.4	12.2	2.4
伝統演劇	63	31.7	3.2	1.6	23.8	7.9	6.3	22.2	46.0	4.8	4.8
邦舞	59	18.6	3.4	3.4	27.1	10.2	3.4	27.1	35.6	13.6	3.4
洋楽	112	43.8	10.7	5.4	32.1	4.5	43.8	8.9	8.0	1.8	0.9
現代演劇・メディア	52	9.6	1.9	19.2	28.8	55.8	5.8	15.4	5.8	9.6	1.9
洋舞	91	7.7	2.2	3.3	3.3	17.6	60.4	13.2	33.0	5.5	2.2
演芸	25	16.0	0.0	0.0	24.0	12.0	20.0	32.0	48.0	12.0	0.0
演出・制作等	32	28.1	3.1	25.0	28.1	65.6	15.6	28.1	18.8	9.4	3.1

<収入と費用>

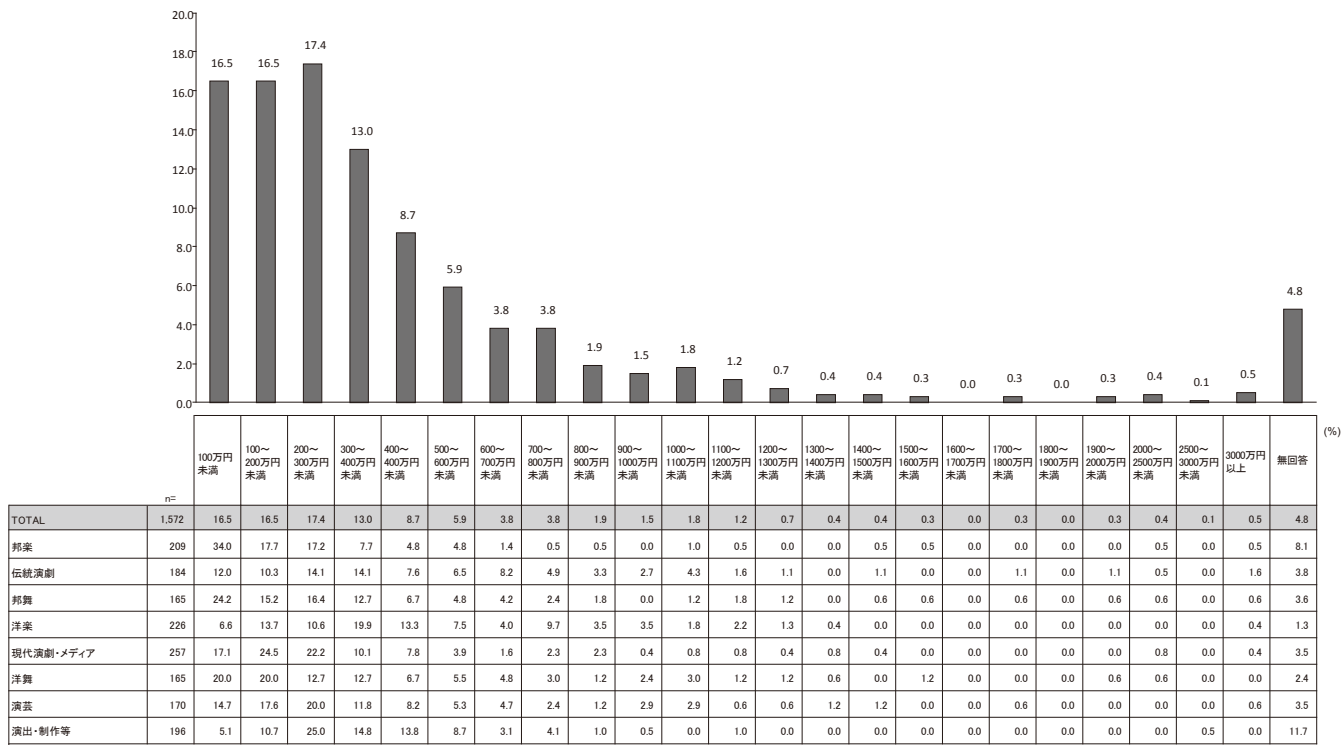
● B-6 (a) 昨年 1 年間の個人収入 (ジャンル別)

芸能実演家の昨年 1 年間の個人収入は、「300 万円未満」までの所得層で全体の 5 割程度を占めています。特に「200 ～ 300 万円未満」(17.4%)、「100 ～ 200 万円未満」(16.5%) の割合が高くなっています。

ジャンル別にみると、「邦楽」「邦舞」は、「100 万円未満」の所得層が最も多く、それぞれ 34.0%、24.2%。洋舞も「100 万円未満」と「100 ～ 200 万円未満」の所得層が

共に 20.0%となっています。「現代演劇」は「100 ～ 200 万円未満」の所得層が 24.5%と最も多く、「演芸」は「200 ～ 300 万円未満」が 20.0%と最も多くなっています。個人収入が 300 万円未満の人と 300 万円以上の方が多いのは、「伝統演劇」(59.8%)、「洋楽」(67.7%)、「演出・制作等」(47.4%) の 3 ジャンルのみでした。

問 B-6 (a) 昨年 1 年間の個人収入 (ジャンル別)

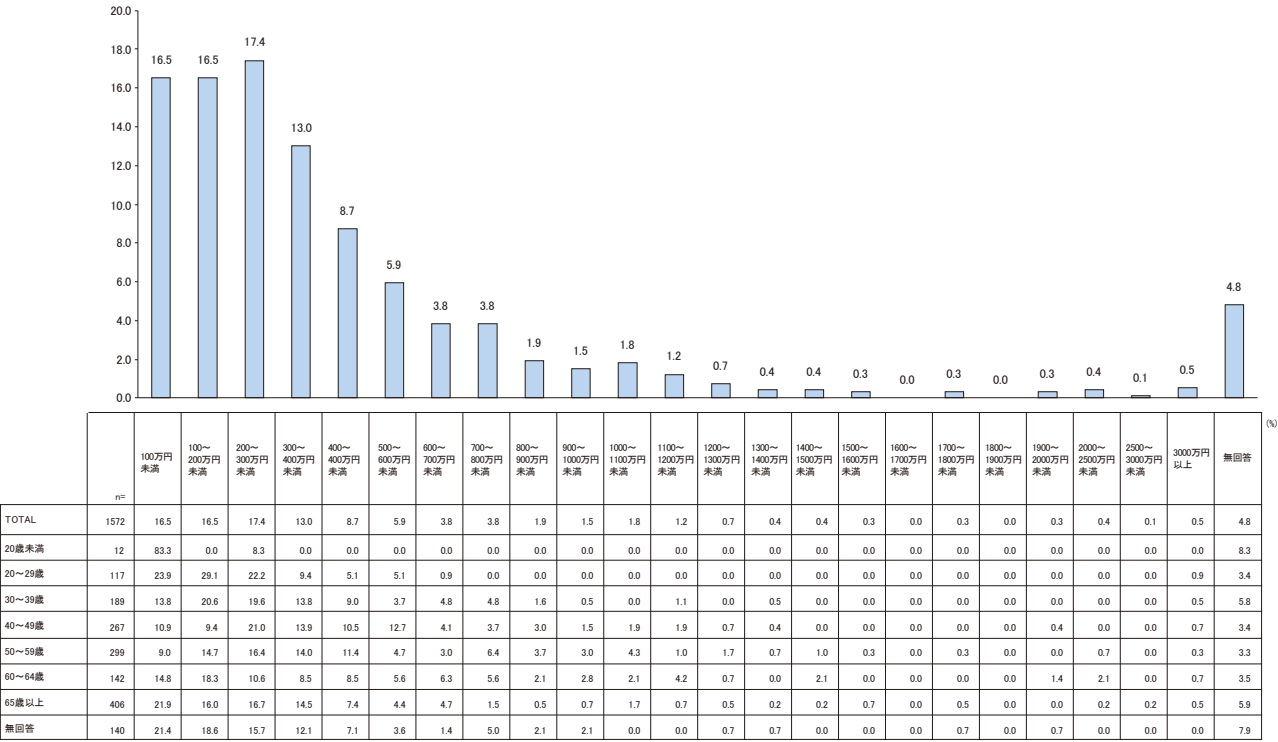


● B-6 (a) 昨年 1 年間の個人収入 (年代別)

年代別にみると、「20～29歳」「30～39歳」は「100～200万円未満」で、「40～49歳」は「200～300万円未満」で、ほかの年齢層よりも割合が高くなっています。

第9回調査と比較すると、「30～39歳」は最も多い所得層が1階層下がり、「40～49歳」も2階層下がっていて、高年齢層の所得が下降傾向にあるようです。

問 B-6 (a) 昨年 1 年間の個人収入 (年代別)



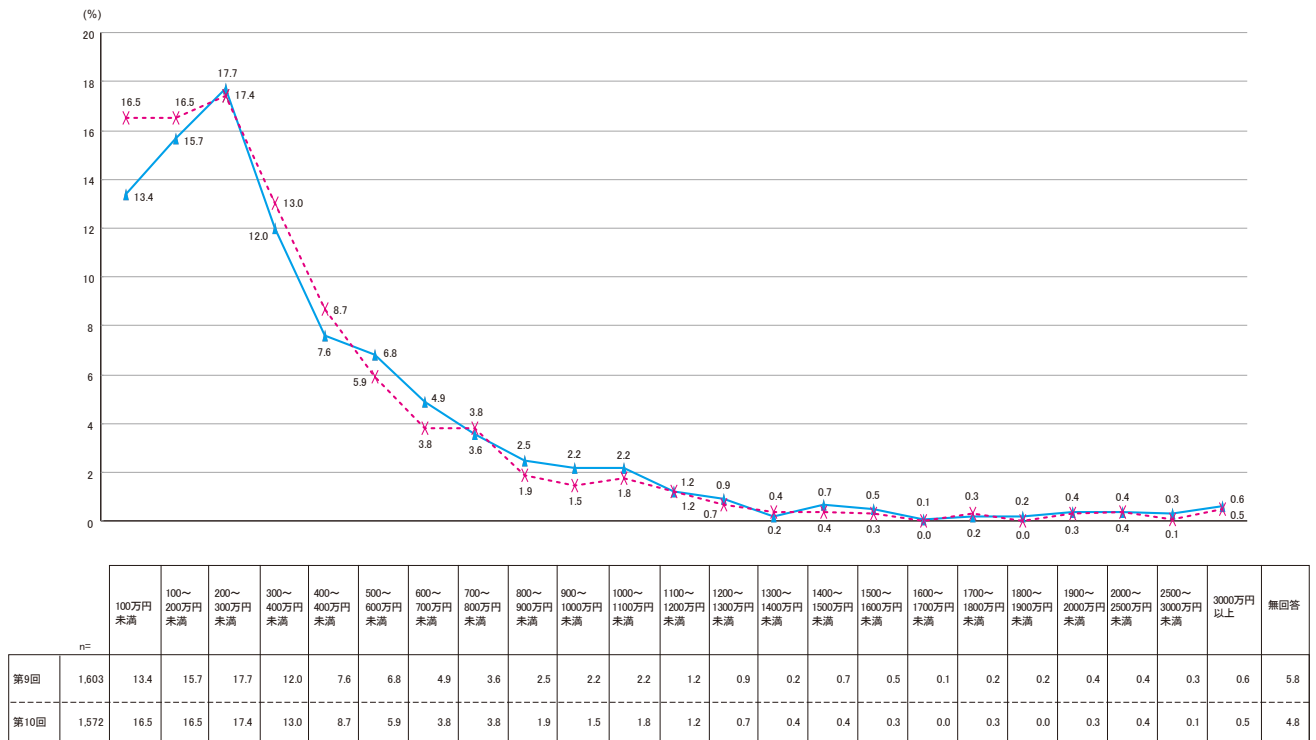
※ サンプル数 30s 未満の年代 (20 歳未満) は参考値扱いとする。

● B-6 (a) 昨年 1 年間の個人収入（第 9 回調査との比較）

昨年 1 年間の個人収入の分布状況を第 9 回調査と比較してみると、全体の分布傾向は、大きくは前回調査と同様の傾向を示していますが、より詳細に比較してみると、「100 万円未満」（第 9 回：13.4%、第 10 回：16.5%）、「100 ～ 200 万円未満」（第 9 回：15.7%、第 10 回：16.5%）といった低所得層の割合が、第 9 回調査に比べて第 10 回調査で高くなっています。最頻値である「200 ～ 300 万

円未満」は、ほぼ同じですが、「300 ～ 400 万円未満」（第 9 回：12.0%、第 10 回：13.0%）、「400 ～ 500 万円未満」（第 9 回：7.6%、第 10 回：8.7%）でも、第 9 回調査よりも第 10 回調査の方が上回っています。それよりも高い所得層では、「500 ～ 600 万円未満」「600 ～ 700 万円未満」で、第 9 回調査を下回っているのを始め、高額所得層では、若干、前回調査より割合が低くなっています。

問 B-6 (a) 昨年 1 年間の個人収入（第 9 回調査との比較）

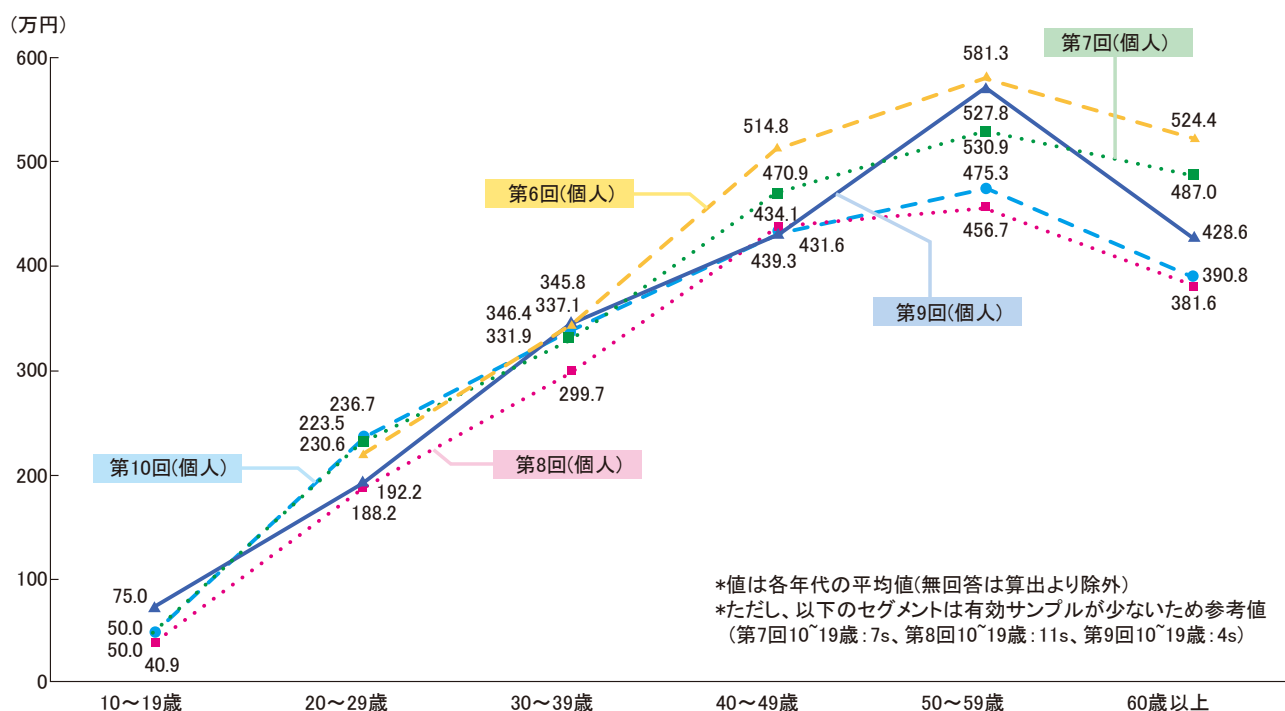


● B-6 (a) 昨年 1 年間の個人収入（年代別平均、過去の調査との比較）

昨年 1 年間の個人収入を過去調査と比較すると、今回の第 10 回調査では「20～29 歳」で平均年収は過去の調査の平均を上回っていますが、「30～39 歳」で第 9 回調査の平均収入より若干下回っています。「40～49 歳」では第 8 回、第 9 回の平均収入を若干上回りましたが、「50～59 歳」では、第 9 回の平均収入より大きく下回っています。「50～59 歳」の平均収入がほかの年代の収入

を上回るという傾向は過去の調査と同じですが、第 9 回の「50～59 歳」の平均収入が 4 回の調査のうち第 1 位の第 6 回調査の値に近いのに対し、「40～49 歳」の平均収入からの上昇の山は低く、「60～69 歳」の平均収入の値も第 9 回から減少しており、高年齢層の平均収入の伸びが小さくなっている傾向が見て取れます。

B-6 (a) 昨年 1 年間の個人収入（年代別平均、過去の調査と比較）



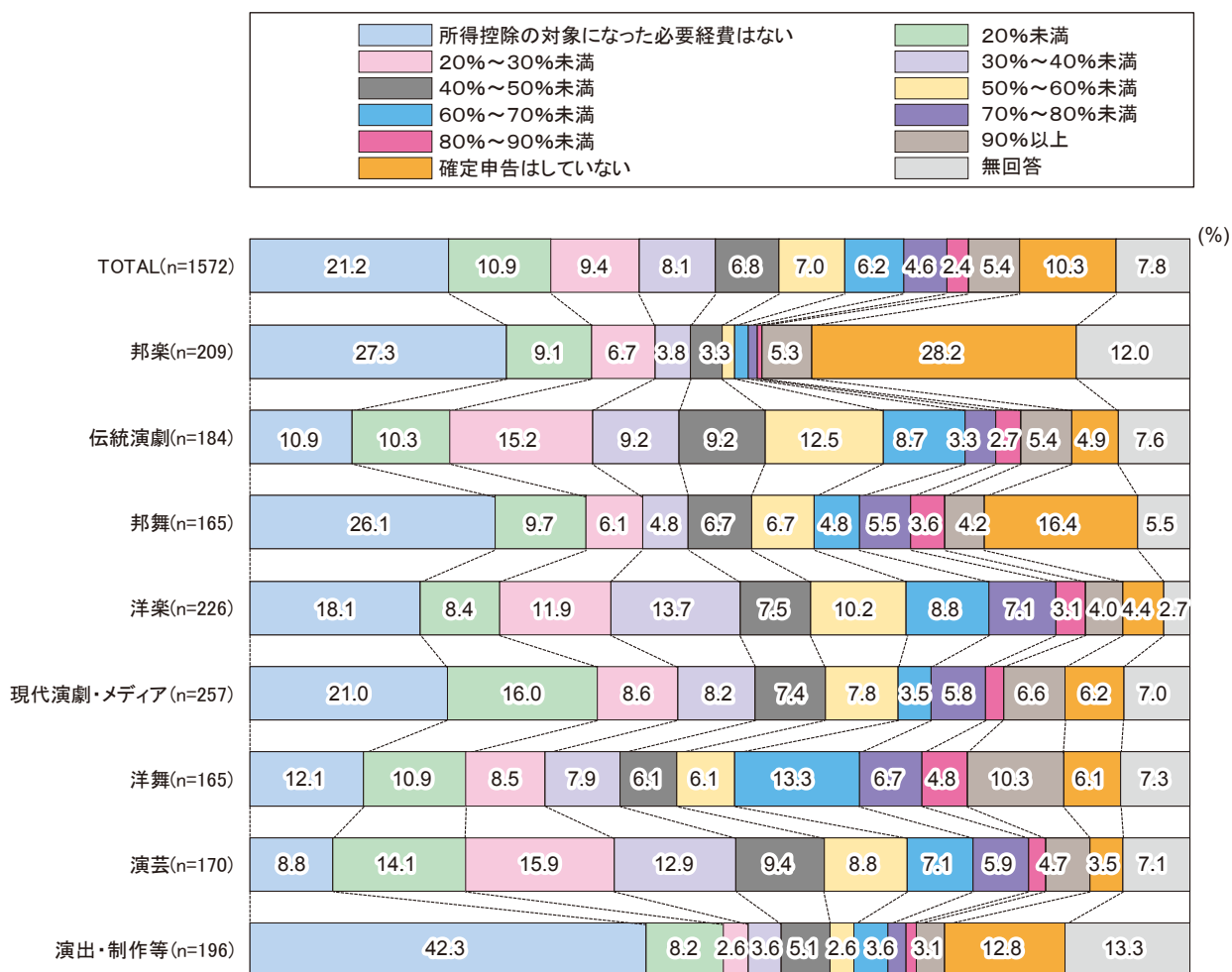
● B-6 (b) 自らが負担した必要経費の割合

昨年1年間に実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費について、「所得控除の対象になった必要経費はない」とする回答が21.2%を占めています。必要経費を負担している場合、総収入に占める割合は、「30%～40%未満」が13.7%、「20%～30%未満」が11.9%、「20%未満」が10.9%となっています。

ジャンル別にみると、「所得控除の対象となった必要経費はない」という回答が多かったのが「その他（演出・

制作等）」(42.3%)、雇用されている制作者が多く含まれているからと考えられます。「邦楽」(27.3%)、「邦舞」(26.1%)のジャンルも多いですが、「確定申告はしていない」も「邦楽」(28.2%)、「邦舞」(16.4%)はほかのジャンルより多く、芸能の仕事で生計を立てていない人が多いことが推察されます。「洋舞」では「70%～80%未満」「80%～90%未満」「90%以上」の割合がほかのジャンルに比べて高くなっています。

問 B-6 (b) 自らが負担した必要経費の割合

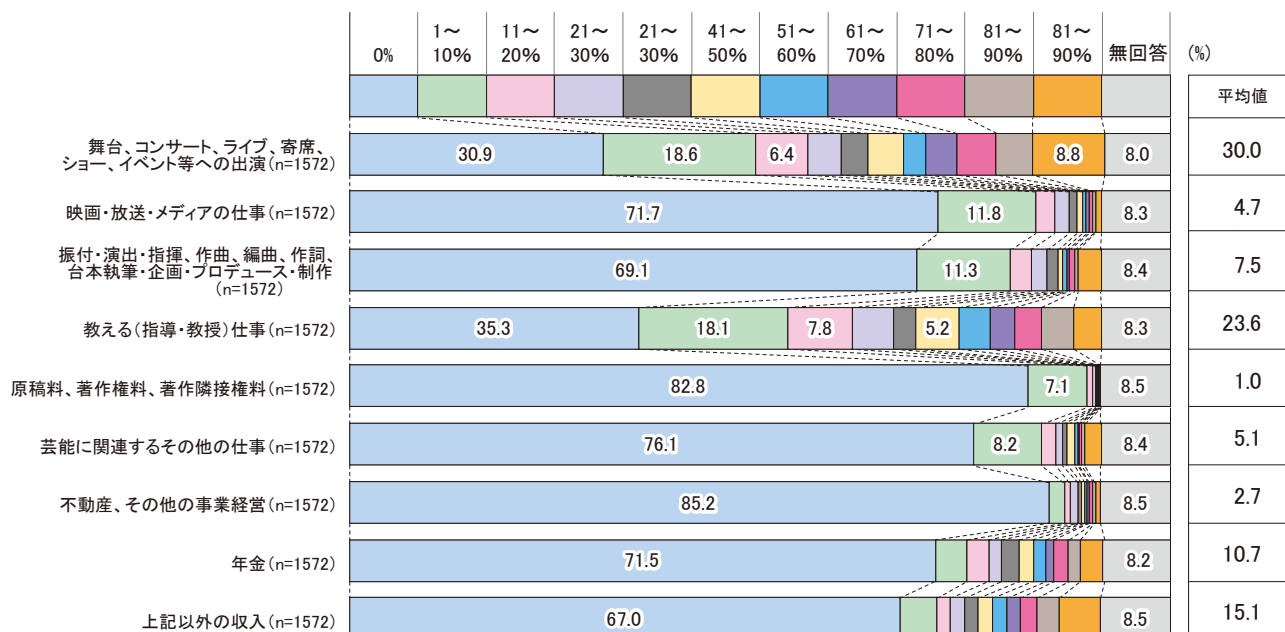


● B-7 昨年 1 年間の活動別収入の割合

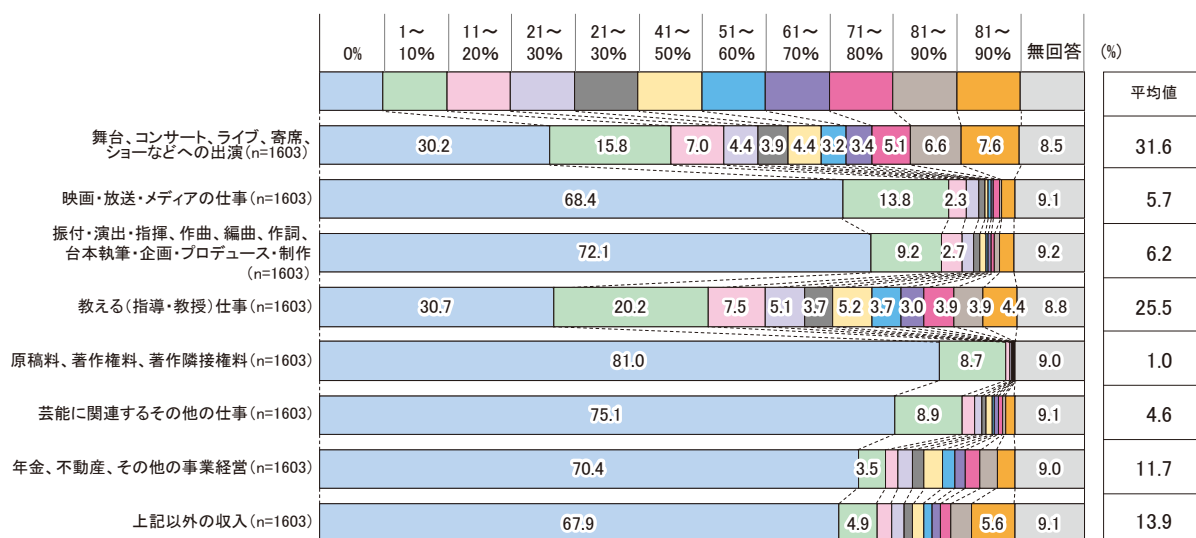
昨年 1 年間の活動別収入の割合の平均は、「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演」が 30.0% で最も高く、次いで「教える仕事」が 23.6% となっています。これらの割合は、第 9 回調査とほとんど変わって

いません。第 10 回調査では「年金」の割合を尋ねていますが平均は 10.7% となりました(第 9 回までは、「年金、不動産、その他の収入」として選択肢を設定)

問 B-7 昨年 1 年間の活動別収入の割合



<参考> 第 9 回調査 調査結果



● B-7 昨年 1 年間の活動別収入の割合（ジャンル別）

ジャンル別に昨年 1 年間の活動別収入の割合をみると、「教える仕事」の割合が高いのは「洋舞」(53.4%)、「邦舞」(42.6%)、「洋楽」(26.6%)です。

「舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー等への出演」の割合が高いジャンルは、「演芸」が 63.9%と最も高く、次いで「洋楽」(51.9%)、「伝統演劇」(43.6%)です。

「伝統演劇」は、「教える仕事」の割合も比較的多く、22.5%を占めています。

「映画・放送・メディアの仕事」が最も多いのが「現代演劇・メディア」で 18.9%です。

「邦楽」では、「年金」収入が 38.0%と、8 ジャンルのうちで最も高い割合で、「伝統演劇」19.0%、「邦舞」も 10.3%と、他ジャンルより高い割合です。

「演出・制作等」は「振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、企画、制作等」(36.3%)が最も高いです。

第 9 回調査と比較すると、「邦楽」では、「舞台等への出演」と「教える仕事」がいずれも減少して、芸能以外

から得る収入の割合が高まっています。

「伝統演劇」は、活動別収入内訳の傾向はほとんど変わっていません。

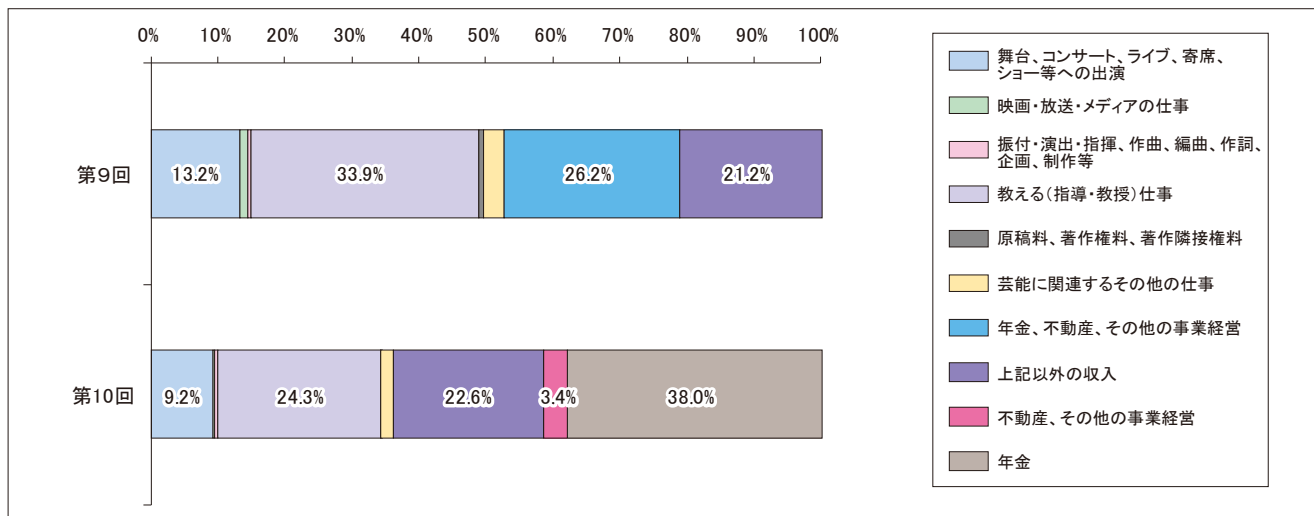
「邦舞」で「教える仕事」の割合が 50.1% から 42.6% に下がっていますが、「舞台等への出演」は、6.7% から 11.4% に上がっています。

「洋楽」でも「教える仕事」の割合が 29.9% から 26.6% に下がっていますが、「舞台等への出演」は 48.7% から 51.9% に上がっています。

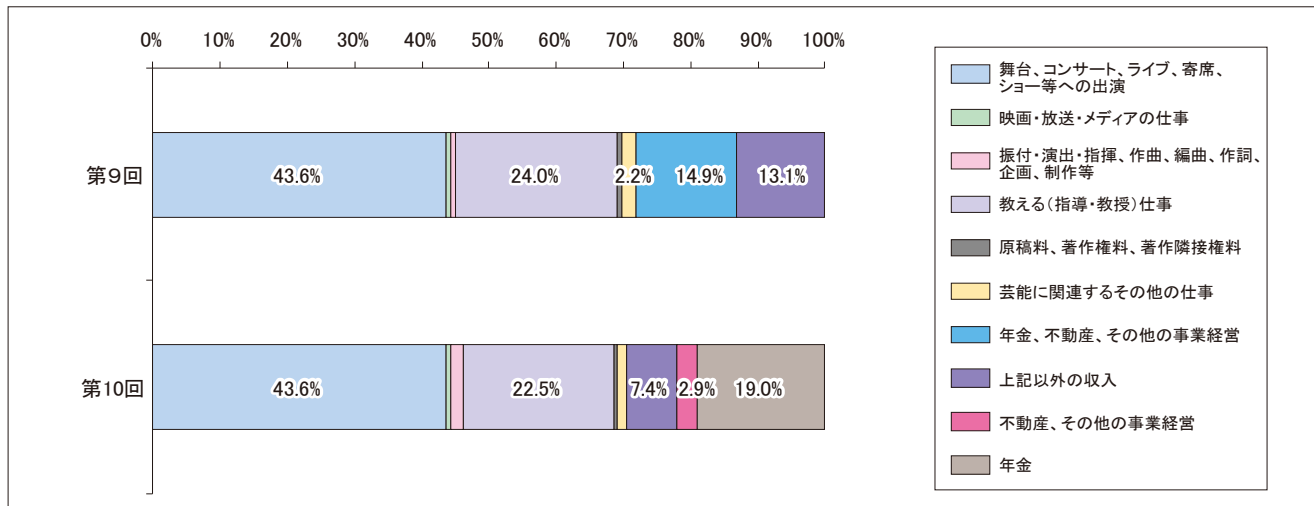
「現代演劇」では、「映画・放送・メディアの仕事」の割合が 24.1% から 18.9% に減少し、「教える仕事」が 7.6% から 9.2% に増えています。「芸能に関するその他の仕事」も 7.9% から 9.4% に増えています。

「洋舞」では「教える仕事」の割合が 56.1% から 53.4% に下がり、「舞台等への出演」も 23.2% から 22.1% に微減です。「振付、演出など」と、「芸能に関するその他の仕事」が微増となっています。

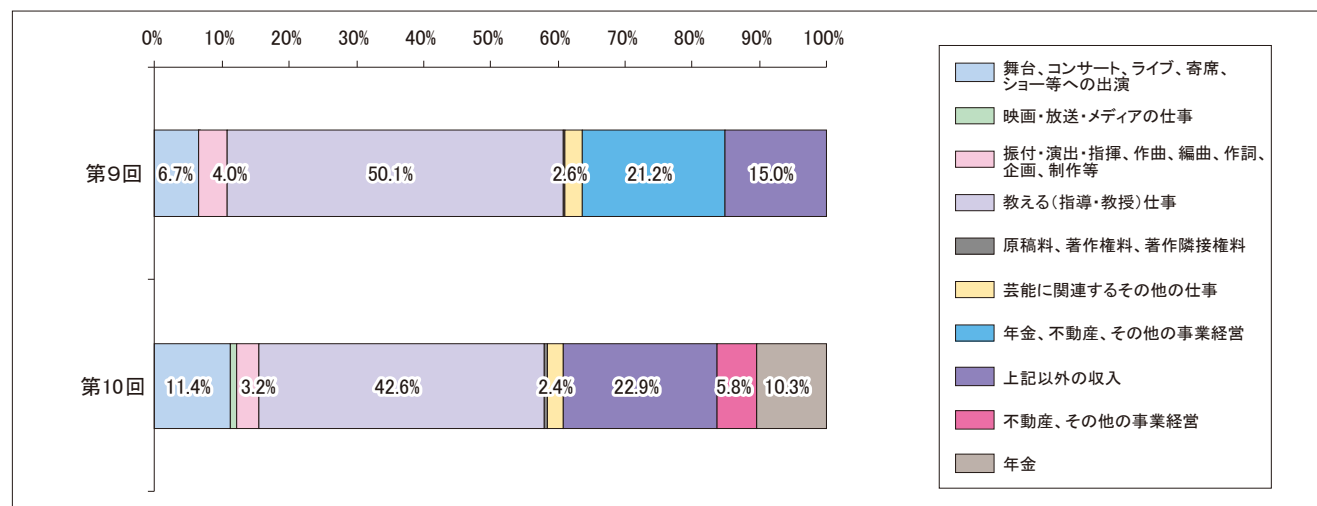
■ 邦楽（第 9 回：n=245、第 10 回：n=209）



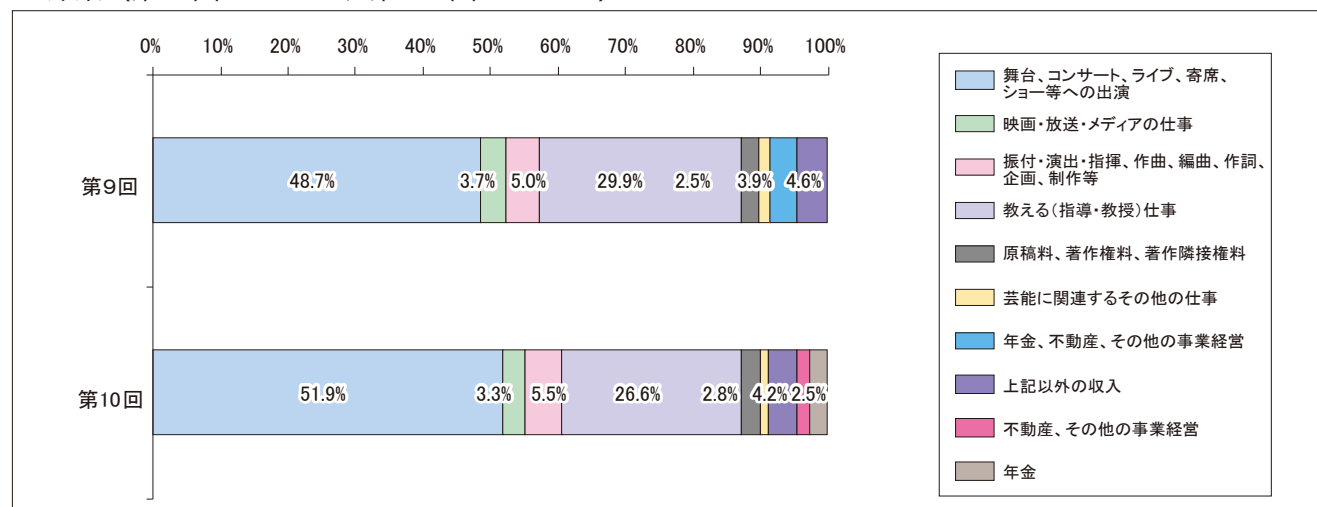
■ 伝統演劇（第 9 回：n=224、第 10 回：n=184）



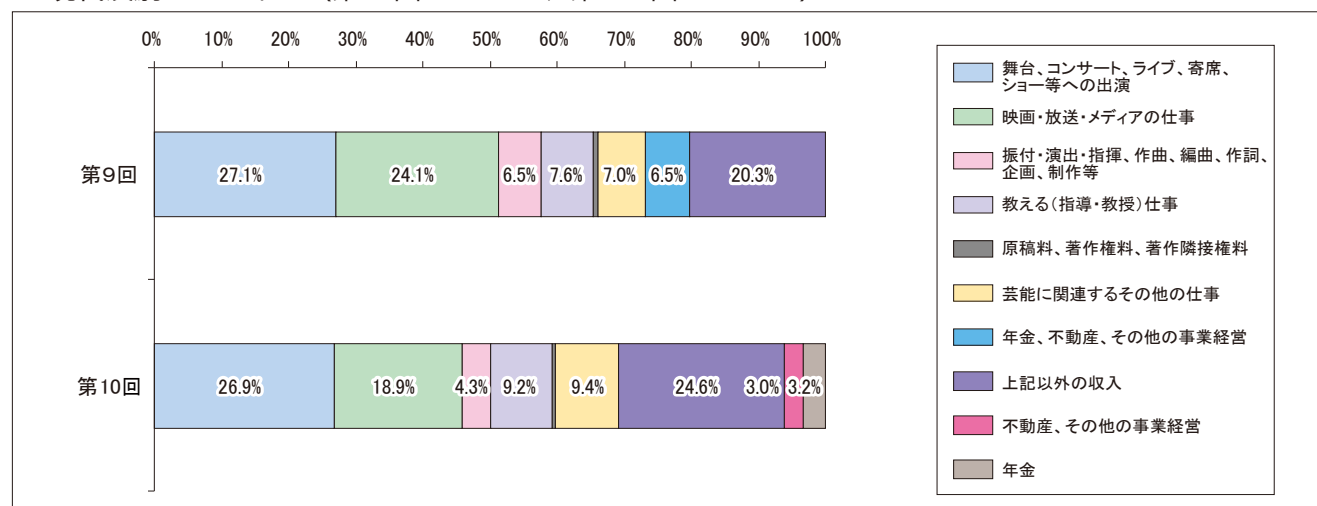
■ 邦舞（第9回：n=142、第10回：n=165）



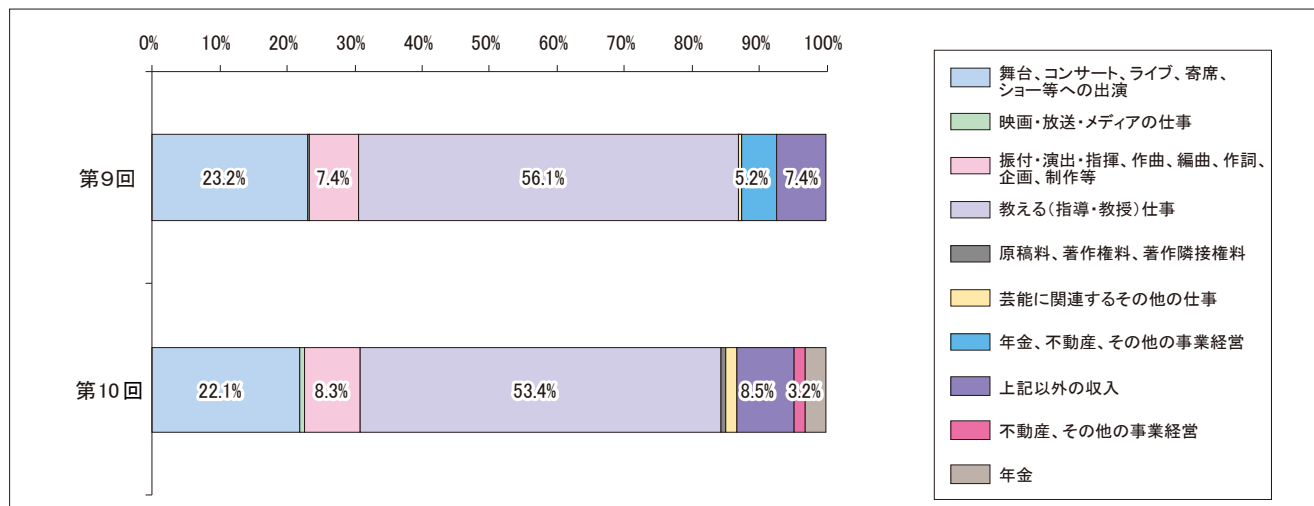
■ 洋楽（第9回：n=249、第10回：n=226）



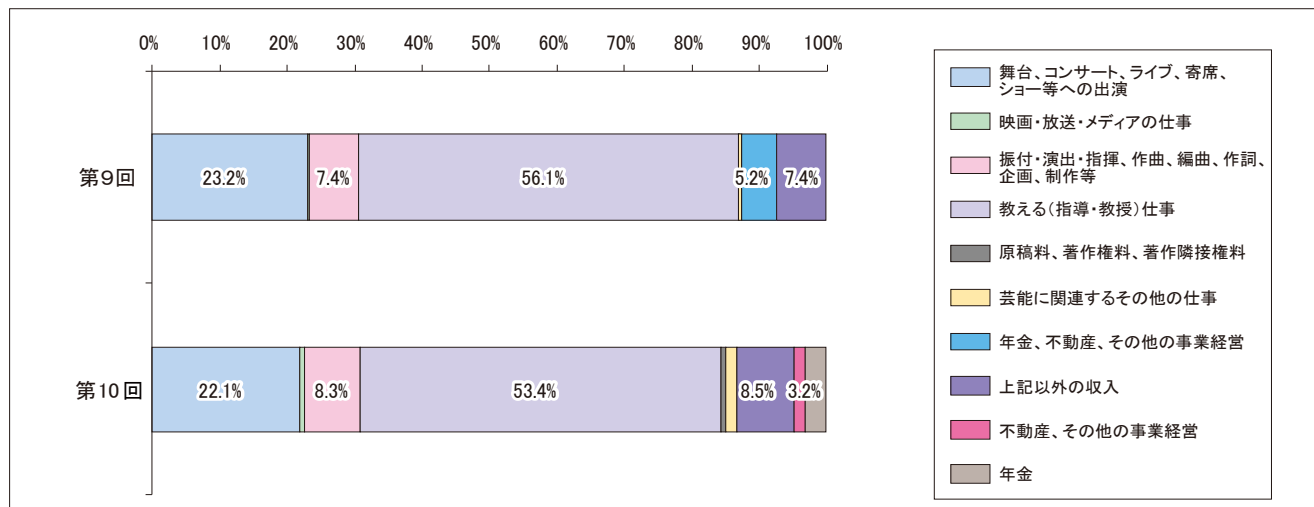
■ 現代演劇・メディア（第9回：n=252、第10回：n=257）



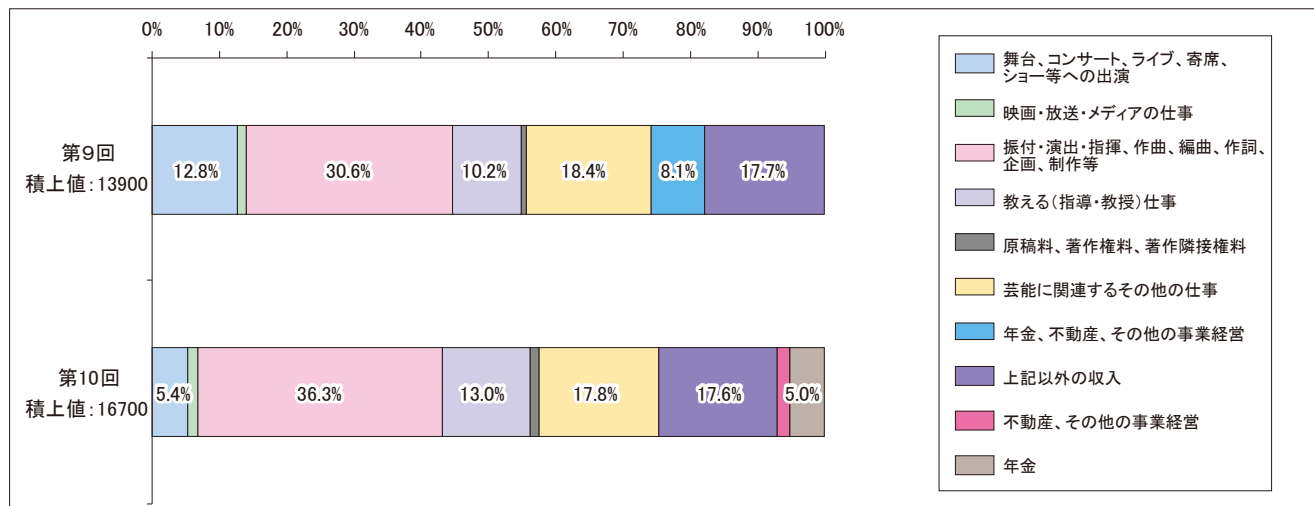
■ 洋舞（第9回：n=131、第10回：n=165）



■ 演芸（第9回：n=163、第10回：n=170）



■ 演出・制作等（第9回：n=197、第10回：n=196）

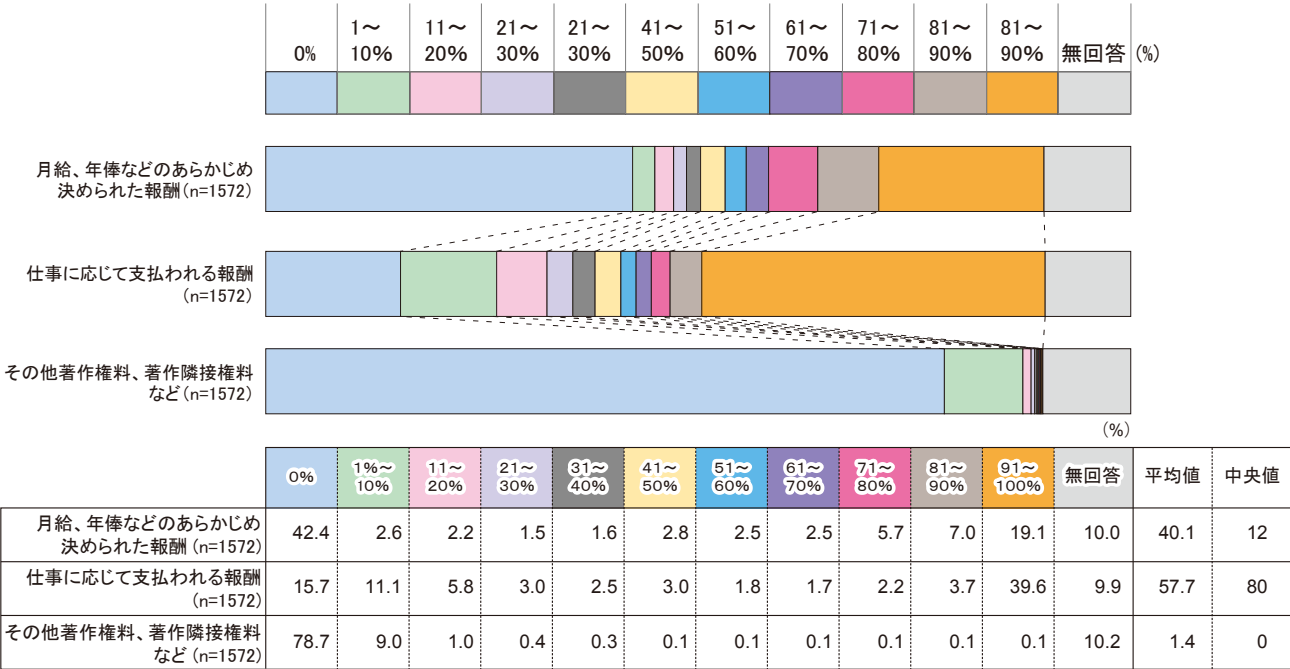


● B-8 昨年 1 年間の収入形式

芸能実演家の昨年 1 年間の収入形式は、「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俸以外）」が最も高い割合となっており、平均で 57.7% です。一方、「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」は 40.1% で、月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬を得ていない人（「0%」の人）が 42.4% を占めています。

報酬を「その他著作権料、著作隣接権料等」から得ている人の割合は少なく、そのような報酬を全く得ていない人が 78.7%。得ている人も、収入全体に対して「10%以下」というカテゴリーが最も多くて 9.0%となっています。

問 B-8 昨年 1 年間の収入形式



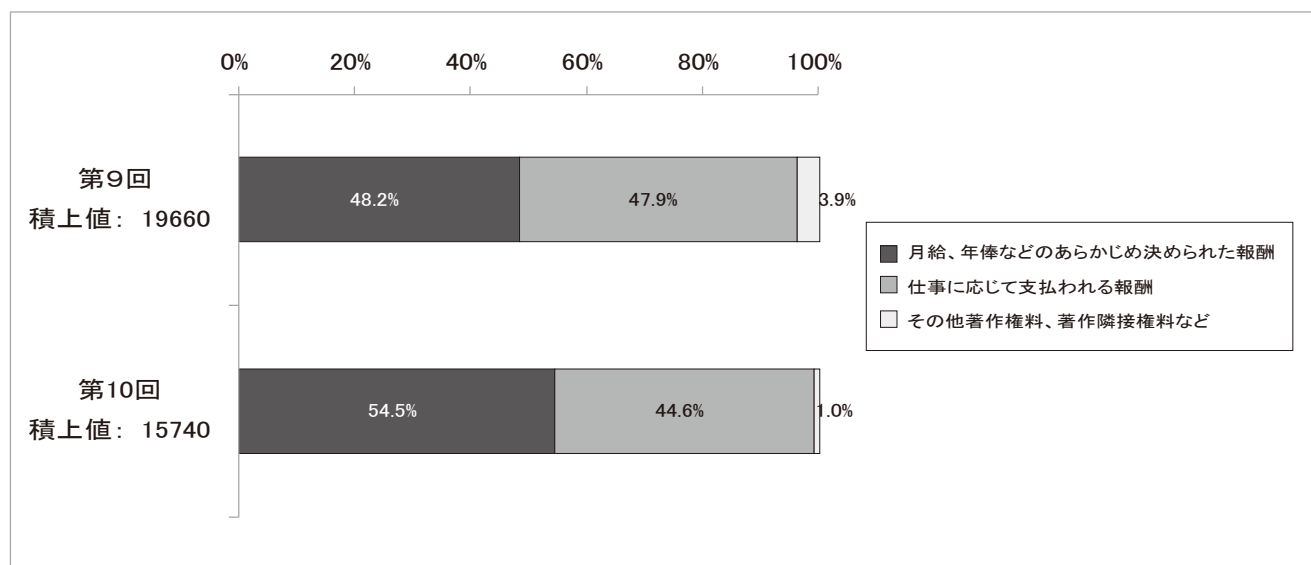
● B-8 昨年 1 年間の収入形式（ジャンル別）

ジャンル別に昨年 1 年間の収入形式の割合をみると、「演出・制作等」「邦楽」は、「月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬」の方が「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俸以外）」より高い傾向にあります。とりわけ「演出・制作等」には、オーケストラや劇団などに雇用されている制作者が含まれているので、「月給、年俸など」の割合が 72.6%と最も高くなっています。そのほかのジャンルでは、「月給、年俸などのあらかじめ

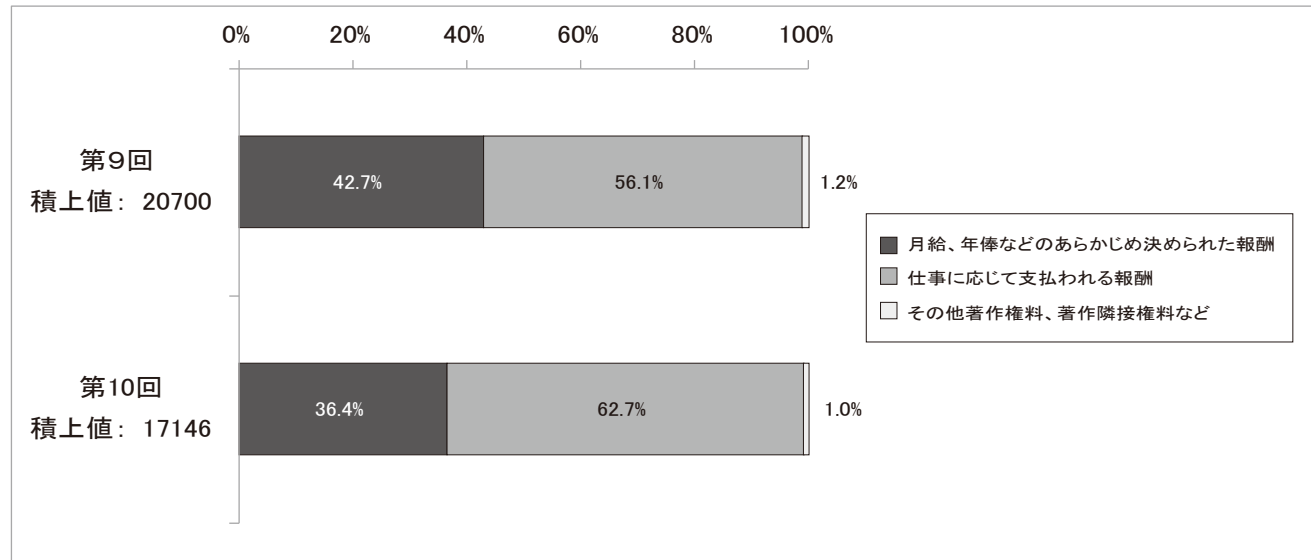
決められた報酬」よりも「仕事に応じて支払われる報酬（月収、年俸以外）」の割合の方が高い傾向にあります。特に、「演芸」（86.1%）、「洋舞」（71.7%）は、「仕事に応じて支払われる報酬」の割合が圧倒的に高いです。

第 9 回調査と比較すると、「伝統演劇」、「邦舞」「現代演劇」は「仕事に応じて支払われる報酬」の割合が高まっています。

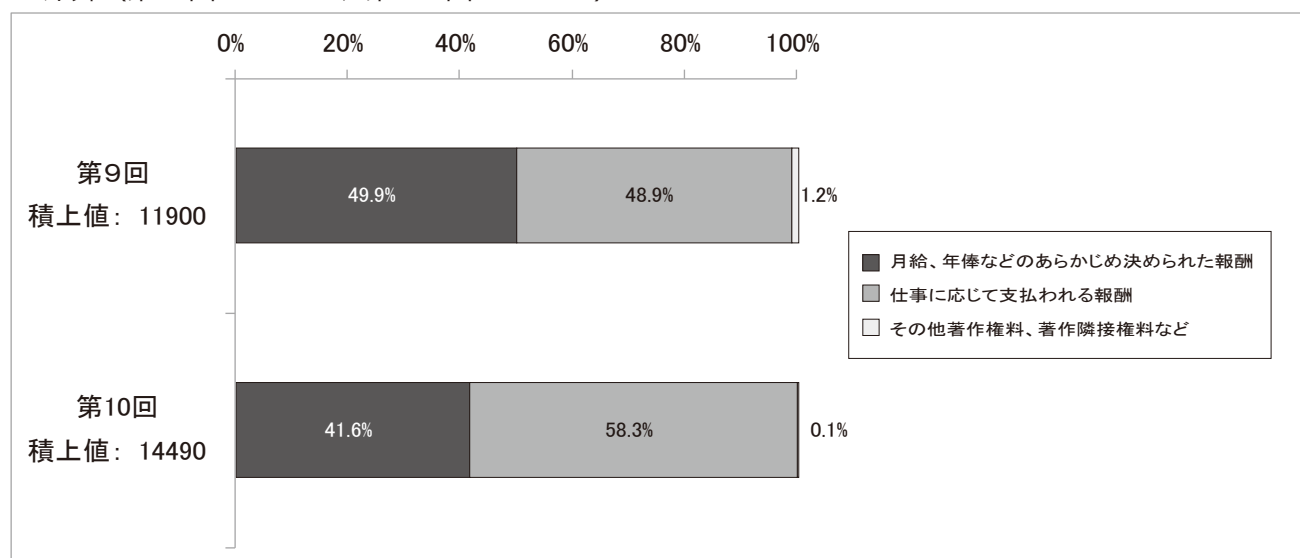
■ 邦楽（第 9 回：n=245、第 10 回：n=209）



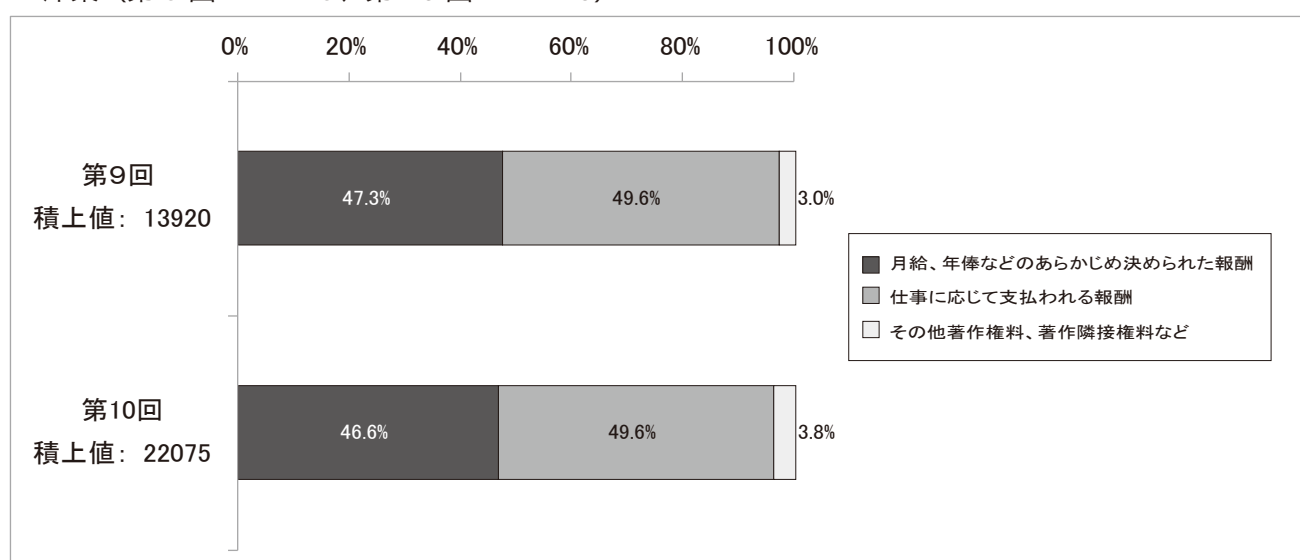
■ 伝統演劇（第 9 回：n=224、第 10 回：n=184）



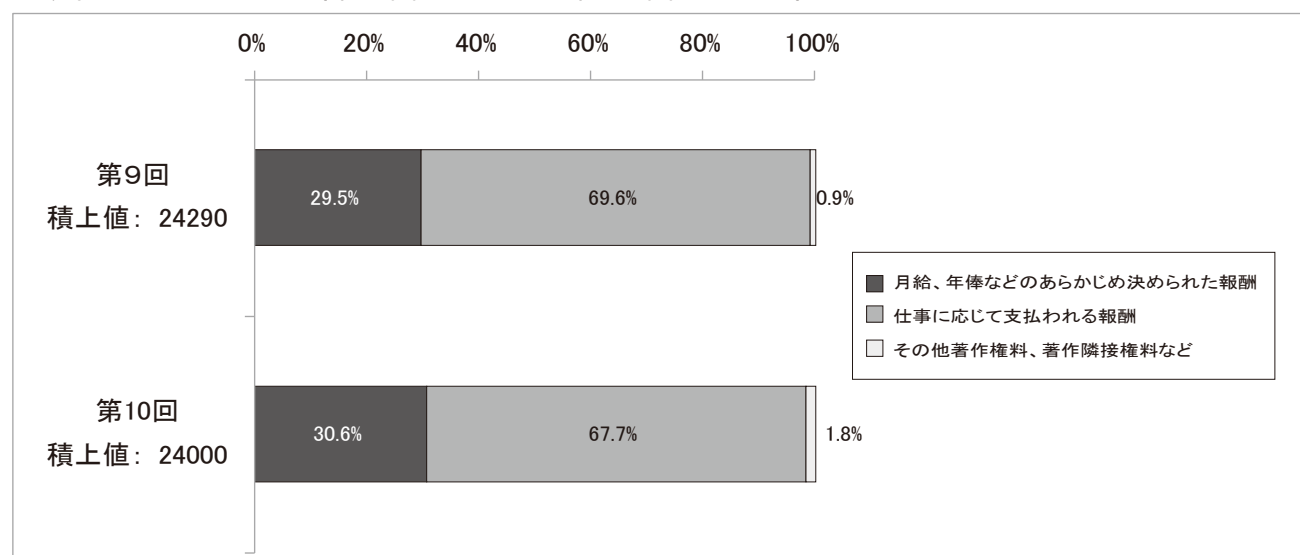
■ 邦舞（第9回：n=142、第10回：n=165）



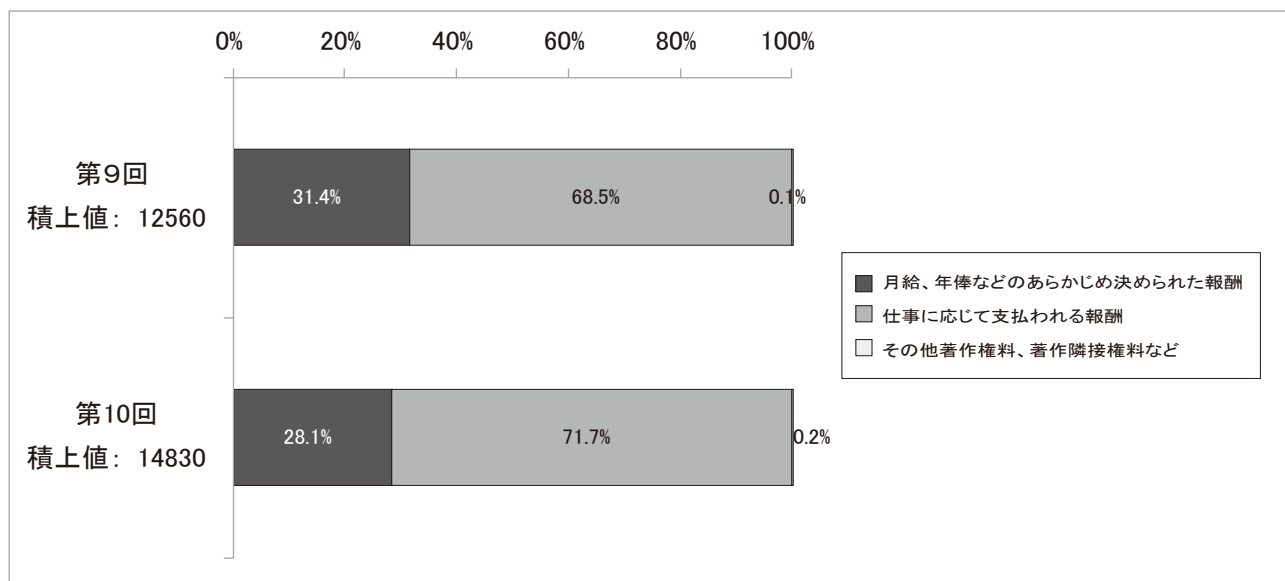
■ 洋楽（第9回：n=249、第10回：n=226）



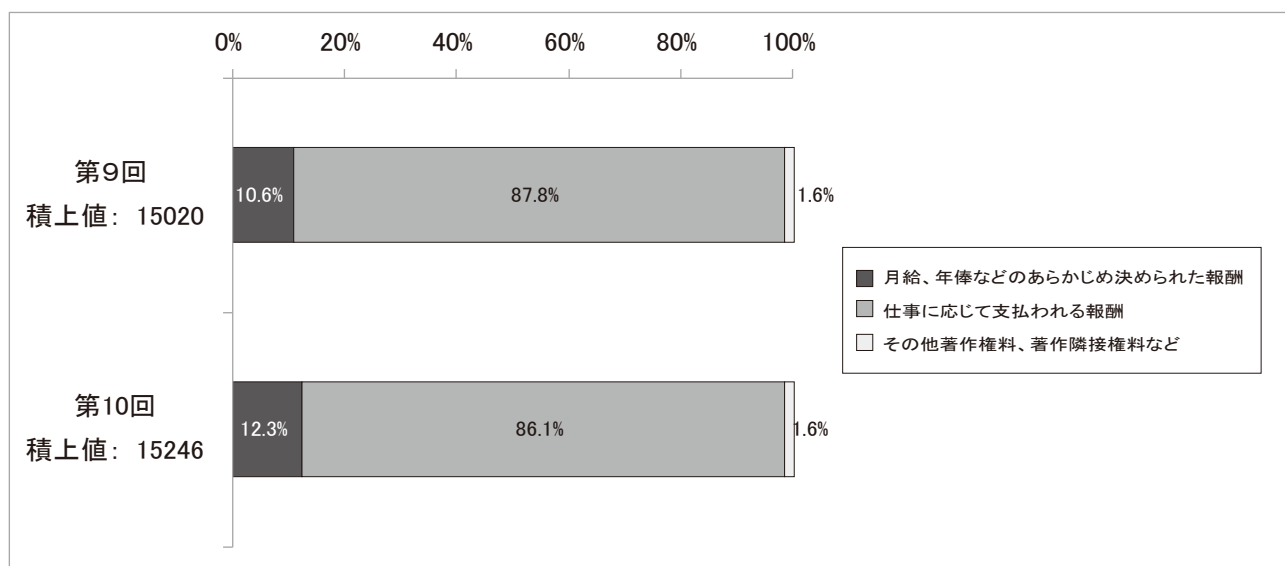
■ 現代演劇・メディア（第9回：n=252、第10回：n=257）



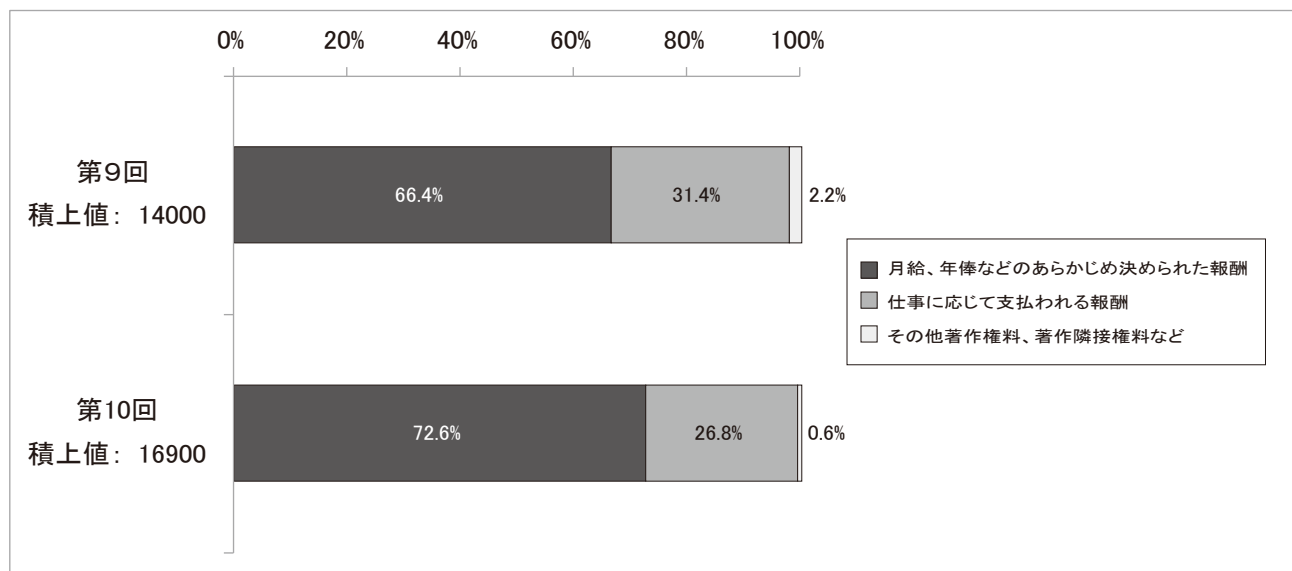
■ 洋舞（第9回：n=131、第10回：n=165）



■ 演芸（第9回：n=163、第10回：n=170）



■ 演出・制作等（第9回：n=197、第10回：n=196）



● C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)

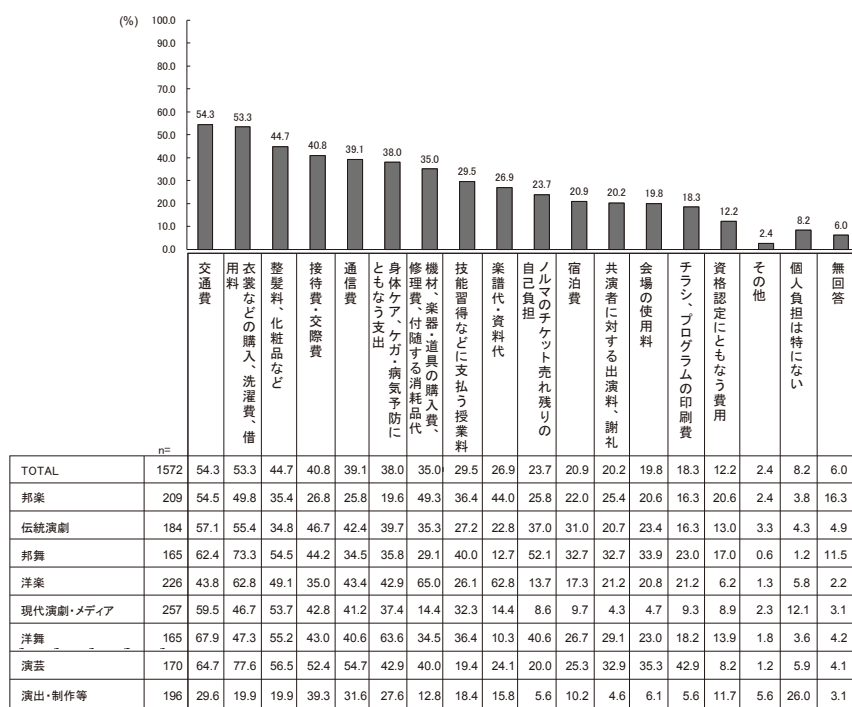
芸能実演家が仕事をするうえで個人負担となっている経費は、「交通費」が54.3%で最も高く、それに「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」(53.3%)「整髪料、化粧品など」(44.7%)が続いています。

ジャンルによって、負担の大きい費用に特徴があります。「楽譜代・資料代」は「洋楽」が62.8%と最も高く、次いで「邦楽」も44.0%です。「洋楽」「邦楽」は「機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代」もそれぞれ65.0%、49.3%と他のジャンルに比べて高い割合となっています。「身体ケア、けが、病気予防に伴う支出」が多いのは「洋舞」で63.6%と突出しています。「ノルマのチケットの売れ残り自己負担」が多いのは「邦

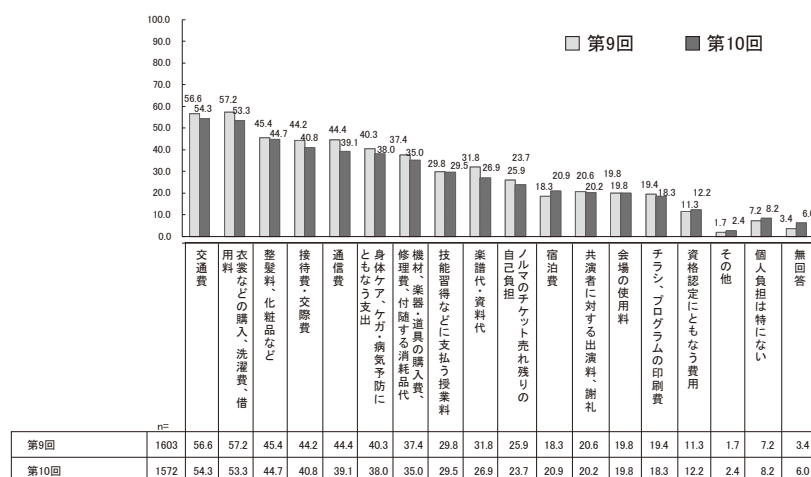
舞」(52.1%)で、「洋舞」(40.6%)「伝統演劇・メディア」(37.0%)と続きます。「共演者に対する出演料、謝礼」で高いのは「演芸」(32.9%)「邦舞」(32.7%)です。「チラシ、プログラムの印刷費」で多いのが「演芸」(42.9%)です。一方、集団で創造する「現代演劇」では、「チラシ、プログラムの印刷費」「共演者に対する出演料、謝礼」などが他ジャンルより低くなっています。

第9回と比較すると、第一位が「衣装代等」から「交通費」に入れ替わっているのをはじめ、順位は一部入れ替わっていますが、それぞれの費用負担の傾向はそれほど大きく変化していません。

問 C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費 (MA)



<参考> 第9回調査結果との比較

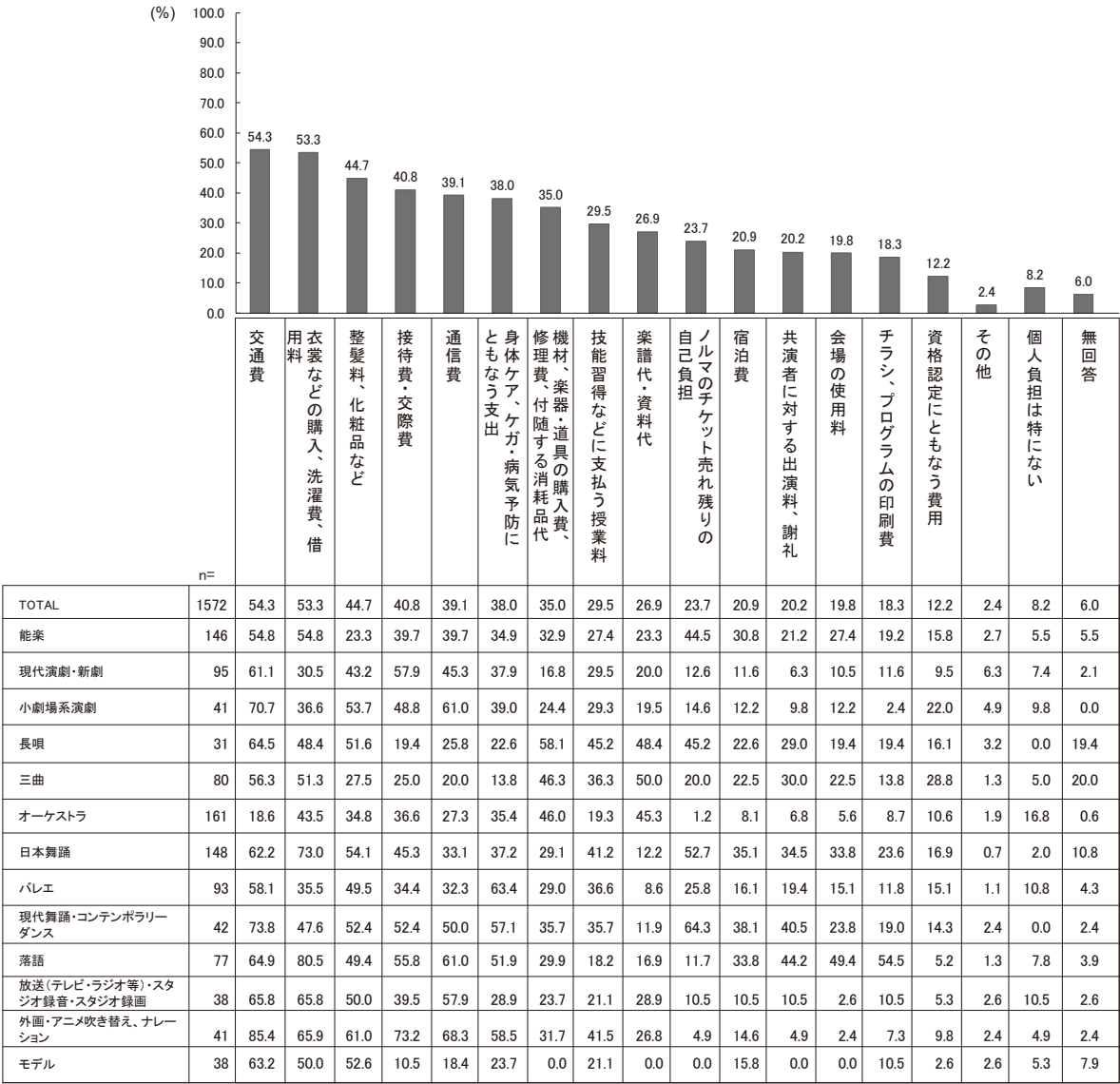


● C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費（小ジャンル別）（MA）

小ジャンル別に、個人負担となっている仕事上の必要経費をみると、「交通費」で高いのは、「外画・アニメ吹き替え、ナレーション」（85.4%）、「現代舞踊・コンテンポラリーダンス」（73.8%）などですが、どのジャンルも押しなべて高く、最低でも能楽の54.8%でした。「衣裳などの購入、洗濯費、借用料」は、「落語」（80.5%）、「日本舞踊」（73.0%）で高くなっています。「落語」と「日本舞踊」は、実演家全体の数値より高い負担割合を示しているカテゴリーが、それぞれ8つ、7つとあり、実演家個人が様々な費用を自ら負担してセルフ・プロデュース

をしている分野と言えそうです。「楽譜代・資料代」の割合が高いのは、「三曲」（50.0%）、「長唄」（48.4%）、「オーケストラ」（45.3%）、「機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代」も、「長唄」（58.1%）、「三曲」（46.3%）、「オーケストラ」（46.0%）と、洋の東西を問わず、演奏家で共通する傾向を示しています。「身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出」が多いのが、「バレエ」（63.4%）、「外画・アニメ吹き替え、ナレーション」（58.5%）、「現代舞踊・コンテンポラリーダンス」（57.1%）、「落語」（51.9%）です。

問 C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費（小ジャンル別）（MA）



＊小ジャンル別の分析について
小ジャンル別の分析については、よりジャンル、分野ごとの特徴をみるため、問 A-1 (b) 「あなた自身がたずさわっている活動分野のうち、最も比重の大きいものをお選びください」という設問の回答結果を元に、30 サンプル以上出現したジャンルのみ集計し分析を行っています。

● E-7 万一の場合や老後に対しての備え (MA)

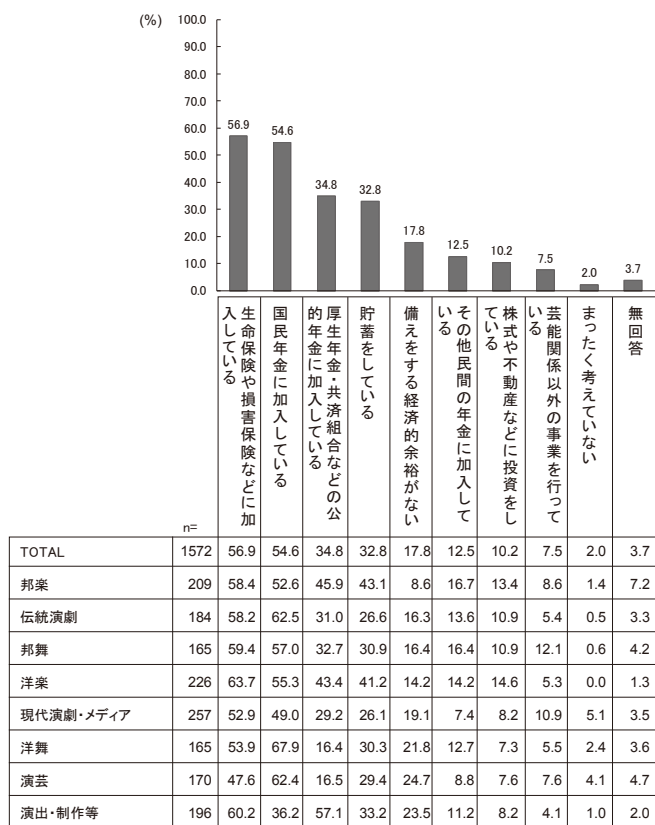
万一の場合や老後に対しての備えとして、「生命保険や損害保険などに加入している」(56.9%)、「国民年金に加入している」(54.6%)が過半数となっています。

ジャンル別にみると、「国民年金に加入している」は「洋舞」の割合が67.9%と、ほかのジャンルに比べて高く、最も低い割合なのは、「演出・制作等」(36.2%)です。「演出・制作等」は、「厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している」が57.1%と最も高くなっており、雇用されている制作者が多く含まれるジャンルの特徴が見てとれます。しかし、「現代演劇・メディア」は、「国民年金に加入している」も49.0%と二番目に低いのに対

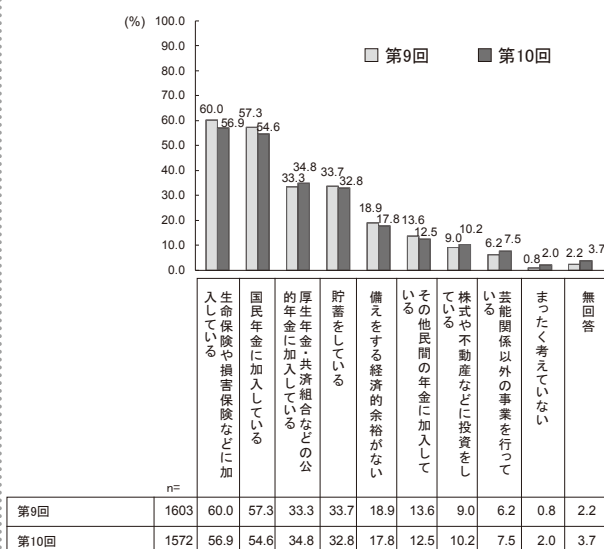
し、「公的年金」(29.2%)も「その他民間の年金に加入している」(7.4%)もあまり高くありません。ただし、「芸能関係以外の事業を行っている」が10.9%と、比較的多いです。「公的年金」は、「邦楽」(45.9%)、「洋楽」(43.4%)でも高くなっています。

第9回の調査と比較すると、「生命保険や損害保険などに加入している」(第9回:60.0%)の割合は若干下がっています。「貯蓄をしている」(第9回:33.7%)の割合は下がり、「公的年金に加入している」(第9回:33.3%)は上がり、2位と3位の順位が入れ替わりしました。

問 E-7 万一の場合や老後に対しての備え (MA)



<参考>第9回調査結果との比較

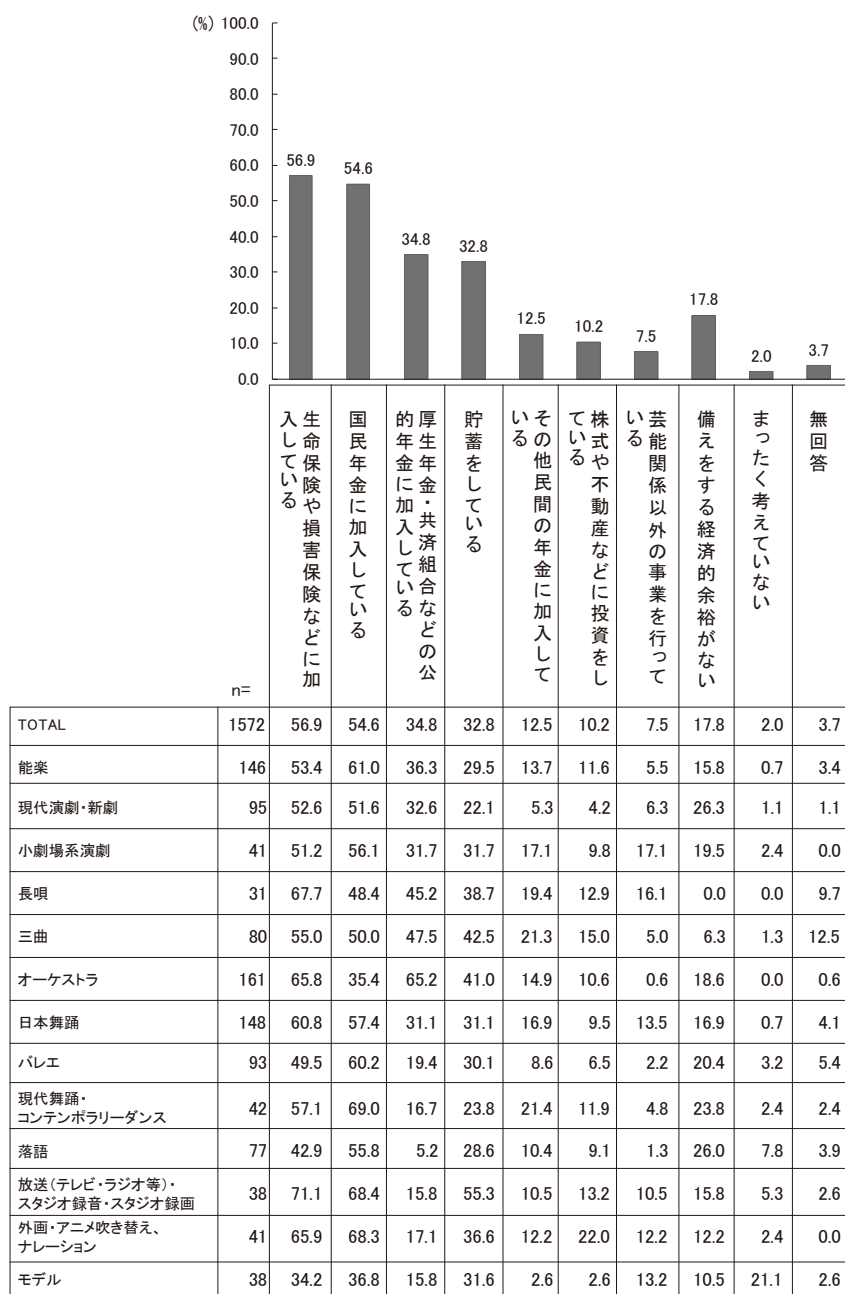


● E-7 万一の場合や老後に対しての備え（小ジャンル別）（MA）

小ジャンル別に万一の場合や老後に対しての備えの状況をみると、「生命保険や損害保険などに加入している」は「放送」が71.1%で最も多く、次いで「長唄」が67.7%となっています。「オーケストラ」は「公的年金」が65.2%と高い一方、「国民年金に加入している」は35.4%と低いです。「現代演劇・新劇」は、「貯蓄をしている」割合が22.1%と最も低く、「備えをする経済的余裕がない」が26.3%と最も高くなっています。「小劇場系演劇」は、「国民年金」「公的年金」「生命保険や損害保険に加入」という項目では「現代演劇・新劇」と似

た傾向にあります。「芸能関係以外の事業を行っている」が17.1%と最も高くなっており、実演芸術以外と兼業の人が多いことがうかがわれます。「芸能関係以外の事業を行っている」は、このほか「長唄」（16.1%）、「日本舞踊」（13.5%）も多いです。「モデル」は、「国民年金に加入している」が36.8%と最も低く、「公的年金」も15.8%と低い方です。また、「まったく考えていない」が21.1%と、ほかのジャンルから突出して多いですが、これは、20歳未満、子どもモデルが含まれているためではないかと考えられます。

問 E-7 万一の場合や老後に対しての備え（小ジャンル別）（MA）



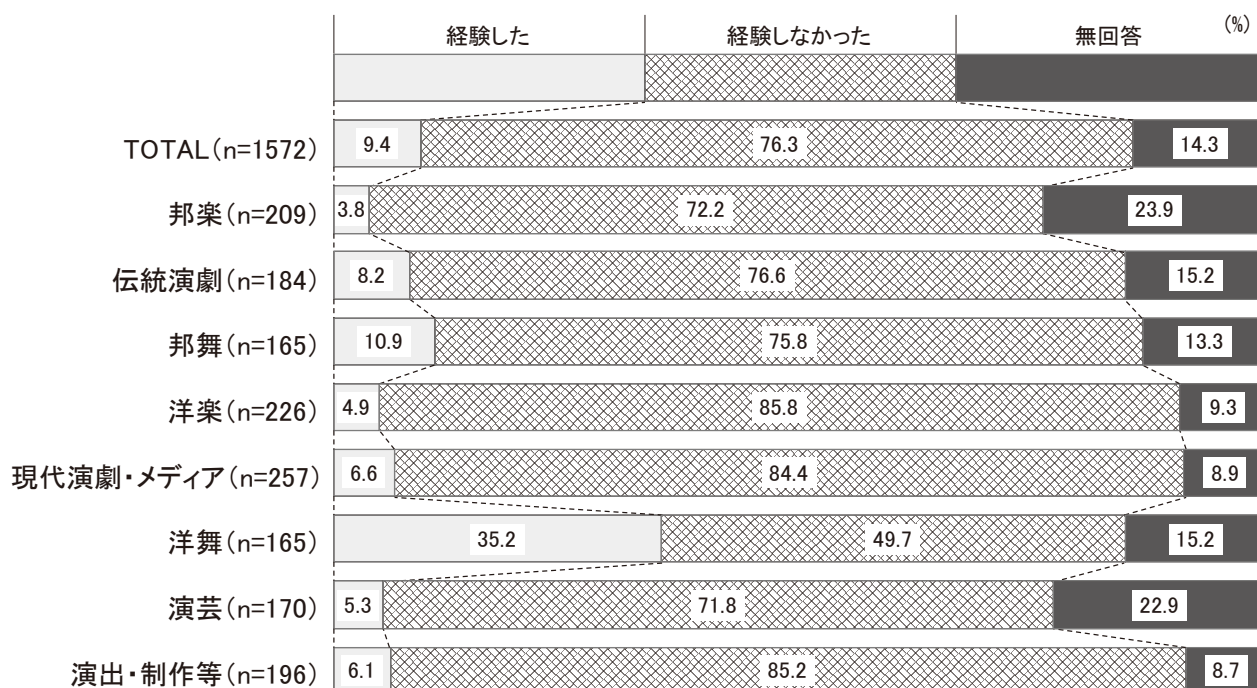
(2) 仕事環境について

< 傷害(ケガ)、病気・症状の状況 >

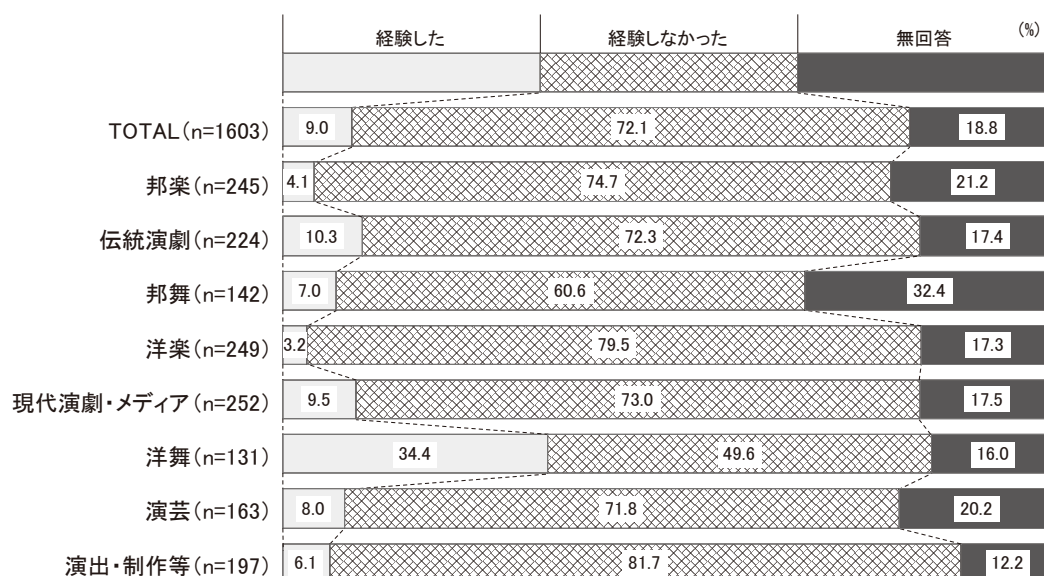
● C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (傷害 (ケガ))

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害 (ケガ) を経験した割合は9.4%でした。ジャンル別にみると、「洋舞」が35.2%で、ほかのジャンルに比べて突出して高いです。

問 C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (傷害 (ケガ))



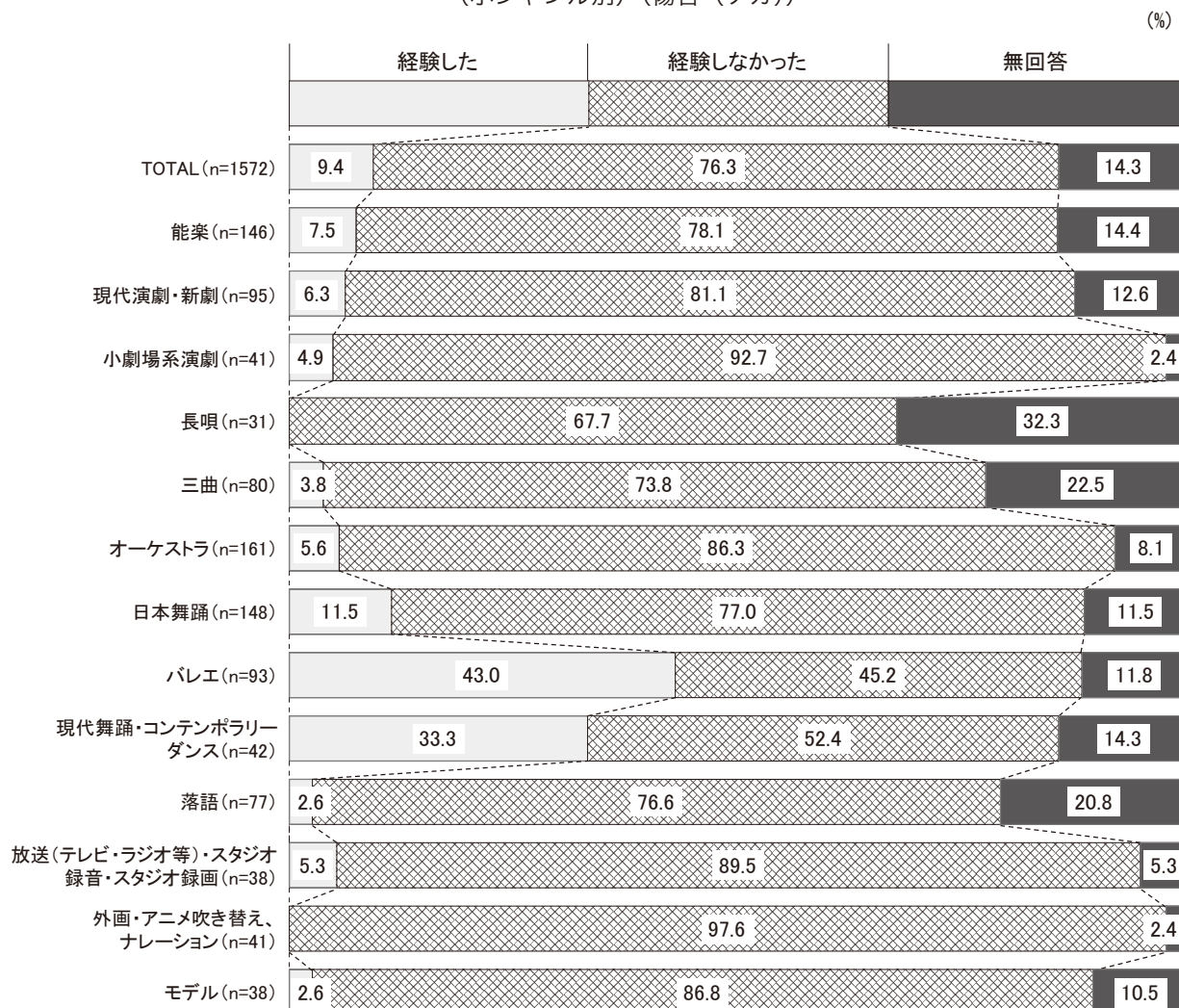
< 参考 > 第9回調査 調査結果



● C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験 (小ジャンル別) (傷害 (ケガ))

小ジャンル別に昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害 (ケガ) の経験をみると、「バレエ」が43.0% でほかの小ジャンルに比べて傷害 (ケガ) の経験率が高く、次いで「現代舞踊・コンテンポラリーダンス」が33.3%と高いです。

問 C-3 (a) 昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった経験
(小ジャンル別) (傷害 (ケガ))

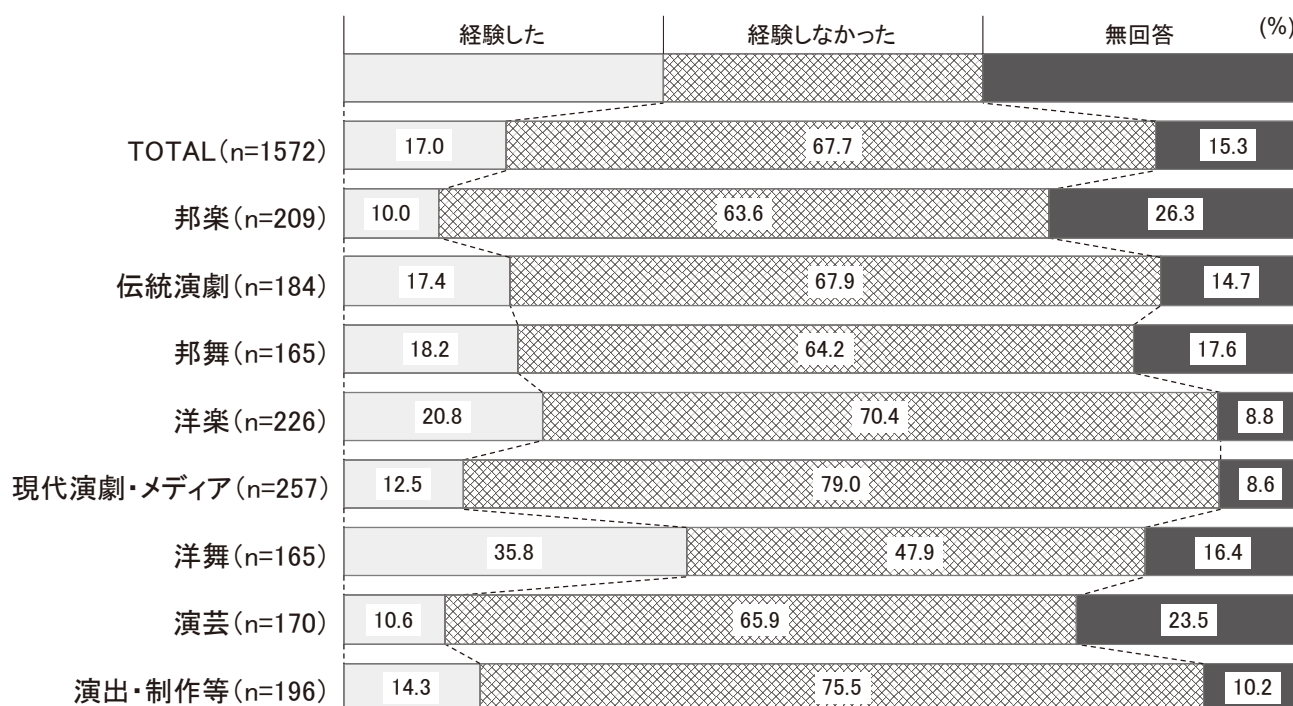


● C-3 (b) 昨年 1 年間に医師の治療が必要となった、 仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験

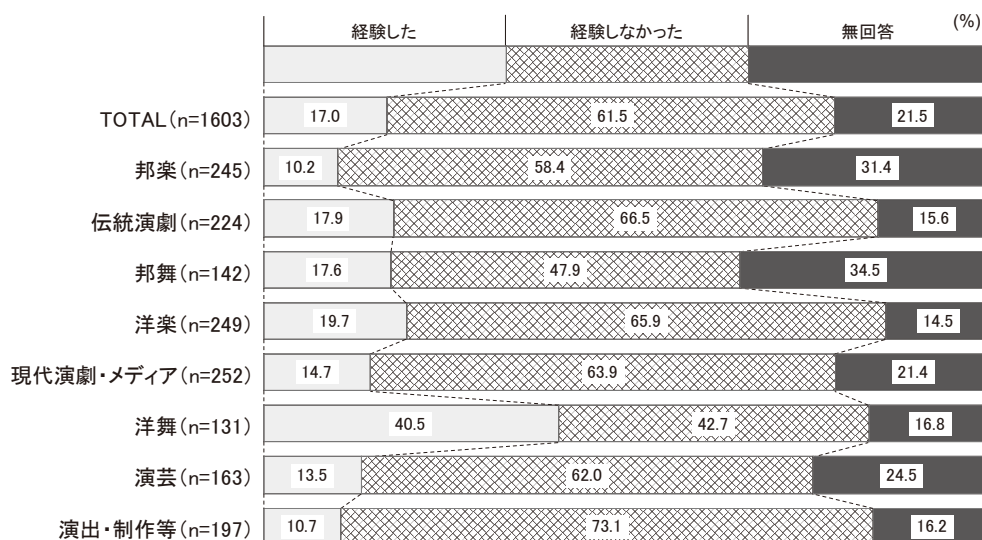
昨年 1 年間に仕事上で医師の治療が必要となった、仕事の原因と考えられる病気・症状などを経験した割合は、傷害（ケガ）を経験した割合より高く 17.0%でした。ジャンル別にみると、これも「洋舞」が最も多く 35.8%

で、次いで「洋楽」が 20.8%で、最も少ない「演芸」でも 10.6%と、仕事由来の何らかの病気、症状で医師の治療を受けたという人は、全体でも 5 人に 1 人という割合でいたことになります。

問 C-3 (b) 昨年 1 年間に医師の治療が必要となった、仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験



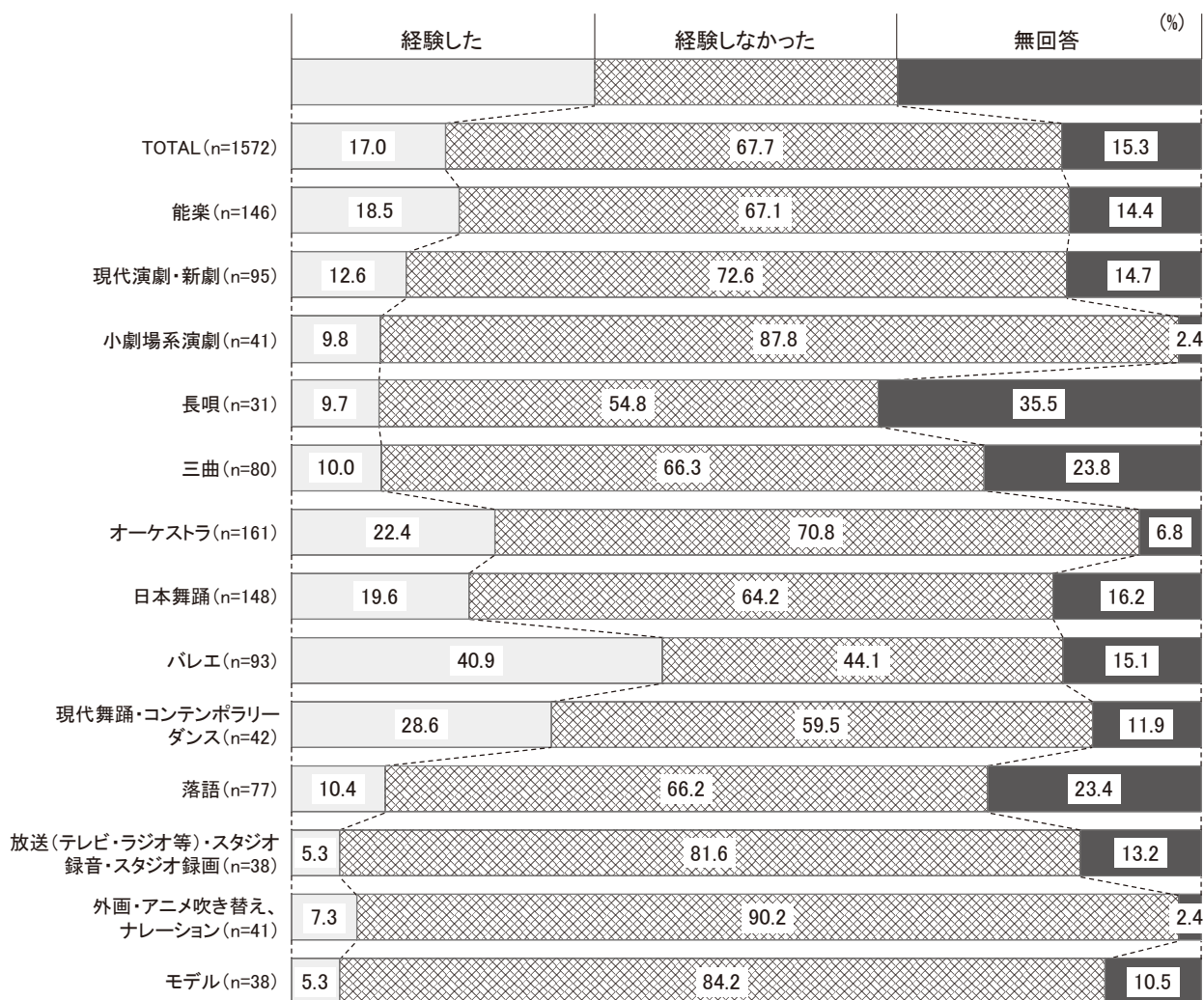
<参考> 第 9 回調査 調査結果



● C-3 (b) 昨年 1 年間に医師の治療が必要となった、 仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験 (小ジャンル別)

小ジャンル別に昨年 1 年間に仕事の原因と考えられる病気・症状で医師の治療が必要となった経験を見ると、傷害 (ケガ) の経験率同様、「バレエ」が最も高く 40.9%、「現代舞踊・コンテンポラリーダンス」が 28.6% となっています。次いで高いのが「オーケストラ」の 22.4% です。

問 C-3 (b) 昨年 1 年間に医師の治療が必要となった、仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験
(小ジャンル別)



*小ジャンル別の分析について

小ジャンル別の分析については、よりジャンル、分野ごとの特徴をみるため、問 A-1 (b) 「あなた自身がたずさわっている活動分野のうち、最も比重の大きいものをお選びください」という設問の回答結果を元に、30 サンプル以上出現したジャンルのみ集計し分析を行っています。

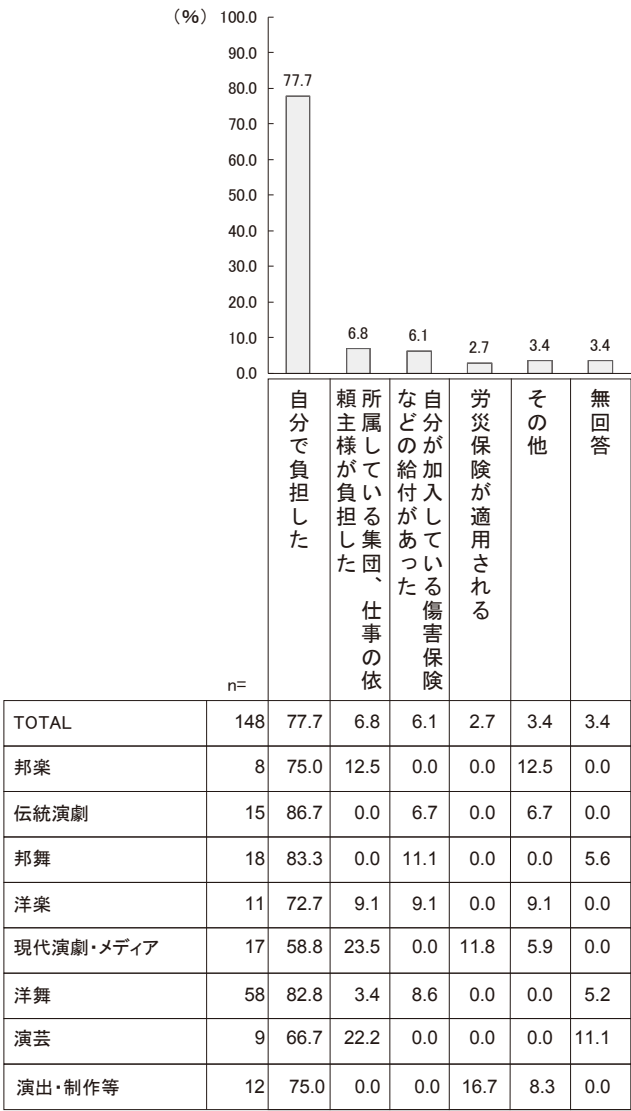
● C-4 昨年 1 年間に経験した仕事上の傷害（ケガ）

治療費等の負担状況（MA）【ベース：傷害経験あり】

昨年 1 年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害（ケガ）に対する治療費等の負担は、「自分で負担した」が 77.7%と突出しており、第 9 回調査の 69.0%に比較して、8.7 ポイント上昇しています。一方、「労災保険が適用された」のは、実演家全体では 2.7%に過ぎず、第 9

回調査の 7.6%から 4.9 ポイントも減少しています。「所属している集団、仕事の依頼主等が負担した」の 6.8%を合わせても、本人負担以外は 9.5%にとどまっています。

問 C-4 昨年 1 年間に経験した仕事上の傷害（ケガ）治療費等の負担状況（MA）【ベース：傷害経験あり】

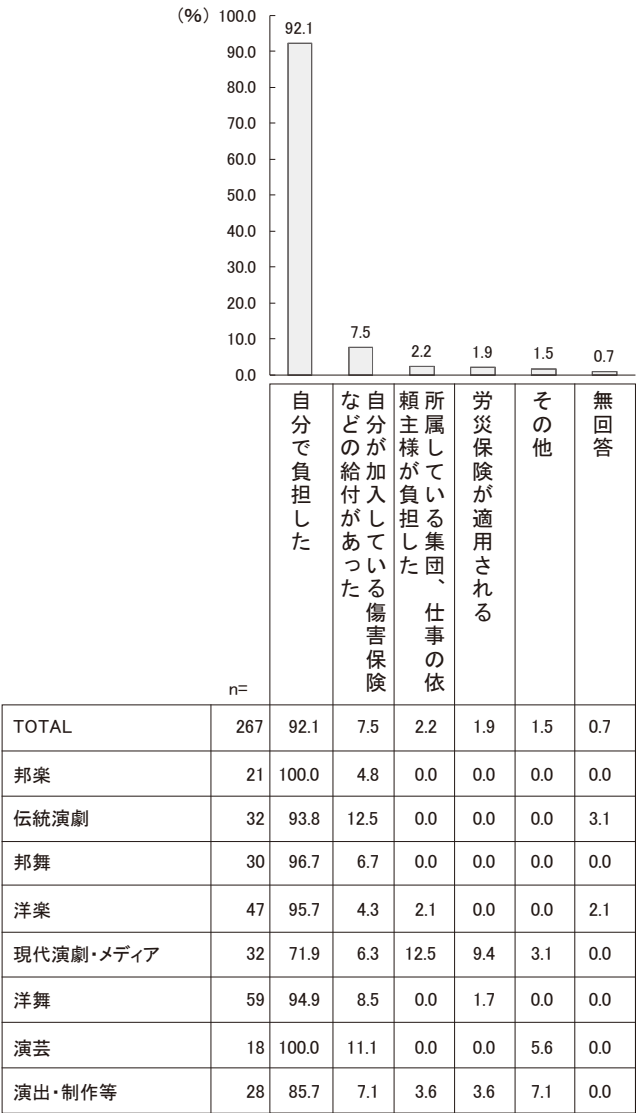


※ サンプル数 30s 未満は参考値として示している。

● C-5 仕事が原因と考えられる病気・症状の
治療費等の負担状況（MA）【ベース：病気経験あり】

昨年1年間に仕事上で医師の治療が必要となった仕事が原因と考えられる病気・症状を経験した人の治療費等の負担は、「自分で負担した」の割合がさらに高くなり、92.1%と突出しています（第9回調査では91.2%）。「労災保険が適用された」割合は1.9%（第9回調査では1.1%）にとどまっています。

問 C-3（b） 昨年1年間に医師の治療が必要となった、仕事が原因と考えられる病気・症状などの経験
（小ジャンル別）



※ サンプル数 30s 未満は参考値として示している。

<仕事とインターネットの活用>

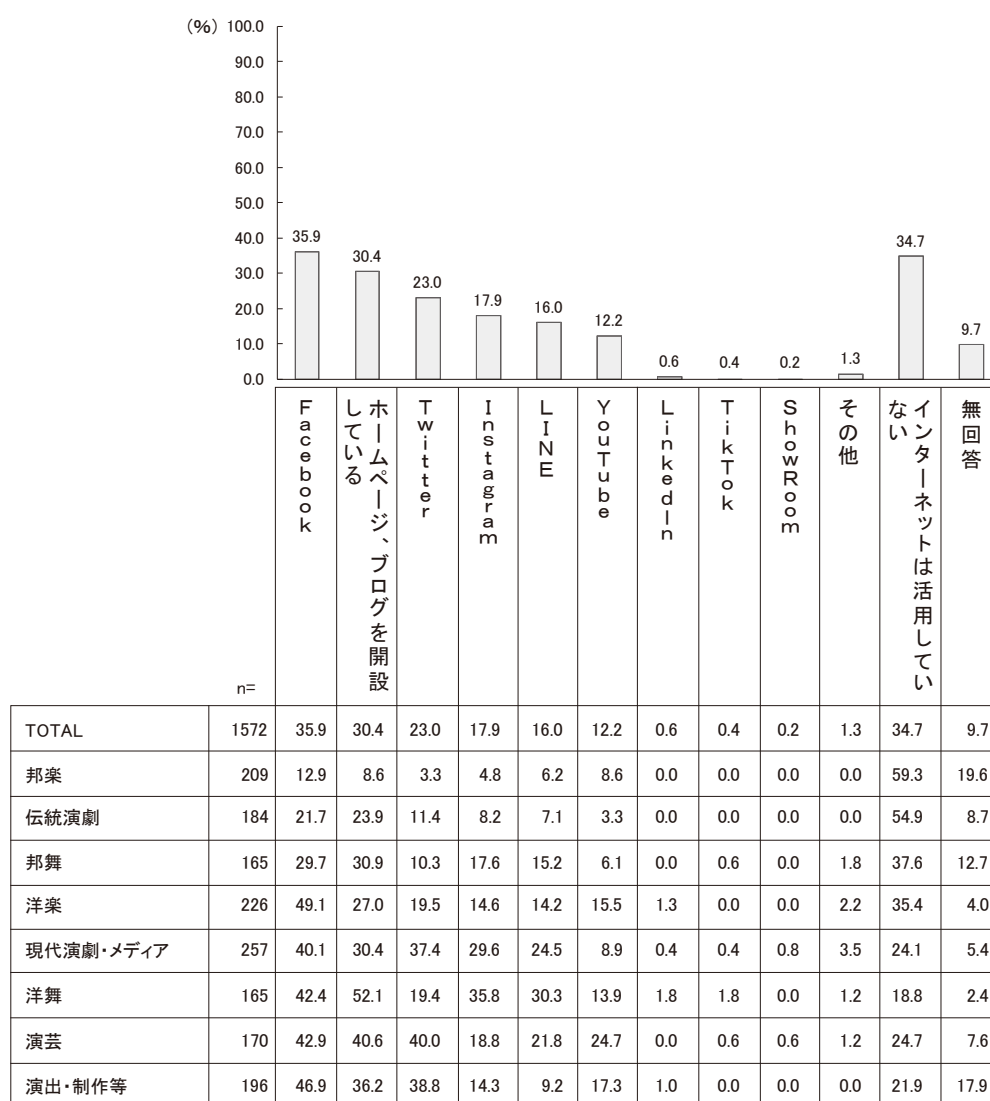
● B-9 自分の活動のプロモーションに、インターネットや SNS などを活用しているか (MA)

自分の活動のプロモーションに、インターネットや SNS などを活用しているかを尋ねたところ、最も多かったのが「Facebook」(35.9%)で、次いで「インターネットは活用していない」(34.7%)、「ホームページ、ブログを開設している」(30.4%)です。

ジャンル別に見ると、「インターネットは活用してい

ない」という回答が最も少なかったジャンル、すなわち、最もインターネットを活用しているジャンルは「洋舞」で、次いで「演出・制作等」です。最も「活用していない」が多かったのは、「邦楽」(59.3%)、次いで「伝統演劇」(54.9%)です。

問 B-9 自分の活動のプロモーションに、インターネットや SNS などを活用しているか (MA)



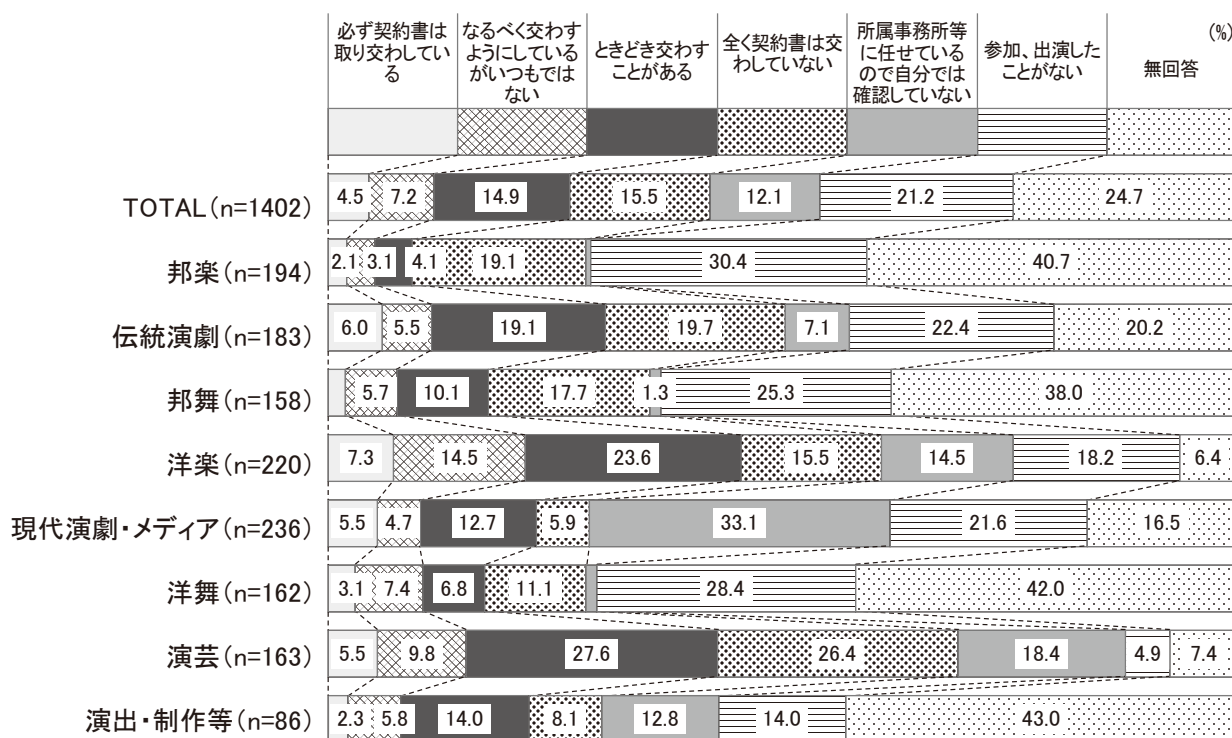
＜契約書について＞

■ B-10 (a) 実演の録音・録画にかかる契約書

「CDのレコーディング、放送番組、劇場用映画に参加、出演する際に契約書を交わしていますか」という設問に対し、「必ず契約書を交わしている」という回答は4.5%にとどまっており、「参加、出演したことがない」(21.2%)、「無回答」(24.7%)の割合も大きいです。ジャンル別にみると、「洋楽」では「必ず契約書を交わしている」が7.3%と、実演家全体より多くなっていますが、

最も多いのは「ときどき交わすことがある」(23.6%)で、「なるべく交わすようにしているがいつもではない」(14.5%)と合わせても、45.4%で半数以下です。「現代演劇・メディア」では、「必ず契約書を交わしている」は5.5%で、最も回答が多かったのは「所属事務所やマネージャーに任せているので自分では確認していない」(33.1%)です。

問 B-10 (a) 実演の録音・録画にかかる契約書



＜コンテンツの二次利用と使用料＞

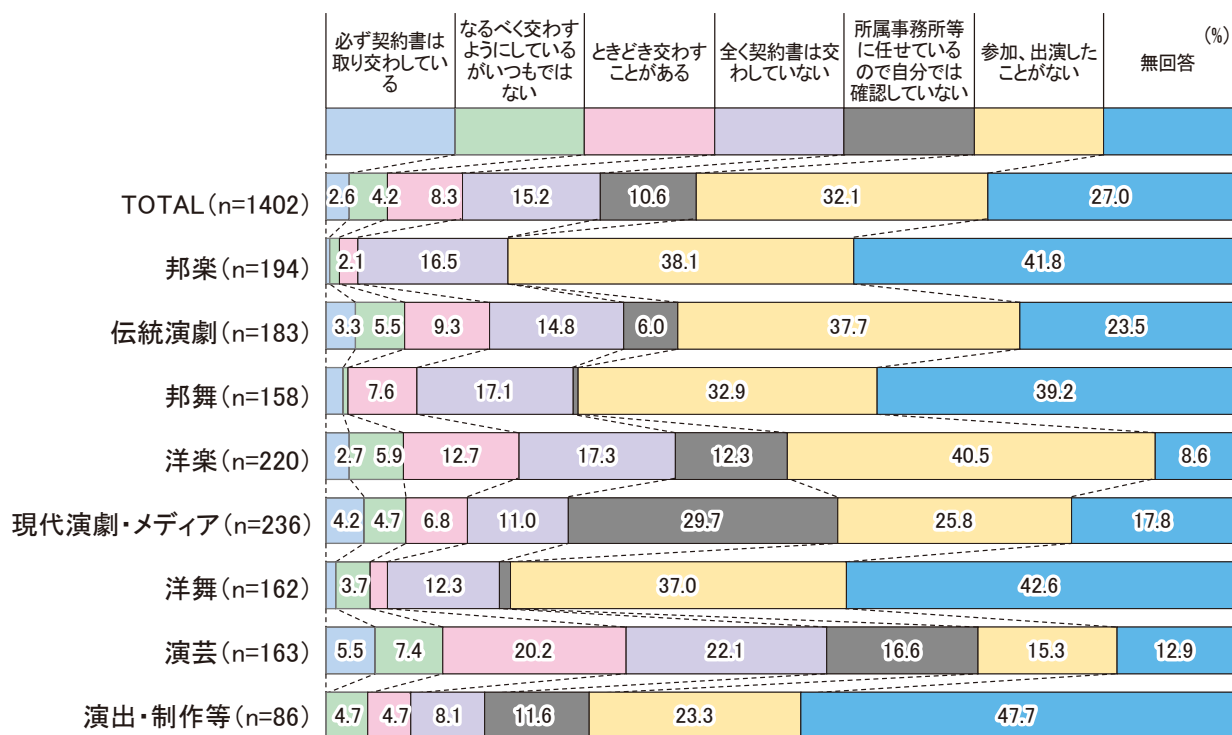
■ B-10 (b) インターネットを利用するための音楽・映像への参加、出演にかかる契約書

問 B-10 (a) に掲げる以外のメディアで、インターネットで利用するための音楽・映像への参加、出演する際に契約を交わしているかどうか尋ねたところ、全体では「必ず取り交わしている」は2.6%に過ぎず、「参加、出演したことがない」が32.1%と、そもそも参加、出演経験がまだ伸びていない状況にあるようです。

ジャンル別にみると、「演芸」では、「参加、出演したことがない」の回答は15.3%と最も低く、「必ず取り交

わしている」は5.5%、「ときどき交わすことがある」が20.4%、「なるべく交わすようにしているがいつもではない」が7.4%というように、契約書を交わそうとしている実演家もいる一方、「全く契約書は交わしていない」が22.1%、「所属事務所やマネージャーに任せているので自分では確認していない」(16.6%)と、人によって対応が異なる状況がうかがわれる。

問 B-10 (b) インターネットを利用するための音楽・映像への参加、出演にかかる契約書



■ B-11 参加したCD、放送番組、劇場用映画が

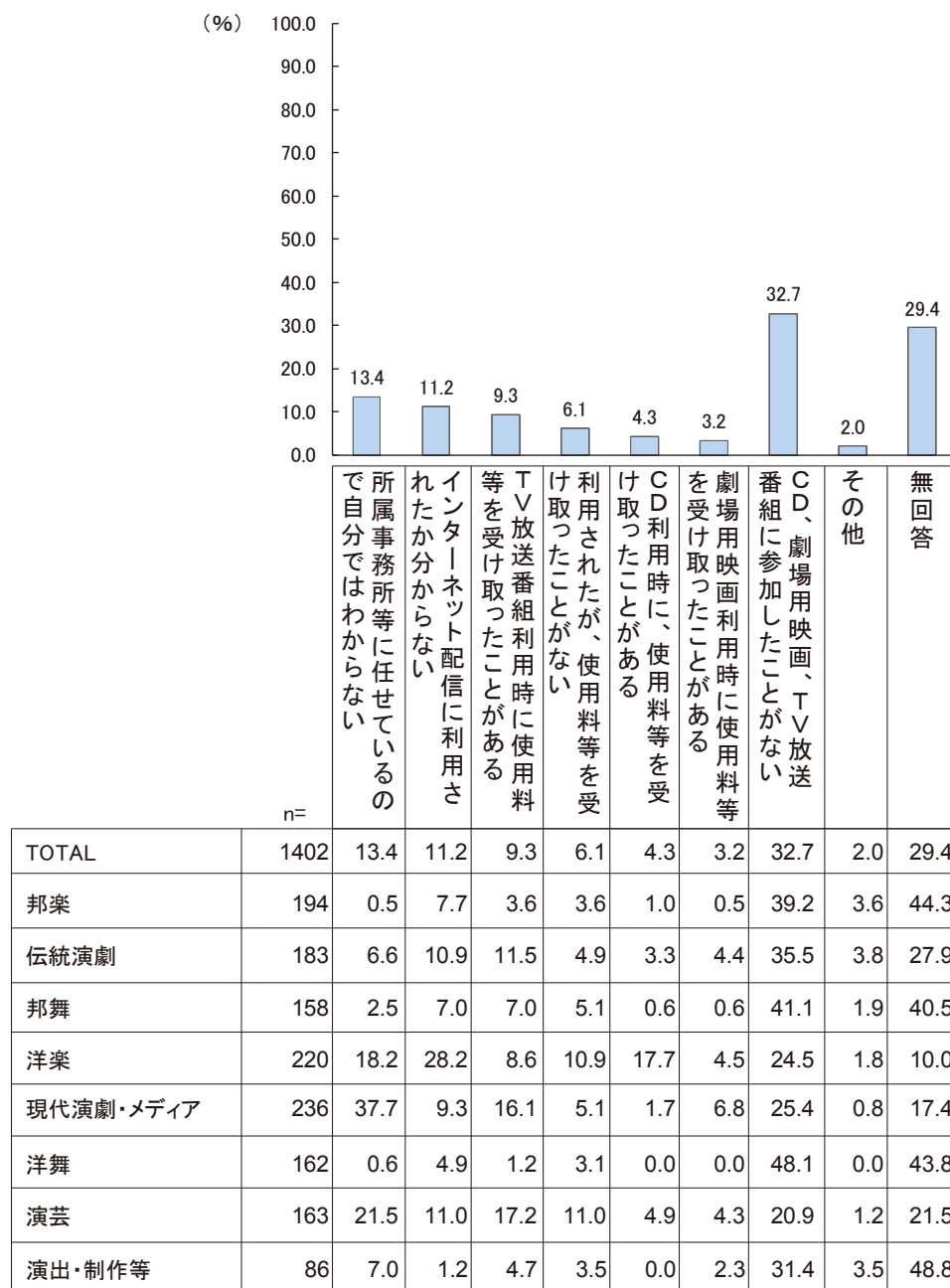
インターネットで利用される場合の状況 (MA)

自分が参加、出演したレコード・CD、放送番組、劇場用映画がインターネットで利用される場合の報酬の有無などについて尋ねました。

「CD利用時に、使用料等を受け取ったことがある」が4.3%、「TV放送番組利用時に使用料等を受け取ったことがある」が9.3%、「劇場用映画利用時に使用料等を受け取ったことがある」が3.2%と、インターネット利用の際に報酬を受け取ったという人は一桁代にとどまり、「利用されたが、使用料等を受け取ったことがない」は61%でした。そもそも「CD、劇場用映

画、TV放送番組に参加したことがない」という回答が32.7%、「無回答」も29.4%となっており、実演家が自分が参加、出演した録音・録画物がインターネットで利用された機会がなかった人が多いようです。その一方で、「所属事務所等に任せているので自分ではわからない」(13.4%)、「インターネット配信に利用されたか分からない」(11.2%)というように、可能性としては利用されているかもしれないが分からないという人も少なくありません。

問 B-11 参加したCD、放送番組、劇場用映画がインターネットで利用される場合の状況 (MA)



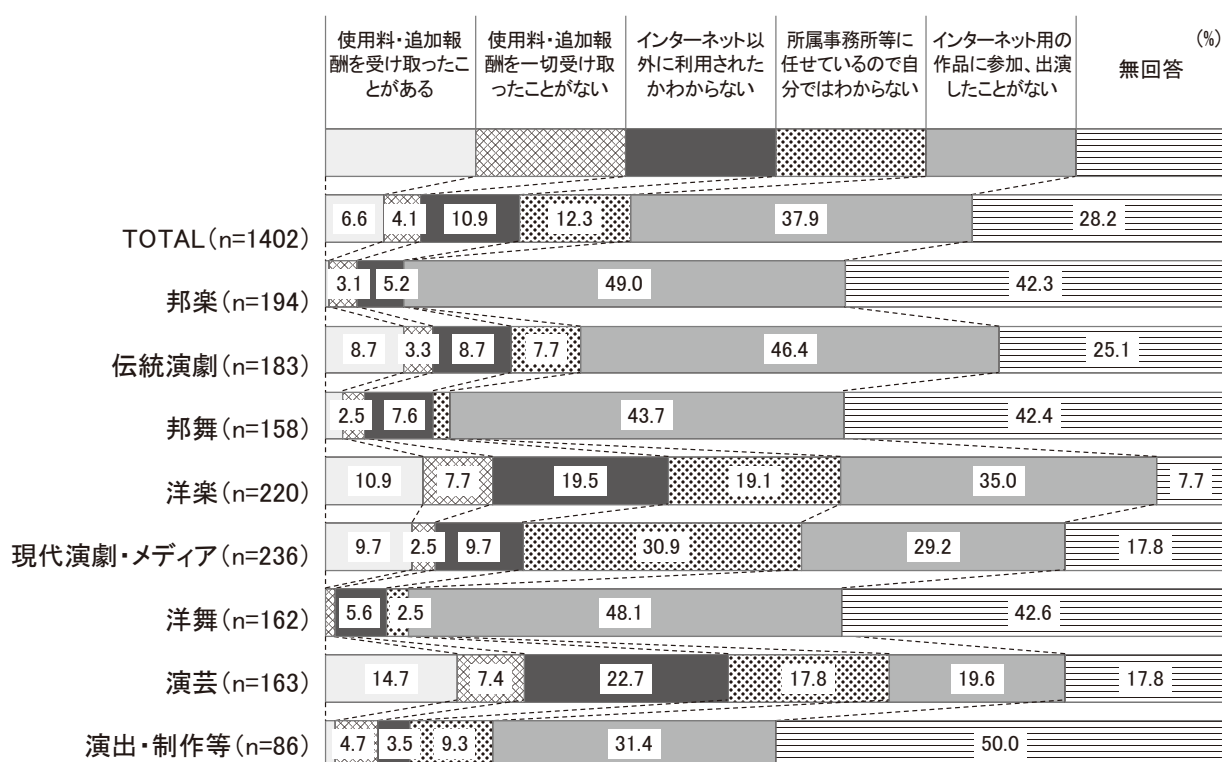
■ B-12 インターネットを利用するための音楽、映像作品が

インターネット以外で利用された場合

自分が参加、出演したインターネットで利用するための音楽・映像が、インターネット以外で利用される場合について尋ねたところ、「使用料・追加報酬を受け取ったことがある」という回答は6.6%にとどまっています。一方、「使用料・追加報酬を一切受け取ったことがない」という回答も4.1%で、「インターネット用の作品に参加、

出演したことがない」が37.9%、「無回答」が28.2%と、およそ3分の2の人は、そうした機会がないと思われ、さらには「所属事務所等に任せているので自分ではわからない」(12.3%)、「インターネット以外に利用されたか分からない」(10.9%)というように把握していないという回答も少なくありません。

問 B-12 インターネットを利用するための音楽、映像作品がインターネット以外で利用された場合



(3) 仕事や生活に対する考え方

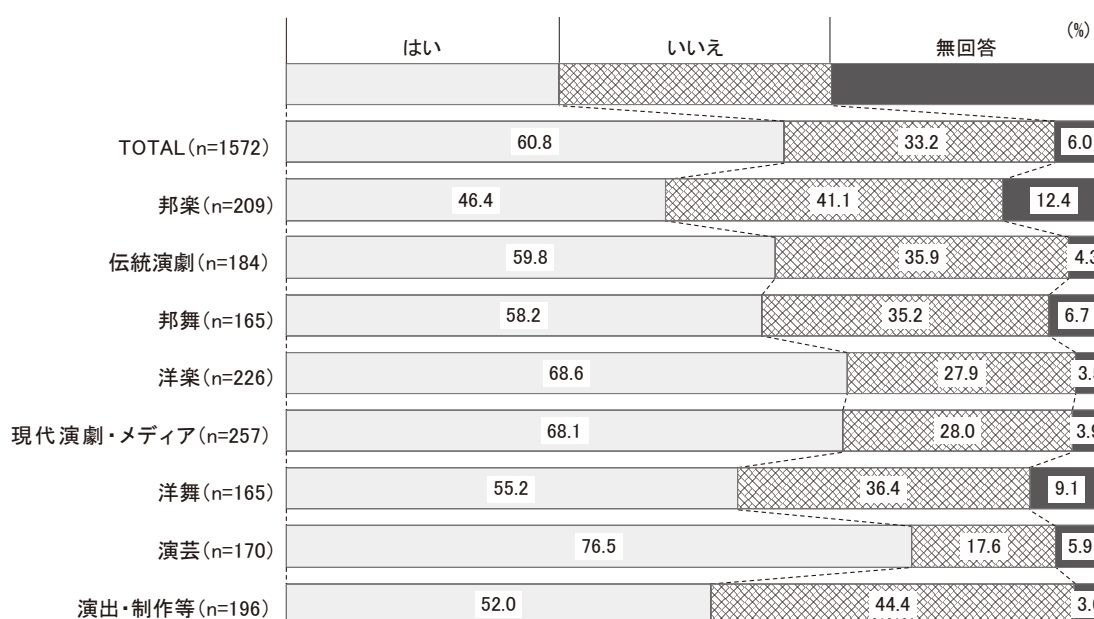
●C-6(a) 10年後も今の仕事を続けていると思うか

「10年後も今の仕事を続けていますか」という問いに対して、実演家全体では「はい」と回答した人が60.8%、「いいえ」が33.2%という結果でした。ジャンル別に見てみると、「はい」の割合が高いのは「演芸」(76.5%)、「洋楽」(68.6%)、「現代演劇・メディア」(68.1%)

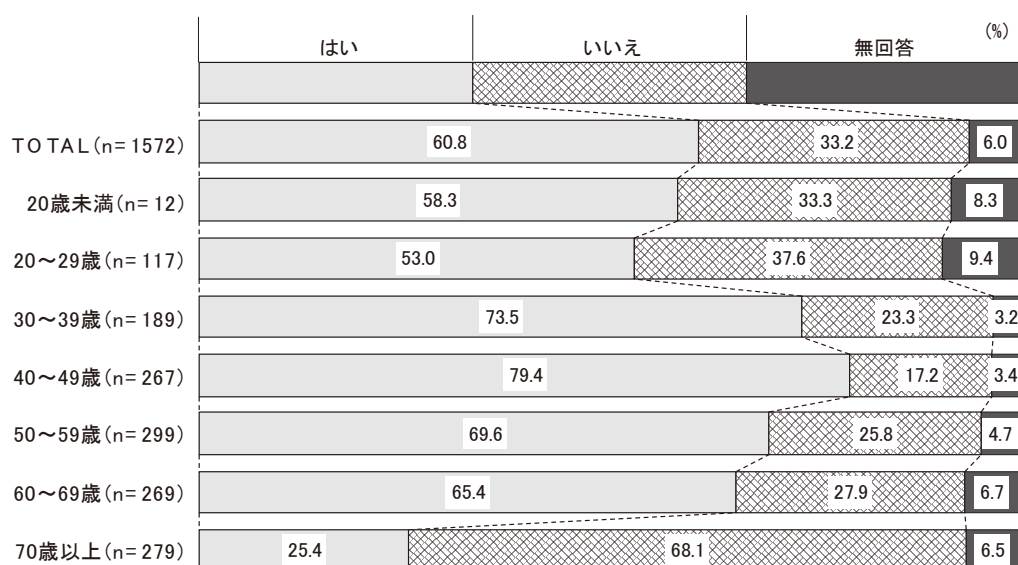
で、最も少なかったのは「邦楽」(46.4%)でした。

年代別に傾向を見てみると、「70歳以上」で「いいえ」の割合が68.1%と最も高くなっています。「20～29歳」も37.6%と、30代、40代より高くなっています。

問 C-6 (a) 10年後も今の仕事を続けていると思うか【実演家 / ジャンル別】



問 C-6 (a) 10年後も今の仕事を続けていると思うか【実演家 / 年代別】



* 20歳未満はサンプル数30未満だが参考として示している。

●C-6(b) 10年後、今の仕事を続けていないと思う主たる理由(3LA)

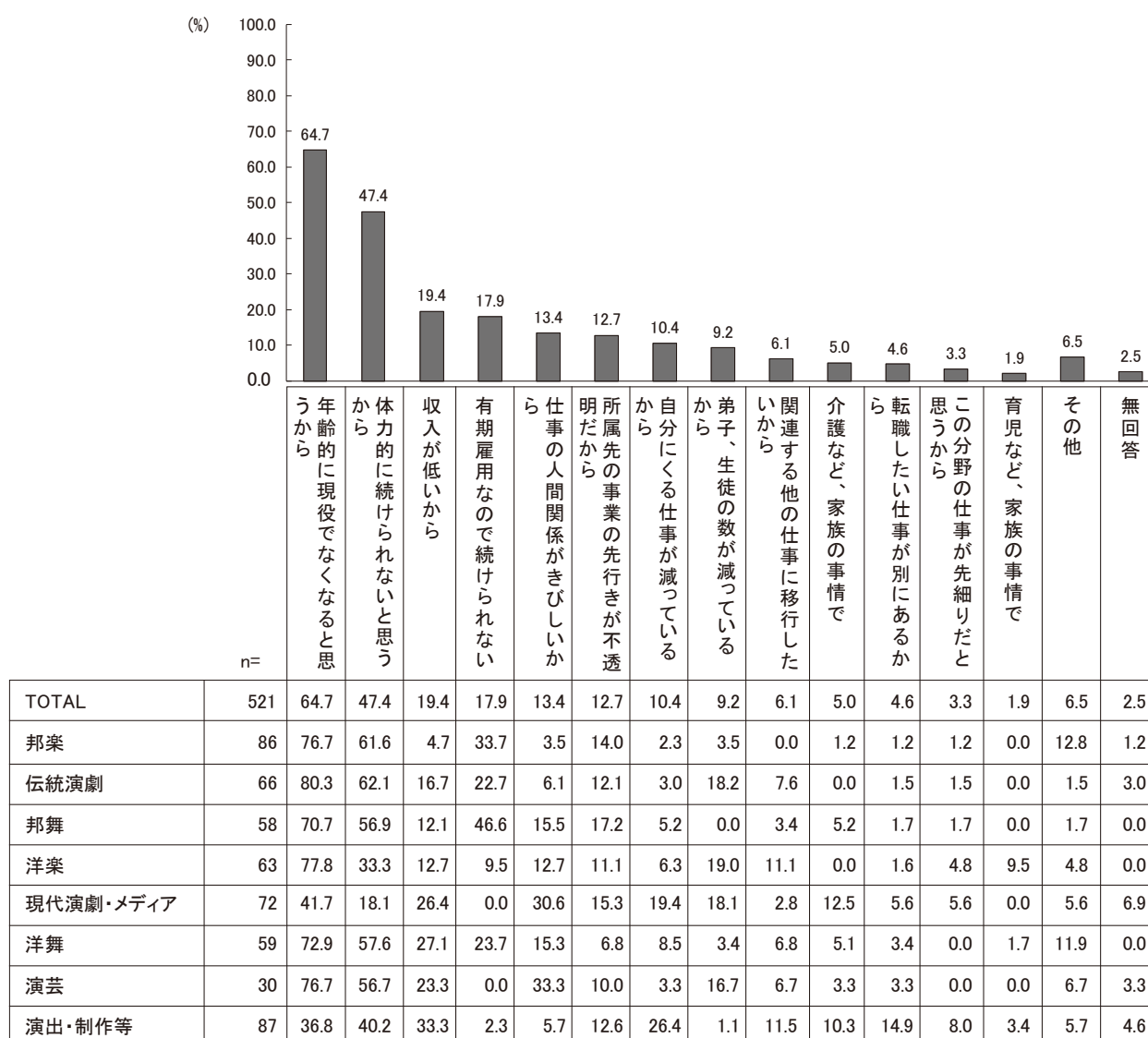
10年後も今の仕事を続けているかという問いに対して「いいえ」と回答した人たちがあげた理由については、主たる理由を3つまで選ぶ設問で、「年齢的に現役でなくなってしまうから」が最も多く(64.7%)、次いで「体力的に続けられないと思うから」(47.4%)、3番目の理由は「収入が低いから」(19.4%)となっています。

ジャンル別にみると「年齢」「体力」に次いで、「邦舞」「邦楽」では「有期雇用なので続けられない」が、それぞれ46.6%、33.7%と高めになっています。「洋楽」では、「体力」を理由にした人は33.3%と比較的低く、「弟子、生徒の数が減っているから」(19.0%)「育児など、家族の事情で」(9.5%)がジャンル別では最も多く選択されています。「現代演劇・メディア」では、「体力」の理由は18.1%と

ジャンル別では最も低く、「仕事の人間関係がきびしいから」(30.6%)の方が理由として多く選ばれています。また、「自分にくる仕事が減っているから」(19.4%)と「弟子、生徒の数が減っているから」(18.1%)の割合が比較的高く、「介護など、家族の事情で」(12.5%)がジャンル別では突出して多いです。

「演出・制作等」は、「年齢的に現役でなくなるから」という回答は36.8%と、ジャンルの中では最も低い割合で、「体力的に続けられない」の40.2%よりも低いです。「収入が低いから」(33.3%)、「自分にくる仕事が減っているから」(26.4%)、「転職したい仕事があるから」(14.9%)が、ほかジャンルより多くなっています。

問C-6(b) 10年後、今の仕事を続けていないと思う主たる理由(3LA)



●D-1(a) 仕事に対する考え方について

仕事に対する考え方に関する9つの設問に対し、肯定的か否定的かを見るため、「そう思う」を+2、「まあそう思う」を+1、「あまりそうは思わない」を-1、「そうは思わない」を-2として加重平均を計算してみました。肯定感が強ければプラスの数値に、否定感が強ければマイナスの数値となります。

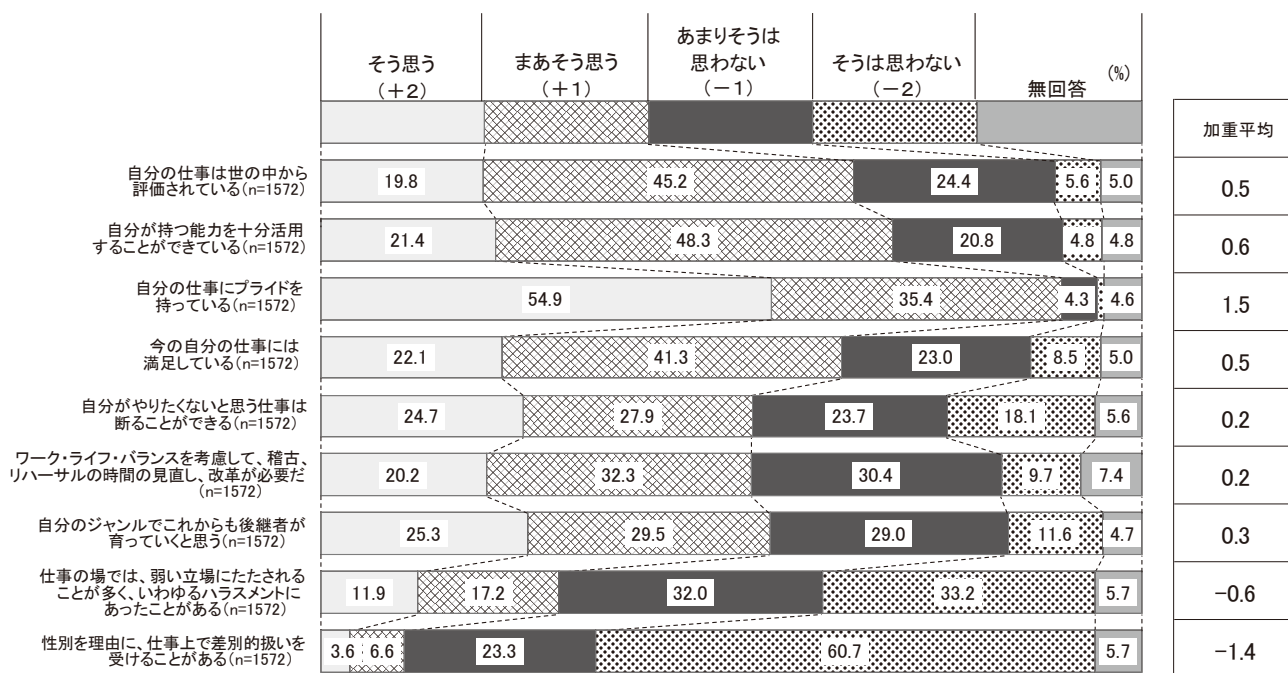
・「自分の仕事にプライドを持っている」は、「そう思う／まあそう思う」の割合が9割前後となり、ほかの項目に比べても肯定する割合が高く、加重平均は1.5と最も値が大きくなっています。

次いで肯定感が強かったのは「自分が持つ能力を十分活用することができている」で、8割の人が「そう思う

／まあそう思う」と回答しており、加重平均の値は0.6です。

「仕事の中では、弱い立場にたたされることが多く、いわゆるハラスメントにあったことがある」は-0.6、「性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある」は-1.4と、加重平均値がマイナスに振れており、否定的な回答が多いのですが、実演家全体で「ハラスメント」の経験者が「そう思う／まあそう思う」合わせて29.1%、「性別を理由とした差別」が「そう思う／まあそう思う」合わせて10.2%あることは看過できないことと思われます。

問 D-1 (a) 仕事に対する考え方について

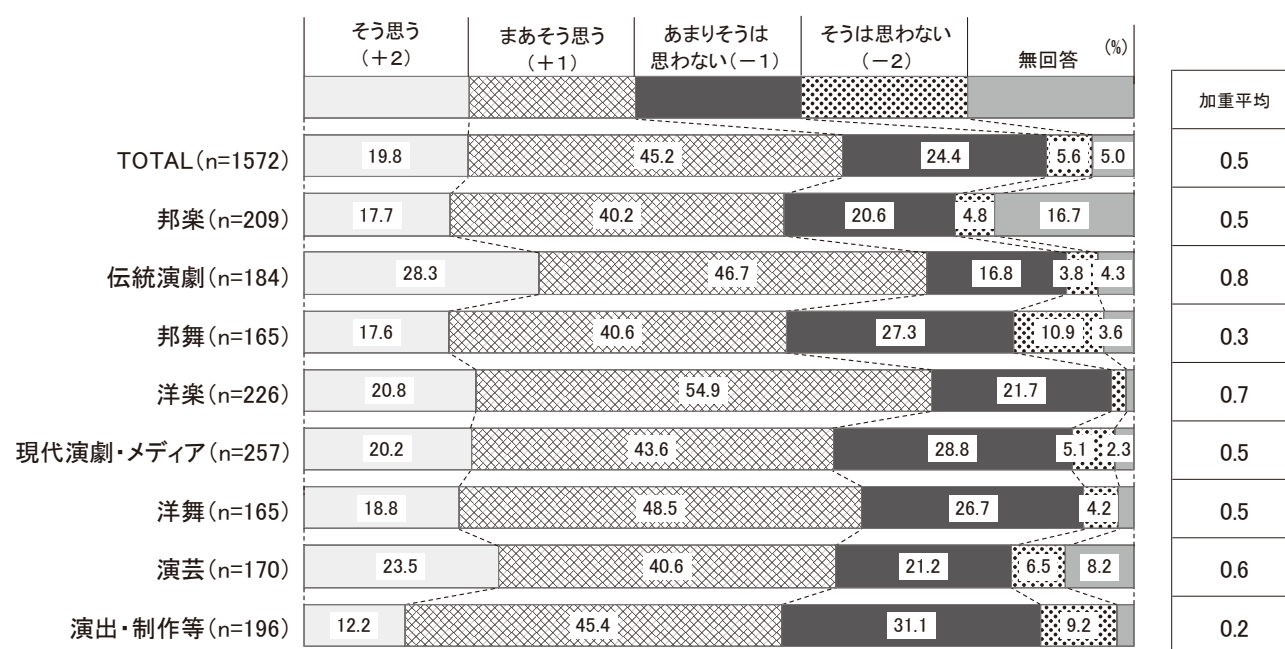


●D-1(a) 仕事に対する考え方について(1)(2)(ジャンル別)

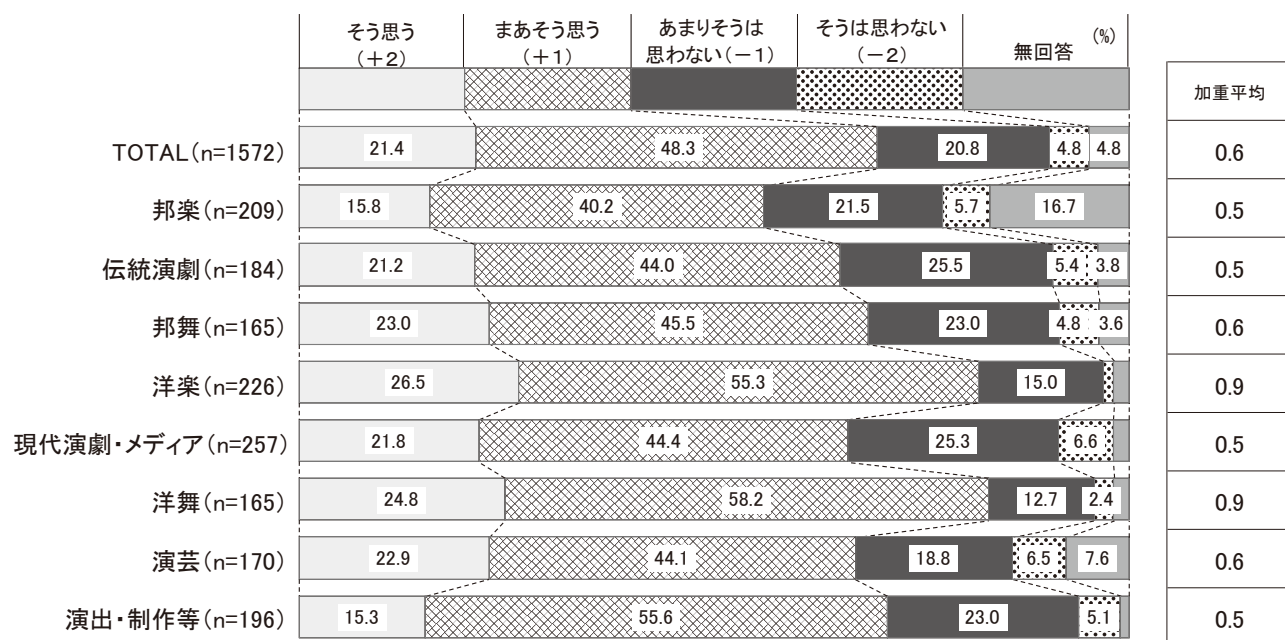
「自分の仕事は世の中から評価されている」はすべてのジャンルで「そう思う／まあそう思う」の合計が過半数を占めていて、加重平均の値で最も肯定感が強かったのは「伝統芸能」(0.8)で、一番弱かったのが「演出・制作等」(0.2)です。

「自分が持つ能力を十分活用することができている」は、「洋楽」「洋舞」で「そう思う／まあそう思う」の合計が8割を超え、加重平均も0.9と、最も肯定感が強い値となっています。

問 D-1 (a) 仕事に対する考え方について (1) (2) (ジャンル別)
(1) (自分の仕事は世の中から評価されている)



(2) 自分持つ能力を十分活用することができる

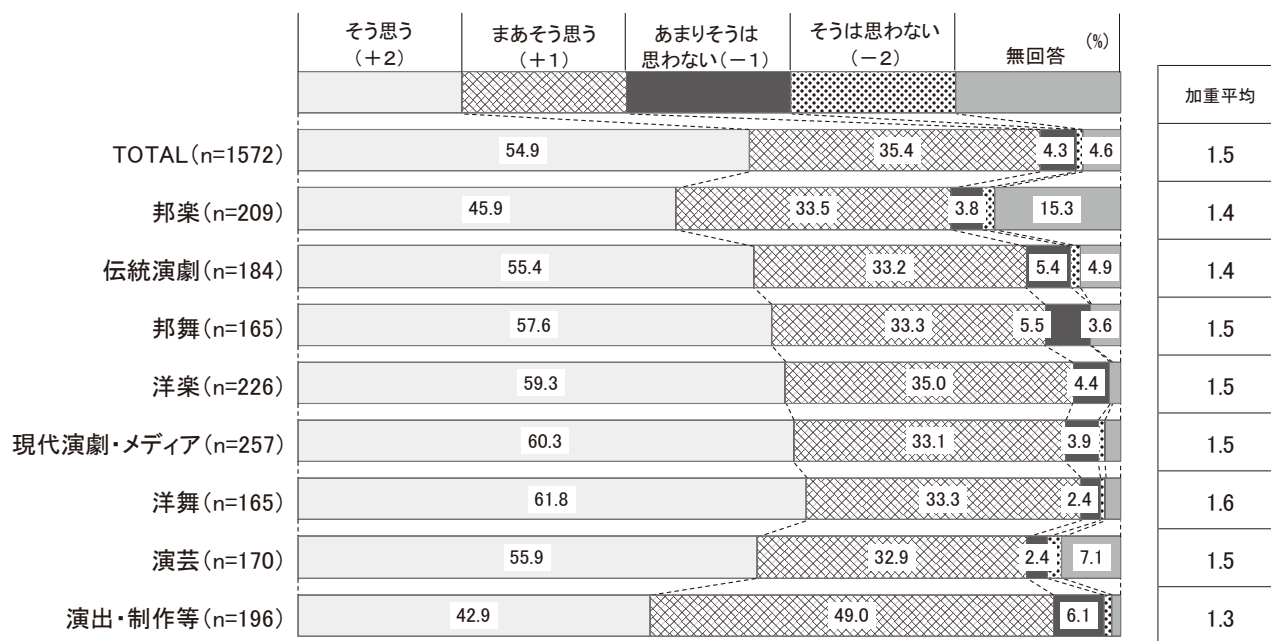


●D-1(a) 仕事に対する考え方について(3)(4)(ジャンル別)

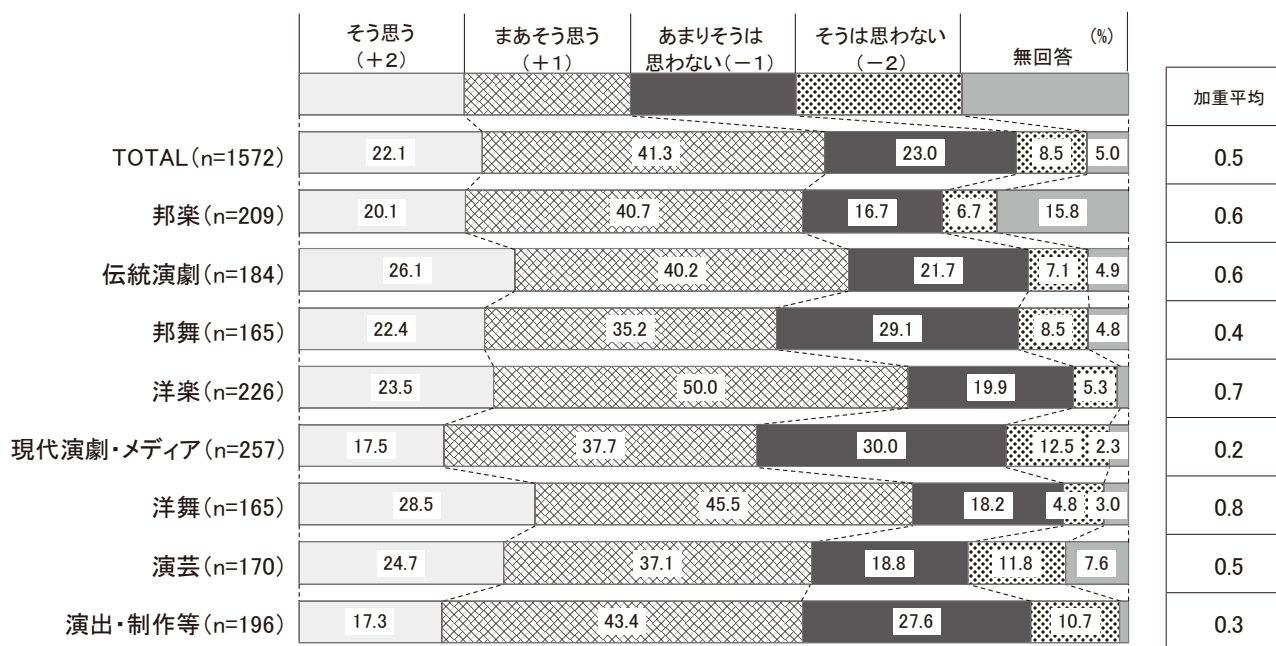
「自分の仕事にプライドを持っている」は、全ジャンルで強い肯定感が示されており、とりわけ「洋舞」で「そう思う」が61.8%、加重平均の値は1.6と最も高くなっています。

「今の自分の仕事には満足している」では、いずれのジャンルも肯定感の方が勝っており、加重平均の値が最も大きいのは「洋舞」で0.8、次いで「洋楽」で0.7です。

(3)自分の仕事にプライドを持っている



(4)今の自分の仕事には満足している



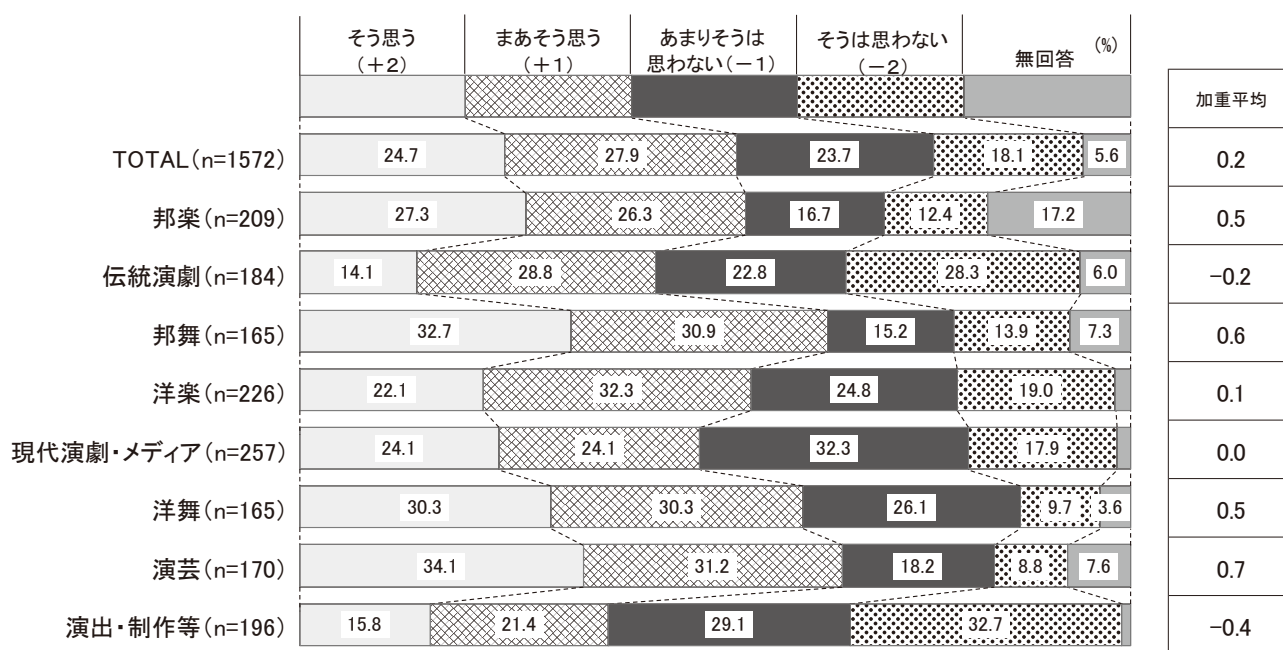
●D-1(a) 仕事に対する考え方について(5)(6)(ジャンル別)

「入ってくる仕事のうち、自分がやりたくないと思う仕事は断ることができる」については、「伝統演劇」と「演出・制作等」では、加重平均がマイナスの値となっていますが、ほかのジャンルは肯定的です。最も肯定感が強いのは「演芸」で「そう思う／まあそう思う」の合計が65.3%、加重平均の値は0.7です。

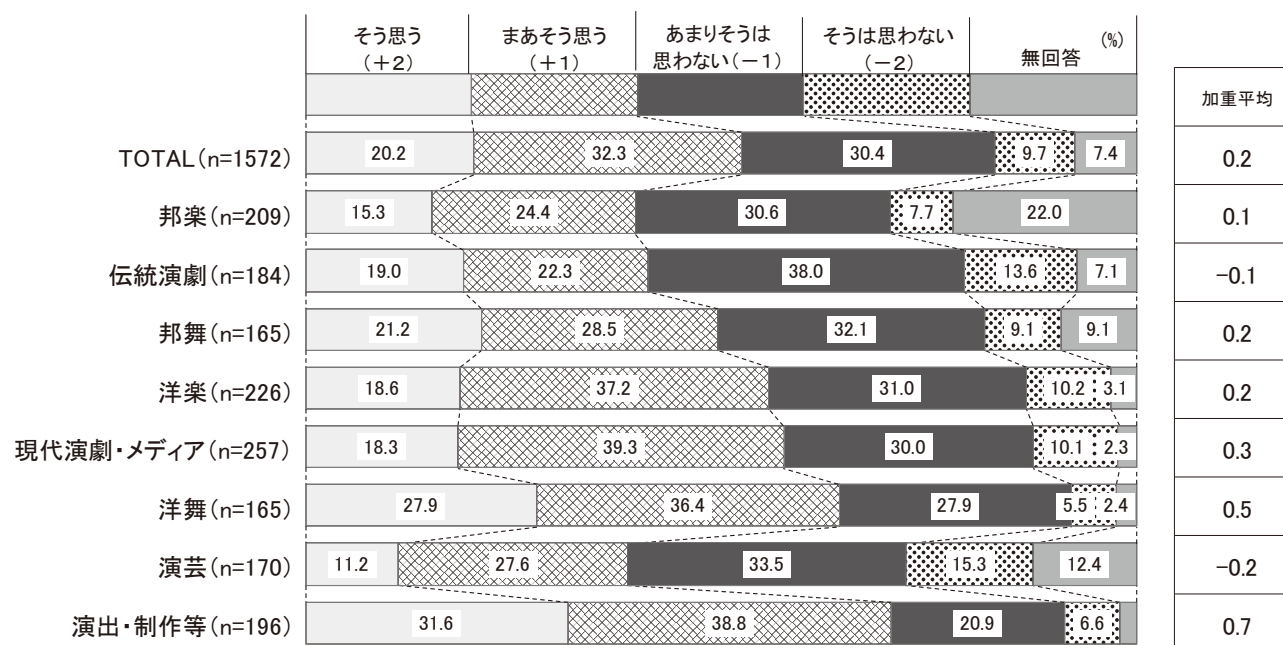
「芸術創造には時間をかけることは不可欠といえども、いわゆる「ワーク・ライフ・バランス」(仕事と生活の

バランス)を考慮して稽古、リハーサルの時間の見直し、比較が必要だ」は「演芸」と「伝統演劇」の加重平均がマイナスの値となっているが、ほかのジャンルは肯定感の方が強くなっています。最も肯定的なのは「演出・制作等」で、加重平均の値は0.7です。長時間労働が続きがちな制作者が多く含まれているジャンルだからと推察されます。

(5)入ってくる仕事のうち、自分がやりたくないと思う仕事は断ることができる



(6)芸術創造には時間をかけることは不可欠といえども、いわゆる「ワーク・ライフ・バランス」(仕事と生活のバランス)を考慮して稽古、リハーサルの時間の見直し、比較が必要だ



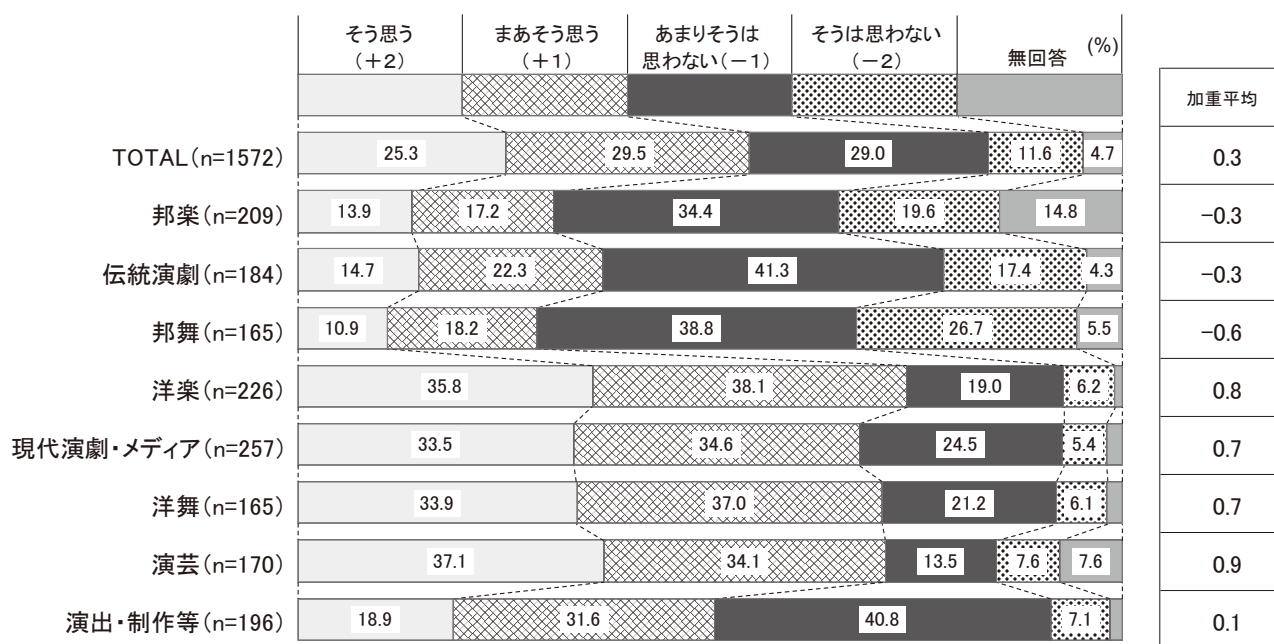
●D-1(a) 仕事に対する考え方について(7)(8)(9)(ジャンル別)

「自分のジャンルについては、これからも後継者が育っていくと思う」は、「演芸」が加重平均の値が0.8と最も肯定的で、次いで「洋楽」の0.8です。一方、「邦舞」「邦楽」「伝統演劇」は「あまりそうは思わない/そうは思わない」の方が多いジャンルで、加重平均の値がマイナスになっています。

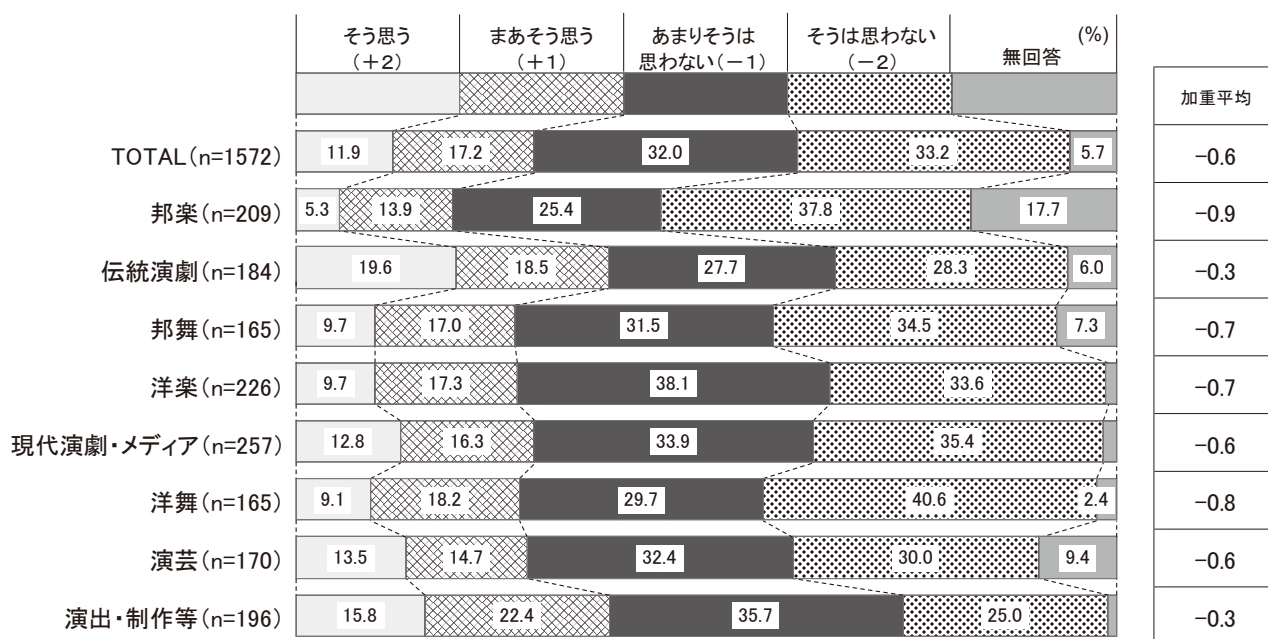
「仕事の場合は、弱い立場にたたされることが多く、いわゆるハラスメントにあったことがある」は全ジャンルでマイナスとなっていますが、「そう思う/まあそう思う」の合計が「演出・制作等」では38.2%、「伝統演劇」は38.1%と、実演家全体の割合より多くなっています。

「性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある」については、全てのジャンルで加重平均の値はマイナスですが、「演出・制作等」では「そう思う/まあそう思う」が18.4%、「邦舞」で12.1%と、差別的扱いがあるという人たちが少数派ではありますが存在しています。

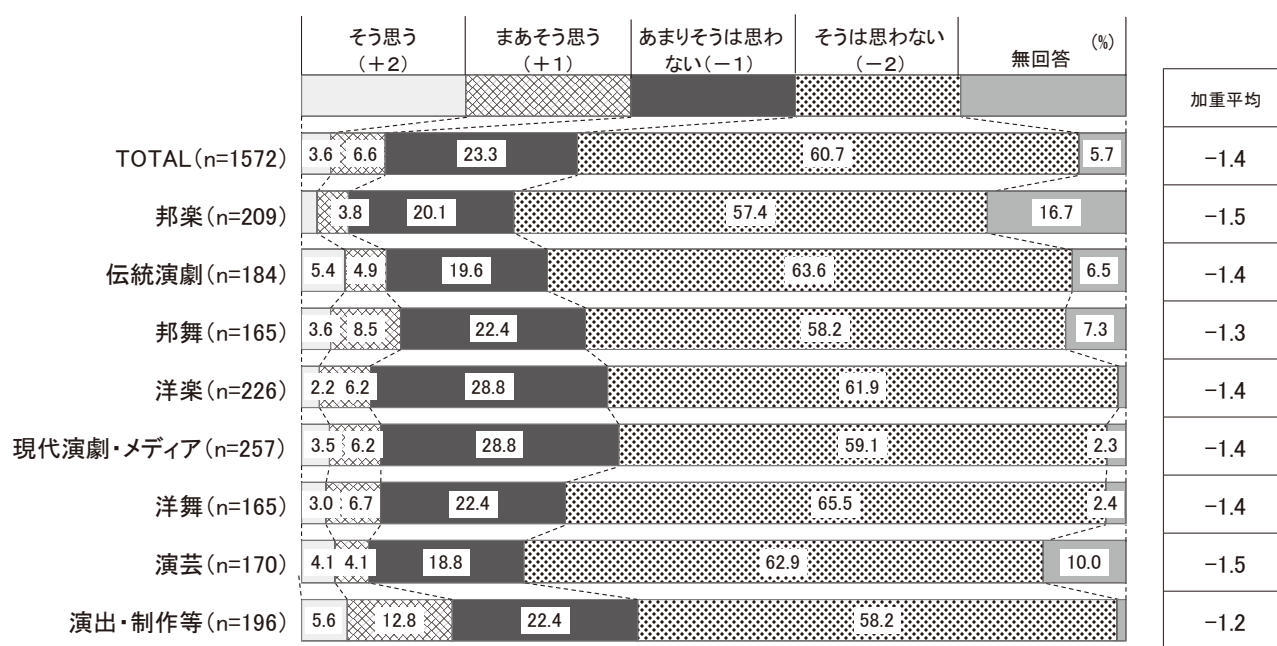
(7)(自分のジャンルについては、これからも後継者が育っていくと思う)



(8)仕事の場合は、弱い立場にたたされることが多く、いわゆるハラスメントにあったことがある



(9) 性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある



(4) より良い活動が続けていくために

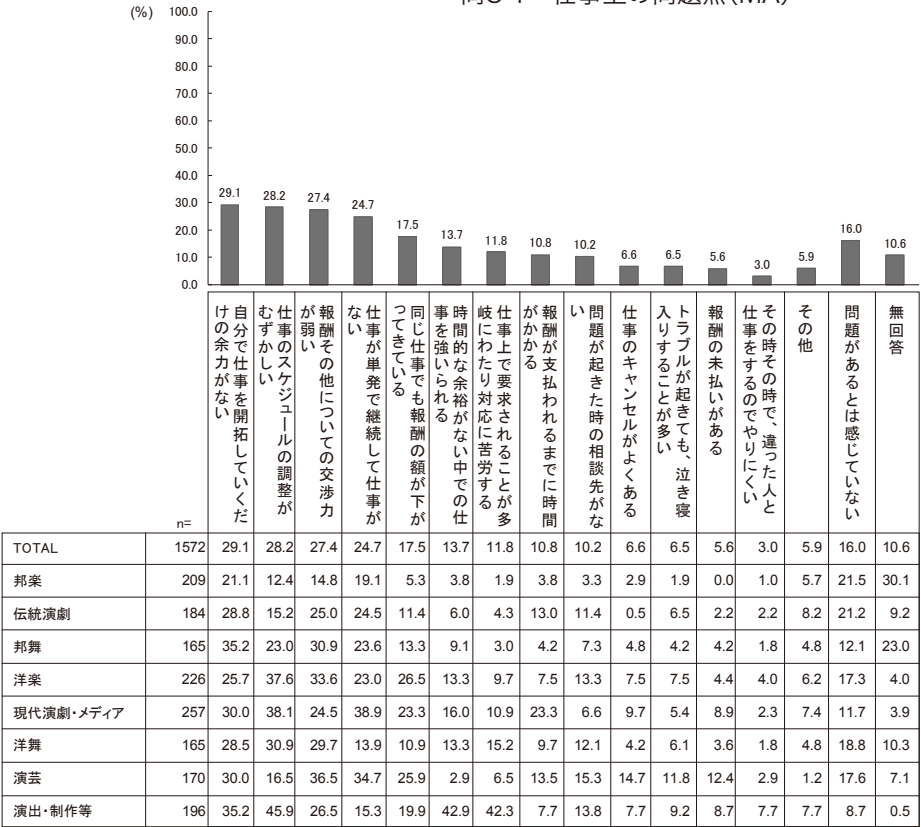
●C-1 仕事上の問題点(MA)

現在、芸能実演家が抱えている仕事上の問題点として選択肢の中から3つまで選ぶ設問で、最も多かったのが「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」が29.1%、次いで「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」が28.2%、三番目が「報酬その他についての交渉力が弱い」が27.4%です。第9回調査で4番目だった「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」3.4ポイント高

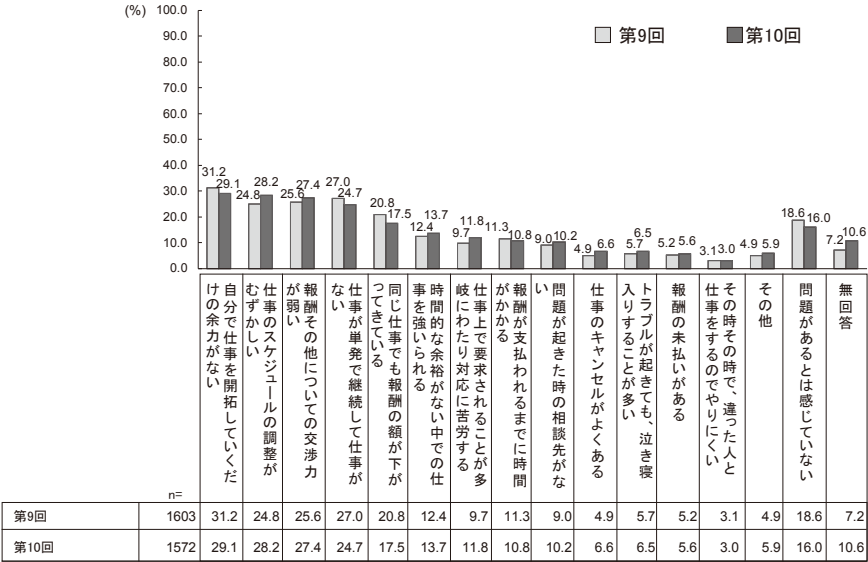
くなって2番目になり、前回「仕事が単発で継続して仕事がない」が4番目と入れ替わっています。

ジャンル別にみると、「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」は「邦舞」が35.2%、「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」は「洋楽」が37.6%とほかのジャンルに比べて高くなっています。

問C-1 仕事上の問題点(MA)



<参考> 第9回調査結果との比較

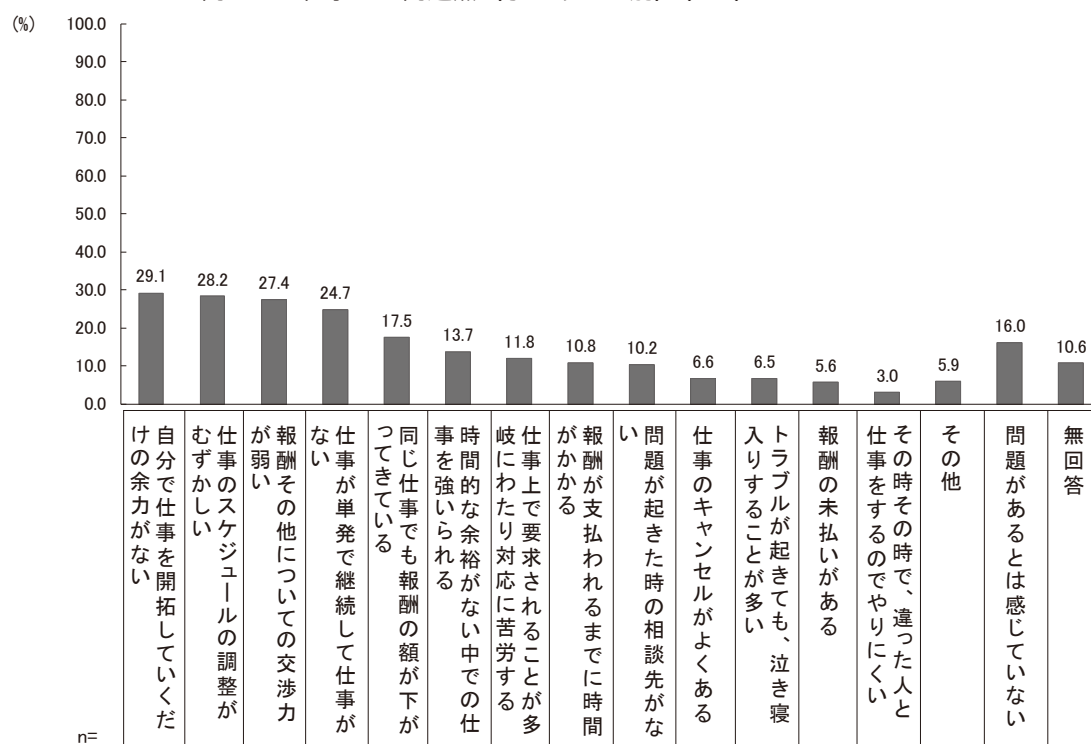


●C-1 仕事上の問題点(小ジャンル別)(MA)

小ジャンル別に仕事上の問題点をみると、「現代舞踊・コンテンポラリーダンス」では「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」が54.8%と高いです。また、「小

劇場系劇団」は「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」が61.0%と高くなっています。

問 C-1 仕事上の問題点 (小ジャンル別) (MA)



	n=	自分で仕事を開拓していくだけの余力がない	仕事のスケジュールの調整がむずかしい	報酬が弱い	報酬が単発で継続して仕事がない	同じ仕事でも報酬の額が下がっている	時間的な余裕がない中での仕事を強いられる	岐にわたり対応に苦労する	仕事上で要求されることが多い	報酬が支払われるまでに時間がかかる	問題が起きた時の相談先がない	仕事のキャンセルがよくある	トラブルが起きてても、泣き寝入りすることが多い	報酬の未払いがある	その他	問題があるとは思っていない	無回答
TOTAL	1572	29.1	28.2	27.4	24.7	17.5	13.7	11.8	10.8	10.2	6.6	6.5	5.6	3.0	5.9	16.0	10.6
能楽	146	29.5	13.7	16.4	30.8	12.3	4.8	3.4	15.1	11.0	0.0	3.4	2.7	2.1	6.8	23.3	11.0
現代演劇・新劇	95	31.6	45.3	25.3	28.4	27.4	26.3	23.2	20.0	7.4	5.3	6.3	10.5	3.2	8.4	5.3	1.1
小劇場系演劇	41	43.9	61.0	31.7	43.9	14.6	34.1	26.8	24.4	19.5	4.9	4.9	7.3	7.3	7.3	7.3	0.0
長唄	31	25.8	9.7	9.7	25.8	6.5	6.5	0.0	3.2	0.0	9.7	3.2	0.0	0.0	3.2	9.7	45.2
三曲	80	16.3	11.3	12.5	7.5	2.5	3.8	0.0	2.5	2.5	1.3	1.3	0.0	1.3	7.5	30.0	33.8
オーケストラ	161	23.0	44.7	24.8	10.6	23.6	23.6	21.1	5.6	11.8	5.0	5.6	2.5	4.3	7.5	16.1	3.1
日本舞踊	148	35.8	23.0	30.4	24.3	12.8	8.8	2.7	4.7	8.1	4.7	4.7	4.7	2.0	5.4	13.5	20.9
バレエ	93	23.7	32.3	24.7	9.7	6.5	18.3	21.5	12.9	12.9	6.5	6.5	3.2	1.1	6.5	19.4	9.7
現代舞踊・コンテンポラリーダンス	42	54.8	31.0	33.3	14.3	16.7	14.3	16.7	4.8	16.7	0.0	9.5	4.8	0.0	2.4	21.4	4.8
落語	77	24.7	11.7	40.3	27.3	22.1	1.3	6.5	18.2	14.3	13.0	15.6	14.3	2.6	2.6	22.1	6.5
放送(テレビ・ラジオ等)・スタジオ録音・スタジオ録画	38	39.5	34.2	36.8	42.1	36.8	15.8	10.5	21.1	10.5	18.4	18.4	10.5	2.6	2.6	5.3	2.6
外画・アニメ吹き替え、ナレーション	41	43.9	29.3	34.1	53.7	19.5	17.1	2.4	29.3	7.3	14.6	4.9	14.6	2.4	9.8	12.2	0.0
モデル	38	23.7	42.1	23.7	42.1	13.2	5.3	7.9	28.9	5.3	15.8	0.0	2.6	2.6	5.3	21.1	7.9

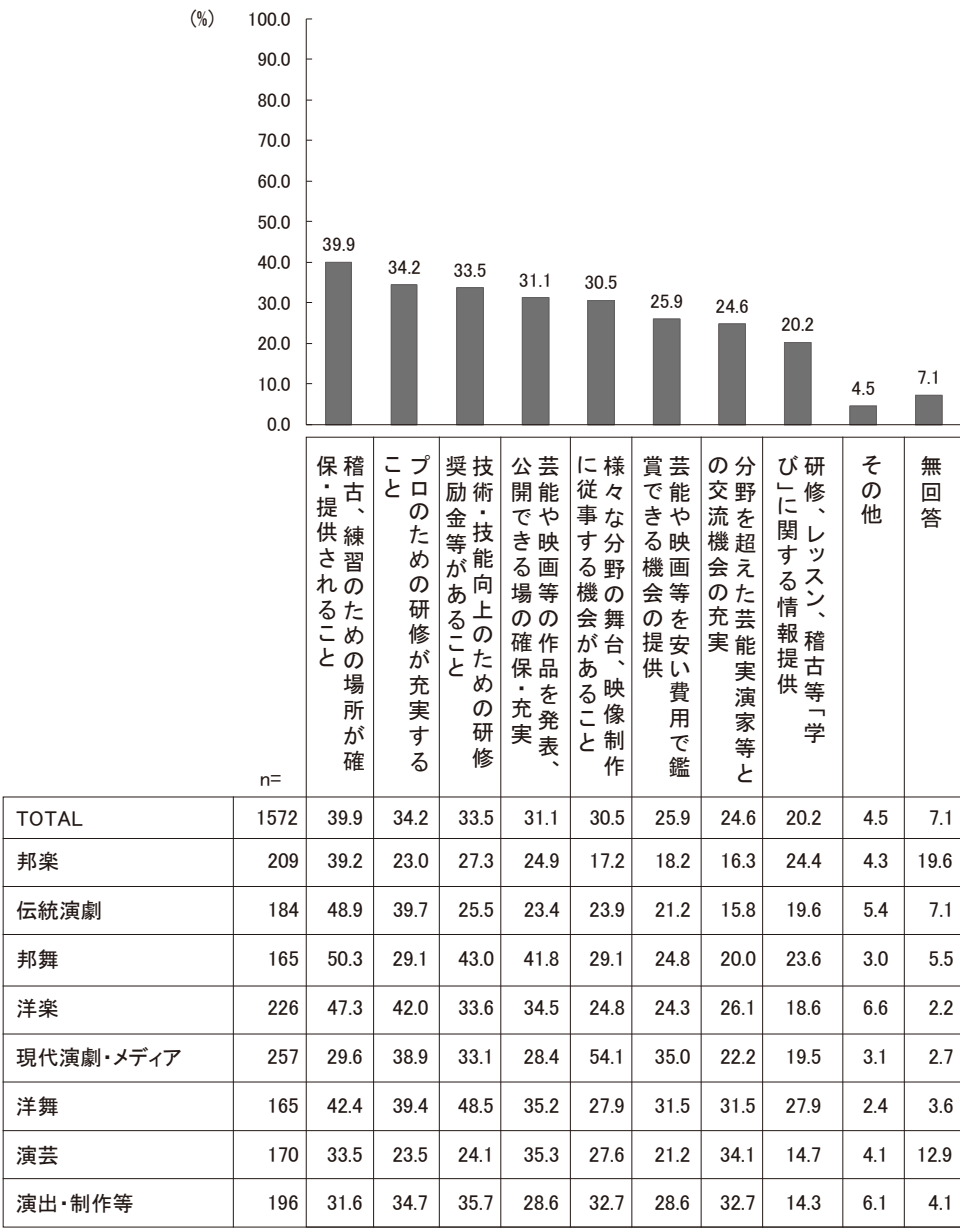
●D-2 技術・技能を向上させるための必要条件(3LA)

技術・技能を向上させるための必要条件として特に必要と思う選択肢を3つまで選ぶ設問では、最も多かったのが「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」(39.9%)、次いで「プロのための研修が充実すること」(34.2%)「技術・技能向上のための研修奨励金等があること」(33.5%)となっています。第9回調査と比較すると、「プロのための研修が充実すること」が3.8ポイント上

がって5位から2位に浮上しています。

ジャンル別にみると、「稽古・練習のための場所が確保・提供されること」を選択しているのは「邦舞」(50.3%)、「伝統演劇」(48.9%)、「洋楽」(47.3%)で高くなっています。「プロのための研修が充実すること」は、「洋楽」(42.0%)、「伝統演劇」(39.7%)、「洋舞」(39.4%)で高くなっています。

問D-2 技術・技能を向上させるための必要条件(3LA)



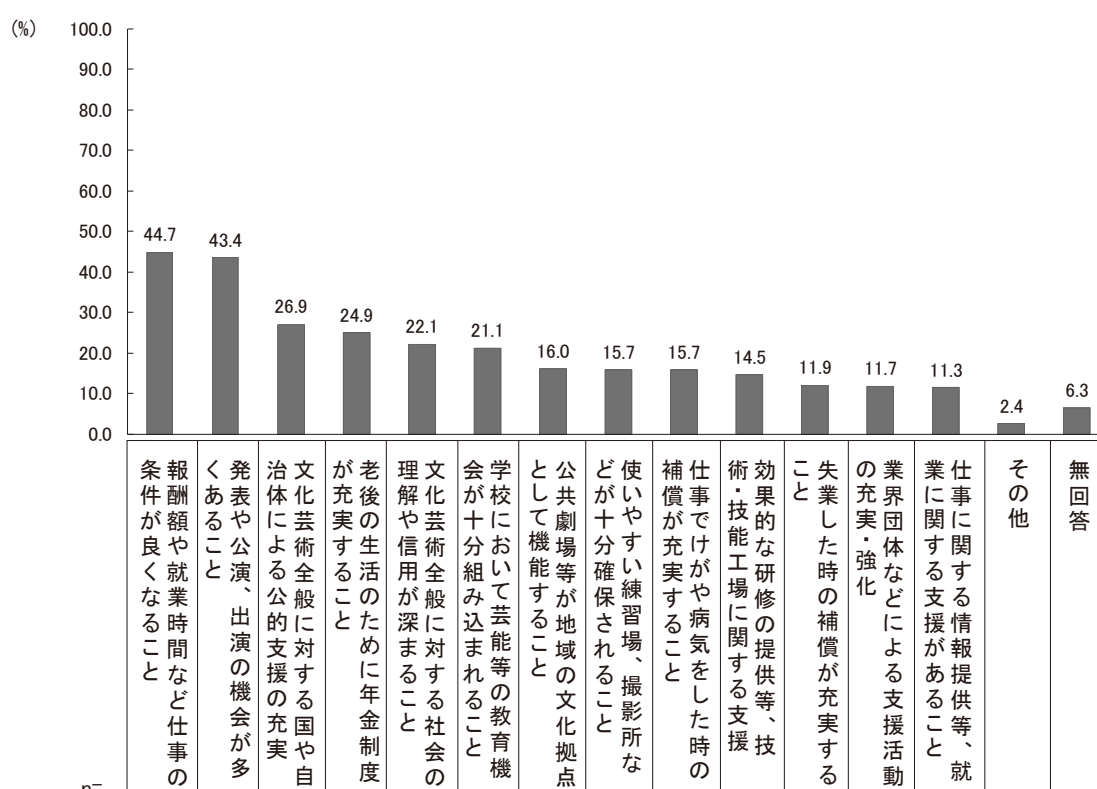
●D-3 安心して活動していくための必要条件(3LA)

安心して活動していくための必要条件として3つまで選択肢から選ぶ設問では、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」が44.7%、「発表や公演、出演の機会が多くあること」が43.4%、「文化芸術全般に対する国や自治体による公的支援の充実」が26.9%となっています。第9回調査と比較すると、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」が6.0ポイント上がっ

て、2位から1位になっています。

ジャンル別では、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」が「洋楽」(62.4%)、「演出・制作等」(58.2%)で高く、「発表や公演、出演の機会が多くあること」は「演芸」(69.4%)、「現代演劇・メディア」(52.9%)、「伝統演劇」(50.5%)で高くなっています。

問D-3 安心して活動していくための必要条件(3LA)



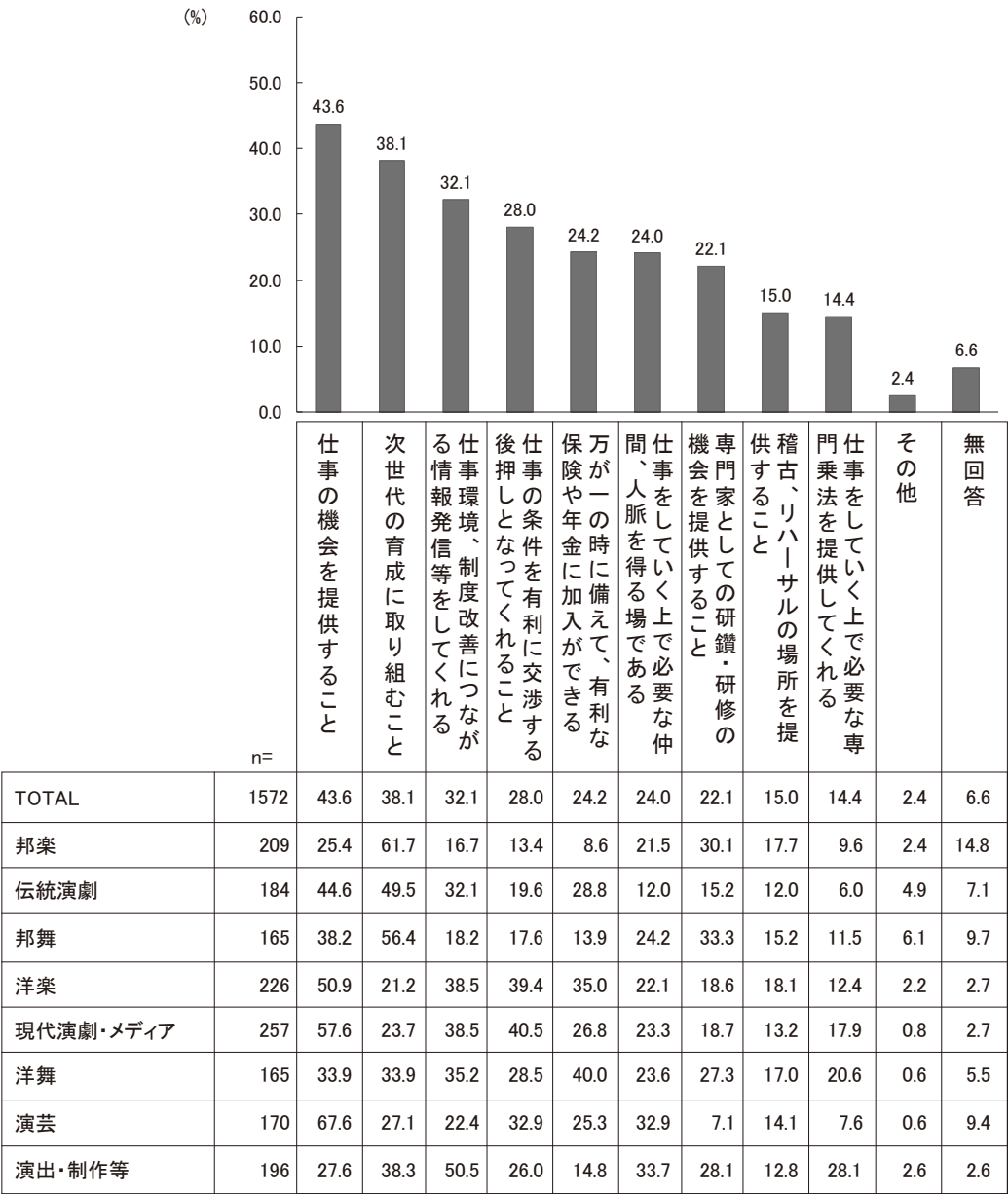
	n=	報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること	発表や公演、出演の機会が多くあること	文化芸術全般に対する国や自治体による公的支援の充実	老後の生活のために年金制度が充実すること	文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること	文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること	学校において芸能等の教育機会が十分組み込まれること	公共劇場等が地域の文化拠点として機能すること	使いやすい練習場、撮影所などが十分確保されること	補償が充実すること	効果的な研修の提供等、技術・技能工場に関する支援	失業した時の補償が充実すること	業界団体などによる支援活動の充実・強化	仕事に関する情報提供等、就業に関する支援があること	その他	無回答
TOTAL	1572	44.7	43.4	26.9	24.9	22.1	21.1	16.0	15.7	15.7	14.5	11.9	11.7	11.3	2.4	6.3	
邦楽	209	17.7	40.2	23.0	19.6	19.1	26.8	18.7	15.3	10.5	16.7	6.7	11.5	8.1	1.4	19.1	
伝統演劇	184	45.1	50.5	22.8	26.6	22.3	27.7	11.4	14.7	18.5	9.2	13.6	9.8	4.9	7.6	5.4	
邦舞	165	31.5	38.8	37.6	20.0	18.2	34.5	19.4	20.0	12.1	21.2	4.8	12.1	9.7	2.4	9.7	
洋楽	226	62.4	41.6	23.5	29.2	22.6	13.3	18.1	21.7	18.1	8.8	17.7	11.9	9.7	1.8	1.8	
現代演劇・メディア	257	51.4	52.9	21.8	23.0	25.7	21.0	8.2	9.7	13.6	24.1	11.7	10.1	14.0	1.6	1.9	
洋舞	165	41.8	40.0	30.9	31.5	22.4	8.5	20.0	18.8	28.5	20.6	14.5	12.1	14.5	1.8	3.6	
演芸	170	43.5	69.4	18.8	27.1	12.9	12.4	8.8	11.2	18.2	5.9	12.4	12.4	15.3	1.8	8.8	
演出・制作等	196	58.2	13.8	40.3	23.0	30.6	24.5	25.5	15.8	8.7	7.7	12.8	14.3	14.3	1.5	1.5	

●D-4 協会、連盟、協議会などの統括団体に期待すること(3LA)

それぞれの分野の協会、連盟、協議会などの統括団体に、どのような役割を期待しているか、選択肢の中から3つまで選ぶ設問で、「仕事の機会を提供すること」が43.6%、「次世代の育成に取り組むこと」が38.1%、「仕事環境、制度改善につながる情報発信等をしてくれる」が32.1%の順となっています。

ジャンル別にみると、「演芸」は「仕事の機会を提供すること」が67.6%、「邦楽」は「次世代の育成に取り組むこと」が61.7%、「現代演劇・メディア」は「仕事の条件を有利に交渉する後押しとなってくれること」が40.5%と高くなっています。

問 D-4 協会、連盟、協議会などの統括団体に期待すること (3LA)



第 2 部

スタッフ 編

I. 調査集計結果の概観

以下に示すのはコンサートや舞台、映画や放送など、実演芸術を支えるプロフェッショナルとして、職能団体に所属するスタッフの仕事の状況に関する調査集計結果です。

調査対象のスタッフはスタッフ会社や劇場・ホールなどに雇用されている人のほか、フリーランスや自らスタッフ会社を経営する個人事業主も多く、作品ごと、現場ごとに移動しながら仕事をしています。就労の形態も様々で、仕事の依頼主も多様なので、労働環境の整備を一様に進めることは難しい状況にあります。それでも、日々の技術革新にアンテナを張り、創造性と安全性を同時に実現するために、誇りをもって仕事に臨んでいます。

この調査は職能団体に所属している範囲内ではありますが、実演芸術に関わるスタッフの状況がここに浮かび上がります。

■ 回答者の属性分析から

第10回実態調査の対象となったスタッフ回答者の平均年齢は55.1歳。第9回の平均年齢と同じでした。

男女の構成比は、全体では男性が8割以上です。第9回調査に比べると女性の比率はすべてのジャンルで下がっています。

この回答結果には、調査対象となる母体の協会・連盟・協議会等の職能団体の所属員の構成が反映されてい

る可能性があります。アンケートと並行して実施したヒアリング調査では、実際の現場には20代、30代の若手、そして女性スタッフが、映像系、ライブ系ともに大変多いという声がありました。この調査は、あくまで調査協力を得られた職能団体の所属員のみを対象としているため、実際の現場の状況とは異なる可能性があることに留意して、回答結果を見る必要があります。

■ ジャンルと仕事の内容

現在携わっている活動分野を複数回答で尋ねた設問（問A-1(a)）では、「テレビ」が最も多く（41.8%）、次いで「演劇・ミュージカル」（41.3%）ですが、「映像系」と「ライブ系」では傾向が異なるため、第9回と同様に最も比重が大きい分野の回答（問A-1(b) P.98）に基づき、「映像系」（小ジャンルは「劇場用映画」「テレビ」「映像系その他」の3つ）と「ライブ系」（小ジャンルは「演劇・ミュージカル」「コンサート」「ライブ系その他」の3つ）に分けて分析していきます。

携わっている職種（問A-2(a)）で見ると、「照明」が最も多く42.6%、次いで「ホール・劇場管理」（27.9%）が続きます。最も比重が大きいものの1つに絞っての回

答（問A-2(b)）でも、「照明」が最も多く27.6%です。「映像系」と「ライブ系」に分けて傾向を見ると、「映像系」で一番多いのは「照明」（21.7%）で、次いで「撮影」（20.7%）となっています。「ライブ系」では、「照明」（36.7%）が最も高く、次いで「舞台音響」（18.0%）となっています。

現在携わっている職務（問A-3(a)）を複数回答で問うと、最も多いのは「技術・担当部門の責任者」（56.3%）で、次いで「オペレーター」（38.5%）、「デザイナー・プランナー」（36.1%）です。最も比重が大きいものの1つ（問A-3(b)）に絞っても、1位、2位の順位は変わりません。

■ スタッフのキャリア形成

スタッフとして報酬を得るようになってからの年数（問A-4）の全体平均は32.7年でした。「映像系」（31.9年）は、「ライブ系」（33.3年）よりも平均年数が短くなっています。

現在の活動分野の技術・技能をどのように身につけたか（問A-5(a)）を複数回答で問うと、「舞台技術会

社や劇団、撮影所、製作プロダクションなどに入って技能を身につけた」が52.2%、次いで「フリー契約やアルバイトなど現場の経験を経ながら身につけた」が49.7%、「専門学校・教室・養成所などで教育を受けた」が34.7%でした。

しかし、最も比重が大きいもの（問A-5(b)）に絞っ

た回答では、「舞台技術会社や劇団、撮影所、製作プロダクションなどに入って技能を身につけた」が44.3%、「フリー契約やアルバイトなど現場の経験を経ながら身につけた」が31.4%となっており、「専門学校・教室・

養成所などで教育を受けた」(8.2%)を大きく引き離し、実務を通して技術・技能を身につけたと言う回答が圧倒的に多くなっています。

■ 教える仕事

昨年1年間に「学校等で教える」仕事に携わったスタッフの割合(問A-3(a))は21.0%で、第9回調査(24.0%)、第8回調査(22.5%)を下回りました。

どのような機関で教えているかの設問(複数回答)で

は、「大学・大学院」が44.2%と最も高く、次いで「専門学校」(31.2%)、「養成機関」(22.1%)の順です。(問A-3(c))

*単純集計結果はP.155～168に示されています。

経済状況・景況感について

■ 仕事の状況、景況感

昨年1年間に行った仕事は、「演芸・ミュージカル」が33.9%と最も高く、次いで「テレビ」が32.0%、「劇場用映画」が29.5%となっています。第9回調査と比較すると、「オペラ」(第9回:21.9%、第10回:10.1%)が4.1ポイント減少しています。(問B-1(a) P.101)

これを仕事の本数で見ると、昨年1年間に行った仕事の本数で平均本数が最も多いのは「テレビ」で27.7本、

最も少ないのは「オペラ」で2.3本です。第9回調査と比べると、「P.R・教育・記録映画」(第9回:8.9本、第10回:17.3本)は平均本数が増えており、「アニメ」(第9回:35.2本、第10回:3.5本)は大幅に減っています。(問B-1(b) P.102)

2～3年前と比べて仕事の増減を問う設問では、「ビデオ・DVD」「CM」で「大幅に減った」「やや減った」と感じる人の割合が5割程度と高くなっています。(問B-2 P.105)

■ 収入と必要経費の負担

【収入】

昨年1年間の個人収入は、「100万円未満」から「400～500万円未満」までの所得層が全体の4割以上を占め、なかでも「400～500万円未満」が最も多く16.9%です。ただし、ジャンルによって最も人数の多い所得層に異同があり、「映像系その他(DVD、アニメ、CM等)」では「200～300万円未満」(15.7%)が最も高くなっています。

年代別に見てみると、「400～500万円未満」の所得層は「30～39歳」の割合が25.0%と、他の年齢層よりも高くなっています。しかし、「40～49歳」(22.1%)、「60～64歳」(19.6%)では、「300～400万円未満」が最も多くなっています。

第9回調査における個人収入の結果と比較してみると、「500～600万円未満」の所得層の割合が低くなっています(第9回:15.2%、第10回:12.6%)。一方で、「600～700万円未満」の所得層の割合が高くなっています(第9回:6.4%、第10回:9.3%)。

年齢層ごとの個人収入の平均値の推移を過去3回(第7回～第9回)の調査と比較すると、第10回調査では20代、30代の収入が最も高くなっており、40代は第9回に次いで低くなっています。(問B-3(a) P.108,109)

活動別収入の割合では、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」が61.4%と最も高く、次いで「舞台、映画、放送に関するその他の仕事」が13.5%となっています。(問B-4 P.111)

【個人負担の必要経費】

昨年1年間に実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費については、「所得控除の対象になった必要経費はない」が32.5%を占めますが、必要経費を負担している場合、総収入に占める割合は、「20%未満」が13.1%、「30%～40%未満」が12.0%、「20%～30%未満」が8.7%となっています。(問B-3(b) P.110)

ジャンル別に見ると、「所得控除の対象になった必要経費はない」は、「ライブ系」の48.0%に対して「映像系」が19.6%で、「ライブ系」の方が高くなっています。

労働環境について

■ 雇用形態と契約形態

雇用形態は、全体では「フリーランス」が最も高く41.0%、次いで「正社員・正職員」が31.1%となっています。（問 B-5 (a) P.116）

しかし、ジャンル別で見ると、「映像系」と「ライブ系」では構成が異なります。「映像系」は60.3%が「フリーランス」で、特に「劇場用映画」は71.4%、「映像系その他（DVD、アニメ、CM等）」は70.6%となっています。一方で、「ライブ系」では、「正社員・正職員」が42.0%で、「フリーランス」は20.0%となっています。

【契約社員、フリーランスの仕事の請け方】

「フリーランス」「契約社員」の場合の契約形態は、全体では「作品契約」の割合が52.5%で最も高くなっています。

ジャンル別に見ると、「映像系」では「作品契約」が63.9%と高く、特に「劇場用映画」は73.2%、「映像系その他（DVD、アニメ、CM等）」は67.5%です。一方「ライブ系」では、「作品契約」が30.4%、「年契約」が26.1%、「1日単位」が30.4%となっています。特に「コンサート」は「1日単位」（66.7%）が最も高くなっています。（問 B-5 (b) P.117）

また、昨年1年間で仕事をする意思があっても仕事が入らずスケジュールが空いた合計日数（問 B-5 (c)）の平均値は105.4日となっています。ジャンル別に見ると、「映像系」は平均108.5日、「ライブ系」は平均104.8日ですが、「コンサート」では平均135.7日と最も長くなっています。これは、「コンサート」が「1日単位」の契約形態が多いためと推測されます。（問 B-5 (c) P.118）

■ 仕事上でのケガや病気の治療費負担

昨年1年間に医師の治療が必要となった仕事上の傷害（ケガ）を経験した割合は、7.1%です。「映像系」（6.5%）、「ライブ系」（6.7%）で特に大きな違いは見られません。（問 C-3 (a) P.119）

仕事上の傷害（ケガ）を「経験した」と回答した26人の治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が最も高く42.3%、次いで「労災保険が適用された」が34.6%、「所属している集団、仕事の依頼主等が負担した」は11.5%です。（問 C-4 P.121）

昨年1年間に仕事の原因と思われる病気・症状などを経験した割合は12.6%です。この割合は、「映像系」（12.0%）、「ライブ系」（13.3%）で大きな違いは見られません。（問 C-3 (b) P.120）

仕事の原因と思われる病気・症状などを「経験した」と回答した46人の治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が最も高く84.8%、「自分が加入している傷害保険などの給付があった」は13.0%となっています。（問 C-5P .122）

■ 仕事上の問題点

仕事上の問題点を複数回答で問う設問では、「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」が49.2%と最も高く、「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」が46.7%、「時間的な余裕がない中での仕事を強いられる」が42.9%と続いています。（問 C-1 P.135）

ジャンル別に見ると、「映像系」では「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」が60.3%と最も高く、「ライブ系」では「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」

（50.0%）、「時間的な余裕がない中での仕事を強いられる」（46.0%）が高くなっています。また、「報酬その他についての交渉力が弱い」「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」「仕事が単発で継続して仕事がない」「仕事のキャンセルがよくある」などは、問題と感じている割合が「ライブ系」に比べて「映像系」で高くなっています。

■ 働き方改革の影響

「働き方改革」による仕事環境の変化についての設問では、「(a) 長時間にわたって仕事をする日が減った」は、「あまりそうは思わない」「そうは思わない」が6割強を占めており、ジャンル別では「劇場用映画」(76.7%)で特に高くなっています。

「(b) 休みがとりやすくなった」についても、「あまりそうは思わない」「そうは思わない」が6割強を占め、ジャンル別では「劇場用映画」(79.3%)で高くなっています。

「(c) かえって忙しくなった」は、「そう思う」「まあそう思う」の割合が約3割あり、これをジャンル別で見ると、「映像系」(24.5)よりも「ライブ系」(32.0%)で割合が高くなっています。

「(d) 働き方改革の影響はない」は、「そう思う」「まあそう思う」が49.2%で、ジャンル別で見ると特に「劇場用映画」では67.6%と高くなっています。(問 B-7 (a) P.133、134)

しかしヒアリングを通じて、現場では、「正社員・正職員」の労働時間に対する動きは徐々に出てきていると感じている人もおり、今後、働き方改革のしわ寄せがフリーランスの仕事の仕方に影響が出てくるのではないという懸念の声もありました。雇用形態が、「映像系」は「正社員・正職員」が約2割で「フリーランス」が約6割、「ライブ系」は「正社員・正職員」が約4割で「フリーランス」が約2割であることを踏まえると、ジャンルによって働き方改革の影響の出方が違ってくる可能性もあります。天候をはじめ様々な影響を受け得る生の芸術を扱う分野であり、多様な雇用形態の人たちが混在する中で、働き方の足並みを一律にそろえることは難しいという現実があります。それでも、素晴らしい作品を生み出し続けるためには、少なからず働き方、創造の仕方を見直すべき時機にあるのかもしれません。今後も就労環境については注視が必要です。

■ 10年後も仕事を続けているために

「10年後も仕事を続けていると思いますか」という設問では、「はい」「いいえ」がそれぞれ約5割ずつとなっています。ジャンル別に見ると、「映像系」では「はい」が56.0%であるのに対し、「ライブ系」では39.3%です。年代別では、「はい」の割合が「30～39歳」では約8割であるのに対して、「40～49歳」では67.6%となっています。(問 C-6 (a) P.123)

「いいえ」と回答した人たちの理由を最大3つあげる設問では、最も多かったのは「年齢的に現役でなくなると思うから」(83.6%)で、次いで「体力的に続けられないと思うから」(53.6%)、「自分にくる仕事が減っているから」(27.3%)となっています。

その理由を年代別に見ると、「年齢的に現役でなくなると思うから」は、年齢が上がるにつれて高くなっています。また、「40～49歳」では、「体力的に続けられないと思うから」「所属先の事業の先行きが不透明だから」がいずれも55.6%と高くなっており、厳しい状況にあります。(問 C-6 (b) P.124)

多くのスタッフは作品や公演などがあってこそ仕事が発生するため、自分自身が主体となって仕事を作り出すことが難しい職種です。10年後も仕事を続けていけるかどうかは、実演家の活動の持続性、発展性とも密接に関係しています。

安心して仕事に取り組むために

■ 技術・技能の向上のために

技術・技能を向上させるための必要条件では、「プロのための研修が充実すること」が48.6%と最も高く、次いで「技術・技能向上のための研修奨励金等」が43.7%、「様々な分野の舞台、映画製作に従事する機会があること」が42.1%となっています。キャリア形成について、実務を通して技術・技能を身につけたと言う回答が圧倒的に多かったこととも関連して、技能の習得・向上のためには現場経験と研鑽の機会が重要であるという意識が読み取れます。(問 D-2 P.136)

一方、ヒアリング調査では、技術革新のスピードが速いため、自分で機材を持たないフリーランスは技術習得、技能向上の面でリスクを抱えているとの指摘もありました。その点においては、会社などに所属している方が最新機材に触れる経験や研修機会が与えられるメリットがあるようです。仕事として継続していく中で、雇用形態に関わらず、いかにして技術の習得および技能向上の機会を作り出せるかが課題だと言えます。

■ 安心して活動していくために

安心して活動していくための必要条件は、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」が約7割を占め、次いで、「老後の生活のために年金制度が充実すること」(29.0%)、「文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること」(28.4%)となっています。仕事上でのケガや病気・症状の治療費も依然として自己負担である割合が高く、「仕事の条件が良くなること」にはこうした面の待遇改善も望まれていると考えられます。(問 D-3 P.137)

また、協会・連盟・協議会などの統括団体への期待では、「仕事環境、制度の改善につながるような情報発信、

政策提言をしてくれること」(46.7%)、「次世代の育成に取り組むこと」(44.0%)、「仕事をしていく上で必要な専門情報を提供してくれること」(37.4%)を求める回答が多くなっています。自分の能力を発揮し、プライドを持って仕事に挑んでいても、仕事環境の改善や人材育成に個人で取り組むには限界があります。雇用形態にとらわれず所属することができる統括団体には、専門人材同士の情報共有の場となり、継続して仕事を続けていくための保障などの環境整備を推進する役割が求められています。(問 D-4 P.138)

Ⅱ. 調査設計・調査回答者について

■ 調査設計

調査対象者は、第9回と同様に芸団協加盟の技術スタッフ関連の協会および、映像関係職能団体に協力を依頼し、それぞれに所属の個人に調査票を送付しました。

	第10回（スタッフ部門）
調査地域	全国
調査対象	日本芸能実演家団体協議会加盟団体および 映像関係職能団体7団体に所属する個人 **
調査手法	郵送法（一部団体発送）
標本抽出	団体名簿による割り当て法 ***
発送数	1,596
有効回収数	366
有効回収率	23.0%
調査期間	2019年8月10日～9月2日
調査実施機関	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
調査協力機関	株式会社インテージリサーチ

* * 映像関係職能団体は8団体あるが、シナリオ作家協会は現場スタッフではないので対象外

* * * スタッフ編は、発送時にジャンルによる分類を行っていない

< 参考 > 第9回調査設計

	第9回（スタッフ部門）
調査地域	全国
調査対象	日本芸能実演家団体協議会加盟団体および 映像関係職能団体7団体に所属する個人 **
調査手法	郵送法（一部団体発送）
標本抽出	団体名簿による割り当て法 ***
発送数	1,440
有効回収数	329
有効回収率	22.8%
調査期間	2014年8月1日～8月31日
調査実施機関	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
調査協力機関	株式会社インテージリサーチ

■ 調査対象について

これまでの調査方法を踏まえ、無作為に抽出された実演家、スタッフを調査対象としています。スタッフ編は、芸団協正会員団体である技術スタッフ関連の協会（4団体）、および映像関係職能団体（7団体）に協力を依頼しました。映像関係職能団体は8団体ありますが、協同組合日本シナリオ作家協会は、現場スタッフではないため対象外としています。また、スタッフについては、アンケート発送時にジャンルによる分類はしていません。（協力団体一覧はP.155を参照のこと）

対象となったスタッフ協会・団体所属の総人数は、第9回と比べて全体で600人以上の減少がありました。過

去の回収率を参考に、必要なサンプル数を得られるよう抽出数を割り出し、アンケート発送を行いました。この母体となる対象者の減少も気に掛かります。

また、回答者の性別、年齢層は、各協会・団体の所属員の構成が反映されている可能性が高いと考えます。ヒアリングでは、現場には20代、30代の若手、そして女性スタッフが、映像系、ライブ系ともに大変多いという声がありました。この調査はあくまで協会・団体所属員のみを対象としているため、実際の現場の状況とは異なる場合があることに留意して、回答結果を見ていく必要があります。

■ 回答者のジャンル構成比について

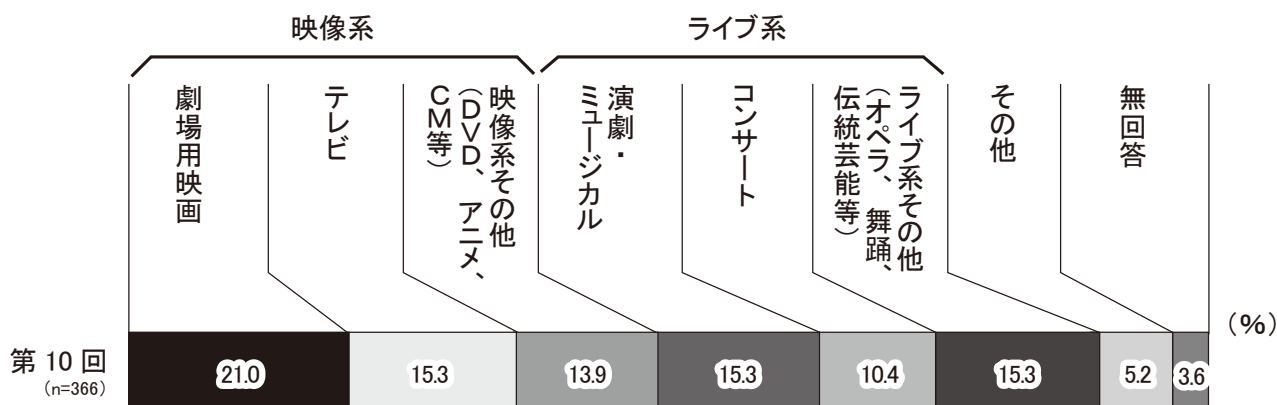
問A-1（b）「たずさわっている仕事の分野のうち最も比重の大きいもの」の回答結果をもとに、下記のように映像系（3ジャンル）、ライブ系（3ジャンル）の計6ジャンルに分類しています。映像系が50.3%、ライブ系が41.0%となりました。

最も多いジャンルは、「劇場用映画」（21.0%）、次い

で「テレビ」「演劇・ミュージカル」「ライブ系その他（オペラ、舞踊、伝統芸能等）」（15.3%）となっています。

第9回調査と比べると、「劇場用映画」が1.2ポイント、「映像系その他（DVD、アニメ、CM等）」が1.1ポイント、回答者の割合が高くなっています。

問A-1 「たずさわっている仕事の分野のうち最も比重の大きいもの」



<参考> 第9回 ジャンル別回収率



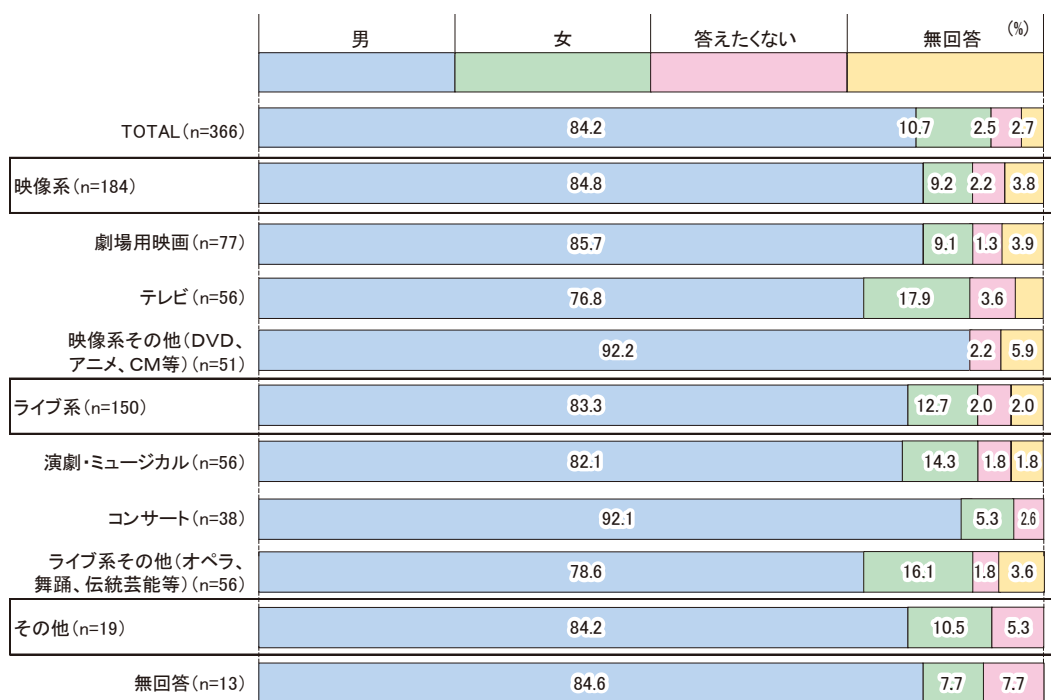
■ E-1 性別

男女の構成比は、「男性」が84.2%、「女性」が10.7%、「答えたくない」が2.5%で、男性が8割を占めています。

第9回調査と比較すると、「演劇・ミュージカル」で7.1ポイント、「テレビ」で5.6ポイント、「ライブ系その他（オ

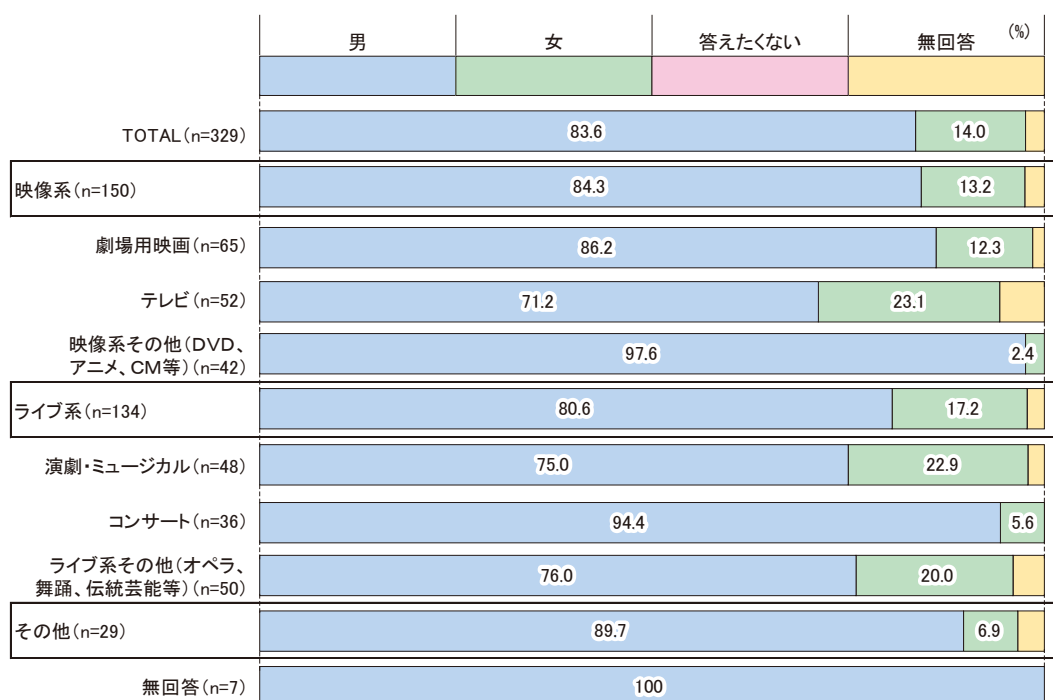
ペラ、舞踊、伝統芸能等）」で2.6ポイント「男性」の割合が増えています。一方で、「女性」は全てのジャンルで減少しています。

問 E-1 性別



※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

<参考> 第9回調査結果



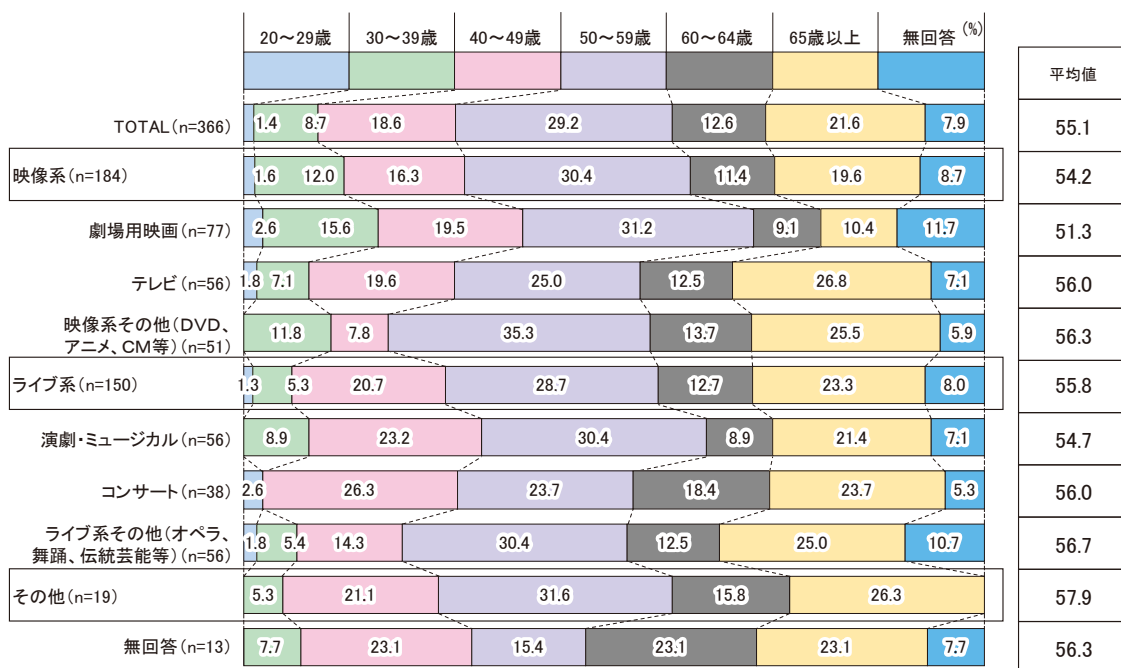
※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

■ E-1 年齢

第10回調査の平均年齢は55.1歳で、最も多い年齢層は「50～59歳」(29.2%)です。

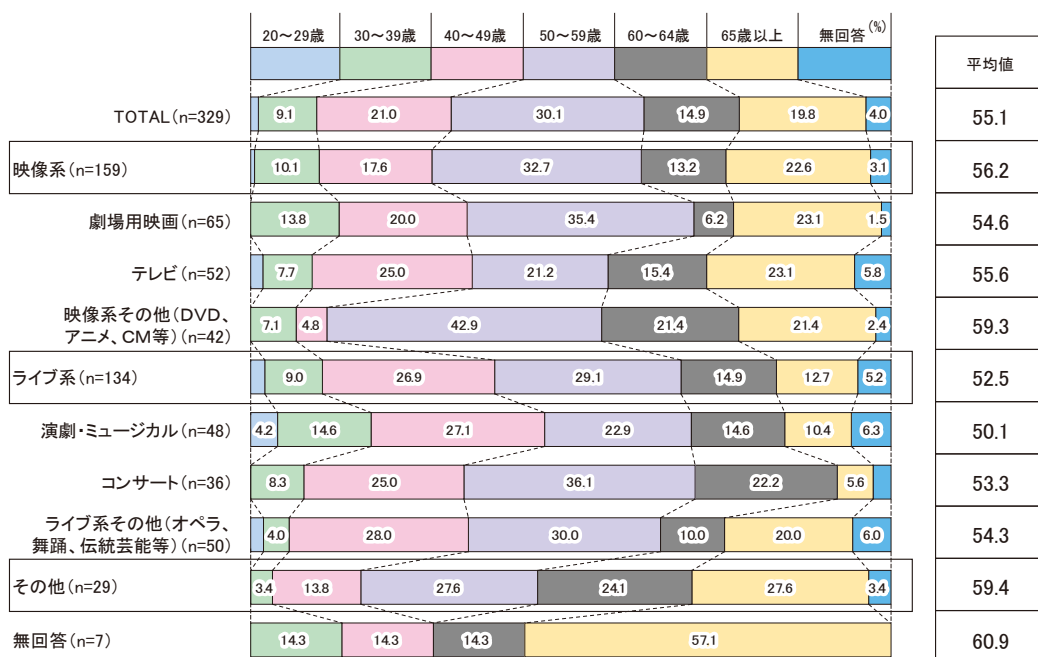
第9回調査結果と比べると、平均年齢は変わらず、「65歳以上」で1.8ポイント高くなっています。

問 E-1 年齢



※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

< 参考 > 第9回調査結果



※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

Ⅲ. 分析結果詳細

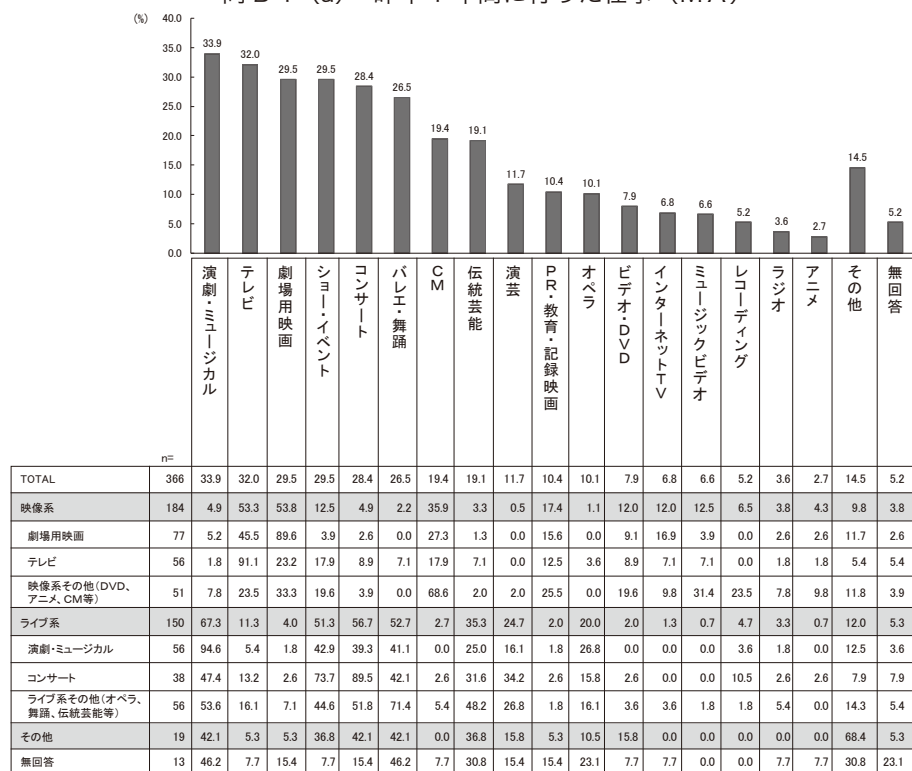
(1) 経済状況・景況感について

● B-1 (a) 昨年1年間に行った仕事 (MA)

昨年1年間に行った仕事は、「演芸・ミュージカル」が33.9%と最も高く、次いで「テレビ」が32.0%、「劇場用映画」が29.5%となっています。

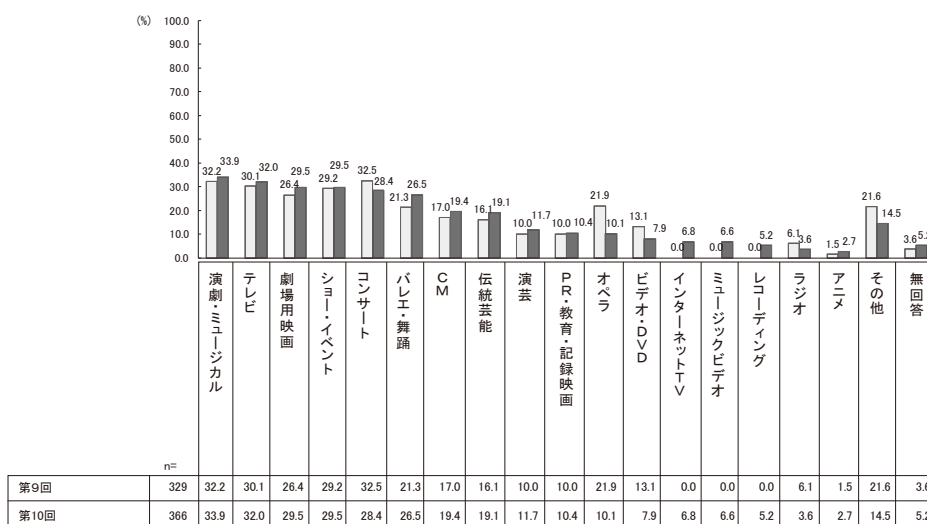
第9回調査と比較すると、「オペラ」(第9回:21.9%、第10回:10.1%)が4.1ポイント減少しています。

問 B-1 (a) 昨年1年間に行った仕事 (MA)



※「その他」「無回答」は、サンプル数30未満のため参考値扱いとする

<参考> 第9回調査 調査結果との比較



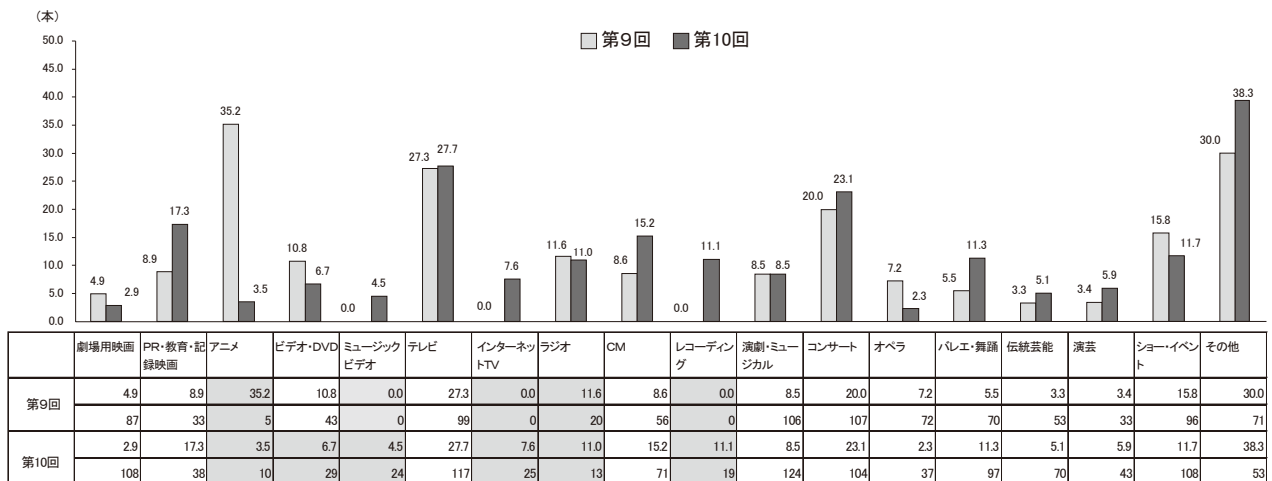
●B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数【ベース：各仕事にたずさわった人】

昨年1年間に行った仕事の本数で平均本数が最も多いものは「テレビ」で27.7本、最も少ないものは「オペラ」で2.3本です。

（第9回：8.9本、第10回：17.3本）は平均本数が増えており、「アニメ」（第9回：35.2本、第10回：3.5本）は大幅に減っています。

第9回調査結果と比べると、「PR・教育・記録映画」

問 B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数
【ベース：各仕事にたずさわった人】



上段：平均本数(本)
下段：サンプル数(人)

※サンプル数30s未満は参考値扱いとする。

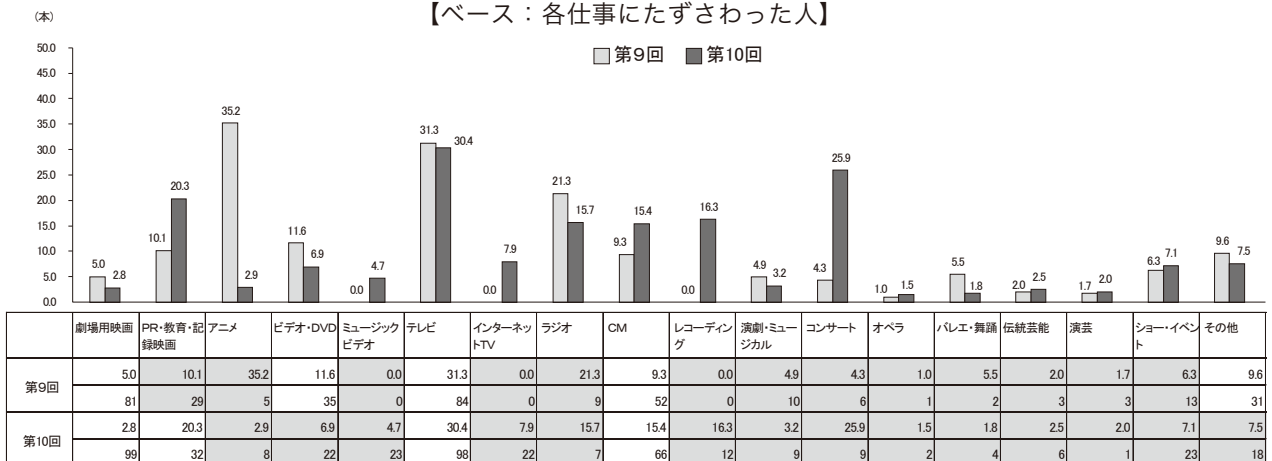
●B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数(ジャンル別：映像系) 【ベース：各仕事にたずさわった人】

映像系では、昨年1年間に行った仕事の本数で平均本数が最も多いものは「テレビ」で30.4本、最も少ないものは「劇場用映画」で2.8本です。

9回：10.1本、第10回：20.3本）は平均本数が増えており、「アニメ」（第9回：35.2本、第10回：2.9本）は減っています。

第9回調査結果と比べると、「PR・教育・記録映画」(第

問 B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数(ジャンル別：映像系)
【ベース：各仕事にたずさわった人】



上段：平均本数(本)
下段：サンプル数(人)

※サンプル数30s未満は参考値扱いとする。

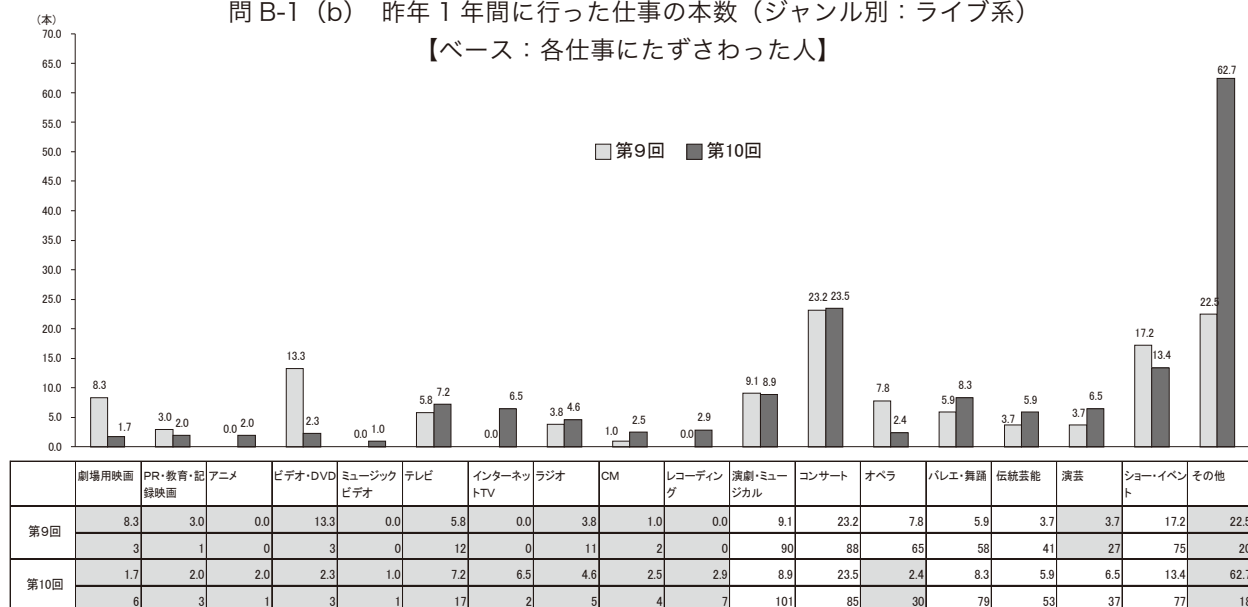
●B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数(ジャンル別:ライブ系) 【ベース:各仕事にたずさわった人】

ライブ系では、昨年1年間に行った仕事の本数で平均本数が最も多いものは「コンサート」で23.5本、最も少ないものは「オペラ」で2.4本となっています。

第9回調査結果と比べると、「演芸」(第9回:3.7本、

第10回:6.5本)は平均本数が増えていますが、「オペラ」(第9回:7.8本、第10回:2.4本)では大幅に減っています。

問B-1 (b) 昨年1年間に行った仕事の本数(ジャンル別:ライブ系)
【ベース:各仕事にたずさわった人】



上段:平均本数(本)
下段:サンプル数(人)

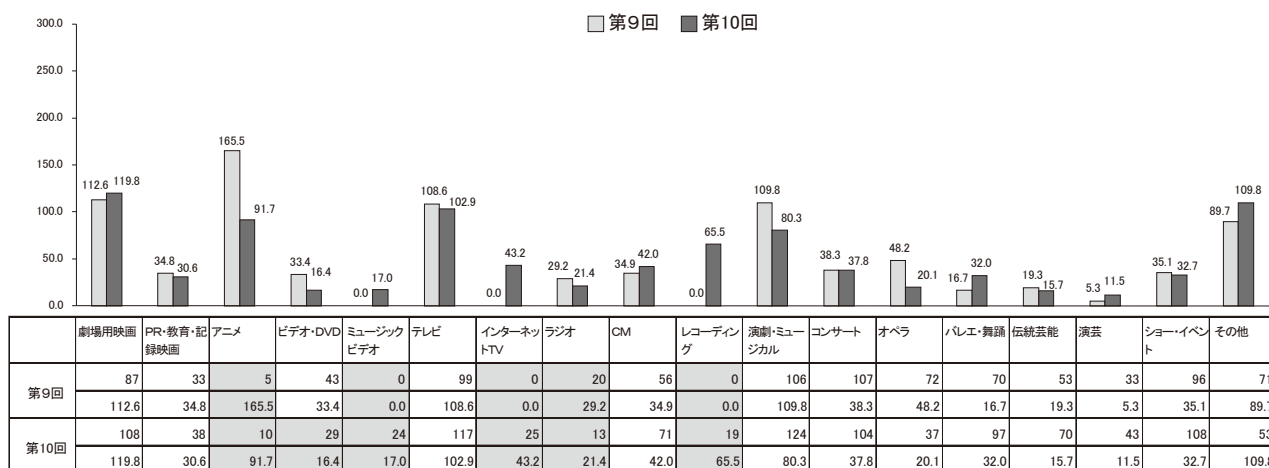
※サンプル数30s未満は参考値扱いとする。

●B-1 (c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数 【ベース:各仕事にたずさわった人】

昨年1年間に携わった仕事の日数で平均日数が最も多いものは「劇場用映画」で119.8日、最も少ないものは「演芸」で11.5日です。

第9回調査結果と比べると、「バレエ・舞踊」で平均日数が大幅に増えているのに対し、「アニメ」で減っています。

問B-1 (c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数
【ベース:各仕事にたずさわった人】



上段:平均本数(本)
下段:サンプル数(人)

※サンプル数30s未満は参考値扱いとする。

●B-1(c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数(ジャンル別:映像系)

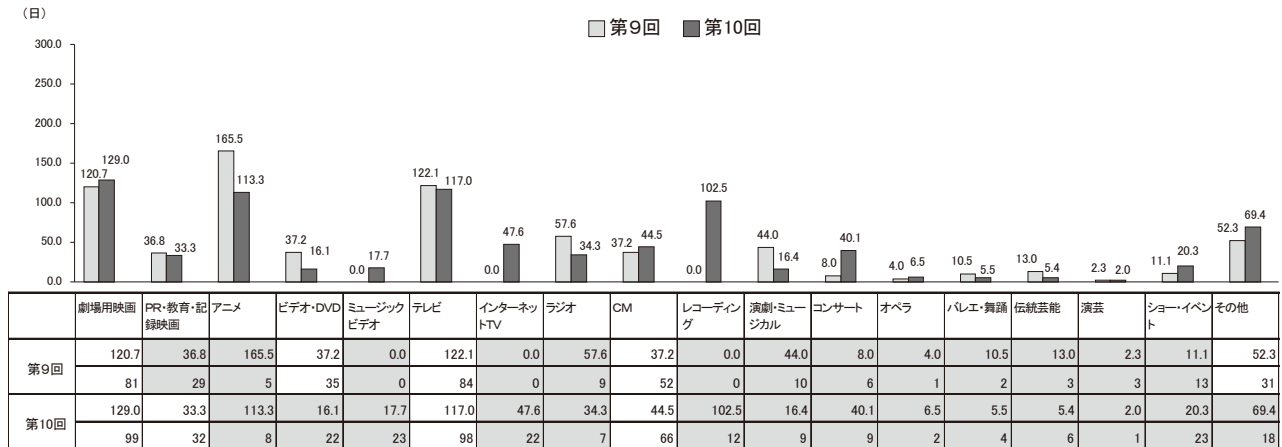
【ベース:各仕事にたずさわった人】

映像系では、昨年1年間に携わった仕事の日数で平均日数が最も多いものは「劇場用映画」で129.0日、最も少ないものは「ビデオ・DVD」で16.1日です。

第9回調査結果と比べると、「劇場用映画」「CM」で平均日数が増えていますが、「アニメ」「ラジオ」では減っています。

問 B-1(c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数(ジャンル別:映像系)

【ベース:各仕事にたずさわった人】



上段:平均本数(本)

下段:サンプル数(人)

※サンプル数30s未満は参考値扱いとする。

●B-1(c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数(ジャンル別:ライブ系)

【ベース:各仕事にたずさわった人】

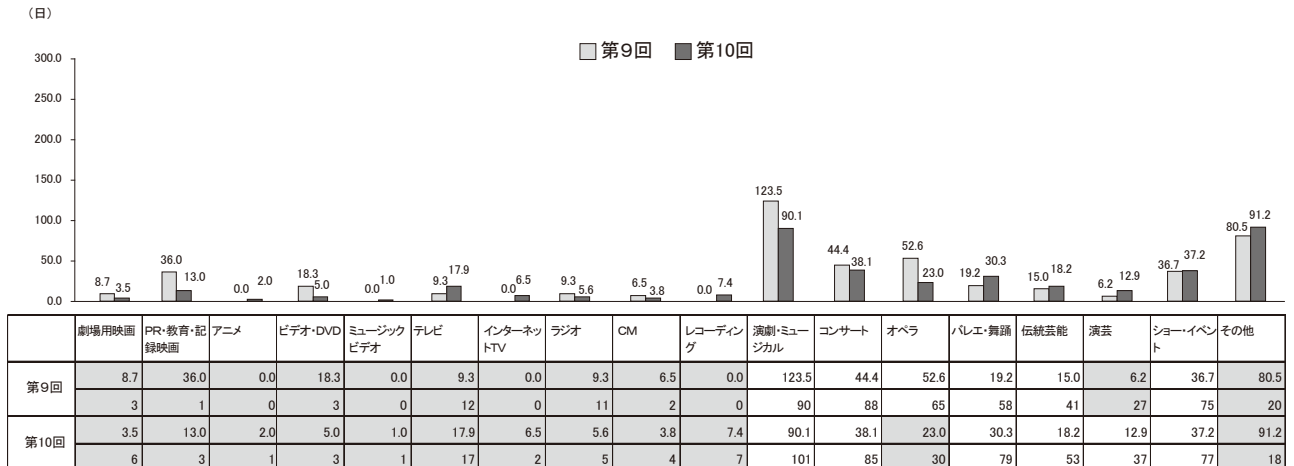
ライブ系では、昨年1年間に携わった仕事の日数で平均日数が最も多いものは「演芸・ミュージカル」で90.1日、最も少ないものは「演芸」で12.9日です。

19.2本、第10回:30.3本)と、11.1日平均日数が増えていますが、一方で、「演芸・ミュージカル」は(第9回:123.5日、第10回:90.1日)大幅に減っています。

第9回調査結果と比べると、「バレエ・舞踊」(第9回:

問 B-1(c) 昨年1年間にたずさわった仕事の日数(ジャンル別:ライブ系)

【ベース:各仕事にたずさわった人】



上段:平均本数(本)

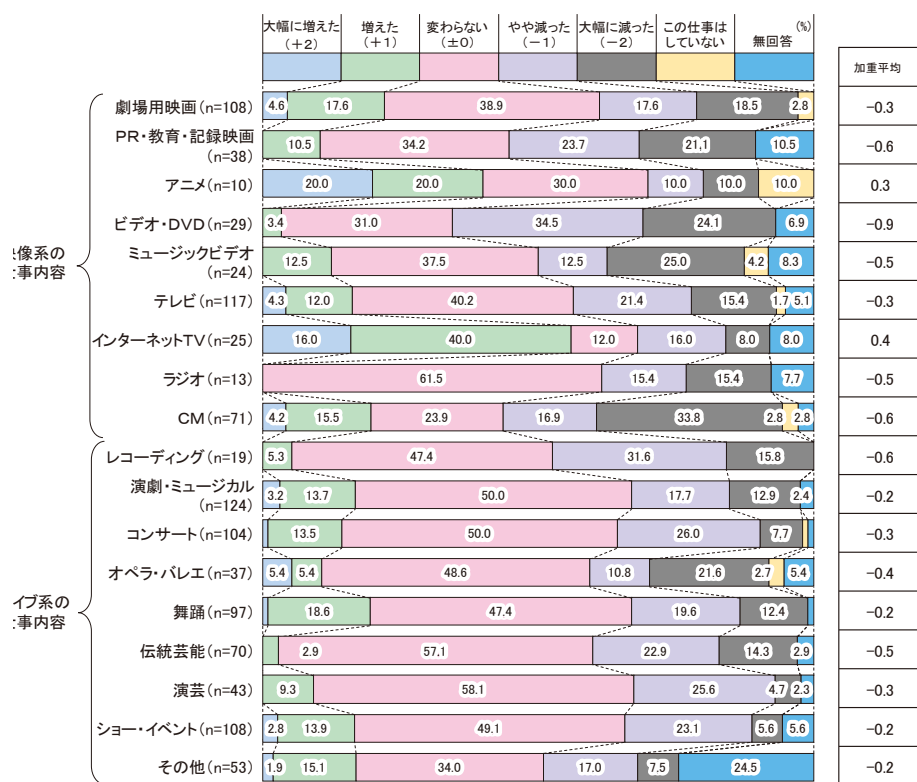
下段:サンプル数(人)

※サンプル数30s未満は参考値扱いとする。

● B-2 仕事の機会について2～3年前との比較 【ベース：各仕事にたずさわった人】

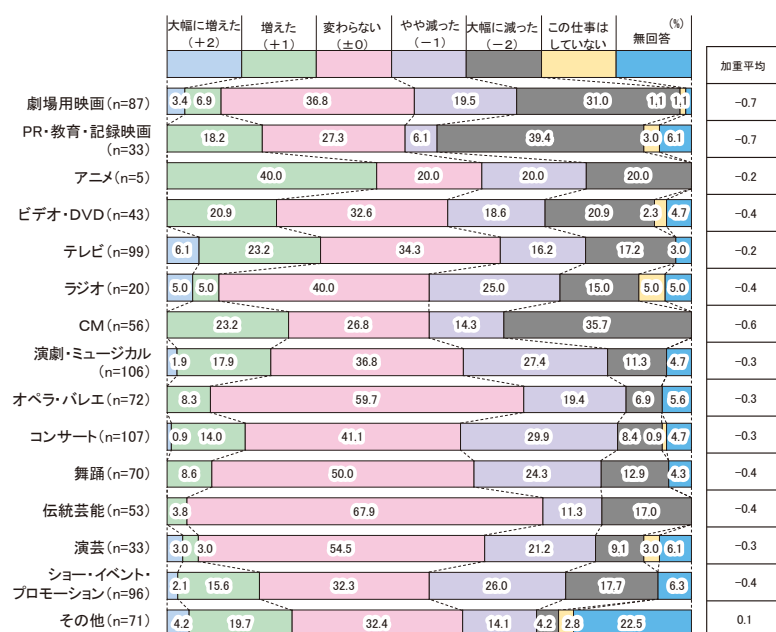
2～3年前と比べた昨年1年間の仕事の機会について M」で「大幅に減った／やや減った」が占める割合が5割程度と高くなっています。

問 B-2 仕事の機会について2～3年前との比較 【ベース：各仕事にたずさわった人】



※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

<参考>第9回調査結果



● B-2 仕事の機会について2～3年前との比較（ジャンル別：映像系）

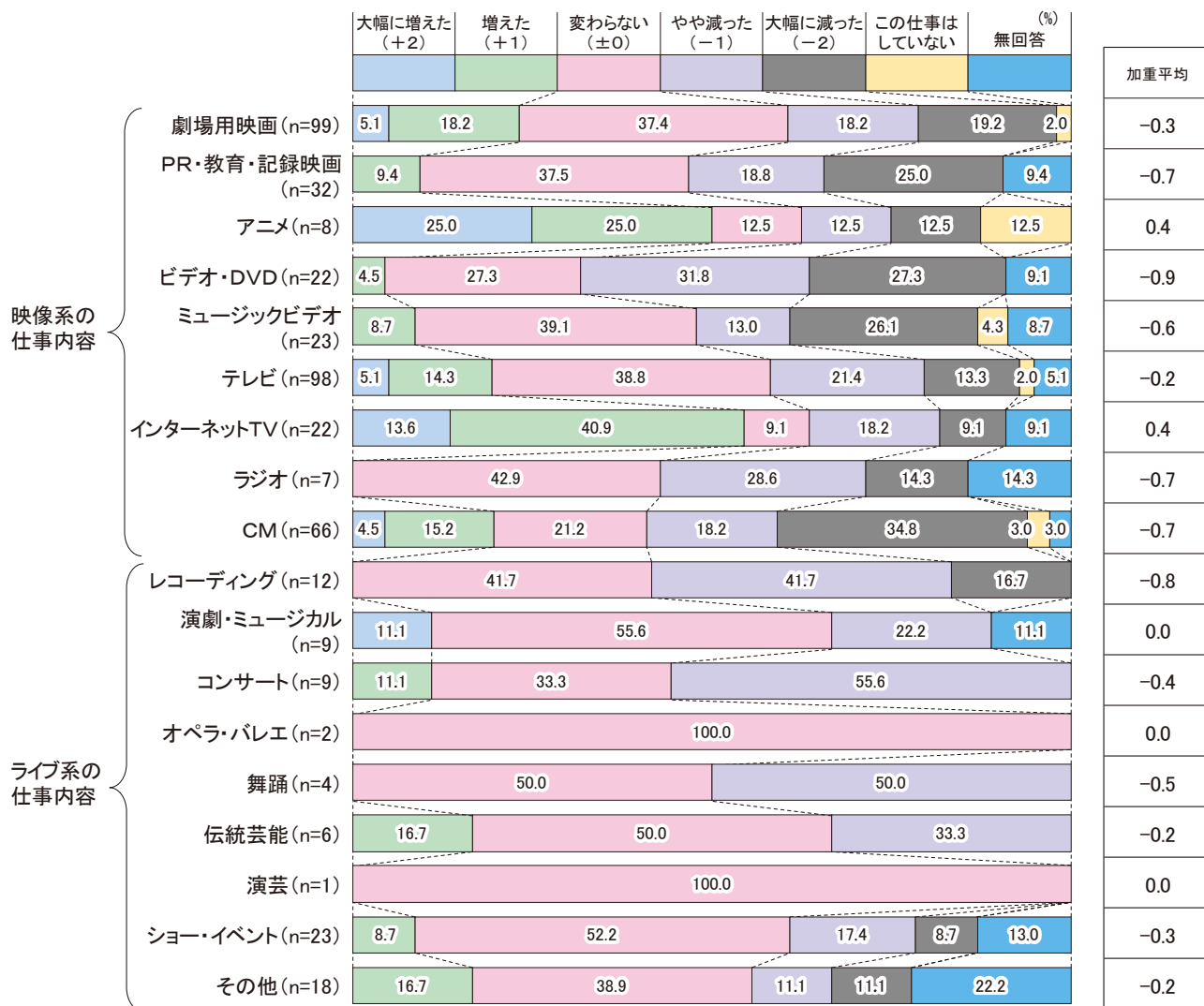
【ベース：各仕事にたずさわった人】

映像系では、2～3年前と比べた昨年1年の仕事の機会について、「変わらない」「やや減った」が比較的多くなっています。

■ 映像系

問 B-2 仕事の機会について2～3年前との比較（ジャンル別：映像系）

【ベース：各仕事にたずさわった人】



※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

● B-2 仕事の機会について2～3年前との比較（ジャンル別：ライブ系）

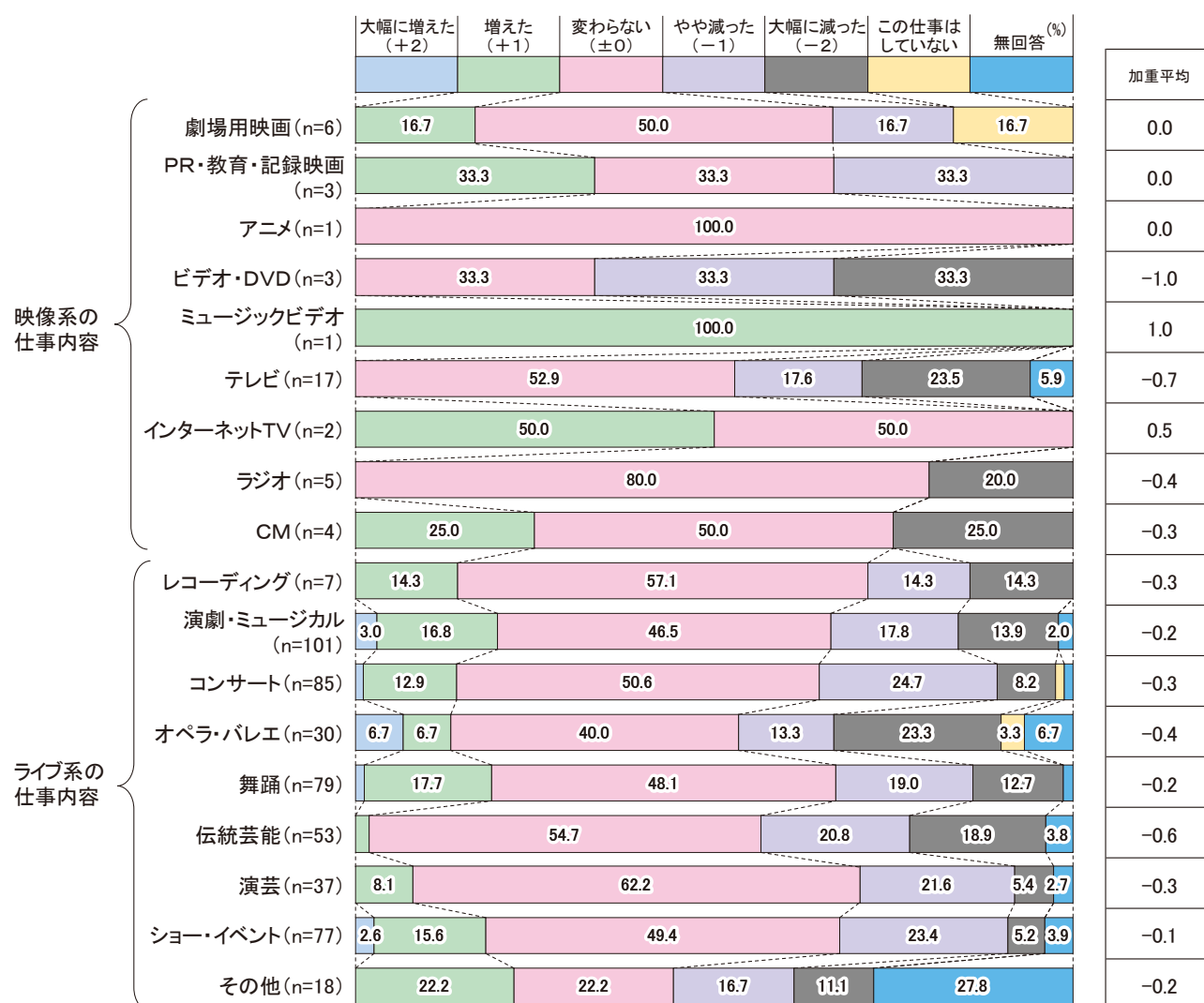
【ベース：各仕事にたずさわった人】

ライブ系では、「オペラ・バレエ」「伝統芸能」で「やや減った／大幅に減った」の割合が4割程度を占めています。

■ ライブ系

問 B-2 仕事の機会について2～3年前との比較（ジャンル別：ライブ系）

【ベース：各仕事にたずさわった人】

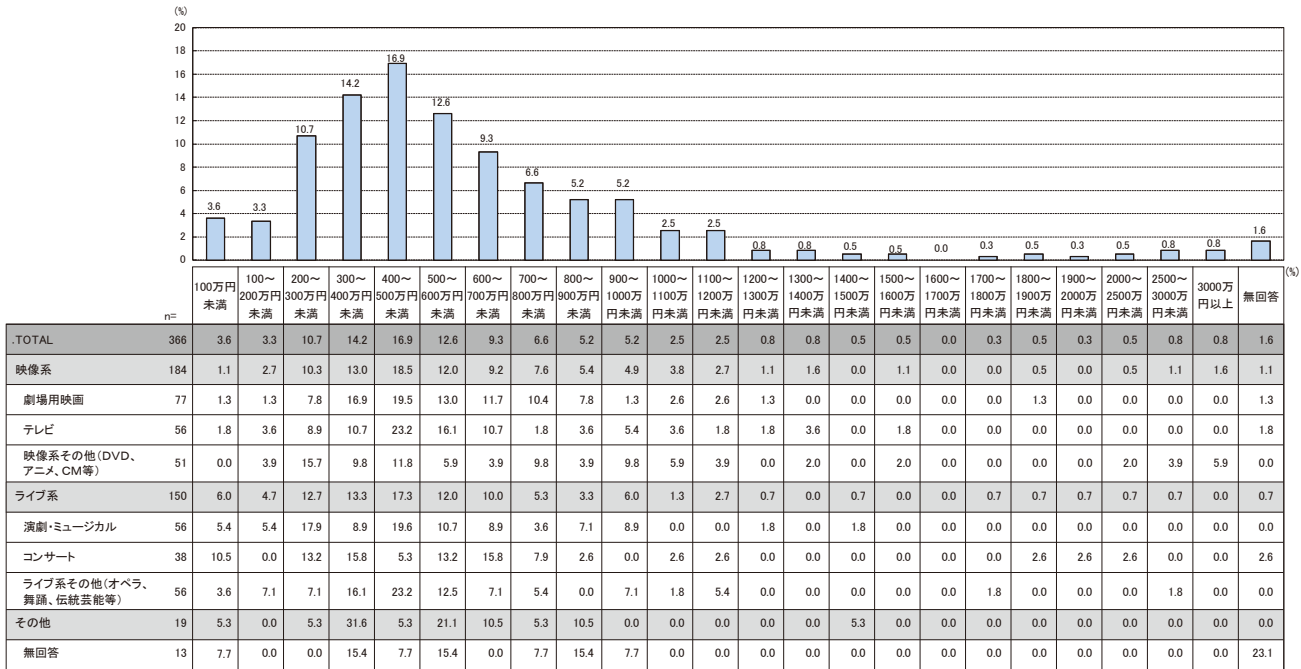


※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

● B-3 (a) 昨年 1 年間の個人収入 (ジャンル別)

昨年 1 年間の個人収入は、「100 万円未満」から「400 ～ 500 万円未満」までの所得層が全体の 4 割以上を占め、(14.2%)、「500 ～ 600 万円未満」(12.6%) の割合が高くなっています。なお、「映像系」と「ライブ系」で傾向に大きな差は見られません。

問 B-3 (a) 昨年 1 年間の個人収入 (ジャンル別)

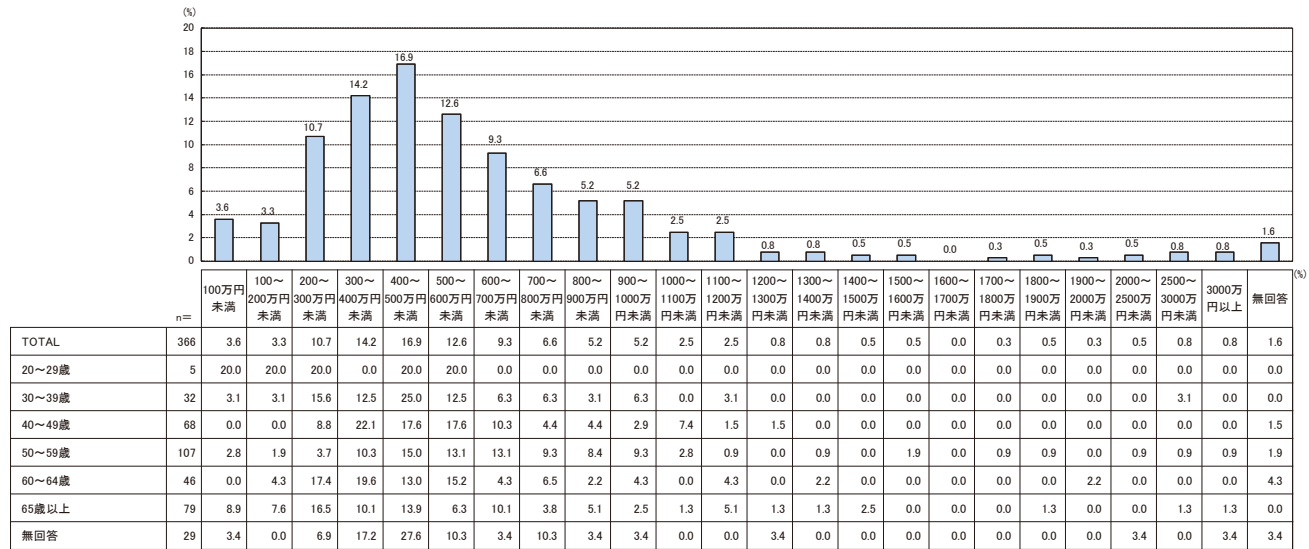


※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

● B-3 (a) 昨年 1 年間の個人収入 (年代別)

個人収入を年代別に見てみると、「400 ～ 500 万円未満」の所得層で「30 ～ 39 歳」の割合が 25.0% と、ほかの年齢層よりも高くなっています。

問 B-3 (a) 昨年 1 年間の個人収入 (年代別)



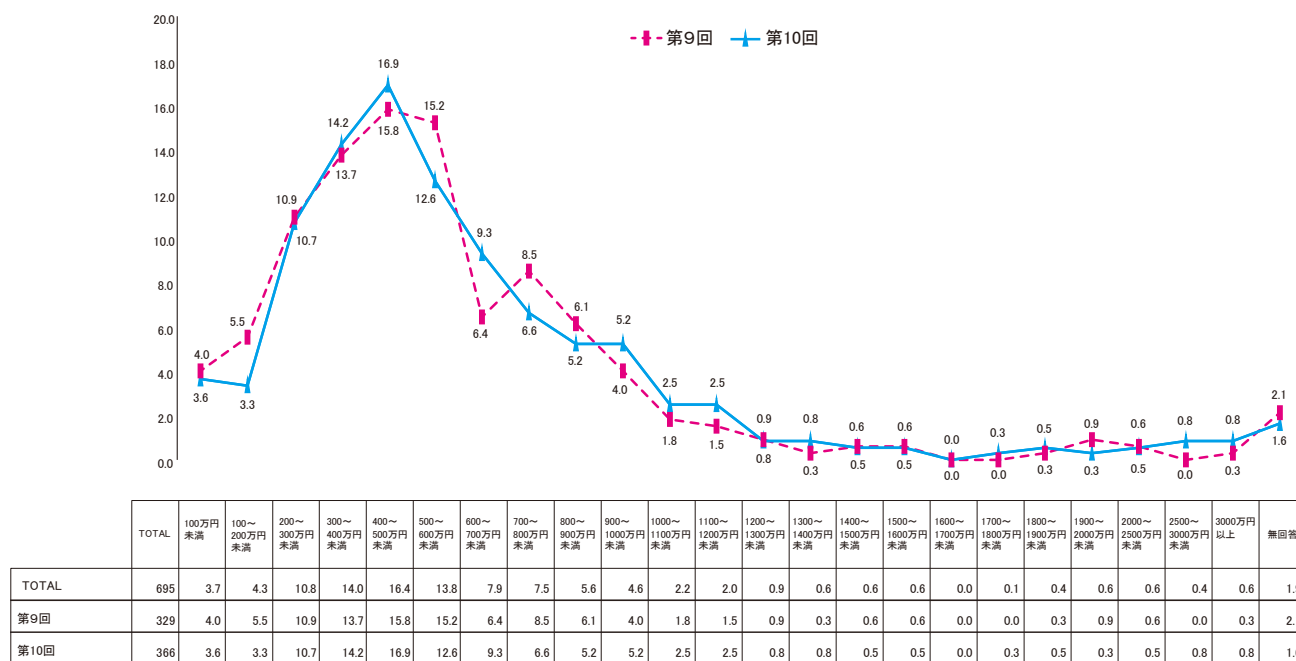
※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

● B-3 (a) 昨年 1 年間の個人収入（第 9 回調査との比較）

第 9 回調査における個人収入の結果と比較して見ると、「500～600 万円未満」の所得層が低くなっています（第 9 回：15.2%、第 10 回：12.6%）。一方で、「600

～700 万円未満」の所得層が高くなっています（第 9 回：6.4%、第 10 回：9.3%）。

問 B-3 (a) 昨年 1 年間の個人収入（第 9 回調査との比較）

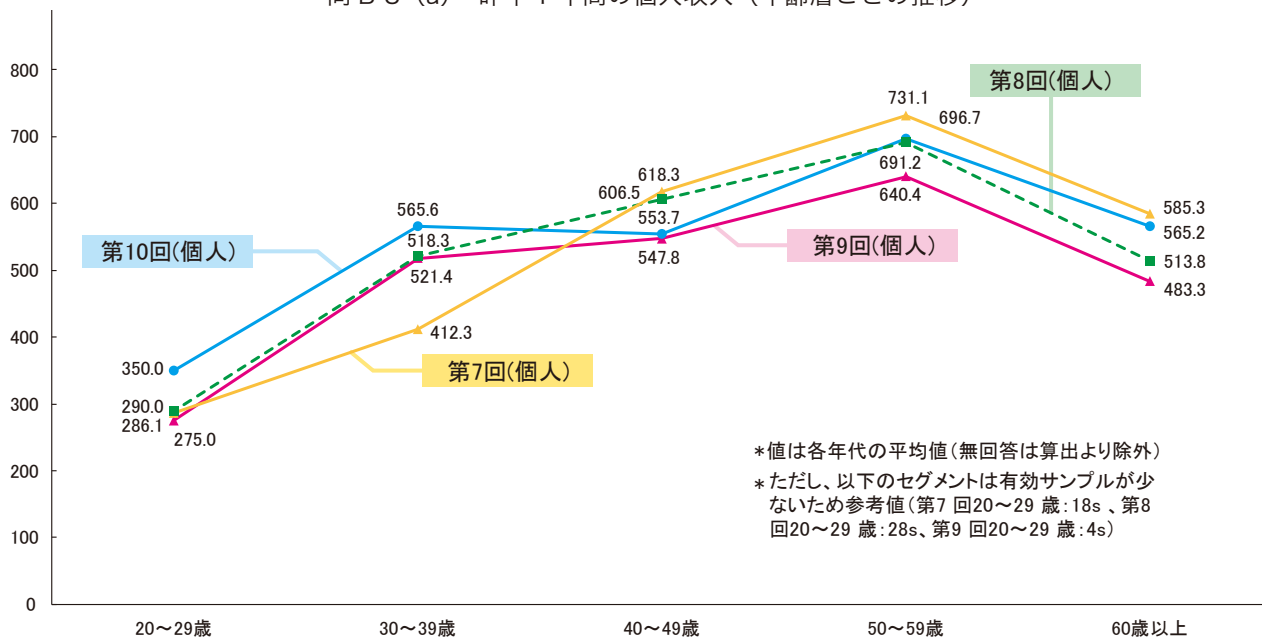


※ サンプル数 30s 未満の仕事は参考値扱いとする。

● B-3 (a) 昨年 1 年間の個人収入（年齢層ごとの推移）

昨年 1 年間の個人収入の年齢層ごとの推移を過去 3 回の調査と比較すると、今回の第 10 回調査で 20 代、30 代の収入が最も高くなっており、40 代は第 9 回に次いで低くなっています。

問 B-3 (a) 昨年 1 年間の個人収入（年齢層ごとの推移）



*値は各年代の平均値(無回答は算出より除外)

*ただし、以下のセグメントは有効サンプルが少ないため参考値(第7回20～29歳:18s、第8回20～29歳:28s、第9回20～29歳:4s)

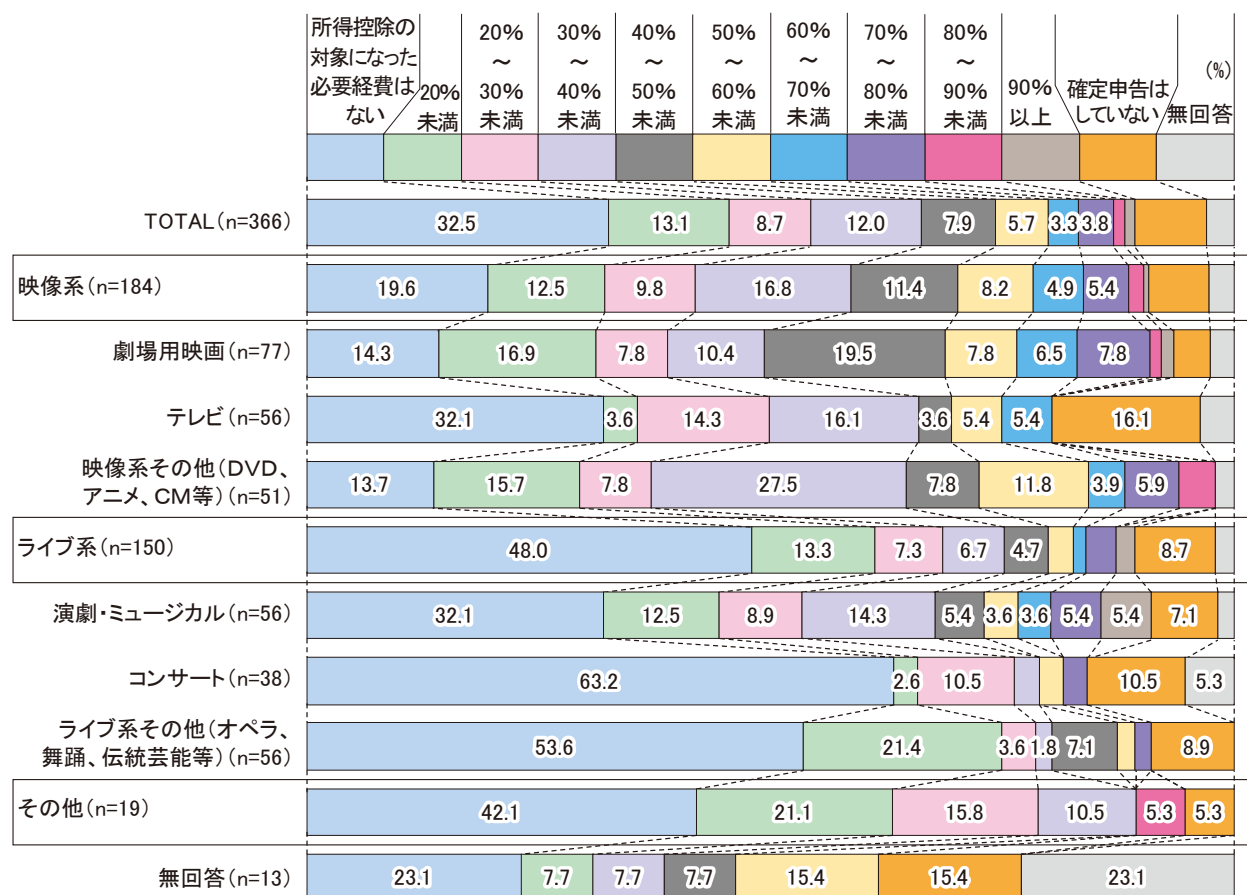
● B-3 (b) 自らが負担した必要経費の割合

昨年1年間に実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費について、「所得控除の対象になった必要経費はない」が32.5%を占めますが、必要経費を負担している場合、総収入に占める割合は、「20%未満」が13.1%、「30%～40%未満」が12.0%、「20%～30%未満」

が8.7%となっています。

ジャンル別に見ると、「所得控除の対象になった必要経費はない」は「ライブ系」が48.0%に対して「映像系」が19.6%で「ライブ系」が高くなっています。

問 B-3 (b) 自らが負担した必要経費の割合

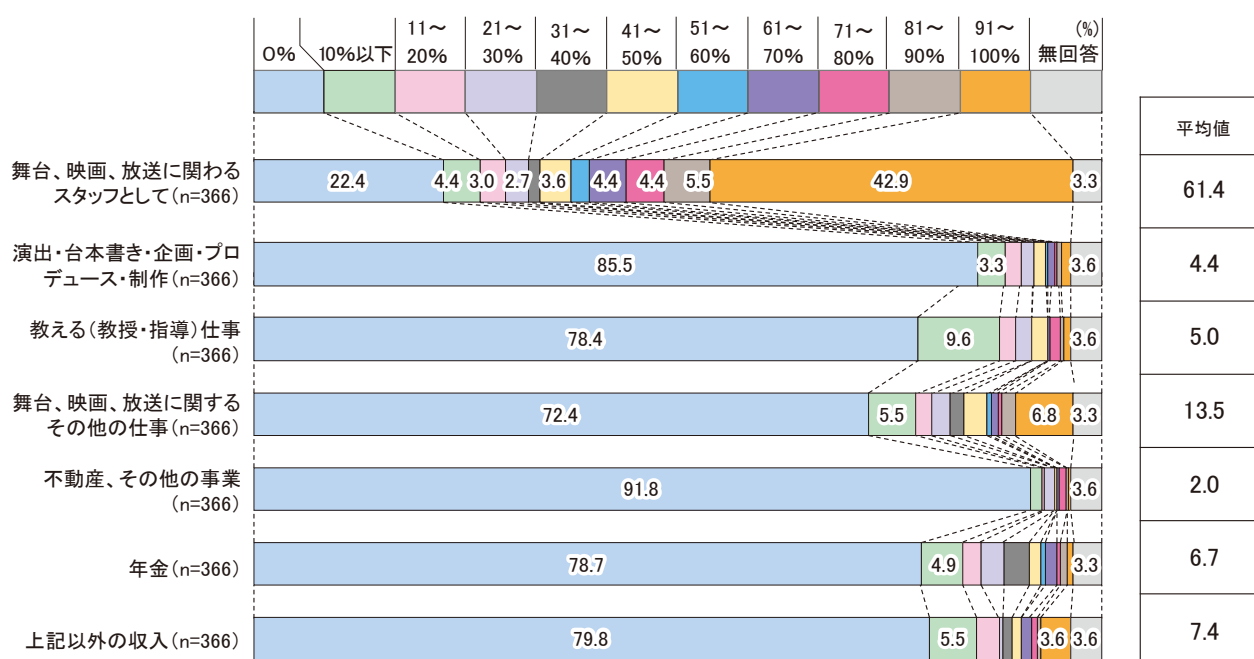


※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

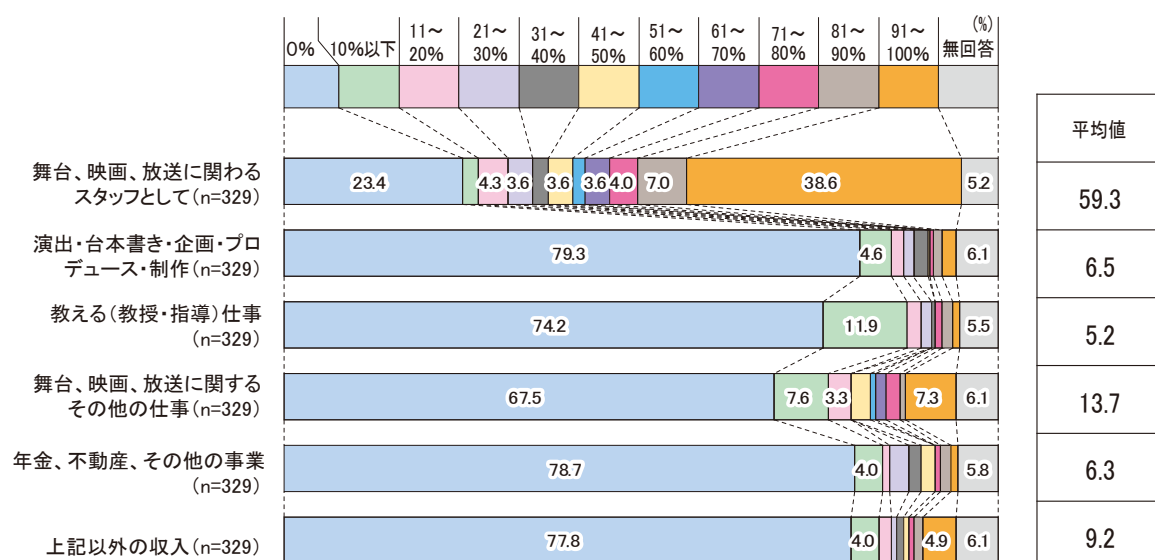
● B-4 昨年 1 年間の活動別収入の割合

昨年 1 年間の活動別収入の割合の平均は、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」が 61.4%と最も高く、次いで「舞台、映画、放送に関するその他の仕事」が 13.5%となっています。

問 B-4 昨年 1 年間の活動別収入の割合



<参考> 第 9 回調査結果との比較



● B-4 昨年 1 年間の活動別収入の割合

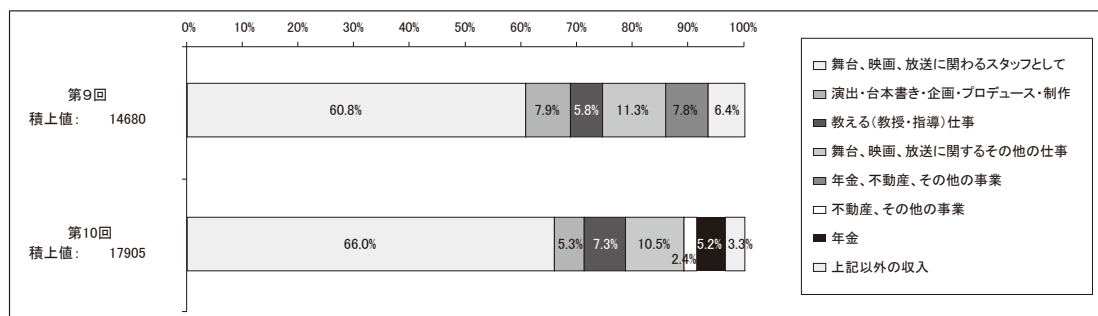
(ジャンル別：映像系／劇場用映画／テレビ／映像系その他)

ジャンル別に昨年 1 年間の活動別収入の割合を見ると、「映像系その他（DVD、アニメ、CM等）」で「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」の割合が 51.7% で低くなっています。

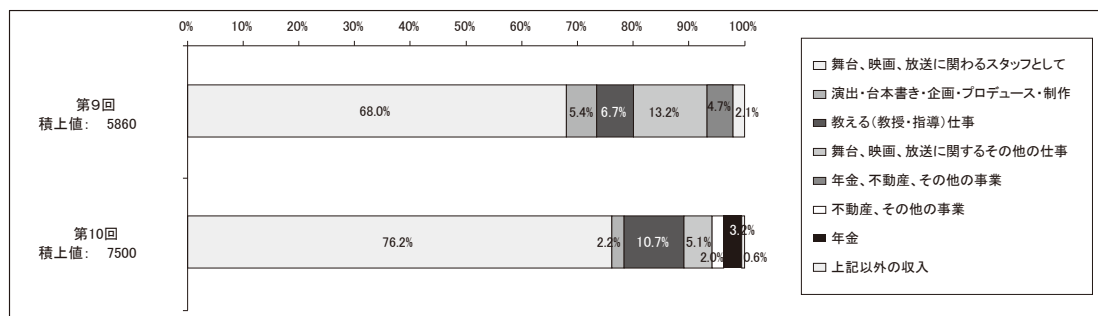
他（DVD、アニメ、CM等）」で「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」の割合が増え、「テレビ」では舞台、映画、放送に関するその他の仕事が増えています。

第 9 回調査結果と比べると、「劇場用映画」「映像系そ

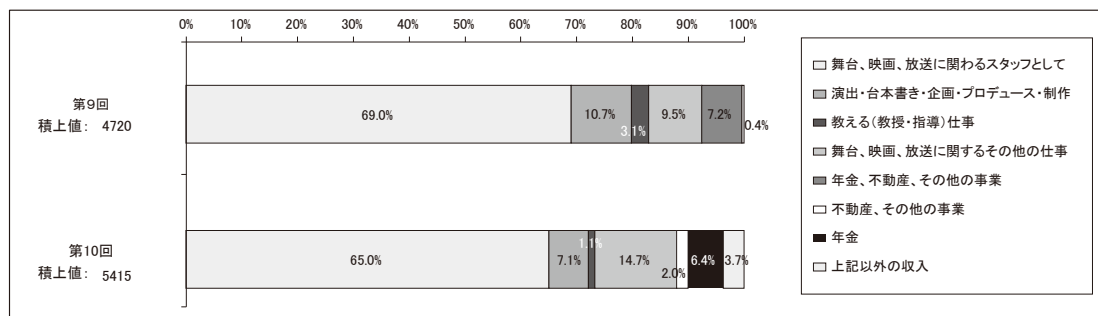
■ 映像系（第 9 回：n=159、第 10 回：n=184）



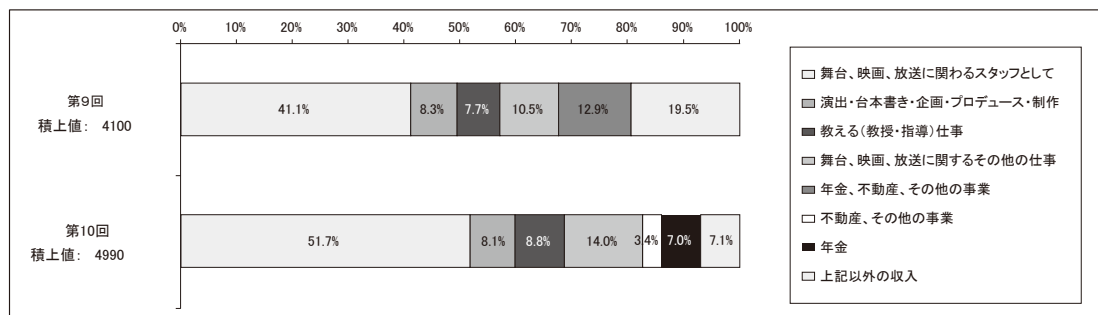
■ 劇場用映画（第 9 回：n=65、第 10 回：n=77）



■ テレビ（第 9 回：n=52、第 10 回：n=56）



■ 映像系その他（DVD、アニメ、CM等）（第 9 回：n=42、第 10 回：n=51）



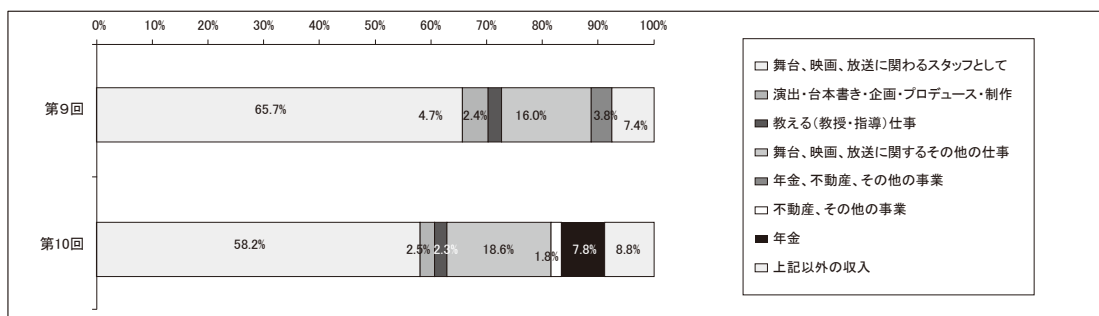
● B-4 昨年 1 年間の活動別収入の割合

(ジャンル別：ライブ系／演劇・ミュージカル／コンサート／ライブ系その他)

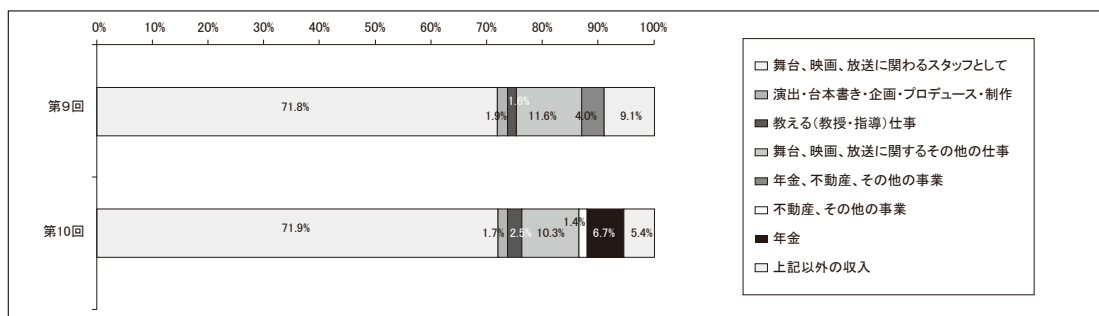
「ライブ系その他（オペラ、舞踊、伝統芸能等）」の昨年 1 年間の活動別収入の割合を見ると、「舞台、映画、放送に関わるスタッフとして」は 45.4% で、「演劇・ミュージカル」「コンサート」に比べて低くなっています。

第 9 回調査結果と比べると、「コンサート」では「舞台、映画、放送に関するその他の仕事」の割合が高くなっています。

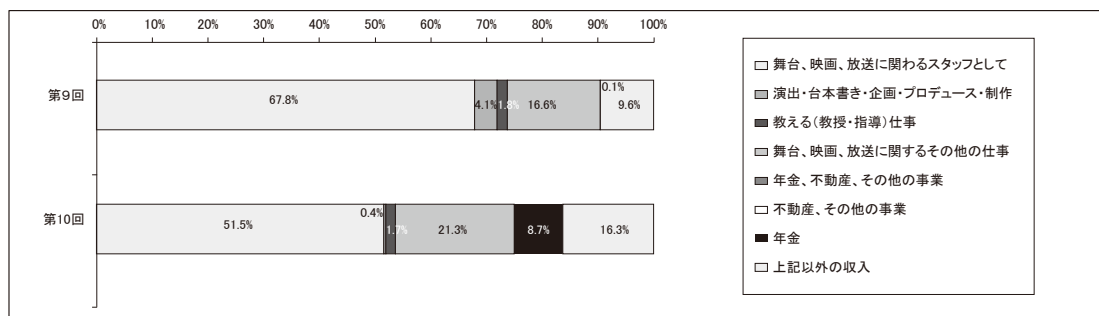
■ ライブ系（第 9 回：n=134、第 10 回：n=150）



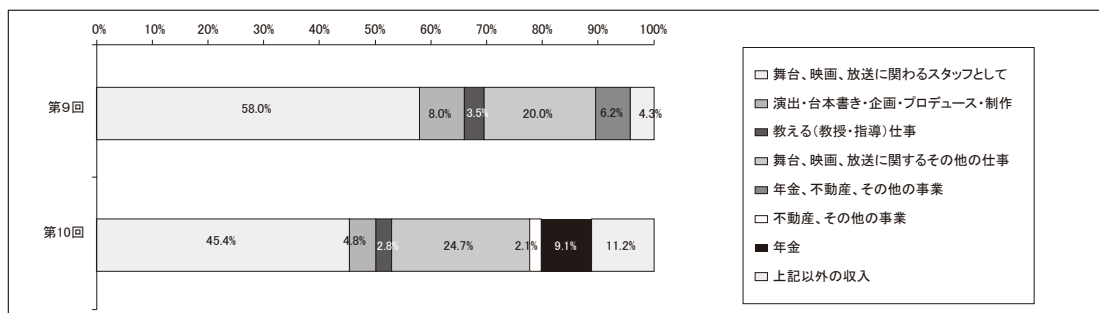
■ 演劇・ミュージカル（第 9 回：n=48、第 10 回：n=38）



■ コンサート（第 9 回：n=36、第 10 回：n=56）



■ ライブ系その他（オペラ、舞踊、伝統芸能等）（第 9 回：n=50、第 10 回：n=56）



● C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費（MA）

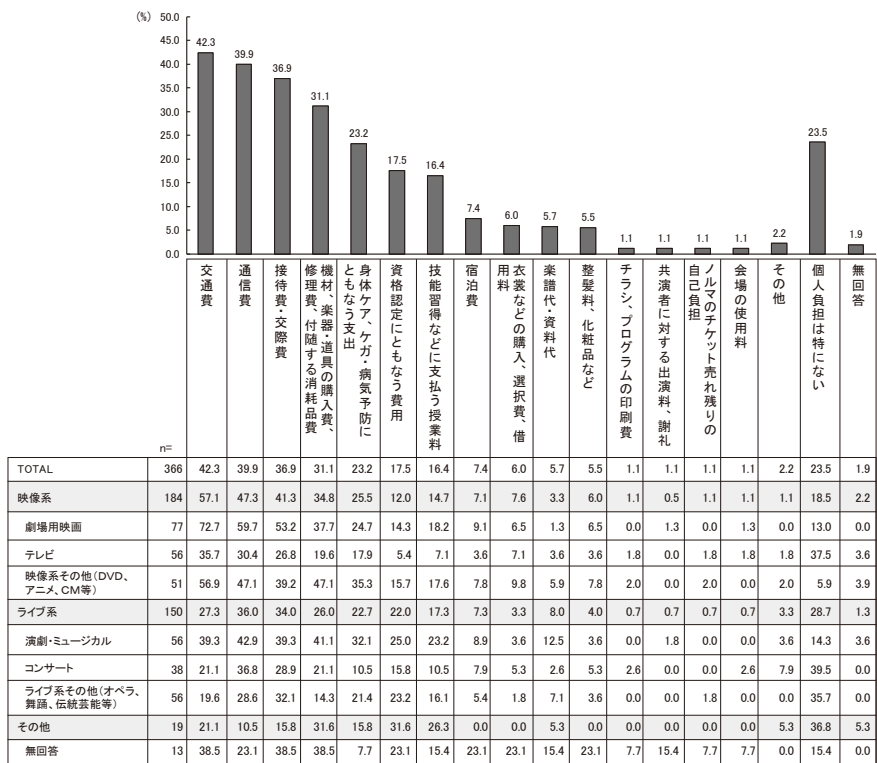
仕事をする上で個人負担となっている経費は、「交通費」が42.3%と最も高く、次いで「通信費」（39.9%）、「接待費・交際費」（36.9%）と続いています。

ジャンル別に見ると、「交通費」は「ライブ系」に比べて「映像系」で高く、特に「劇場用映画」（72.7%）で高くなっています。「通信費」も同様に「映像系」で高

く、その中でも「劇場用映画」（59.7%）が最も高くなっています。「個人負担はない」は「映像系」に比べて「ライブ系」が高くなっています。

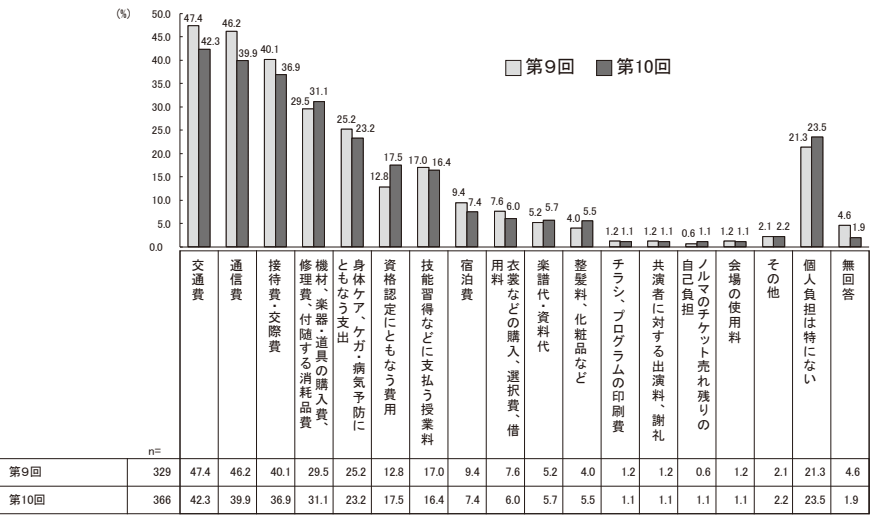
第9回調査結果と比べると「交通費」「通信費」「接待費・交際費」で減少しており、「資格認定にともなう費用」（第9回 12.8%、第10回：17.5%）が増えています。

問 C-2 個人負担となっている仕事上の必要経費（MA）



※「その他」「無回答」は、サンプル数30s未満のため参考値扱いとする。

<参考> 第9回調査結果との比較



● E-7 万一の場合や老後に対しての備え (MA)

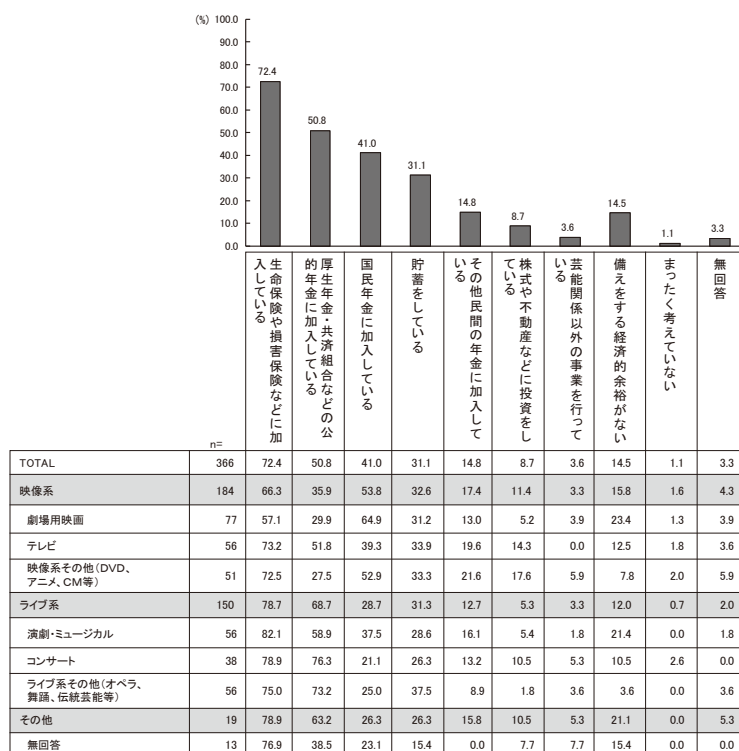
万一の場合や老後に対しての備えとして、「生命保険や損害保険などに加入している」が72.4%と最も高く、次いで「厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している」(50.8%)、「国民年金に加入している」(41.0%)となっています。

ジャンル別に見ると、「厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している」の割合は「ライブ系」で高く、

特に「コンサート」「ライブ系その他（オペラ、舞踊、伝統芸能等）」で高くなっています。一方で、「国民年金に加入している」は「映像系」のほうが高くなっています。

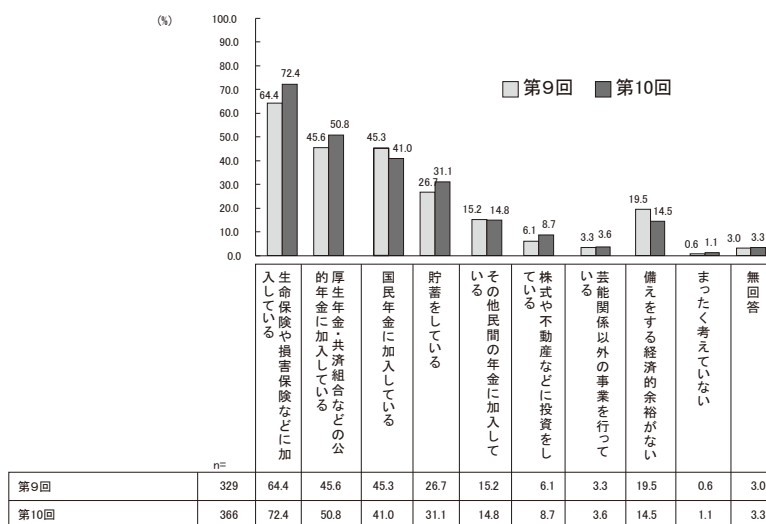
第9回調査結果と比べると「生命保険や損害保険などに加入している」「厚生年金・共済組合等の公的年金に加入している」「貯蓄をしている」が増えています。

問 E-7 万一の場合や老後に対しての備え (MA)



※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

<参考> 第9回調査結果との比較



(2) 労働環境について

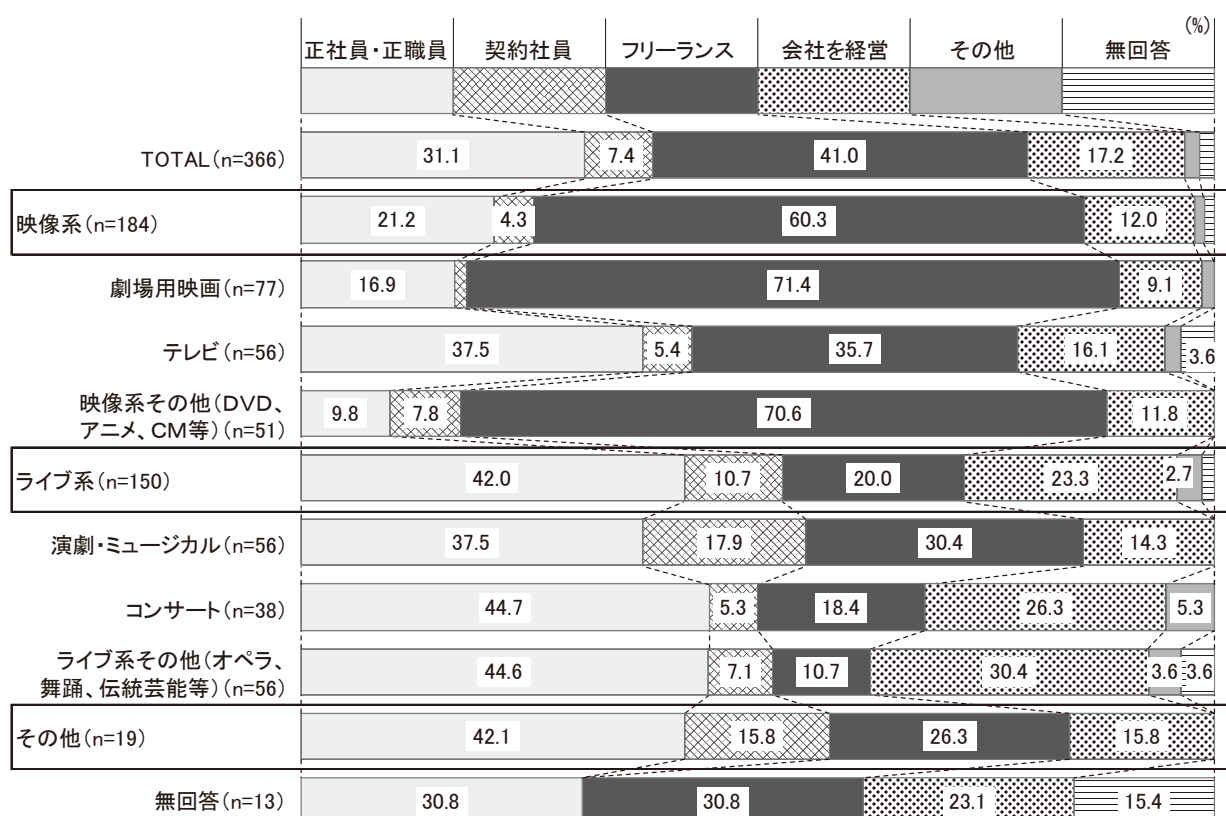
● B-5 (a) 雇用形態

スタッフの雇用形態は、「フリーランス」が最も高く41.0%、次いで「正社員・正職員」が31.1%となっています。

ジャンル別に見ると、「フリーランス」は「映像系」(60.3%)の割合が「ライブ系」(20.0%)に比べて高く、

特に「劇場用映画」(71.4%)、「映像系その他(DVD、アニメ、CM等)」(70.6%)が高くなっています。一方で、「正社員・正職員」は「ライブ系」(42.0%)が「映像系」(21.2%)よりも高くなっています。

問 B-5 (a) 雇用形態



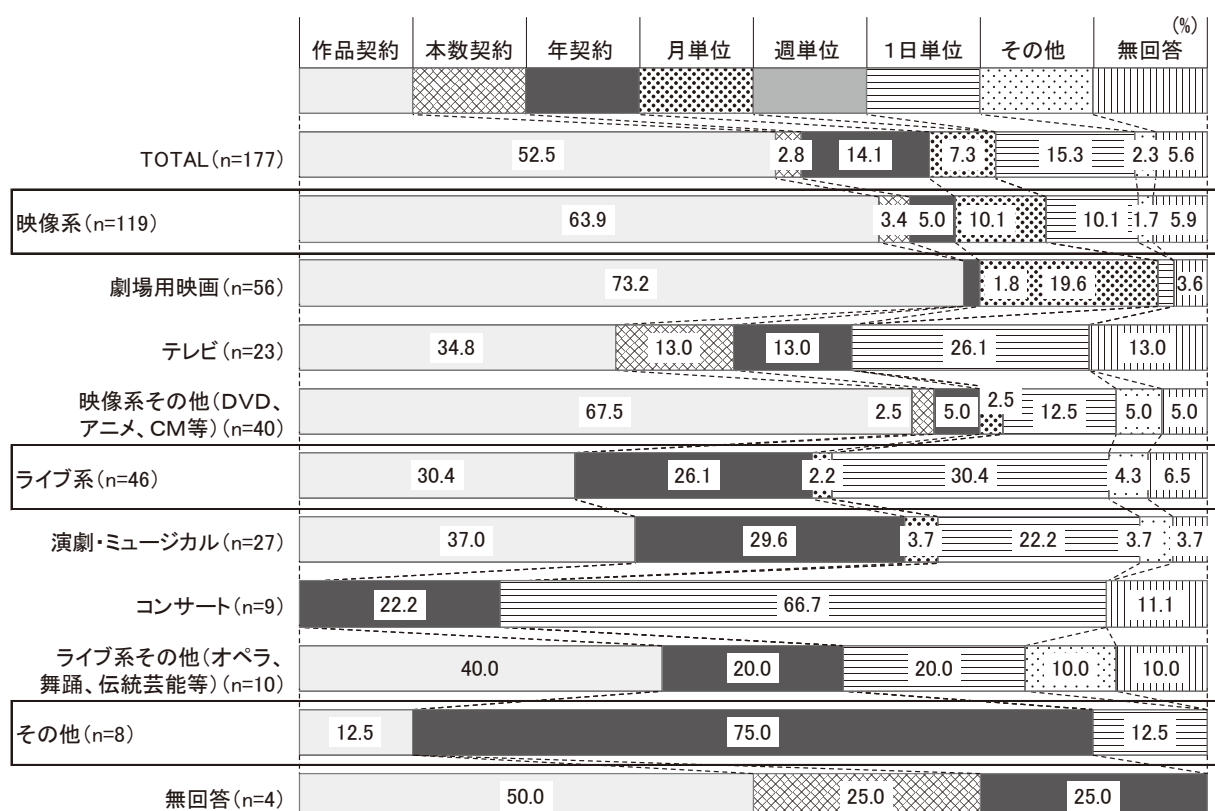
※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

● B-5 (b) 契約形態で最も多いもの

雇用形態が「フリーランス」「契約社員」である場合に最も多い契約形態は、「作品契約」の割合が52.5%で最も高く、「1日単位」が15.3%、「年契約」が14.1%、「月契約」が7.3%となっています。

ジャンル別に見ると、「作品契約」は「映像系」が「ライブ系」に比べて割合が高く、「年契約」「1日単位」は「ライブ系」のほうが高くなっています。

問 B-5 (b) 契約形態で最も多いもの



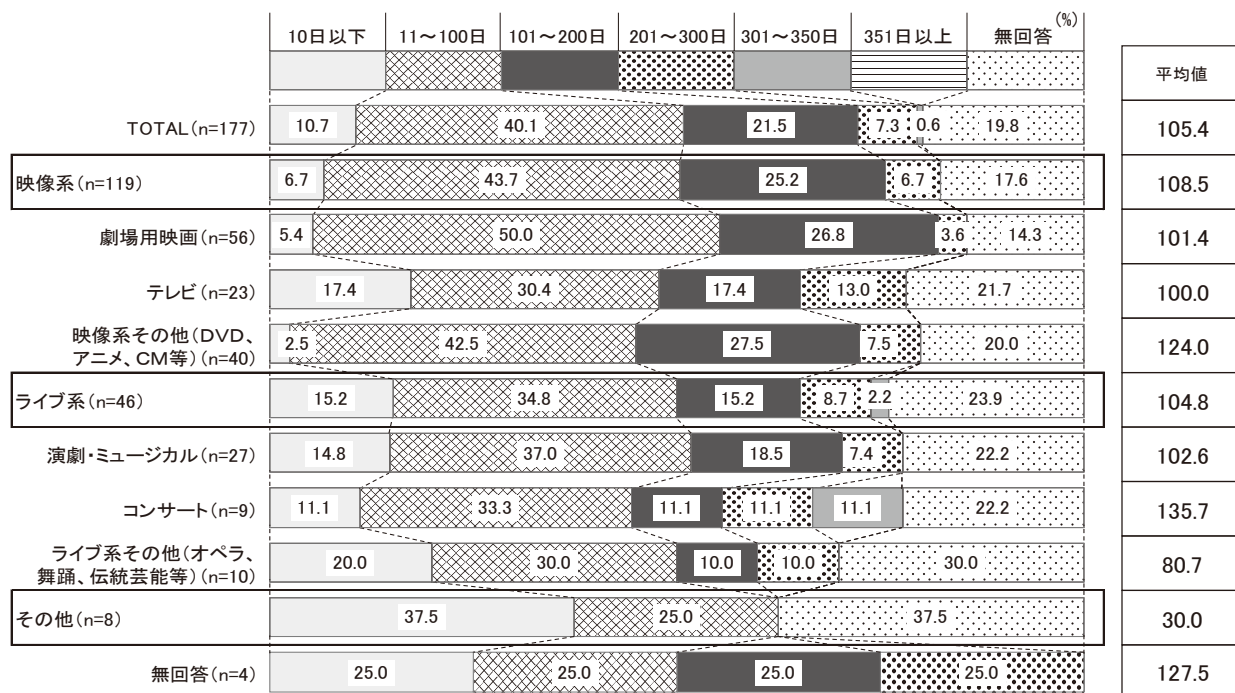
※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

● B-5 (c) 昨年1年間で仕事が入らずスケジュールが空いた日数

昨年1年間で、仕事をする意思があっても仕事が入らず、スケジュールが空いた合計日数の平均は105.4日です。

ジャンル別に見ると、「映像系」が108.5日であるのに対して「ライブ系」は104.8日で、「映像系」のほうが長くなっています。

問 B-5 (c) 昨年1年間で仕事が入らずスケジュールが空いた日数



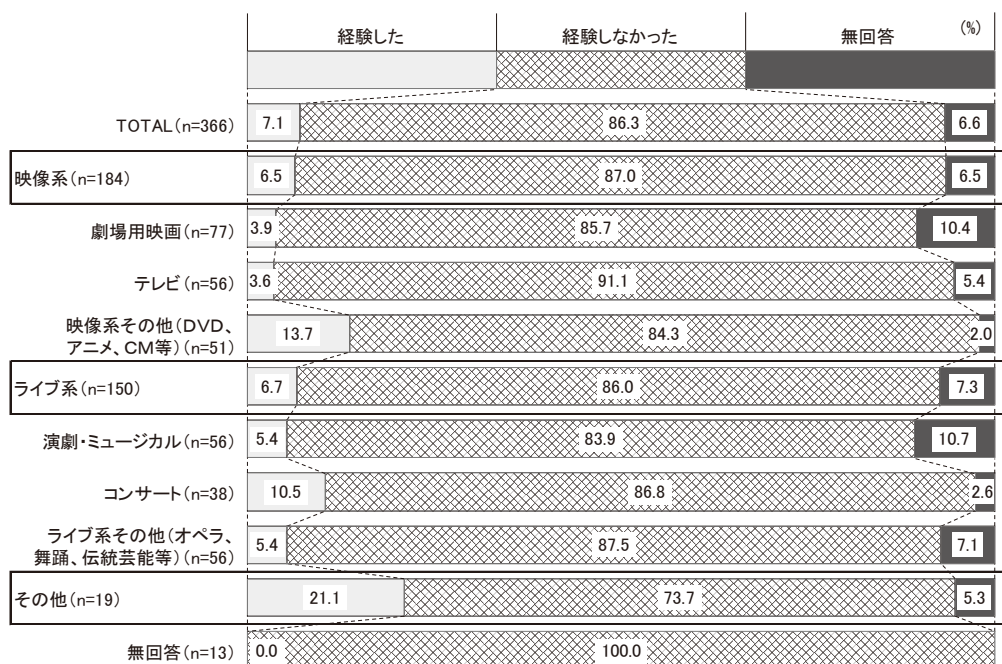
※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

■ 傷害(ケガ)・病気・症状の状況

● C-3 (a) 昨年1年間に医師の治療が必要となった経験(傷害(ケガ))

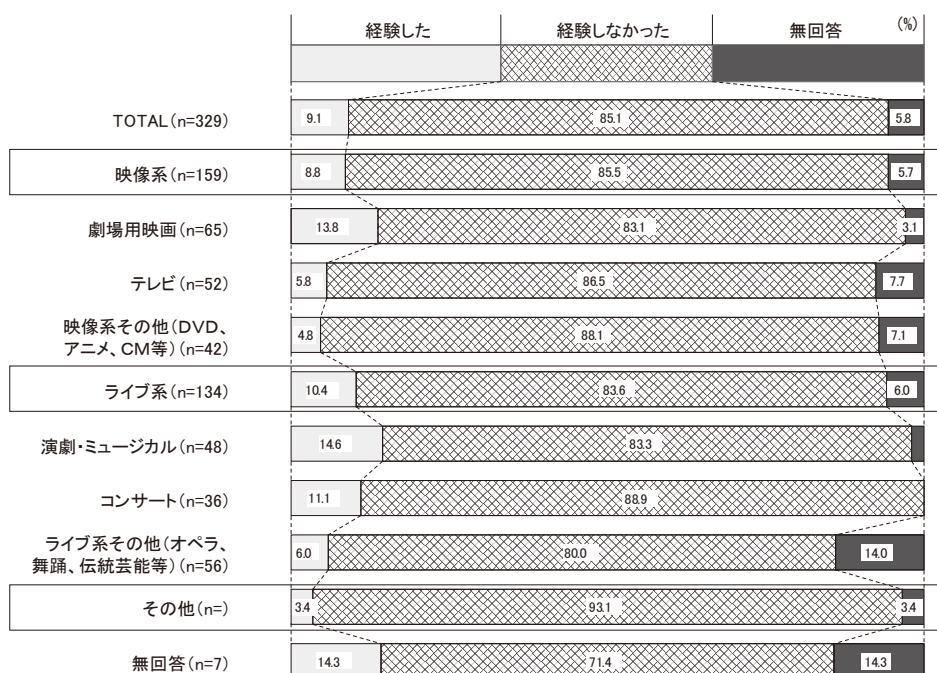
昨年1年間に仕事上で、医師の治療が必要となった傷害(ケガ)を経験した割合は7.1%となっています。「映像系」「ライブ系」で比較すると、特に大きな違いは見られません。

問 C-3 昨年1年間に医師の治療が必要となった経験
(a) 仕事上の傷害(ケガ)



※「その他」「無回答」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

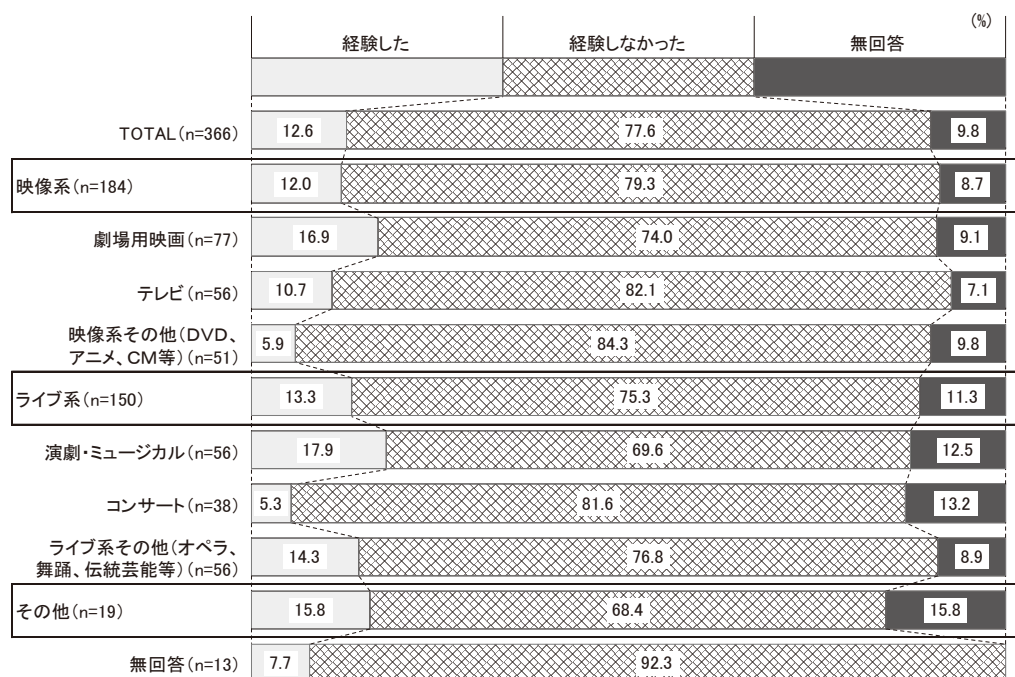
<参考> 第9回調査結果



● C-3 (b) 昨年 1 年間に医師の治療が必要となった経験 (病気・症状)

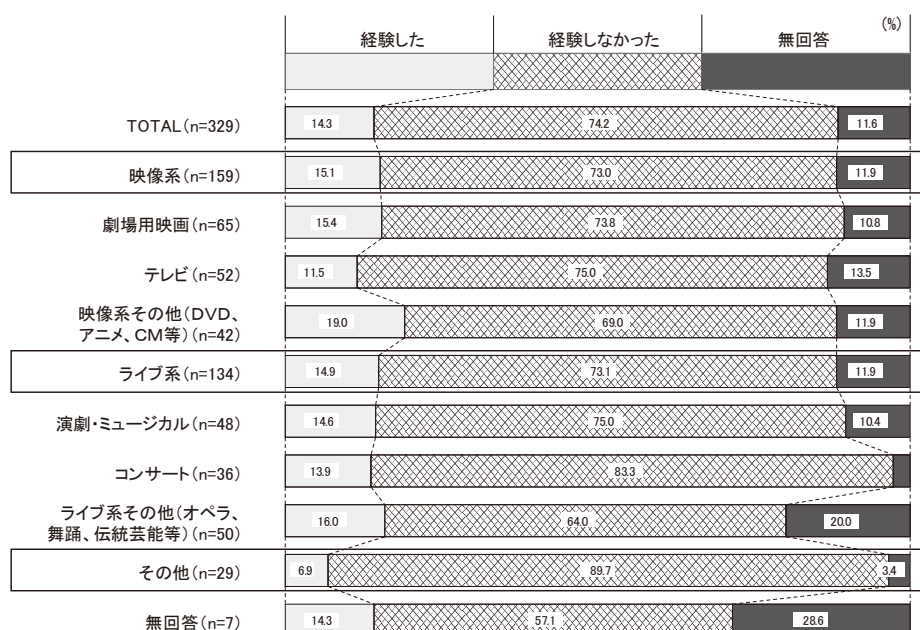
昨年 1 年間に医師の治療が必要となった仕事が原因と これを「映像系」「ライブ系」で比較すると、特に大きな違いは見られません。

問 C-3 昨年 1 年間に医師の治療が必要となった経験
(b) 仕事が原因と考えられる病気・症状



※ サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

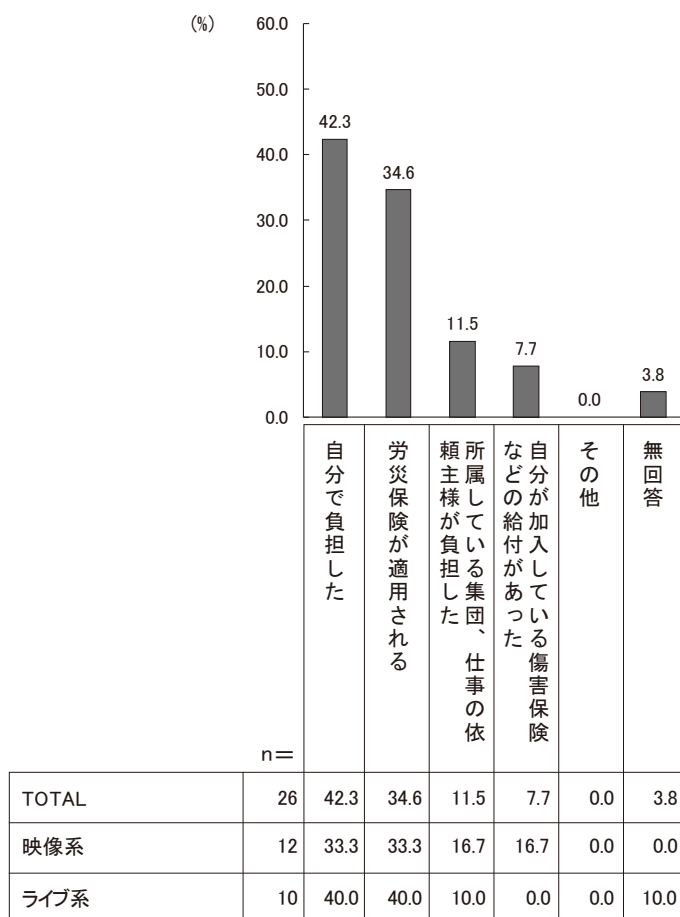
<参考> 第 9 回調査 調査結果



● C-4 昨年 1 年間に経験した仕事上の傷害（ケガ）治療費等の負担状況（MA）

昨年 1 年間に仕事上で医師の治療が必要となった傷害（ケガ）に対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」は 26 人中 11 人と最も多く（42.3%）、次いで「労災保険が適用された」が 9 人（34.6%）、「所属している集団、仕事の依頼主等が負担した」は 3 人（11.5%）となっています。

問 C-4 昨年 1 年間に経験した仕事上の傷害（ケガ）治療費等の負担状況（MA）



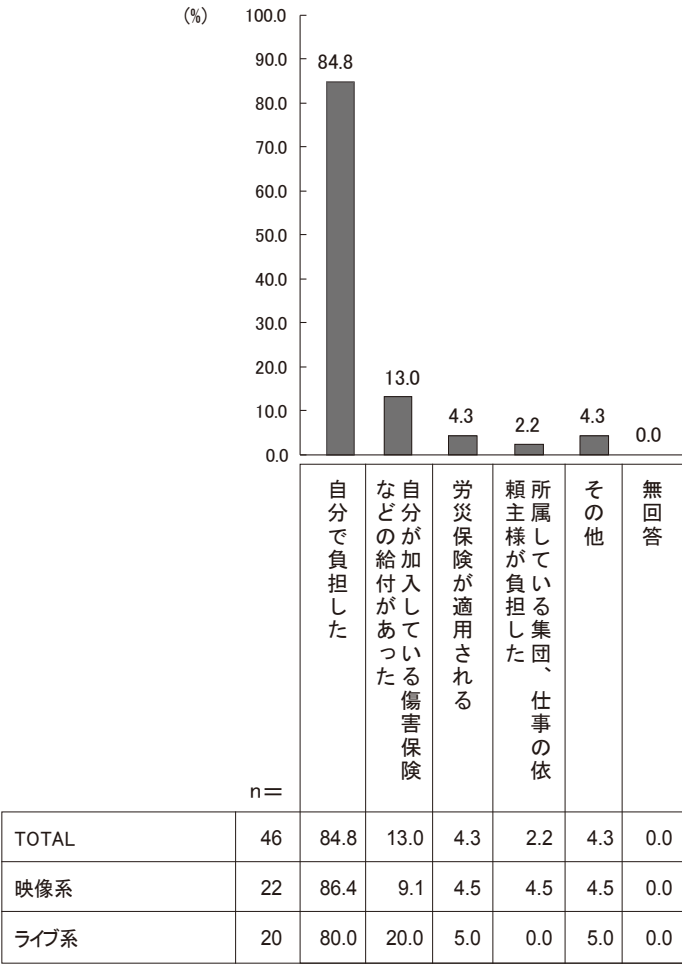
※ サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

● C-5 仕事が原因と考えられる病気・症状の治療費等の負担状況（MA）

昨年1年間に医師の治療が必要となった仕事が原因と考えられる病気・症状などに対する治療費等の負担状況は、「自分で負担した」が46人中39人と最も多く（84.8%）、

「自分が加入している傷害保険などの給付があった」は6人（13.0%）となっています。

問 C-5 仕事が原因と考えられる病気・症状の治療費の負担状況（MA）



※サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

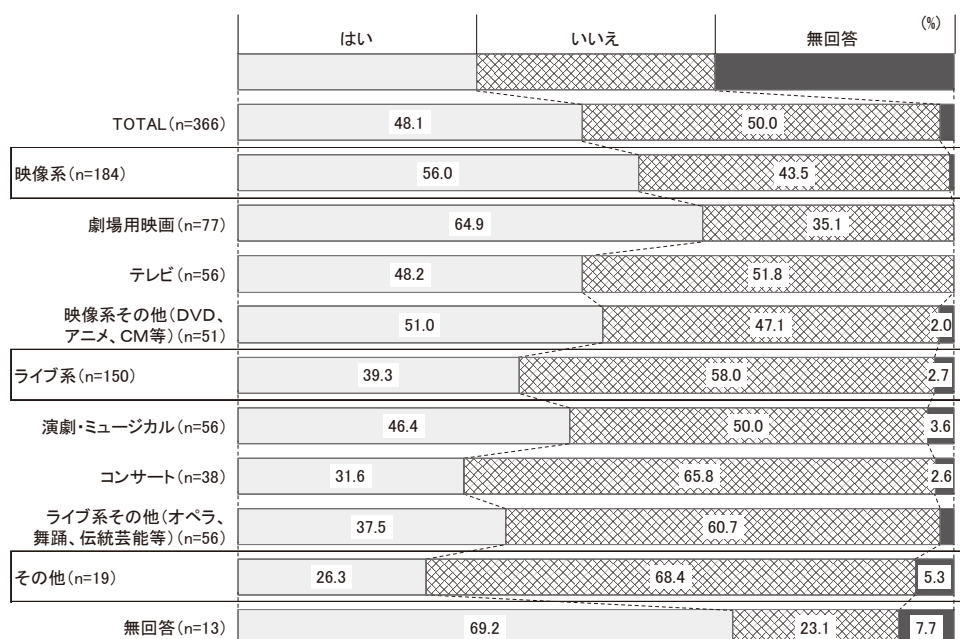
(3) 仕事や生活に対する考え方

● C-6 (a) 10年後も今の仕事を続けていると思うか

10年後も今の仕事を続けていると思うかは、「はい」「いいえ」がそれぞれ5割程度となっています。ジャンル別に見ると、「劇場用映画」は「はい」(64.9%)、「ライブ系その他(オペラ、舞踊、伝統芸能等)」は「いいえ」(60.7%)が高くなっている。年代別に見ると、「30～39歳」が81.3%と高くなっています。

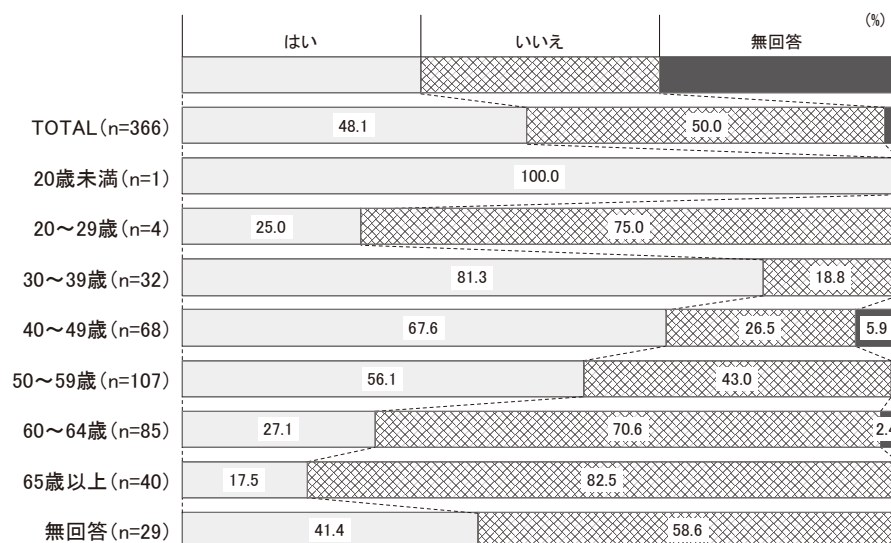
問 C-6 (a) 10年後も今の仕事を続けていると思うか

■ジャンル別



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

■年代別



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

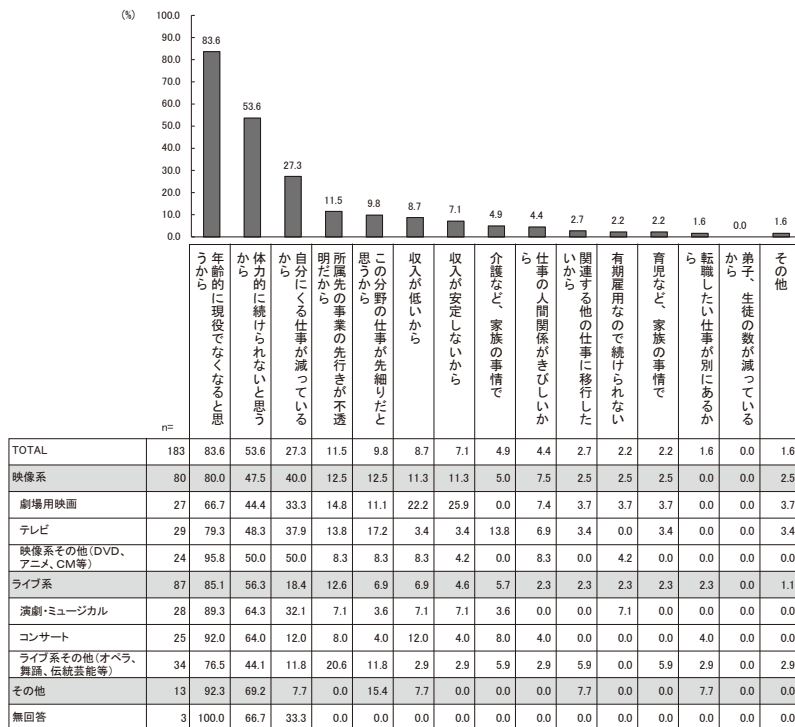
● C-6 (b) 10年後も今の仕事を続けていないと思われる主たる理由 (3LA)

10年後も今の仕事を続けていないと思われる主たる理由は、「年齢的に現役でなくなると思うから」が83.6%で、いずれのジャンルにおいても最も高くなっており、次いで「体力的に続けられないと思うから」が53.6%、「自分にくる仕事が減っているから」が27.3%と高くなっています。

年代別に見ると、「年齢的に現役でなくなると思うから」「体力的に続けられないと思うから」は年齢が上がるにつれて高くなっています。「40～49歳」では、「所属先の事業の先行きが不透明だから」が3番目にあげられています。

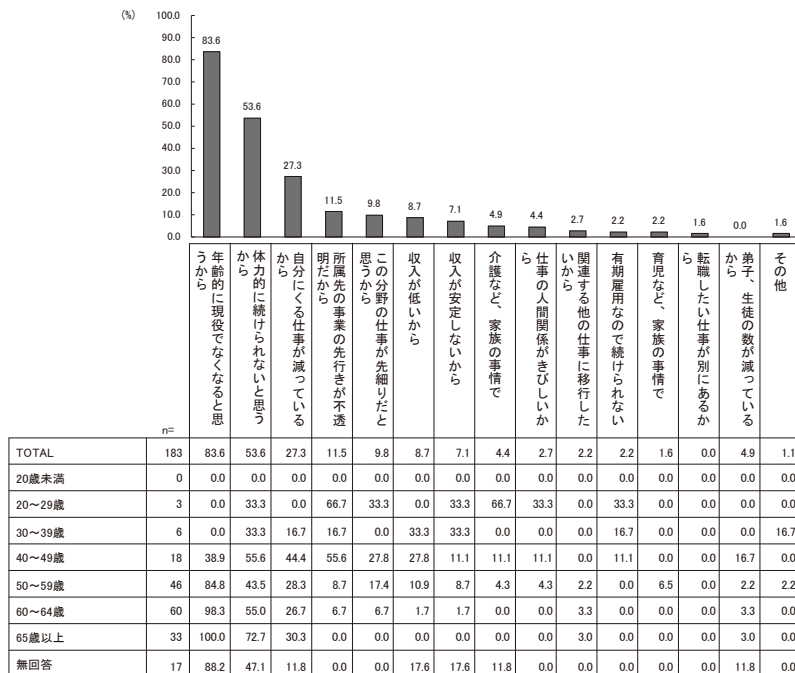
問 C-6 (b) 10年後も今の仕事を続けていないと思われる主たる理由 (3LA)

■ジャンル別



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

■年代別



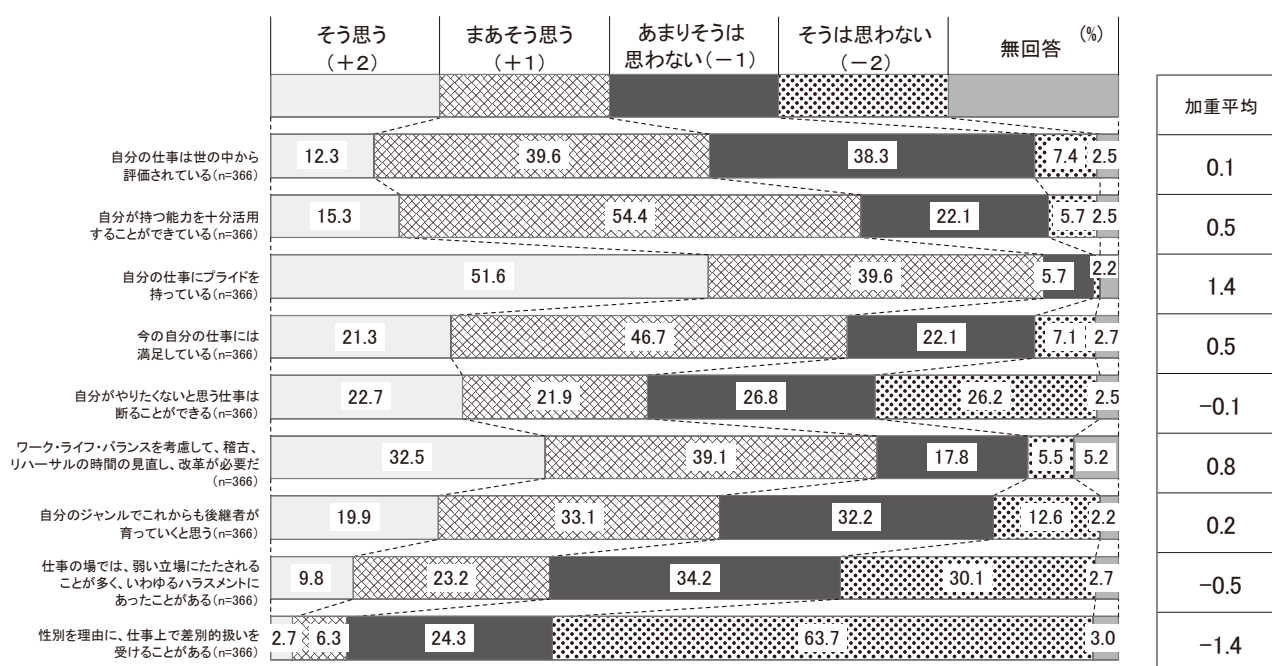
※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

● D-1 仕事に関する考え方

「自分の仕事にプライドを持っている」は、「そう思う／まあそう思う」が9割を占め、ほかの項目に比べて肯定する割合が高くなっています。

「性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある」は、「そうは思わない／あまりそうは思わない」が88.0%と高くなっています。

問 D-1 仕事に関する考え方



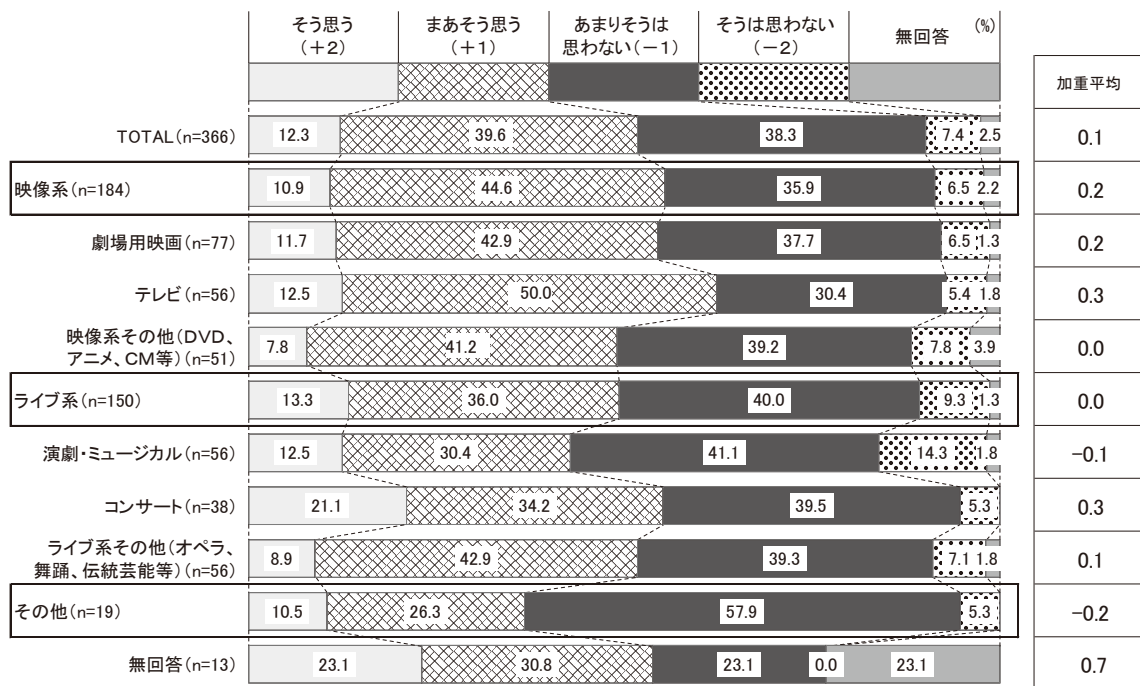
● D-1 仕事に関する考え方 (1) (2) (ジャンル別)

「自分の仕事は世の中から評価されている」は「そう思う／まあそう思う」の割合が5割を占めています。「映像系」55.5%、「ライブ系」49.3%と、「映像系」のほうが高くなっています。

「自分が持つ能力を十分活用することができている」については「映像系」「ライブ系」で特に傾向に差は見られません。

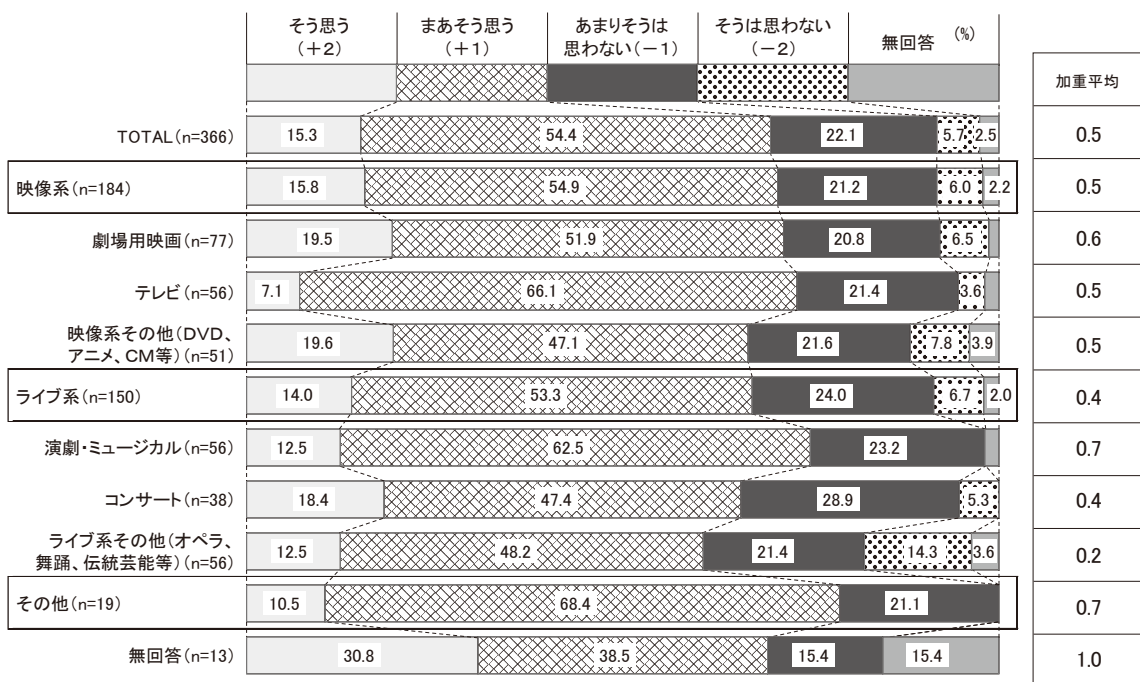
問 D-1 仕事に関する考え方 (1) (2) (ジャンル別)

(1) 自分の仕事は世の中から評価されている



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

(2) 自分が持つ能力を十分活用することができている



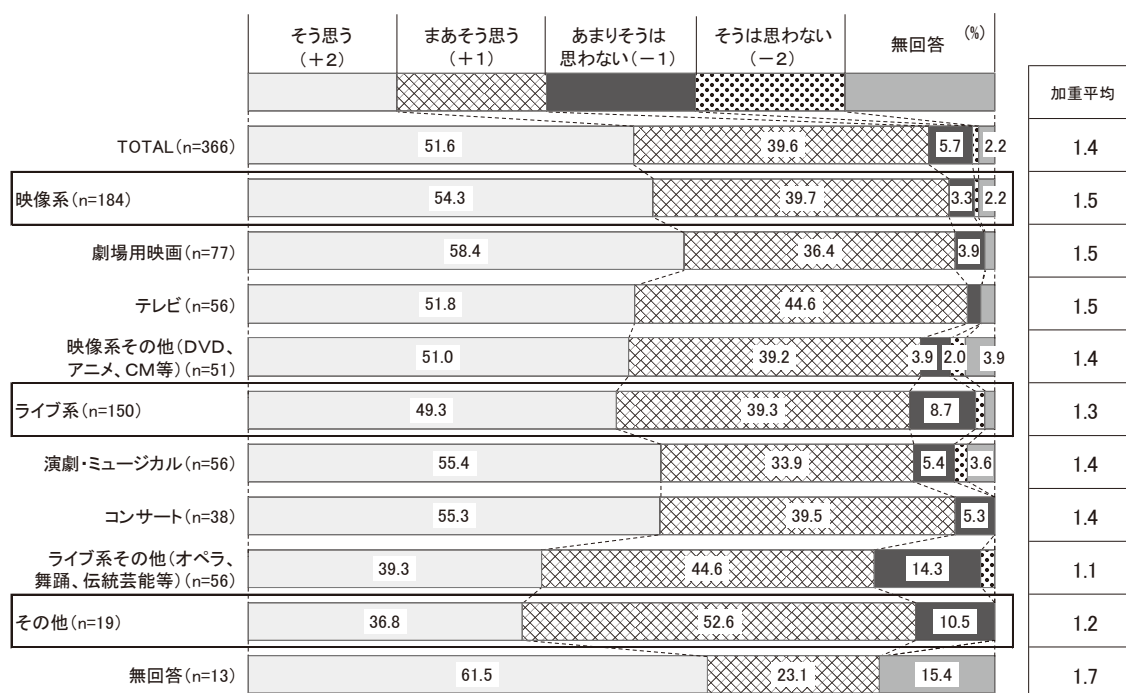
※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

● D-1 仕事に関する考え方 (3) (4) (ジャンル別)

「自分の仕事にプライドを持っている」は「そう思う」「今の自分の仕事には満足している」では「映像系」／「まあそう思う」の割合が9割を占めています。「映像系」「ライブ系」で特に傾向に差は見られません。「ライブ系」で特に傾向に差は見られません。

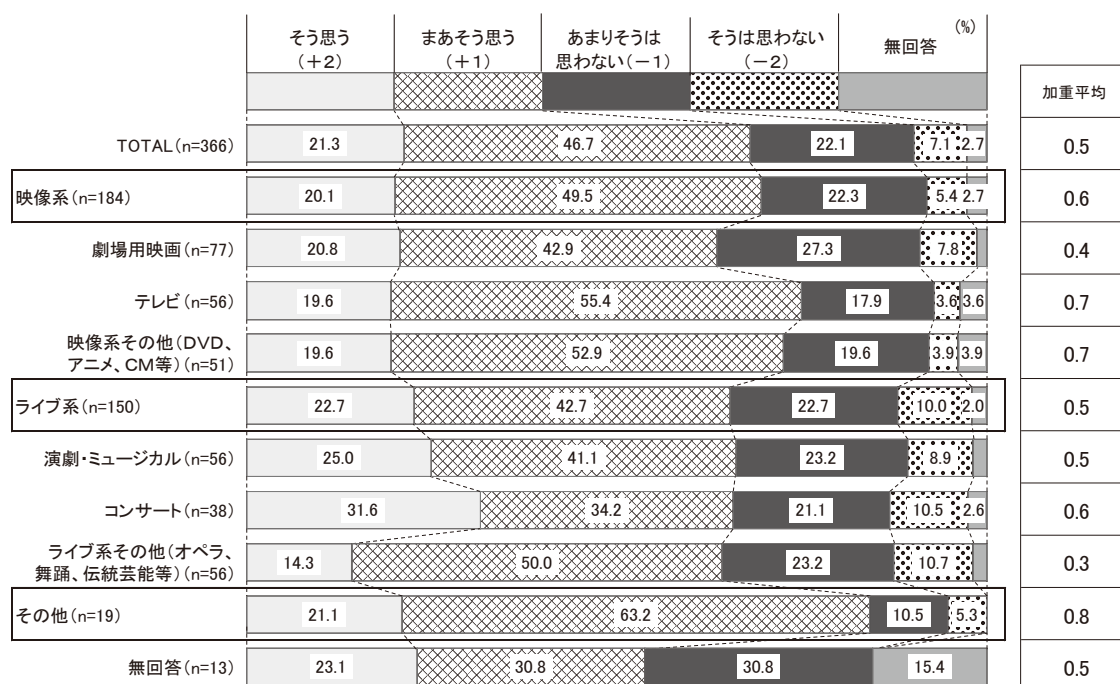
問 D-1 仕事に関する考え方 (3) (4) (ジャンル別)

(3) 自分の仕事にプライドを持っている



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

(4) 今の自分の仕事には満足している



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

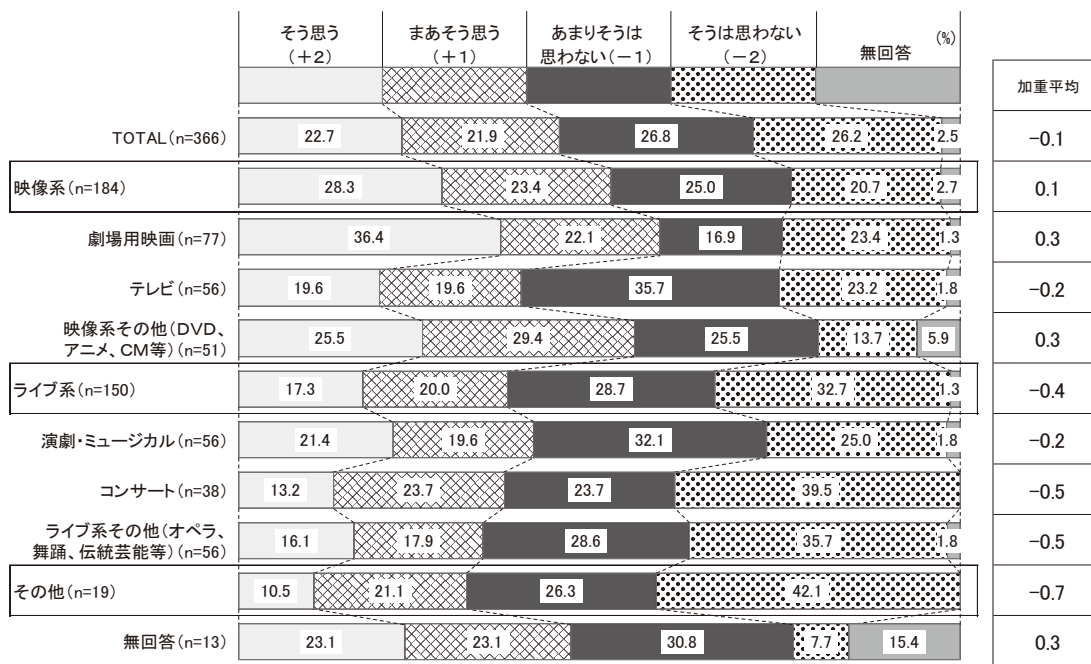
● D-1 仕事に関する考え方 (5) (6) (ジャンル別)

「入ってくる仕事のうち、自分がやりたくないと思う仕事は断ることができる」は「そう思う／まあそう思う」の割合が「映像系」で51.7%、「ライブ系」で37.3%と「映像系」の方が高くなっています。

「ワーク・ライフ・バランス」を考慮して、稽古、リハーサル時間の見直し、改革が必要だ」では「そう思う／まあそう思う」の割合が7割を占め、「ライブ系」の方が「そう思う」(36.0%)が高くなっています。

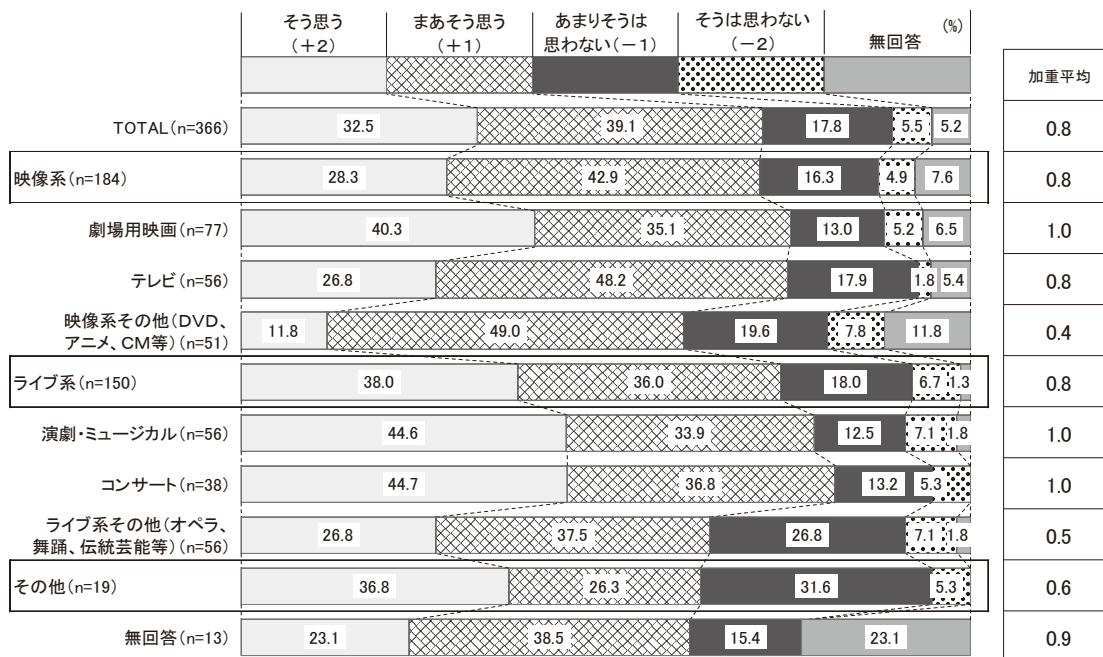
問 D-1 仕事に関する考え方 (5) (6) (ジャンル別)

(5) 入ってくる仕事のうち、自分がやりたくないと思う仕事は断ることができる



※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

(6) 「ワーク・ライフ・バランス」を考慮して、稽古、リハーサル時間の見直し、改革が必要だ



※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

● D-1 仕事に関する考え方 (7) (8) (ジャンル別)

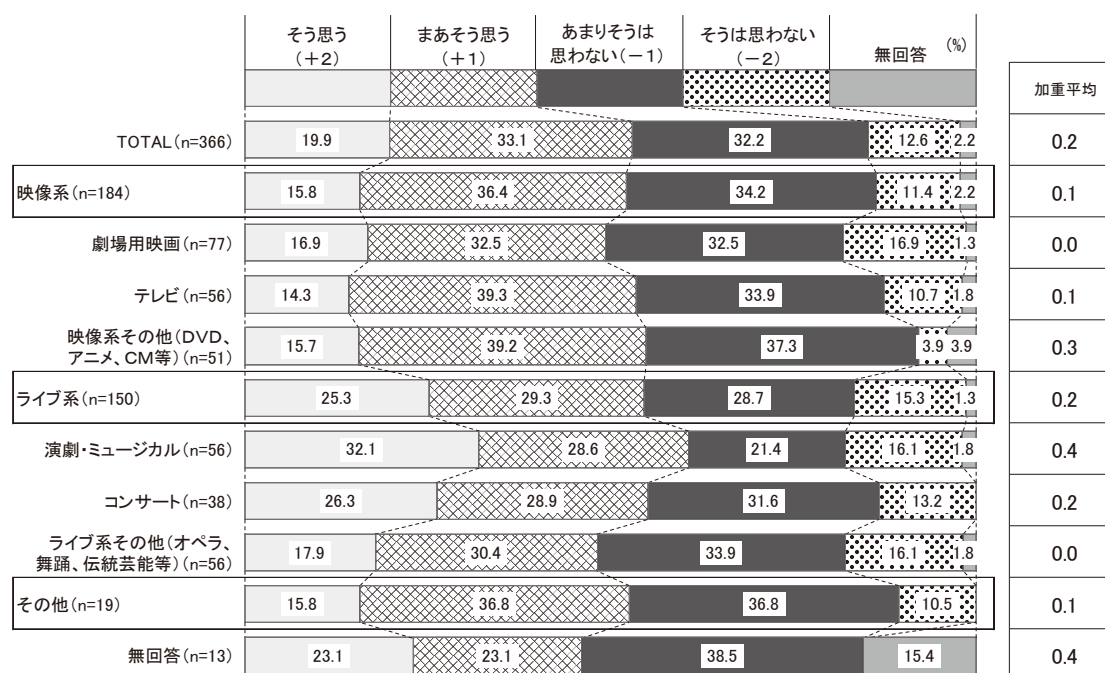
「自分のジャンルについては、これからも後継者が育っていくと思う」は「そう思う」の割合が「ライブ系」25.3%に対して「映像系」15.8%で「ライブ系」が高くなっています。特に「演劇・ミュージカル」が32.1%と高く

なっています。

「ハラスメントにあったことがある」は「そう思う／まあそう思う」が「映像系」36.4%に対し、「ライブ系」が29.4%と「映像系」が高くなっています。

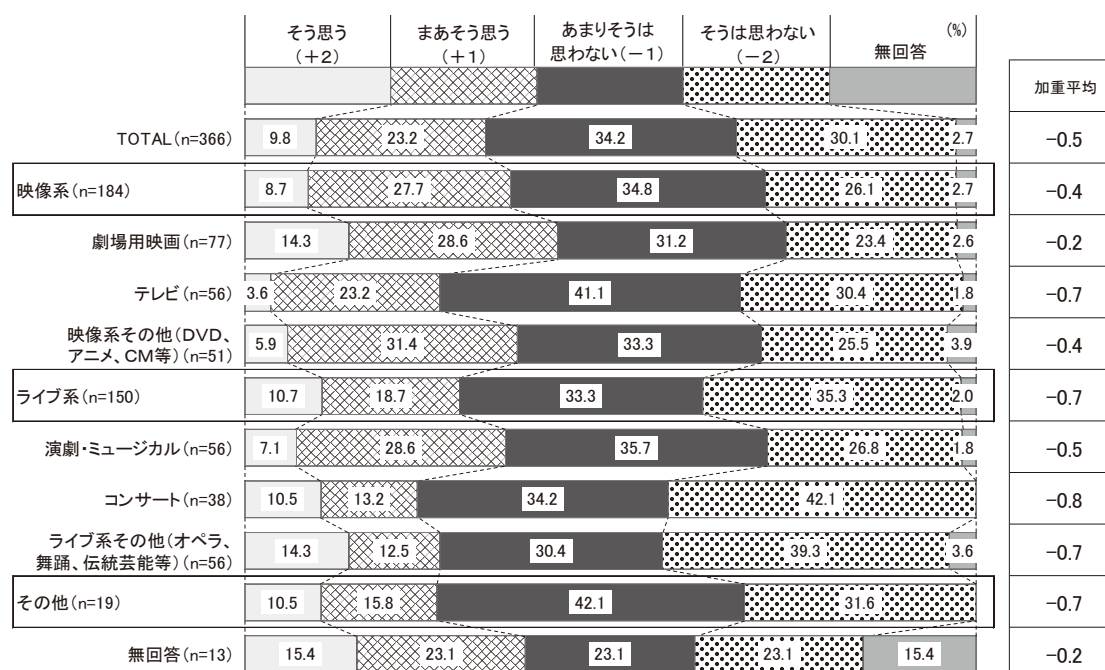
問 D-1 仕事に関する考え方 (7) (8) (ジャンル別)

(7) 自分のジャンルについては、これからも後継者が育っていくと思う



※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

(8) ハラスメントにあったことがある



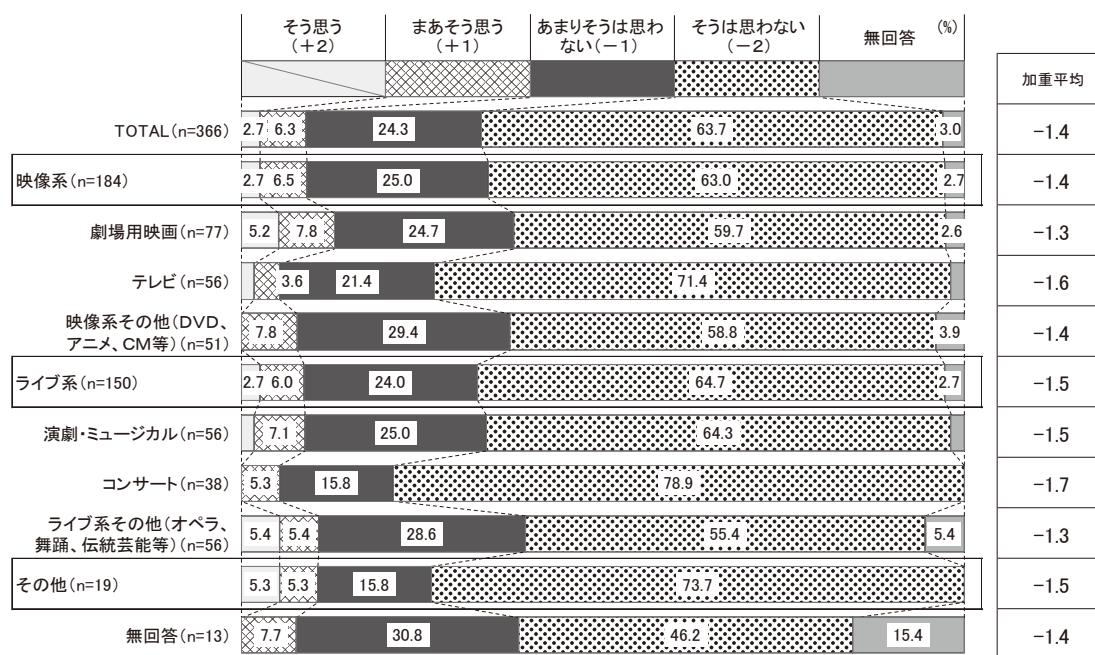
※「その他」は、サンプル数 30s 未満のため参考値扱いとする。

● D-1 仕事に関する考え方 (9) (ジャンル別)

「性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある」は「あまりそうは思わない／そうは思わない」の割合が約9割を占めています。「映像系」「ライブ系」では特に傾向差は見られません。

問 D-1 仕事に関する考え方 (9) (ジャンル別)

(9) 性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

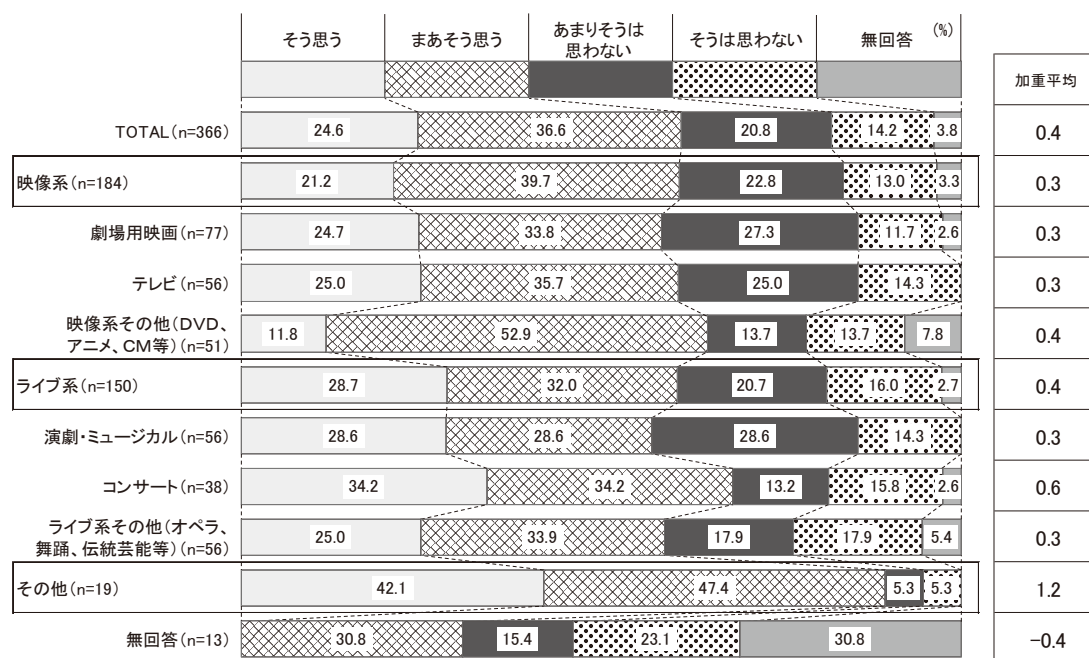
● B-6 仕事に関して当てはまること (a) (b) (ジャンル別)

「新しい機材や技術の導入によって戸惑うことがある」は「映像系」「ライブ系」では特に傾向差は見られませんが、「映像系その他（DVD、アニメ、CM等）」で「まああそう思う」が52.9%と高くなっています。

「新しい機材や技術に対応する為の研修機会は十分にある」は「ライブ系」は「そう思う」が13.3%、「映像系」は4.9%と、「ライブ系」の方が高くなっています。

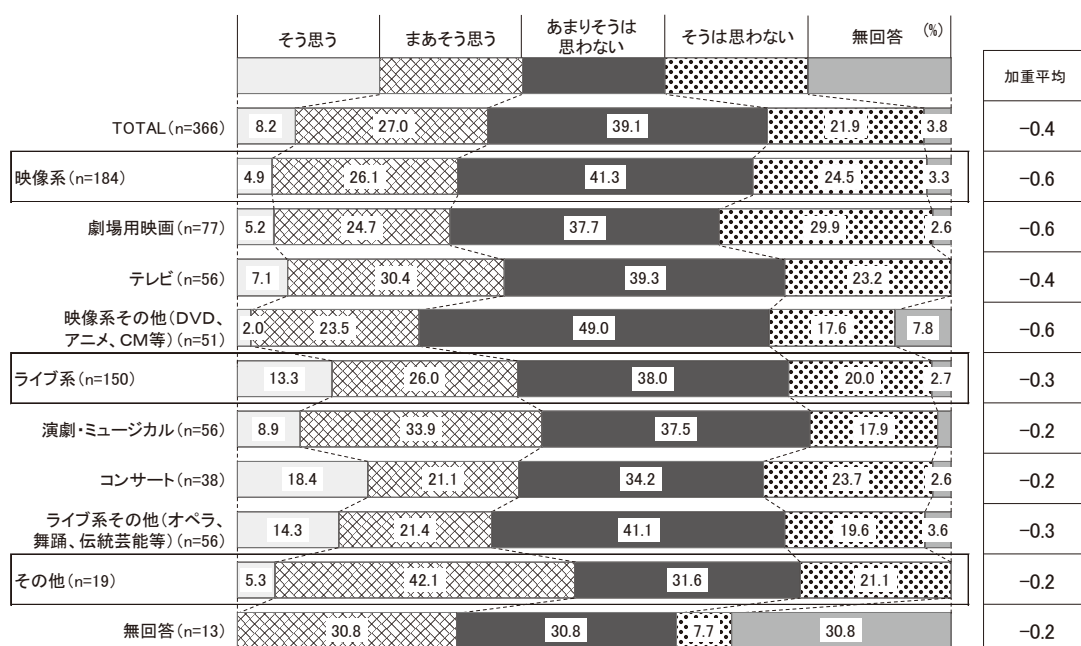
問 B-6 仕事に関して当てはまること (a) (b) (ジャンル別)

(a) 新しい機材や技術の導入によって戸惑うことがある



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

(b) 新しい機材や技術の導入に対応するための研修の機会は十分にある



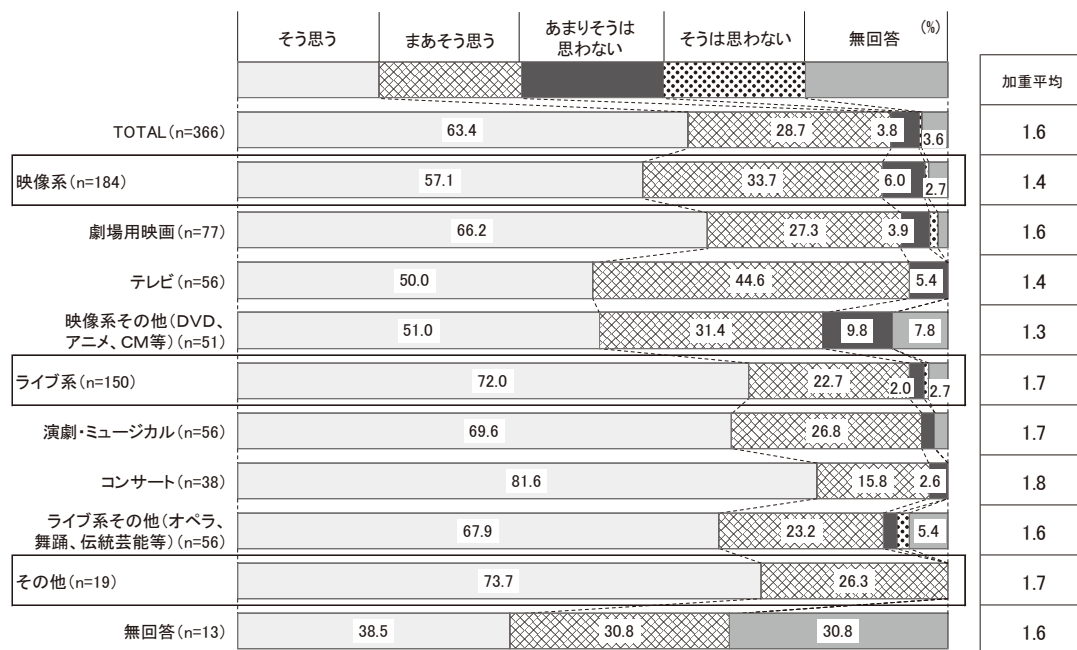
※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

● B-6 仕事に関して当てはまること (c) (ジャンル別)

「人材育成には基礎知識や創造性の涵養を重視すべき」は57.1%と、「ライブ系」が高くなっています。特に「コンサート」では81.6%と高くなっています。
 は「そう思う／まあそう思う」は9割を占めています。
 「ライブ系」は「そう思う」が72.0%に対し、「映像系」

問 B-6 仕事に関して当てはまること (c) (ジャンル別)

(c) 技術の進展が急速だからこそ、人材育成には、基盤となる基礎知識や創造性の涵養を重視すべきである



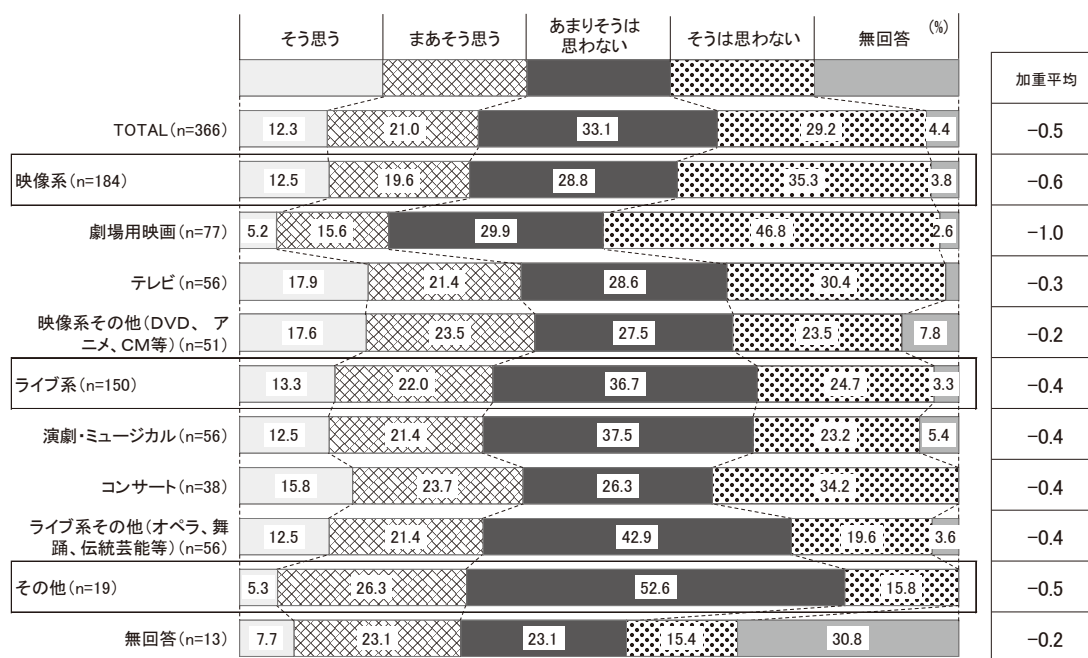
※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

● B-7 (a) 「働き方改革」での仕事環境の変化 (a) (b) (ジャンル別)

「長時間にわたって仕事をする日が減った」は、「あまりそうは思わない／そうは思わない」が62.3%と高く、「劇場用映画」が76.7%と高くなっています。「休みがとりやすくなった」は、同様に「劇場用映画」が79.3%と高くなっています。

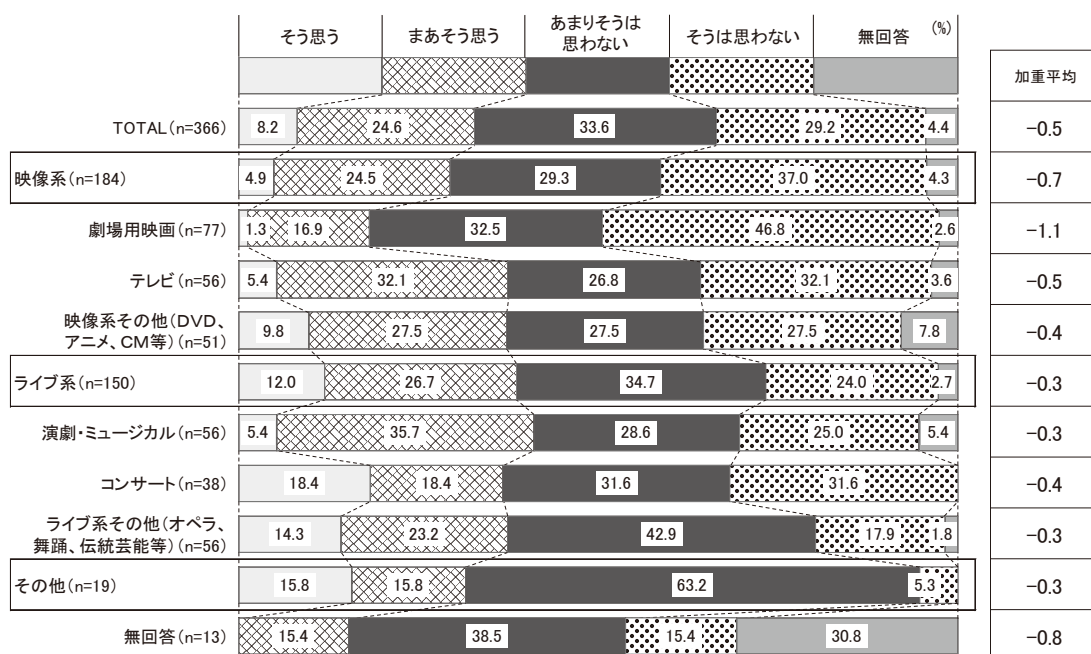
問 B-7 (a) 「働き方改革」での仕事環境の変化 (a) (b) (ジャンル別)

(a) 長時間労働を減らすように仕事のスケジュールが見直されて、自分自身、長時間にわたって仕事をする日が減った



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

(b) 長時間労働を減らすように仕事のスケジュールが見直されて、自分自身、休みがとりやすくなった



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

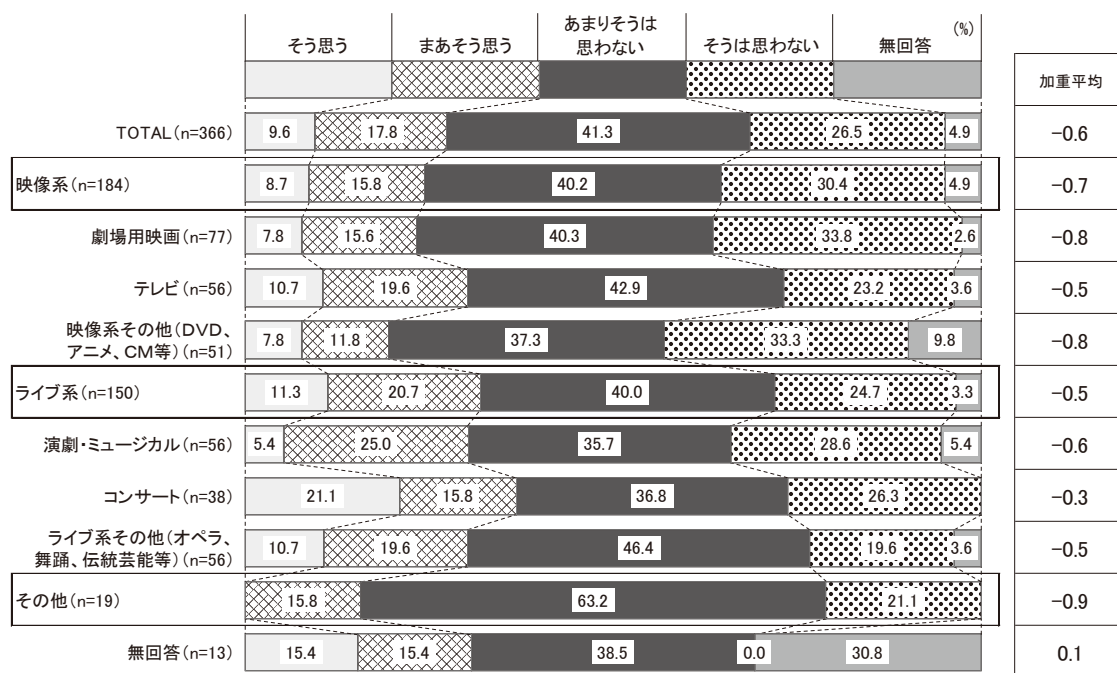
● B-7 (a) 「働き方改革」での仕事環境の変化 (c) (d) (ジャンル別)

「かえって忙しくなった」は、「そう思う／まあそう思う」の割合が27.4%で、「ライブ系」で32.0%となっています。

「働き方改革」の影響はない」は、「そう思う／まあそう思う」が49.2%となっており、特に「劇場用映画」では67.6%と高くなっています。

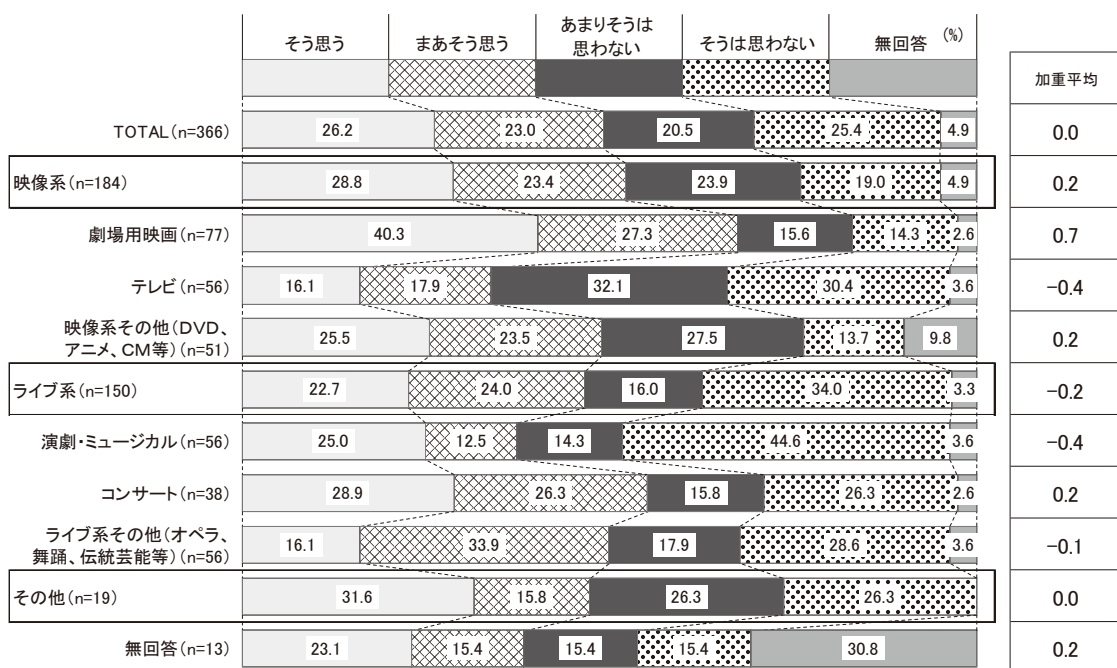
問 B-7 (a) 「働き方改革」での仕事環境の変化 (c) (d) (ジャンル別)

(c) 長時間労働を減らすように仕事のスケジュールが見直されて、自分自身はかえって忙しくなった



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

(d) 自分が関わっている仕事の現場では、「働き方改革」の影響はない



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

(4) より良い活動が続けていくために

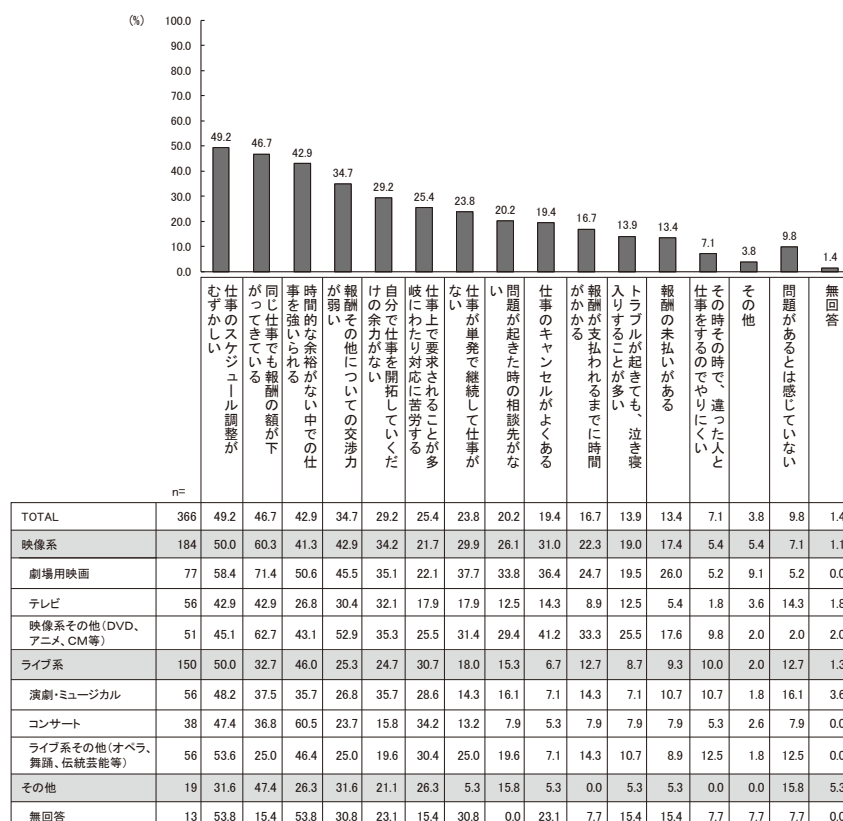
● C-1 仕事上の問題点 (MA)

現在抱えている仕事上の問題点として、「仕事のスケジュールの調整がむずかしい」が49.2%と最も高く、「同じ仕事でも報酬の額が下がってきている」が46.7%、「時間的な余裕がない中での仕事を強いられる」が42.9%と続いています。

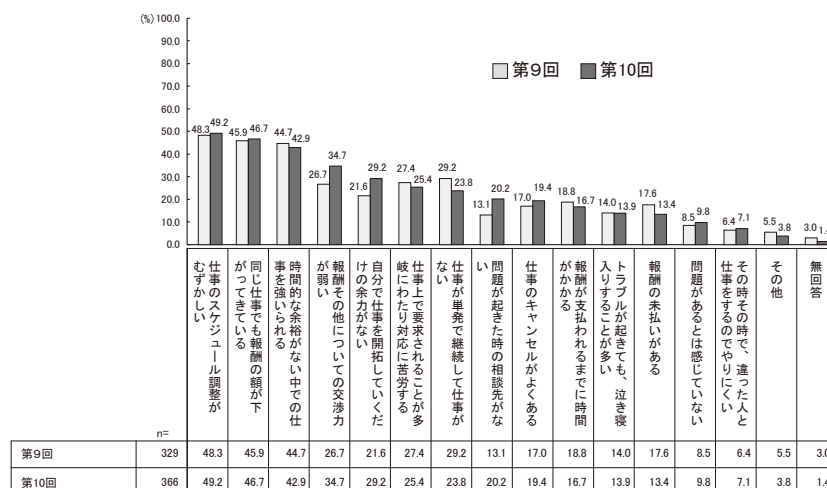
ジャンル別に見ると、「同じ仕事でも報酬の額が下が

ってきている」は「映像系」60.3%に対して「ライブ系」32.7%と、「映像系」が高くなっています。そのほかにも、「報酬その他についての交渉力が弱い」「自分で仕事を開拓していくだけの余力がない」「仕事が単発で継続して仕事がない」「仕事のキャンセルがよくある」などで「ライブ系」に比べて「映像系」の割合が高くなっています。

問 C-1 仕事上の問題点 (MA)



<参考> 第9回調査結果との比較



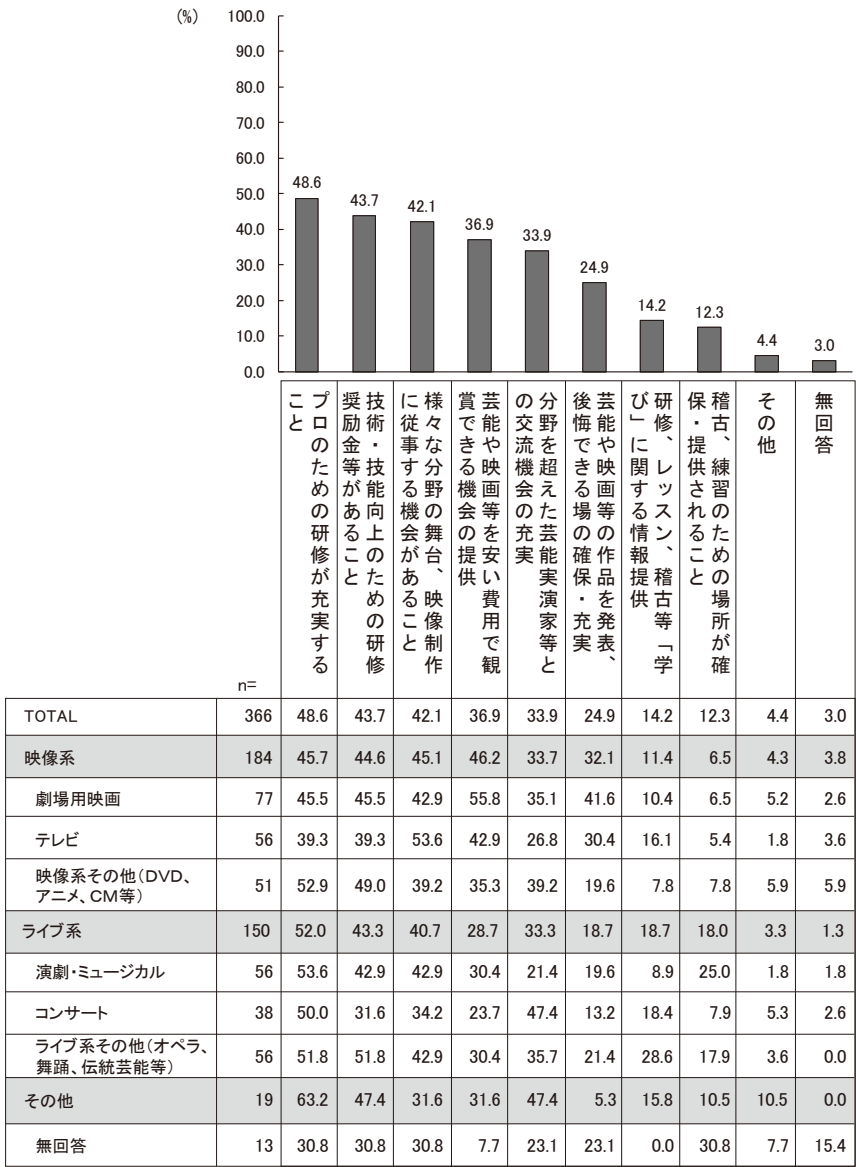
※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

● D-2 技術・技能を向上させるための必要条件（3LA）

技術・技能を向上させるための必要条件として、「プロのための研修が充実すること」が48.6%と最も高く、43.7%、「様々な分野の舞台、映画製作に従事する機会があること」が42.1%、となっています。

次いで「技術・技能向上のための研修奨励金等」が

問 D-2 技術・技能を向上させるための必要条件（3LA）



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

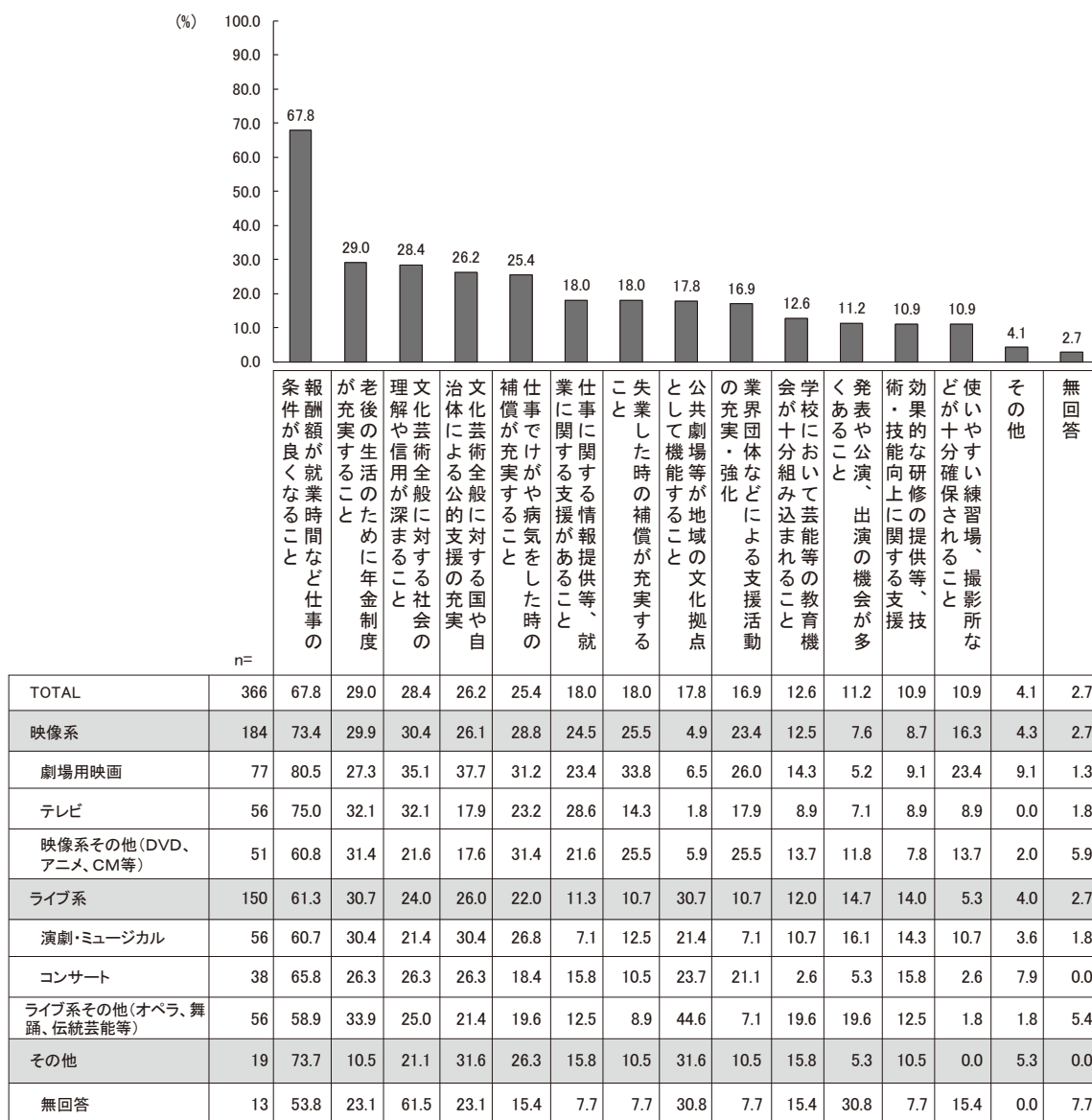
● D-3 安心して活動していくための必要条件（3LA）

安心して活動していくための必要条件は、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」が67.8%と最も高く、次いで、「老後の生活のために年金制度が充実すること」が29.0%、「文化芸術全般に対する社会の理

解や信用が深まること」が28.4%と高くなっています。

ジャンル別に見ると、「報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること」は「映像系」が73.4%、「ライブ系」が61.3%と、「映像系」が高くなっています。

問 D-3 安心して活動していくための必要条件（3 L A）



※サンプル数 30s 未満は参考値扱いとする。

卷末資料

調査票・集計結果

本調査で使用した芸能実演家用とスタッフ用の2種の調査票に、各設問毎の有効回答数を【n=】で示し、総回答数に占める割合をパーセンテージで表記、または平均の数値を示す形で集計結果を表示しています。

【巻末資料】調査票（実演家編）

第10回

芸能実演家やスタッフの活動実態についてのアンケート ＜実演家用＞

この調査は、日本芸能実演家団体協議会（芸団協）が1974年から5年ごとに実施している大規模調査で、舞台、映画、放送、CD、ビデオ、インターネットなど様々なメディア（以下、メディア）、教授・指導などに関わる芸能実演家やスタッフの活動実態を明らかにすることを目的としています。

調査結果は、俳優、歌手、演奏家、舞踊家、演芸家などの芸能実演家やスタッフの、仕事環境をよりよくするための基礎資料として活用されます。社会に対し芸能実演家やスタッフについての理解を深めてもらうために、また、法整備や文化予算拡充など、国や地方自治体への政策提言を行うために重要な調査です。今回は、特に実演家の仕事にかかわるインターネットの影響についての設問を含めており、社会状況の変化への対応を考える資料といたします。

調査結果は報告書にまとめて文化庁に提出されるほか、概要は、芸団協のホームページなどを通じて公開いたしますので、皆様にもご覧いただけます。

ご多忙のところ大変お手数ですが、本調査の趣旨をご理解の上、是非ともご協力くださいますようお願い申し上げます。

無記名でお答えいただきますので、回答から個人を特定することはできません

＊匿名でお答えいただき、調査の結果はすべて統計的に処理いたします。

皆さまにご迷惑をおかけすることは一切ございません。

この調査は、2019年度の文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」として、芸団協正会員団体および映画、放送関連団体などのご協力を得て実施しています。

この調査票を受け取られた実演家・スタッフご自身にて記入をお願いいたします
ご回答は、選択肢から選んで○をつけるか、数字を記入していただくようになっています
ご記入にあたっては、同封の「てびき」をご参照ください。

9月24日（火）までに、同封の返信用封筒（切手不要）でご投函ください。

この調査についてご質問等

＜調査に関して不明な点などあれば、遠慮なくお問い合わせください＞

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会〔芸団協〕

■オペラシティ事務所 担当：井上（た）、君塚

〒163-1466 東京都新宿区西新宿 3-20-2 東京オペラシティタワー11F TEL：03-5353-6600

■芸能花伝舎事務所（実演芸術振興部） 担当：米屋、藤原

〒160-8374 東京都新宿区西新宿 6-12-30 芸能花伝舎 2F TEL：03-5909-3060

E-mail：research@geidankyo.or.jp

A. ご自身と仕事との関わりについて伺います

問A-1 (a) 次のうち、現在あなた自身がたずさわっている分野の番号すべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=1,572】

《伝統演劇》	《洋楽》	《演芸》
1. 能楽(10.2%)	26. オーケストラ(12.0%)	51. 落語(5.7%)
2. 人形浄瑠璃・文楽(1.1%)	27. 室内楽(10.1%)	52. 講談(0.6%)
3. 組踊(1.0%)	28. オペラ・オペレッタ(6.3%)	53. 浪曲(0.8%)
4. 歌舞伎(3.7%)	29. 合唱(3.6%)	54. 漫才(1.8%)
《現代演劇》	30. ソロ(演奏)(9.2%)	55. 漫談(1.3%)
5. 現代演劇・新劇(12.7%)	31. ソロ(歌唱)(2.9%)	56. 奇術(1.5%)
6. 商業演劇(5.7%)	32. ジャズ(3.8%)	57. 曲芸・太神楽(0.8%)
7. 小劇場系演劇(8.5%)	33. J-POP・フォーク(4.3%)	58. クラウン(0.6%)
8. 児童・青少年演劇(6.6%)	34. ロック・ソウル・R&B(2.4%)	59. 物真似(0.5%)
9. 人形劇(2.4%)	35. ダンス・ヒップホップミュージック(1.8%)	60. 司会(4.2%)
10. 影絵(0.2%)	36. 民族音楽(1.8%)	61. その他の演芸(1.1%)
11. ミュージカル(5.9%)	37. 演歌・流行歌(3.6%)	《メディア、その他》
《邦楽》	38. その他の音楽(1.8%)	62. 映画(7.8%)
12. 雅楽(0.4%)	《舞踊など》	63. 放送(テレビ、ラジオ等)・スタジオ録音・スタジオ録画(19.8%)
13. 琵琶(1.0%)	39. 日本舞踊(14.0%)	64. オリジナルビデオ、PV(5.3%)
14. 義太夫(1.4%)	40. 琉球舞踊(0.8%)	65. 外画・アニメ吹き替え、ナレーション(6.7%)
15. 常磐津(1.6%)	41. バレエ(9.8%)	66. 殺陣・アクション・スタント(1.4%)
16. 清元(1.5%)	42. 現代舞踊・コンテンポラリーダンス(6.6%)	67. その他メディア(0.7%)
17. 新内(1.0%)	43. ジャズダンス(2.6%)	68. モデル(4.6%)
18. 古曲(2.7%)	44. 児童舞踊(1.5%)	69. ショー・イベント・プロモーション(6.3%)
19. 長唄(4.8%)	45. 舞踏(0.2%)	70. その他(1.4%)
20. 囃子(2.4%)	46. フラメンコ(1.8%)	無回答(2.6%)
21. 小唄(1.5%)	47. ベリーダンス(0.0%)	無回答(2.6%)
22. 三曲(6.9%)	48. その他の舞踊(1.5%)	
23. 民謡(1.6%)	49. パントマイム(1.1%)	
24. 現代邦楽(4.1%)	50. パフォーマンス(2.2%)	
25. 琉球古典音楽(1.4%)		

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に記入してください。【n=1,572】

問A-2 (a) あなたが現在お仕事でなさっていることを次の選択肢であてはまるものすべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=1,572】

1. 劇やドラマを演ずる(20.6%)	11. 脚本、台本を書く(9.2%)
2. 嘶す・読む・語るなどの芸を演ずる(18.6%)	12. 作詞、作曲・編曲をする(7.3%)
3. 楽器を演奏する(29.8%)	13. 振付け、演出、指揮などをする(19.3%)
4. 歌・唄・謡をうたう・語る(22.1%)	14. 舞台監督をする(3.7%)
5. 踊る・舞う(28.4%)	15. 美術、照明、音響などのプランをつくる(4.6%)
6. 人形をあやつる(2.2%)	16. 大道具、照明、音響などの操作をする(3.9%)
7. プロモーションなどで演ずる(4.3%)	17. 企画をたてる・制作をする(24.5%)
8. その他の実演(3.0%)	18. 主宰・運営・経営をする(24.3%)
9. 司会・レポートなどを行う(9.3%)	19. その他(5.1%)
10. 教える、指導をする(55.5%)	無回答(3.8%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に記入してください。【n=1,572】

問A-3 あなたがいまの仕事をしようになった動機は何ですか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=1,572】

1. その分野の芸を世襲している家で生まれ育ったから(8.3%)
 2. 世襲ではないが、家庭環境で自然に入った(16.9%)
 3. とにかくやりたかったから(41.5%)
 4. 自分の素質や才能を活かせると思ったから(32.4%)
 5. ごくあたり前の職業には就きたくなかったから(13.6%)
 6. 有名になりたい、目立つことがしてみたいと思ったから(8.1%)
 7. 実力しだいが高収入を得られるようになるから(3.7%)
 8. 芸能活動を通じて自分の主義・思想を伝えることができるから(12.7%)
 9. 先輩、友人、その他の影響を受けて(17.8%)
 10. 小さい時から芸能活動のための教育を受けたから(10.1%)
 11. 親・兄弟その他に勧められて(8.8%)
 12. スカウトされて(3.0%)
 13. オーディションを受けて合格したから(7.4%)
 14. 偶然・何となく(10.9%)
 15. その他(5.1%)
- 無回答(3.9%)

問A-4 あなたの芸歴、活動年数について伺います。

(a) いまの活動分野に関わりはじめてから何年ですか(習いはじめ・養成期間を含む)。

右の欄に年数を記入してください。(端数は6ヵ月単位で切上げ、切下げ。

ただし、1年未満の場合は「1」と記入してください。)【n=1,572】

平均 36.5 年

(b) 出演料、教授料など報酬を得るようになってから何年ですか。

右の欄に年数を記入してください。(端数は6ヵ月単位で切上げ、切下げ。

ただし、1年未満の場合は「1」と記入してください。)【n=1,572】

平均 25.9 年

問A-5 (a) あなたは、どのようにしていまの活動分野の技能を身につけましたか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=1,572】

1. 小さい時から先生についてレッスン、指導を受けた(36.1%)
 2. 親や親戚が同じ芸能活動をしていて小さい時から指導を受けた(14.0%)
 3. 小さい時から劇団や合唱団に入って訓練を受けた(2.9%)
 4. その道のプロに弟子入りをして教えを受けた(41.3%)
 5. 専門学校・教室・養成所などで教育を受けた(24.2%)
 6. その分野の専門の大学院、大学、短大で教育を受けた(19.1%)
 7. 学校や職場、地域などのサークル活動で技能を身につけた(14.0%)
 8. プロの仕事の手伝いやアルバイトで技能を身につけた(15.9%)
 9. 劇団・楽団などプロの集団に直接入って技能を身につけた(20.9%)
 10. 独学をした(16.2%)
 11. その他(3.6%)
- 無回答(2.7%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も重要だったと思うものの番号を右の欄に記入してください。【n=1,572】

B. ご自身の仕事について伺います

問B-1 (a) 次のうち、あなたが所属している集団、流派、組織等はどれですか。あてはまるもの
すべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=1,572】

1. 劇団、舞踊団・バレエ団、オペラ団、合唱団、オーケストラ、室内楽団、バンドなどの創造公演集団(32.4%)
2. 映画会社、興行会社、企画制作会社(3.6%)
3. 俳優、音楽、芸能などのマネジメント事務所、プロダクション(17.6%)
4. 協会・組合など(46.6%)
5. 芸を継承する流派・一門・社中(36.0%)
6. ライブハウス、クラブ、キャバレーに雇われている(0.4%)
7. 教室、研修所、学校などの教育機関(18.3%)
8. その他(2.4%)
9. フリー(10.8%)
- 無回答(2.9%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、あなたと最も関係の深いものの番号を右の欄
に記入してください。【n=1,572】

問B-2 (a) あなたが昨年(2018(平成 30)年 1 月から 12 月末まで)1年間に行なった芸能に関わる仕事とそれ以外の仕事について、あてはまるものの番号すべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=1,572】

(b) また、上記(a)で○印をつけたお仕事で昨年1年間にあなたが費やした日数をお答えください。
その際、1日の活動時間が数十分から数時間程度の仕事でも1日としてカウントしてください。

(a)昨年1年間に行った仕事(○印はいくつでも)		(b)日数
1. 舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演	76.5%	58.3日 【n=1,202】
2. 舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベント出演のための稽古(リハーサル、移動日を含む)	67.1%	84.4日 【n=1,055】
3. 映画・放送・メディアへの出演、演奏(テレビ、ラジオ出演、演奏、アテレコ、ビデオ出演、レコード・CD・テープなどのレコーディング、CM出演、印刷媒体への露出など)	27.3%	26.7日 【n=429】
3-1. 上記のうち、インターネットTVで配信される独自番組の収録	5.0%	11.7日 【n=78】
4. 映画・放送・メディアへの出演、演奏のための稽古(リハーサル、移動日を含む)	13.9%	29.1日 【n=218】
5. 振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など(自宅などで個人での作業を含む)	25.7%	89.1日 【n=404】
6. 企画・プロデュース・制作	22.3%	88.3日 【n=350】
7. 教える仕事(ワークショップ・体験指導も含む)	61.1%	102.3日 【n=961】
8. 芸能に関連するその他の活動(関連する講演、執筆、スタッフや組織などでの活動)	23.1%	61.8日 【n=363】
9. 技能を維持するための研鑽、トレーニング、仕事に必要なリサーチ、研究など	45.4%	144.1日 【n=713】
10. 芸能活動以外の仕事(事業経営、パート・アルバイトなど)	24.6%	160.0日 【n=387】
無回答	5.2%	

(日数の合計は 365 日を超えて構いません)

問B-3 あなたの仕事の機会は2～3年前に比べて増えていますか、減っていますか。

問B-2でお答えになった仕事の内容別に、あてはまるものいずれかひとつに○印をつけてください。

(○印は1つずつ)【n=1,572】

	大幅に増えた	増えた	変わらない	やや減った	大幅に減った	この仕事はしていない	無回答
(a)舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演【n=1202】	4.3%	24.5%	36.8%	18.2%	13.0%	0.7%	2.5%
(b)映画・放送・メディアへの出演、演奏（テレビ、ラジオ出演、演奏、アテレコ、ビデオ出演、レコード・CD・テープなどのレコーディング、CM出演、印刷媒体への露出など）【n=429】	2.3%	21.9%	36.4%	21.0%	13.5%	1.4%	3.5%
(b-1)上記のうち、インターネットTVで配信される独自番組の収録【n=404】	6.4%	25.6%	39.7%	2.6%	3.8%	12.8%	9.0%
(c)振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆など（自宅などで個人での作業を含む）【n=350】	5.9%	25.5%	44.8%	12.4%	5.2%	2.0%	4.2%
(d)企画・プロデュース・制作【n=961】	8.3%	29.1%	41.1%	8.9%	4.9%	2.6%	5.1%
(e)教える仕事（ワークショップ、体験指導も含む）【n=363】	8.0%	27.4%	40.3%	14.0%	6.9%	0.8%	2.6%
(f)芸能に関連するその他の活動（関連する講演、執筆、スタッフや組織などでの仕事）【n=387】	4.4%	27.3%	46.0%	7.7%	5.8%	2.5%	6.3%
(g)芸能活動以外の仕事（事業経営、パート・アルバイトなど）【n=78】	10.1%	15.0%	46.5%	14.7%	6.5%	2.6%	4.7%

★ 問A-2で「10.教える、指導をする」に○印を付けた方に伺います

* 教える仕事をされていない方は、次ページ、問B-6へ

問B-4 (a) あなたがなさっている教える仕事について、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=872】

(b) 【問B-4(a)で1、2に○印をつけた方にうかがいます。】現在、あなたが(a)の選択肢1、2の教授所で直接、継続的に教えている生徒(弟子)数は何名ですか。右の欄に、おおよその人数を記入してください。

(a)あなたがなさっている教える仕事 (○印はいくつでも)		(b)直接の生徒・弟子の数
1. 学校や教室、養成機関に勤めて(雇われて)教えている	54.5%	平均39.1人 【n=475】
2. 自分で教室を主宰したり、弟子をとって教えている	66.2%	平均23.6人 【n=577】
3. 不定期の仕事として、ときどき、体験指導などを依頼される	38.6%	
無回答	3.8%	

→ 問B-5 【問B-4(a)で、「1. 学校や教室、養成機関に勤めて(雇われて)教えている」に○印をつけた方にうかがいます。】(それ以外の方は問B-6へ)

あなたが勤めて(雇われて)いるのはどんな学校、教室ですか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=475】

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 大学・大学院 (22.9%) | 6. 民間企業や個人主催の音楽教室、バレエ教室等 (27.4%) |
| 2. 短大 (4.4%) | 7. 公立施設等で開催する入門講座、ワークショップ (18.3%) |
| 3. 専門学校 (6.5%) | 8. カルチャーセンター (25.3%) |
| 4. 小・中学・高校 (25.1%) | 9. その他 (7.2%) |
| 5. 劇団、舞踊団、プロダクションなどの付属養成機関 (18.3%) | |
| 無回答 (2.3%) | |

★ ここからはすべての方に伺います

問B-6 (a) あなた個人の昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)分の税込みの総収入(芸能以外の仕事による収入を含む)はおおよそいくらでしたか。あてはまるものに○印をつけてください。
(○印は1つ)【n=1,572】

1. 100万円未満(16.5%)	13. 1,200～1,300万円未満(0.7%)
2. 100～200万円未満(16.5%)	14. 1,300～1,400万円未満(0.4%)
3. 200～300万円未満(17.4%)	15. 1,400～1,500万円未満(0.4%)
4. 300～400万円未満(13.0%)	16. 1,500～1,600万円未満(0.3%)
5. 400～500万円未満(8.7%)	17. 1,600～1,700万円未満(0.0%)
6. 500～600万円未満(5.9%)	18. 1,700～1,800万円未満(0.3%)
7. 600～700万円未満(3.8%)	19. 1,800～1,900万円未満(0.0%)
8. 700～800万円未満(3.8%)	20. 1,900～2,000万円未満(0.3%)
9. 800～900万円未満(1.9%)	21. 2,000～2,500万円未満(0.4%)
10. 900～1,000万円未満(1.5%)	22. 2,500～3,000万円未満(0.1%)
11. 1,000～1,100万円未満(1.8%)	23. 3,000万円以上(0.5%)
12. 1,100～1,200万円未満(1.2%)	無回答(4.8%)

(b) あなたが昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)、実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費は、当該事業収入に対してどのくらいの割合でしたか。確定申告で、おおよそどのくらいの割合を必要経費に計上したか、あてはまるものに○印をつけてください。

(○印は1つ)【n=1,572】

1. 給与所得だけで確定申告はしていないので、所得控除の対象になった必要経費はない(21.2%)	
2. 20%未満(10.9%)	7. 60%～70%未満(6.2%)
3. 20%～30%未満(9.4%)	8. 70%～80%未満(4.6%)
4. 30%～40%未満(8.1%)	9. 80%～90%未満(2.4%)
5. 40%～50%未満(6.8%)	10. 90%以上(5.4%)
6. 50%～60%未満(7.0%)	11. 確定申告はしていない(10.3%)
	無回答(7.8%)

問B-7 あなた個人の昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)の年収を仕事の種別に分けると、どのような割合になりますか。おおよその割合を欄内に記入してください。【n=1,572】
(該当しない仕事の場合は「0」(ゼロ)を記入し、すべての項目の合計が 100 になるようにお答えください。小数点以下、四捨五入)

(a) 舞台、コンサート、ライブ、寄席、ショー、イベントなどへの出演	30.0%
(b) 映画・放送・メディアの仕事	4.7%
(c) 振付・演出・指揮、作曲、編曲、作詞、台本執筆・企画・プロデュース・制作	7.5%
(d) 教える(指導・教授)仕事	23.6%
(e) 原稿料、著作権料、著作隣接権料	1.0%
(f) 芸能に関連するその他の仕事	5.1%
(g) 不動産、その他の事業経営	2.7%
(h) 年金	10.7%
(i) 上記以外の収入	15.1%
合 計	100%

問B-8 あなたが得ている報酬を形式別に分けると、どのような割合になりますか。おおよその数字を欄内に記入してください。【n=1,572】
(該当しない場合は「0」(ゼロ)を記入し、すべての項目の合計が 100 になるようにお答えください。小数点以下、四捨五入)

(a) 月給、年俸などのあらかじめ決められた報酬	40.1%
(b) 仕事に応じて支払われる報酬 (月給、年俸などのあらかじめ決められたものでないもの)	57.7%
(c) その他-著作権料、著作隣接権料など	1.4%
合 計	100%

★ あなたのお仕事とインターネットの活用について伺います

問B-9 あなたは、自分の活動のプロモーションに、インターネットや SNS などを活用していますか。活用しているもの、あてはまるもの すべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも) 【n=1,572】

1. YouTube(12.2%)	5. LinkedIn(0.6%)	9. ホームページ、ブログを開設している(30.4%)
2. Twitter(23.0%)	6. TikTok(0.4%)	10. その他(1.3%)
3. Facebook(35.9%)	7. LINE(16.0%)	11. インターネットは活用していない(34.7%)
4. Instagram(17.9%)	8. ShowRoom(0.2%)	無回答(9.7%)

* 問 B-10～12 は、実演家の方のみにお答えいただきます。制作の方は P.9にお進みください。

問B-10(a) あなたは、CDのレコーディング、放送番組、劇場用映画に参加、出演する際に契約書を交わしていますか。あてはまるものに○印をつけてください。(○印は1つだけ) 【n=1,402】

1. 必ず契約書は交わしている(4.5%)
2. なるべく交わすようにしているがいつもではない(7.2%)
3. ときどき交わすことがある(14.9%)
4. 全く契約書は交わしていない(15.5%)
5. 所属事務所又はマネージャーに任せているので自分では確認していない(12.1%)
6. 舞台・コンサートや教授業を中心に活動しているため、レコーディング、放送番組、劇場用映画、インターネットで利用するための音楽・映像に参加、出演したことがない(21.2%)
無回答(24.7%)

(b)あなたは、(a)に掲げる以外のメディアで、インターネットで利用するための音楽・映像に参加、出演する際に契約書を交わしていますか。あてはまるものに○印をつけてください。

(○印は1つだけ)【n=1,402】

1. 必ず契約書は交わしている(2.6%)
2. なるべく交わすようにしているがいつもではない(4.2%)
3. ときどき交わすことがある(8.3%)
4. 全く契約書は交わしていない(15.2%)
5. 所属事務所又はマネージャーに任せているので自分では確認していない(10.6%)
6. 舞台・コンサートや教授業を中心に活動しているため、レコーディング、放送番組、劇場用映画、インターネットで利用するための音楽・映像に参加、出演したことがない(32.1%)
無回答(27.0%)

問B-11 あなたが参加、出演したレコード・CD、放送番組、劇場用映画がインターネットで利用される場合について、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)

【n=1,402】

1. 歌唱・演奏で参加したCDがインターネット配信に利用された際に、使用料・追加報酬を受け取ったことがある(4.3%)
 2. 出演したテレビ放送番組がインターネット配信に利用された際に、使用料・追加報酬を受け取ったことがある(9.3%)
 3. 出演した劇場用映画がインターネット配信に利用された際に、使用料・追加報酬を受け取ったことがある(3.2%)
 4. 歌唱・演奏で参加したCDや出演した劇場用映画・テレビ放送番組がインターネット配信に利用されたが、使用料・追加報酬を一切受け取ったことがない(6.1%)
 5. 歌唱・演奏で参加したCDや出演した劇場用映画・テレビ放送番組がインターネット配信に利用されたか分からない(11.2%)
 6. 所属事務所またはマネージャーに任せているので自分ではわからない(13.4%)
 7. 舞台・コンサートを中心に活動しているため、CD、劇場用映画、テレビ放送番組に参加したことがない(32.7%)
 8. その他(2.0%)
- 無回答(29.4%)

問B-12 あなたが参加、出演したインターネットで利用するための音楽・映像作品が、インターネット以外に利用される場合について、あてはまるものに○印をつけてください。

(○印は1つだけ)【n=1,402】

1. 参加、出演したインターネット用の音楽・映像が、劇場上映、テレビ・ラジオ放送、DVD化などインターネット以外に利用された際、使用料・追加報酬を受け取ったことがある(6.6%)
 2. 参加、出演したインターネット用の音楽・映像が、劇場上映、テレビ・ラジオ放送、DVD化などインターネット以外に利用された際、使用料・追加報酬を一切受け取ったことがない(4.1%)
 3. 参加、出演したインターネット用の音楽・映像が、インターネット以外に利用されたかわからない(10.9%)
 4. 所属事務所またはマネージャーに任せているので自分ではわからない(12.3%)
 5. 舞台・コンサートや教授業を中心に活動しているため、インターネット用の音楽・映像に参加、出演したことがない(37.9%)
- 無回答(28.2%)

C. 仕事をするうえでの環境や条件について伺います

ここからは、実演家、スタッフ、共通の質問です

問C-1 あなたが仕事をするうえで、どのような点に問題があると感じていますか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。**(○印はいくつでも)【n=1,572】**

1. 仕事のキャンセルがよくある(6.6%)
2. 仕事のスケジュールの調整がむずかしい(28.2%)
3. 自分で仕事を開拓していくだけの余力がない(29.1%)
4. その時その時で、違ったメンバーと仕事をするのでやりにくい(3.0%)
5. 仕事が単発で継続して仕事がない(24.7%)
6. 報酬その他についての交渉力が弱い(27.4%)
7. 報酬が支払われるまでに時間がかかる(10.8%)
8. 報酬の未払いがある(5.6%)
9. トラブルが起きても、泣き寝入りをする人が多い(6.5%)
10. 問題が起きた時の相談先がない(10.2%)
11. 時間的な余裕がない中での仕事を強いられる(13.7%)
12. 仕事上で要求されることが多岐にわたり対応に苦勞する(11.8%)
13. 同じ仕事でも報酬の額が下がってきている(17.5%)
14. その他(5.9%)
15. 問題があるとは思っていない(16.0%)
- 無回答(10.6%)

問C-2 あなたが仕事をするうえで必要な費用で、通常あなた個人の負担になっているものには、どのようなものがありますか(所属集団・流派・組織や依頼主、制作プロダクションが通常負担してくれないもの)。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=1,572】

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 衣裳などの購入、洗濯費、借用料(53.3%) | 10. 資格認定にともなう費用(12.2%) |
| 2. 整髪料、化粧品など(44.7%) | 11. 交通費(54.3%) |
| 3. 機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代(35.0%) | 12. 宿泊費(20.9%) |
| 4. 楽譜代・資料代(26.9%) | 13. 通信費(39.1%) |
| 5. チラシ、プログラムの印刷費(18.3%) | 14. 接待費・交際費(40.8%) |
| 6. 共演者に対する出演料、謝礼(20.2%) | 15. 身体ケア、ケガ・病気予防にともなう支出
(38.0%) |
| 7. ノルマのチケット売れ残りの自己負担
(23.7%) | 16. その他(2.4%) |
| 8. 会場の使用料(19.8%) | 17. 個人負担は特にない(8.2%) |
| 9. 技能習得などに支払う授業料(29.5%) | 無回答(6.0%) |

問C-3 あなたは昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)1年間に医師の治療が必要な
(a)仕事上の傷害(ケガ)、(b)仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験がありますか。
(○印は1つ)【n=1,572】

	経験した	しなかった	無回答
(a) 仕事上の傷害(ケガ)	9.4%	76.3%	14.3%
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など	17.0%	67.7%	15.3%

問C-4 【問C-3(a)で仕事上の傷害(ケガ)を「経験した」に○印をつけた方にうかがいます】
その傷害(ケガ)の治療費などの補償はどのようになりましたか。(○印は1つ)【n=148】

1. 自分で負担した(77.7%)	4. 自分が加入している傷害保険などの給付があった(6.1%)
2. 労災保険が適用された(2.7%)	5. その他(3.4%)
3. 所属している集団、仕事の依頼主等が負担した(6.8%)	無回答(3.4%)

問C-5 【問C-3(b)で仕事の原因と考えられる病気・症状などを「経験した」に○印をつけた方にうかがいます】
治療費などの負担はどのようになりましたか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=267】

1. 自分で負担した(92.1%)	4. 自分が加入している傷害保険などの給付があった(7.5%)
2. 労災保険が適用された(1.9%)	5. その他(1.5%)
3. 所属している集団、仕事の依頼主等が負担した(2.2%)	無回答(0.7%)

問C-6 (a) あなたは10年後も今の仕事を続けていると思いますか。【n=1,572】

1. はい(60.8%) 2. いいえ(33.2%) 無回答(6.0%)

→(b) 「いいえ」と回答した方におたずねします。続けていないと思われる主たる理由は何ですか。(○印は3つまで)【n=521】

1. 年齢的に現役でなくなると思うから(64.6%)	9. 所属先の事業の先行きが不透明だから(10.3%)
2. 体力的に続けられないと思うから(47.3%)	10. 自分にくる仕事が減っているから(9.2%)
3. 収入が低いから(19.3%)	11. 弟子、生徒の数が減っているから(17.8%)
4. 収入が安定しないから(13.4%)	12. 有期雇用なので続けられない(1.9%)
5. 仕事の人間関係がきびしいから(6.1%)	13. 育児など、家族の事情で(5.0%)
6. 関連する他の仕事に移行したいから(4.6%)	14. 介護など、家族の事情で(6.5%)
7. 転職したい仕事があるから(3.3%)	15. その他(6.3%)
8. この分野の仕事が先細りだと思うから(12.6%)	(具体的に) 無回答(0.6%)

D. 仕事や生活に対する意識について伺います

問D-1 あなたのご自分の仕事について、どのように思っていますか。また、お仕事の環境について、どうとらえていますか。あてはまるものに1つずつ○印をつけてください。

(○印は1つずつ)【n=1,572】

	そう 思う	まあ そう 思う	そう は 思 わ ない	あ ま り 思 わ ない	無 回 答
自分の仕事は世の中から評価されている	19.8%	45.2%	24.4%	5.6%	5.0%
自分が持つ能力を十分活用することができている	21.4%	48.3%	20.8%	4.8%	4.8%
自分の仕事にプライドを持っている	54.9%	35.4%	4.3%	0.8%	4.6%
今の自分の仕事には満足している	22.1%	41.3%	23.0%	8.5%	5.0%
入ってくる仕事のうち、自分がやりたくないと思う仕事は断ることができる	24.7%	27.9%	23.7%	18.1%	5.6%
芸術創造には時間をかけることが不可欠といえども、いわゆる「ワーク・ライフ・バランス」(仕事と生活のバランス)を考慮して、稽古、リハーサルの時間の見直し、改革が必要だ	20.2%	32.3%	30.4%	9.7%	7.4%
自分のジャンルについては、これからも後継者が育っていくと思う	25.3%	29.5%	29.0%	11.6%	4.7%
仕事の間では、弱い立場にたたされることが多く、いわゆるハラスメントにあったことがある	11.9%	17.2%	32.0%	33.2%	5.7%
性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある	3.6%	6.6%	23.3%	60.7%	5.7%

問D-2 あなたは、あなたの技術・技能を向上させるためのサポートとして何が必要だと思いますか。次のうち、特に必要と思うものを3つまで○印をつけてください。(○印は3つまで)【n=1,572】

1. プロのための研修が充実すること(34.2%)
 2. さまざまな分野の舞台、映像制作に仕事として携わる機会があること(30.5%)
 3. 芸能や映画などを安い費用で鑑賞できる機会が提供されること(25.9%)
 4. 芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実されること(31.1%)
 5. 稽古、練習のための場所が確保・提供されること(39.9%)
 6. 研修、レッスン、稽古など「学び」に関する情報が提供されること(20.2%)
 7. 技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあること(33.5%)
 8. 分野を超えて舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフ同士の交流の機会があること(24.6%)
 9. その他(4.5%)
- 無回答(7.1%)

問D-3 あなたが安心して活動に取り組めるようになるために、何が必要だと思いますか。次のうち、特に必要と思うもの3つまで〇印をつけてください。(〇印は3つまで)【n=1,572】

1. 発表や公演、出演の機会が多くあること(43.4%)
 2. 仕事に関する情報提供など、就業に関する支援があること(11.3%)
 3. 報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること(44.7%)
 4. 効果的な研修、レッスンの提供など、技術・技能向上に関する支援があること(14.5%)
 5. 使いやすい練習場、撮影所などが十分確保されること(15.7%)
 6. 失業した時の補償が充実すること(11.9%)
 7. 仕事でけがや病気をした時の補償が充実すること(15.7%)
 8. 老後の生活のために年金制度が充実すること(24.9%)
 9. 公共劇場や音楽堂などが整備され、地域の文化拠点として機能すること(16.0%)
 10. 学校における芸能や映画、放送などの教育機会が十分組み込まれること(21.1%)
 11. 芸能や映画、放送など文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること(22.1%)
 12. 芸能や映画、放送など文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること(26.9%)
 13. 業界団体などによる芸能や映画、放送などの活動を支援する活動が充実・強化されること(11.7%)
 14. その他(2.4%)(具体的に)
- 無回答(6.3%)

問D-4 あなたの分野の協会、連盟、協議会などの統括団体には、どのような役割を期待していますか。次のうち、特に重要と思うもの3つまで〇印をつけてください。

(〇印は3つまで)【n=1,572】

1. 仕事の機会を提供すること(43.6%)
 2. 仕事の条件を有利に交渉する後押しとなってくれること(28.0%)
 3. 仕事の環境、制度の改善につながるような情報発信、政策提言をしてくれること(32.1%)
 4. 老後や万が一の時に備えて、有利な保険や年金に加入ができること(24.2%)
 5. 稽古、リハーサルを提供すること(15.0%)
 6. 専門家としての研鑽・研修の機会を提供すること(22.1%)
 7. 仕事をしていく上で必要な仲間、人脈を得る場であること(24.0%)
 8. 仕事をしていく上で必要な専門情報を提供してくれること(14.4%)
 9. 次世代の育成に取り組むこと(38.1%)
 10. その他(2.4%)(具体的に)
- 無回答(6.6%)

E. あなたご自身のことについて伺います

問E-1 あなたの性別と年齢を記入してください。【n=1,572】

1. 男(43.4%)		
2. 女(50.1%)		53.4 歳
3. 答えたくない(3.4%)	無回答(3.1%)	

問E-2 あなたの最終学歴をお答えください。

(○印は1つだけ)【n=1,572】

1. 義務教育修了(2.8%)	4. 高専卒業(1.1%)	7. その他(2.7%)
2. 高校卒業(26.6%)	5. 短大卒業(9.0%)	
3. 専門学校卒業(7.1%)	6. 大学・大学院卒業(47.7%)	無回答(2.9%)

問E-3 (a) 現在、配偶者はいらっしゃいますか。

(○印は1つだけ)【n=1,572】

1. 配偶者あり(58.7%)	2. 配偶者なし(未婚)(27.9%)	3. 配偶者なし(離・死別)(10.6%)
		無回答(2.8%)

(b) お子さんはいらっしゃいますか。(○印は1つだけ)【n=1,572】

1. 子どもあり(49.5%)	2. 子どもなし(47.5%)	無回答(3.0%)
-----------------	-----------------	-----------

(c) 介護が必要なご家族はいらっしゃいますか。(○印は1つだけ)【n=1,572】

1. 要介護者 あり(15.5%)	2. 要介護者 なし(81.3%)	無回答(3.2%)
-------------------	-------------------	-----------

問E-4 (a) 現在一緒にお住まいのご家族は何人ですか(あなたご自身を含みます)。

(○印は1つだけ)【n=1,572】

1. 1人(22.6%)	3. 3人(21.8%)	5. 5人(4.1%)
2. 2人(33.8%)	4. 4人(12.4%)	6. 6人以上(2.5%)
		無回答(2.7%)

(b) あなたは世帯主ですか。

(○印は1つだけ)【n=1,572】

1. 自分が世帯主(58.9%)	2. 自分は世帯主ではない(37.9%)	無回答(3.2%)
------------------	----------------------	-----------

問E-5 あなたのご家族やご親戚に舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフの方がいらっしゃいますか。あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=1,572】

1. 父(5.6%)	4. 子ども(9.4%)	7. その他の家族・親戚(11.9%)
2. 母(5.2%)	5. 祖父母(2.1%)	8. 誰もいない(58.7%)
3. 配偶者(13.2%)	6. 兄弟姉妹(6.7%)	無回答(4.1%)

問E-6 現在、お住まいの都道府県をお答えください。【n=1,572】

	都 道 府 県
--	------------

問E-7 あなたは事故など万一の場合や老後の暮らしに対して、何らかの備えをしていますか。
次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=1,572】

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------|
| 1. 国民年金に加入している (54.6%) | 6. 株式や不動産などに投資をしている (10.2%) |
| 2. 厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している (34.6%) | 7. 芸能関係以外の事業を行っている (7.5%) |
| 3. その他民間の年金に加入している (12.5%) | 8. 備えをする経済的余裕がない (17.8%) |
| 4. 生命保険や損害保険などに加入している (56.9%) | 9. まったく考えていない (2.0%) |
| 5. 貯蓄をしている (32.8%) | 無回答 (3.7%) |

* 芸団協や所属団体などに行なってほしい舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフの仕事環境改善に必要なこと、その他のご意見、ご要望がありましたら、何でもご自由にお書きください。

設問は以上です。ご協力大変ありがとうございました。

同封の返信用封筒でご返送ください。(切手は不要です)

第 10 回

芸能実演家やスタッフの活動実態についてのアンケート ＜スタッフ用＞

この調査は、日本芸能実演家団体協議会（芸団協）が 1974 年から 5 年ごとに実施している大規模調査で、舞台、映画、放送、CD、ビデオ、インターネットなど様々なメディア（以下、メディア）、教授・指導などに関わる芸能実演家やスタッフの活動実態を明らかにすることを目的としています。

調査結果は、俳優、歌手、演奏家、舞踊家、演芸家などの芸能実演家やスタッフの、仕事環境をよりよくするための基礎資料として活用されます。社会に対し芸能実演家やスタッフについての理解を深めてもらうために、また、法整備や文化予算拡充など、国や地方自治体への政策提言を行うために重要な調査です。調査結果は報告書にまとめて文化庁に提出されるほか、概要は、芸団協のホームページなどを通じて公開いたしますので、皆様にもご覧いただけます。

ご多忙のところ大変お手数ですが、本調査の趣旨をご理解の上、是非ともご協力くださいますようお願い申し上げます。

無記名でお答えいただきますので、回答から個人を特定することはできません

＊匿名でお答えいただき、調査の結果はすべて統計的に処理いたします。

皆さまにご迷惑をおかけすることは一切ございません。

この調査は、2019 年度の文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」として、芸団協正会員団体および映画、放送関連団体などのご協力を得て実施しています。

この調査票を受け取られた実演家・スタッフご自身にて記入をお願いいたします。
ご回答は、選択肢から選んで○をつけるか、数字を記入していただくようになっています。
ご記入にあたっては、同封の「てびき」をご参照ください。

9月 24 日(火)までに、同封の返信用封筒(切手不要)でご投函ください。

この調査についてご質問等

＜調査に関して不明な点などあれば、遠慮なくお問い合わせください＞

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会〔芸団協〕

■オペラシティ事務所 担当：井上(た)、君塚

〒163-1466 東京都新宿区西新宿 3-20-2 東京オペラシティタワー 11F TEL：03-5353-6600

■芸能花伝舎事務所(実演芸術振興部) 担当：米屋、藤原

〒160-8374 東京都新宿区西新宿 6-12-30 芸能花伝舎 2F TEL：03-5909-3060

E-mail:research@geidankyo.or.jp

A. ご自身と仕事との関わりについて伺います

問A-1 (a) 次のうち、あなたが現在たずさわっている活動分野の番号すべてに○印をつけてください。
(○印はいくつでも)【n=366】

1. 劇場用映画(36.9%)	8. ラジオ(4.4%)	15. 伝統芸能(24.0%)
2. PR・教育・記録映画(17.8%)	9. CM(24.6%)	16. 演芸(16.7%)
3. アニメ(3.3%)	10. レコーディング(6.8%)	17. ショー・イベント・プロ モーション(27.6%)
4. ビデオ・DVD(16.9%)	11. 演劇・ミュージカル(41.3%)	18. その他(10.1%)
5. ミュージック・ビデオ(12.0%)	12. コンサート(35.5%)	無回答(0.8%)
6. テレビ(41.8%)	13. オペラ(16.9%)	
7. インターネットTV(15.0%)	14. バレエ・舞踊(30.9%)	

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に
記入してください。【n=366】

問A-2 (a) 次のうち、あなたが現在たずさわっている職種すべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=366】

1. プロデューサー(9.3%)	10. 音響効果(14.2%)	19. 特撮・特殊映像(2.2%)
2. ディレクター(10.4%)	11. 舞台音響(18.3%)	20. 特殊効果(2.5%)
3. 映画監督(6.6%)	12. 編集(9.6%)	21. アクション指導・構成(0.3%)
4. 舞台監督(15.3%)	13. スクリプター(1.9%)	22. 製作進行(4.6%)
5. 技術監督(8.7%)	14. 美術(7.4%)	23. プロダクションマネージャー (3.6%)
6. 助監督・アシスタントディレクター (0.8%)	15. 大道具(8.5%)	24. 舞台・スタジオ機構(10.9%)
7. 撮影(14.8%)	16. 小道具(3.6%)	25. ホール・劇場管理(27.9%)
8. 照明(42.6%)	17. 衣裳(0.5%)	26. その他(5.5%)
9. 録音・整音(調音)(15.3%)	18. メイキャップ・結髪 (0.0%)	無回答(0.5%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に
記入してください。【n=366】

問A-3 (a) 次のうち、あなたが現在たずさわっている職務すべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=366】

1. 指揮・監督(20.2%)	6. 施設や設備の操作・管理(32.5%)
2. デザイナー・プランナー(36.1%)	7. 運営や進行の管理(15.6%)
3. 技師、担当部門の責任者(56.3%)	8. 学校等で教える(21.0%) → 次頁(c)にも回答を
4. 助手(18.3%)	9. 経営・運営(18.9%)
5. オペレーター(38.5%)	10. その他(1.6%) (具体的に)
	無回答(1.6%)

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に
記入してください。【n=366】

(c) 【問 A-3(a)で「8. 学校等で教える」に○印をつけた方にうかがいます。】

(昨年、教える仕事をしなかった方は、問A-4に進んでください)

あなたが勤めて(雇われて)いるのはどんな学校、教室、機関ですか。

次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=77】

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 大学・大学院(44.2%) | 5. 海外の大学・養成機関など(2.6%) |
| 2. 短大(3.9%) | 6. 公立施設などで開催する入門講座、ワークショップ(16.9%) |
| 3. 専門学校(31.2%) | 7. カルチャーセンター(0.0%) |
| 4. 養成機関(協会等が主催の専門的講座を含む)(22.1%) | 8. その他(7.8%) |
| 無回答(5.2%) | |

★ ここからはすべての方に伺います

問A-4 あなたが舞台、映画、放送に関わる仕事で報酬を得るようになってからの年数を整数でお答えください。(端数は6ヵ月単位で切上げ、切下げ。ただし、1年未満の場合は「1」と記入してください。)**【n=366】**

経験年数 32.7 年

問A-5 (a) あなたは、どのようにして現在の活動分野の技術・職能を身につけましたか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)**【n=366】**

- | |
|---|
| 1. 専門学校・教室・養成所などで教育を受けた(34.7%) |
| 2. 専門の大学院、大学、短大で教育を受けた(13.1%) |
| 3. 学校や職場、地域などのサークル活動で技能を身につけた(17.5%) |
| 4. 舞台技術会社や劇団、撮影所、製作プロダクションなどに入って技能を身につけた(52.2%) |
| 5. フリー契約やアルバイトなど現場の経験を経ながら技能を身につけた(49.7%) |
| 6. 自主制作で技能を身につけた(12.3%) |
| 7. その他(3.0%) (<small>具体的</small>) |
| 無回答(3.6%) |

(b) 上記(a)で○印をつけたもののうち、最も比重が大きいものの番号を右の欄に記入してください。**【n=366】**

B. ご自身の仕事について伺います

- 問B-1 (a) あなたが昨年(2018(平成 30)年 1 月から 12 月末まで)1年間にたずさわった仕事について、あてはまるものの番号**すべてに○印**をつけてください。(○印はいくつでも)【n=366】
- (b) あわせて、昨年1年間にたずさわった本数をお答えください。【n=366】
- (c) また、それぞれの活動で昨年(2018(平成 30)年)1年間にあなたが費やした日数をお答えください。その際、1日の活動時間が数十分から数時間程度の仕事でも、1日としてカウントしてください。(日数の合計は 365 日を超えて構いません)【n=366】

	(a)たずさわった仕事 すべてに○を記入	(b)本数	(c)日数
1. 劇場用映画	29.5%	2.9本【n=108】	119.8 日
2. PR・教育・記録映画	10.4%	17.3本【n=38】	30.6 日
3. アニメ	2.7%	3.5本【n=10】	91.7 日
4. ビデオ・DVD	7.9%	6.7本【n=29】	16.4 日
5. ミュージックビデオ	6.6%	4.5本【n=24】	17.0 日
6. テレビ	32.0%	27.7本【n=117】	102.9 日
7. インターネットTV	6.8%	7.6本【n=25】	43.2 日
8. ラジオ	3.6%	11.0本【n=13】	21.4 日
9. CM	19.4%	15.2本【n=71】	42.0 日
10. レコーディング	5.2%	11.1本【n=19】	65.5 日
11. 演劇・ミュージカル	33.9%	8.5本【n=124】	80.3 日
12. コンサート	28.4%	23.1本【n=104】	37.8 日
13. オペラ	10.1%	2.3本【n=37】	20.1 日
14. バレエ・舞踊	26.5%	11.3本【n=97】	32.0 日
15. 伝統芸能	19.1%	5.1本【n=70】	15.7 日
16. 演芸	11.7%	5.9本【n=43】	11.5 日
17. ショー・イベント	29.5%	11.7本【n=108】	32.7 日
18. その他 (具体的に)	14.5%	38.3本【n=53】	109.8 日
無回答	5.2%		

- 問B-2 あなたの仕事の機会は2～3年前に比べて増えていますか、減っていますか。仕事の内容別にあてはまるものに**1つつ○印**をつけてください。(○印は1つつ)【n=366】

	増え 大幅に	増え た	変 わ ら ない	減 った や や	減 った 大 幅に	こ の し じ は し て い ない	無 回 答
(a) 劇場用映画	4.6%	17.6%	38.9%	17.6%	18.5%	2.8%	0.0%
(b) PR・教育・記録映画	0.0%	10.5%	34.2%	23.7%	21.1%	0.0%	10.5%
(c) アニメ	20.0%	20.0%	30.0%	10.0%	10.0%	10.0%	0.0%
(d) ビデオ・DVD	0.0%	3.4%	31.0%	34.5%	24.1%	0.0%	6.9%
(e) ミュージックビデオ	0.0%	12.5%	37.5%	12.5%	25.0%	4.2%	8.3%
(f) テレビ	4.3%	12.0%	40.2%	21.4%	15.4%	1.7%	5.1%
(g) インターネットTV	16.0%	40.0%	12.0%	16.0%	8.0%	0.0%	8.0%
(h) ラジオ	0.0%	0.0%	61.5%	15.4%	15.4%	0.0%	7.7%
(i) CM	4.2%	15.5%	23.9%	16.9%	33.8%	2.8%	2.8%
(j) レコーディング	0.0%	5.3%	47.4%	31.6%	15.8%	0.0%	0.0%
(k) 演劇・ミュージカル	3.2%	13.7%	50.0%	17.7%	12.9%	0.0%	2.4%
(l) コンサート	1.0%	13.5%	50.0%	26.0%	7.7%	1.0%	1.0%
(m) オペラ	5.4%	5.4%	48.6%	10.8%	21.6%	2.7%	5.4%
(n) バレエ・舞踊	1.0%	18.6%	47.4%	19.6%	12.4%	0.0%	1.0%
(o) 伝統芸能	0.0%	2.9%	57.1%	22.9%	14.3%	0.0%	2.9%
(p) 演芸	0.0%	9.3%	58.1%	25.6%	4.7%	0.0%	2.3%
(q) ショー・イベント	2.8%	13.9%	49.1%	23.1%	5.6%	0.0%	5.6%
(r) その他	1.9%	15.1%	34.0%	17.0%	7.5%	0.0%	24.5%

問B-3 (a) あなた個人の昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)分の税込みの総収入はいくらでしたか。あてはまるものに○印をつけてください。
(舞台・映画・放送メディアスタッフ以外の仕事による収入を含む)

(○印は1つ)【n=366】

1. 100万円未満(3.6%)	13. 1,200～1,300万円未満(0.8%)
2. 100～200万円未満(3.3%)	14. 1,300～1,400万円未満(0.8%)
3. 200～300万円未満(10.7%)	15. 1,400～1,500万円未満(0.5%)
4. 300～400万円未満(14.2%)	16. 1,500～1,600万円未満(0.5%)
5. 400～500万円未満(16.9%)	17. 1,600～1,700万円未満(0.0%)
6. 500～600万円未満(12.6%)	18. 1,700～1,800万円未満(0.3%)
7. 600～700万円未満(9.3%)	19. 1,800～1,900万円未満(0.5%)
8. 700～800万円未満(6.6%)	20. 1,900～2,000万円未満(0.3%)
9. 800～900万円未満(5.2%)	21. 2,000～2,500万円未満(0.5%)
10. 900～1,000万円未満(5.2%)	22. 2,500～3,000万円未満(0.8%)
11. 1,000～1,100万円未満(2.5%)	23. 3,000万円以上(0.8%)
12. 1,100～1,200万円未満(2.5%)	無回答(1.6%)

(b) あなたが昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)、実演芸術にかかる仕事のために自らが負担した必要経費は、当該事業収入に対してどのくらいの割合でしたか。確定申告で、おおよそどのくらいの割合を必要経費に計上したか、あてはまるものに○印をつけてください。

(○印は1つ)【n=366】

1. 給与所得だけで確定申告はしていないので、所得控除の対象になった必要経費はない(32.5%)	
2. 20%未満(13.1%)	7. 60%～70%未満(3.3%)
3. 20%～30%未満(8.7%)	8. 70%～80%未満(3.8%)
4. 30%～40%未満(12.0%)	9. 80%～90%未満(1.1%)
5. 40%～50%未満(7.9%)	10. 90%以上(1.1%)
6. 50%～60%未満(5.7%)	11. 確定申告はしていない(7.7%)
	無回答(3.0%)

問B-4 あなた個人の昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)の総収入を活動別に分けると、どのような割合になりますか。おおよその割合を欄内に記入してください。
(該当しない活動の場合は「0」(ゼロ)と記入し、すべての項目の合計が 100 になるようにお答えください。小数点以下、四捨五入)【n=366】

(a)舞台、映画、放送に関わるスタッフとして	61.4%
(b)演出・台本書き・企画・プロデュース・制作	4.4%
(c)教える(教授・指導)仕事	5.0%
(d)舞台、映画、放送に関するその他の仕事	13.5%
(e)不動産、その他の事業	2.0%
(f) 年金	6.7%
(g)上記以外の収入	7.4%
合 計	100%

問B-5 (a) あなたの雇用形態はどれですか。次のうち、あてはまるものに○印をつけてください。
(○印は1つ)【n=366】

1. 正社員・正職員(31.1%)	4. 会社を経営(17.2%)
2. 契約社員 (7.4%)	5. その他(1.6%)
3. フリーランス (41.0%)	(具体的に)
	無回答(1.6%)

(1、4、5を選択した方は次のページへ)

→(b) 【(a)で「2. 契約社員」「3. フリーランス」に○印をつけた方にうかがいます。】
あなたの契約形態で最も多いものはどのケースですか。(○印は1つ)【n=177】

1. 作品契約(52.5%)	5. 週単位(0.0%)
2. 本数契約(2.8%)	6. 1日単位(15.3%)
3. 年契約(14.1%)	7. その他(2.3%)
4. 月単位(7.3%)	無回答(5.6%)

→(c) 【(a)で「2. 契約社員」「3. フリーランス」に○印をつけた方にうかがいます。】
昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)、あなたに仕事をする意思があっても仕事が入らず、スケジュールが空いた日数は合計すると、おおよそ何日間ですか。【n=177】

105.4

日間

問 B-6 あなたの仕事に関連して、あてはまるものに1つずつ〇印をつけてください。

(〇印は1つずつ)【n=366】

	そう 思う	まあ そう 思う	あまり そう は 思 わ な い	そう は 思 わ な い	無 回 答
(a) 新しい機材や技術の導入によって戸惑うことがある	24.6%	36.6%	20.8%	14.2%	3.8%
(b) 新しい機材や技術の導入に対応するための研修の機会は十分にある	8.2%	27.0%	39.1%	21.9%	3.8%
(c) 技術の進展が急速だからこそ、人材育成には、基盤となる基礎知識や創造性の涵養を重視すべきである	63.4%	28.7%	3.8%	0.5%	3.6%

問 B-7(a) あなたの仕事の現場で「働き方改革」は進んでいますか。仕事環境の変化について、あてはまるものに1つずつ〇印をつけてください。

(〇印は1つずつ)【n=366】

	そう思う	まあそう思う	あまりそうは思わない	そうは思わない	無回答
(a) 長時間労働を減らすように仕事のスケジュールが見直されて、自分自身、長時間にわたって仕事をする日が減った。	12.3%	21.0%	33.1%	29.2%	4.4%
(b) 長時間労働を減らすように仕事のスケジュールが見直されて、自分自身、休みがとりやすくなった。	8.2%	24.6%	33.6%	29.2%	4.4%
(c) 長時間労働を減らすように仕事のスケジュールが見直されて、自分自身はかえって忙しくなった。	9.6%	17.8%	41.3%	26.5%	4.9%
(d) 自分が関わっている仕事の現場では、「働き方改革」の影響はない。	26.2%	23.0%	20.5%	25.4%	4.9%

(b) あなたの仕事の現場で、「働き方改革」によって上記(a)～(c)以外に影響がありましたら、具体的にお答えください。

C. 仕事をするうえでの環境や条件について伺います

ここからは、実演家、スタッフ、共通の質問です。

問C-1 あなたが仕事をするうえで、どのような点に問題があると感じていますか。次のうち、あてはまるものすべてに〇印をつけてください。**(〇印はいくつでも)【n=366】**

1. 仕事のキャンセルがよくある(19.4%)
 2. 仕事のスケジュールの調整がむずかしい(49.2%)
 3. 自分で仕事を開拓していただく余力がない(29.2%)
 4. その時その時で、違ったメンバーと仕事をするのでやりにくい(7.1%)
 5. 仕事が単発で継続して仕事がない(23.8%)
 6. 報酬その他についての交渉力が弱い(34.7%)
 7. 報酬が支払われるまでに時間がかかる(16.7%)
 8. 報酬の未払いがある(13.4%)
 9. トラブルが起きても、泣き寝入りをする人が多い(13.9%)
 10. 問題が起きた時の相談先がない(20.2%)
 11. 時間的な余裕がない中での仕事を強いられる(42.9%)
 12. 仕事上で要求されることが多岐にわたり対応に苦勞する(25.4%)
 13. 同じ仕事でも報酬の額が下がってきている(46.7%)
 14. その他(3.8%)(具体的に))
 15. 問題があるとは思っていない(9.8%)
- 無回答(1.4%)

問C-2 あなたが仕事をするうえで必要な費用で、通常あなた個人の負担になっているものには、どのようなものがありますか(所属集団・流派・組織や依頼主、制作プロダクションが通常負担してくれないもの)。次のうち、あてはまるものすべてに〇印をつけてください。

(〇印はいくつでも)【n=366】

- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| 1. 衣裳などの購入、洗濯費、借用料(6.0%) | 10. 資格認定にともなう費用(17.5%) |
| 2. 整髪料、化粧品など(5.5%) | 11. 交通費(42.3%) |
| 3. 機材、楽器・道具の購入費、修理費、付随する消耗品代(31.1%) | 12. 宿泊費(7.4%) |
| 4. 楽譜代・資料代(5.7%) | 13. 通信費(39.9%) |
| 5. チラシ、プログラムの印刷費(1.1%) | 14. 接待費・交際費(36.9%) |
| 6. 共演者に対する出演料、謝礼(1.1%) | 15. 身体ケア、ケガ・病氣予防にともなう支出(23.2%) |
| 7. ノルマのチケット売れ残りの自己負担(1.1%) | 16. その他(2.2%) |
| 8. 会場の使用料(1.1%) | 17. 個人負担は特にない(23.5%) |
| 9. 技能習得などに支払う授業料(16.4%) | 無回答(1.9%) |

問C-3 あなたは昨年(2018(平成30)年1月から12月末まで)1年間に医師の治療が必要な
(a)仕事上の傷害(ケガ)、(b)仕事の原因と考えられる病気・症状などの経験がありますか。

(○印は1つつ)【n=366】

	経験した	経験しなかった	無回答
(a) 仕事上の傷害(ケガ)	7.1%	86.3%	6.6%
(b) 仕事の原因と考えられる病気・症状など	12.6%	77.6%	9.8%

問C-4 【問C-3(a)で仕事上の傷害(ケガ)を「経験した」に○印をつけた方にうかがいます】
その傷害(ケガ)の治療費などの補償はどのようになりましたか。(○印は1つつ)【n=26】

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. 自分で負担した(42.3%) | 4. 自分が加入している傷害保険などの給付があった(7.7%) |
| 2. 労災保険が適用された(34.6%) | 5. その他(0.0%) |
| 3. 所属している集団、仕事の依頼主等が負担した(11.5%) | 無回答(3.8%) |

問C-5 【問C-3(b)で仕事の原因と考えられる病気・症状などを「経験した」に○印をつけた方にうかがいます】
治療費などの負担はどのようになりましたか。次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。(○印はいくつでも)【n=46】

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1. 自分で負担した(84.8%) | 4. 自分が加入している傷害保険などの給付があった(13.0%) |
| 2. 労災保険が適用された(4.3%) | 5. その他(4.3%) |
| 3. 所属している集団、仕事の依頼主等が負担した(2.2%) | 無回答(0.0%) |

問C-6 (a) あなたは10年後も今の仕事を続けていると思いますか。【n=366】

- | | | |
|--------------|---------------|-----------|
| 1. はい(48.1%) | 2. いいえ(50.0%) | 無回答(1.9%) |
|--------------|---------------|-----------|

→(b) 「いいえ」と回答した方におたずねします。続けていないと思われる主たる理由は何ですか。(○印は3つまで)【n=183】

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 年齢的に現役でなくなると思うから(83.6%) | 9. 所属先の事業の先行きが不透明だから(11.5%) |
| 2. 体力的に続けられないと思うから(53.6%) | 10. 自分にくる仕事が減っているから(27.3%) |
| 3. 収入が低いから(8.7%) | 11. 弟子、生徒の数が減っているから(0.0%) |
| 4. 収入が安定しないから(7.1%) | 12. 有期雇用なので続けられない(2.2%) |
| 5. 仕事の人間関係がきびしいから(4.4%) | 13. 育児など、家族の事情で(2.2%) |
| 6. 関連する他の仕事に移行したいから(2.7%) | 14. 介護など、家族の事情で(4.9%) |
| 7. 転職したい仕事があるから(1.6%) | 15. その他(1.6%) |
| 8. この分野の仕事が先細りだと思ふから(9.8%) | 無回答(0.0%) |

D. 仕事や生活に対する意識について伺います

問D-1 あなたのご自分の仕事について、どのように思っていますか。また、お仕事の環境について、どうとらえていますか。あてはまるものに1つずつ〇印をつけてください。

(〇印は1つずつ)【n=366】

	そう思う	まあそう思う	あまりそうは思わない	そうは思わない	無回答
自分の仕事は世の中から評価されている	12.3%	39.6%	38.3%	7.4%	2.5%
自分が持つ能力を十分活用することができている	15.3%	54.4%	22.1%	5.7%	2.5%
自分の仕事にプライドを持っている	51.6%	39.6%	5.7%	0.8%	2.2%
今の自分の仕事には満足している	21.3%	46.7%	22.1%	7.1%	2.7%
入ってくる仕事のうち、自分がやりたくないと思う仕事は断ることができる	22.7%	21.9%	26.8%	26.2%	2.5%
芸術創造には時間をかけることが不可欠といえども、いわゆる「ワーク・ライフ・バランス」(仕事と生活のバランス)を考慮して、稽古、リハーサルの時間の見直し、改革が必要だ	32.5%	39.1%	17.8%	5.5%	5.2%
自分のジャンルについては、これからも後継者が育っていくと思う	19.9%	33.1%	32.2%	12.6%	2.2%
仕事の場では、弱い立場にたたされることが多く、いわゆるハラスメントにあったことがある	9.8%	23.2%	34.2%	30.1%	2.7%
性別を理由に、仕事上で差別的扱いを受けることがある	2.7%	6.3%	24.3%	63.7%	3.0%

問D-2 あなたは、あなたの技術・技能を向上させるためのサポートとして何が必要だと思いますか。次のうち、特に必要と思うものを3つまで〇印をつけてください。(〇印は3つまで)【n=366】

1. プロのための研修が充実すること(48.6%)
2. さまざまな分野の舞台、映像制作に仕事として携わる機会があること(42.1%)
3. 芸能や映画などを安い費用で鑑賞できる機会が提供されること(36.9%)
4. 芸能や映画などの作品を発表、公開できる場が確保・充実されること(24.9%)
5. 稽古、練習のための場所が確保・提供されること(12.3%)
6. 研修、レッスン、稽古など「学び」に関する情報が提供されること(14.2%)
7. 技術・技能向上のための研修奨励金や受講料補助などがあること(43.7%)
8. 分野を超えて舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフ同士の交流の機会があること(33.9%)
9. その他(4.4%)

問D-3 あなたが安心して活動に取り組めるようになるために、何が必要だと思いますか。次のうち、特に必要と思うもの3つまで○印をつけてください。(○印は3つまで)【n=366】

1. 発表や公演、出演の機会が多くあること(11.2%)
 2. 仕事に関する情報提供など、就業に関する支援があること(18.0%)
 3. 報酬額や就業時間など仕事の条件が良くなること(67.8%)
 4. 効果的な研修、レッスンの提供など、技術・技能向上に関する支援があること(10.9%)
 5. 使いやすい練習場、撮影所などが十分確保されること(10.9%)
 6. 失業した時の補償が充実すること(18.0%)
 7. 仕事でけがや病気をした時の補償が充実すること(25.4%)
 8. 老後の生活のために年金制度が充実すること(29.0%)
 9. 公共劇場や音楽堂などが整備され、地域の文化拠点として機能すること(17.8%)
 10. 学校における芸能や映画、放送などの教育機会が十分組み込まれること(12.6%)
 11. 芸能や映画、放送など文化芸術全般に対する社会の理解や信用が深まること(28.4%)
 12. 芸能や映画、放送など文化芸術全般に対して国や自治体等による公的な支援が充実すること(26.2%)
 13. 業界団体などによる芸能や映画、放送などの活動を支援する活動が充実・強化されること(16.9%)
 14. その他 (4.1%)
- 無回答(2.7%)

問D-4 あなたの分野の協会、連盟、協議会などの統括団体には、どのような役割を期待していますか。次のうち、特に重要と思うもの3つまで○印をつけてください。

(○印は3つまで)【n=366】

1. 仕事の機会を提供すること(20.5%)
 2. 仕事の条件を有利に交渉する後押しとなってくれること(35.0%)
 3. 仕事の環境、制度の改善につながるような情報発信、政策提言をしてくれること(46.7%)
 4. 老後や万が一の時に備えて、有利な保険や年金に加入ができること (30.9%)
 5. 稽古、リハーサルの場所を提供すること(3.6%)
 6. 専門家としての研鑽・研修の機会を提供すること(26.2%)
 7. 仕事をしていく上で必要な仲間、人脈を得る場であること(29.0%)
 8. 仕事をしていく上で必要な専門情報を提供してくれること(37.4%)
 9. 次世代の育成に取り組むこと(44.0%)
 10. その他(2.5%)
- 無回答(2.2%)

E. あなたご自身のことについて伺います

問E-1 あなたの性別と年齢を記入してください。【n=366】

1. 男(84.2%)		
2. 女(10.7%)		55.1 歳
3. 答えたくない(2.5%)	無回答(2.7%)	

問E-2 あなたの最終学歴をお答えください。

(○印は1つ)【n=366】

1. 義務教育修了(0.0%)	4. 高専卒業(1.9%)	7. その他(4.4%)
2. 高校卒業(20.2%)	5. 短大卒業(4.1%)	無回答(3.0%)
3. 専門学校卒業(33.6%)	6. 大学・大学院卒業(32.8%)	

問E-3 (a) 現在、配偶者はいらっしゃいますか。

(○印は1つ)【n=366】

1. 配偶者あり(70.8%)	2. 配偶者なし(未婚)(18.3%)	3. 配偶者なし(離・死別)(7.9%)
		無回答(3.0%)

(b) お子さんはいらっしゃいますか。

(○印は1つ)【n=366】

1. 子どもあり(58.7%)	2. 子どもなし(38.0%)	無回答(3.3%)
-----------------	-----------------	-----------

(c) 介護が必要なご家族はいらっしゃいますか。(○印は1つ)【n=366】

1. 要介護者 あり(15.0%)	2. 要介護者 なし(81.7%)	無回答(3.3%)
-------------------	-------------------	-----------

問E-4 (a) 現在一緒にお住まいのご家族は何人ですか(あなたご自身を含みます)。

(○印は1つ)【n=366】

1. 1人(18.6%)	3. 3人(23.2%)	5. 5人(1.9%)
2. 2人(39.3%)	4. 4人(12.0%)	6. 6人以上(1.9%)
		無回答(3.0%)

(b) あなたは世帯主ですか。

(○印は1つ)【n=366】

1. 自分が世帯主(88.0%)	2. 自分は世帯主ではない(9.0%)	無回答(3.0%)
------------------	---------------------	-----------

問E-5 あなたのご家族やご親戚に舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフの方がいらっしゃいますか。あてはまるものすべてに○印をつけてください。

(○印はいくつでも)【n=366】

1. 父(1.9%)	4. 子ども(6.6%)	7. その他の家族・親戚(8.7%)
2. 母(0.3%)	5. 祖父母(0.3%)	8. 誰もいない(66.1%)
3. 配偶者(13.4%)	6. 兄弟姉妹(3.3%)	無回答(3.8%)

問E-6 現在、お住まいの都道府県をお答えください。

	都 道 府 県
--	------------

問E-7 あなたは事故など万一の場合や老後の暮らしに対して、何らかの備えをしていますか。
次のうち、あてはまるものすべてに○印をつけてください。（○印はいくつでも）【n=366】

- | | |
|------------------------------------|----------------------------|
| 1. 国民年金に加入している (41.0%) | 6. 株式や不動産などに投資をしている (8.7%) |
| 2. 厚生年金・共済組合などの公的年金に加入している (50.8%) | 7. 芸能関係以外の事業を行っている (3.6%) |
| 3. その他民間の年金に加入している (14.8%) | 8. 備えをする経済的余裕がない (14.5%) |
| 4. 生命保険や損害保険などに加入している (72.4%) | 9. まったく考えていない (1.1%) |
| 5. 貯蓄をしている (31.1%) | 無回答 (3.3%) |

* 芸団協や所属団体などに行なってほしい舞台、映画、放送、メディア、教授に関わる芸能実演家やスタッフの仕事環境改善に必要なこと、その他のご意見、ご要望がありましたら、何でもご自由にお書きください。

設問は以上です。ご協力大変ありがとうございました。

同封の返信用封筒でご返送ください。（切手は不要です）

調査票発送協力団体一覧（分野別区分）

■邦楽

一般社団法人 大阪三曲協会
 一般社団法人 関西常磐津協会
 一般社団法人 義太夫協会
 清元協会
 新内協会
 特定非営利活動法人 筑前琵琶連合会
 公益社団法人 当道音楽会
 常磐津協会
 一般社団法人 長唄協会
 名古屋邦楽協会
 公益社団法人 日本小唄連盟
 公益社団法人 日本三曲協会
 日本琵琶楽協会
 一般社団法人 沖縄県芸能関連協議会（琉球古典音楽）

■伝統演劇

公益社団法人 日本俳優協会（第一部）
 一般社団法人 人形浄瑠璃文楽座むつみ会
 公益社団法人 能楽協会
 一般社団法人 沖縄県芸能関連協議会（組踊）

■邦舞

公益社団法人 日本舞踊協会
 一般社団法人 沖縄県芸能関連協議会（琉球舞踊）

■洋楽

公益社団法人 日本演奏連盟
 公益社団法人 日本オーケストラ連盟
 日本音楽家ユニオン
 一般社団法人 日本歌手協会
 一般社団法人 日本作編曲家協会
 一般社団法人 日本シンセサイザープロフェッショナル
 アーツ
 特定非営利活動法人 日本青少年音楽芸能協会
 パブリック・イン・サード会（PIT）
 特定非営利活動法人レコーディング・ミュージシャンズ・
 アソシエーション・オブ・ジャパン（RMAJ）

■現代演劇・メディア

一般社団法人 全国専門人形劇団協議会
 名古屋放送芸能家協議会
 一般社団法人 日本映画俳優協会
 一般社団法人 日本芸能マネジメント事業者協会
 公益社団法人 日本劇団協議会
 日本児童・青少年演劇劇団協同組合
 日本人形劇人協会
 公益社団法人 日本俳優協会（第二部）
 協同組合 日本俳優連合
 一般社団法人 日本モデルエージェンシー協会

■洋舞

一般社団法人 現代舞踊協会
 一般社団法人 全日本児童舞踊協会
 一般社団法人 日本ジャズダンス芸術協会
 公益社団法人 日本バレエ協会
 一般社団法人 日本バレエ団連盟
 一般社団法人 日本フラメンコ協会
 一般社団法人 ベリーダンス協会

■演芸

一般社団法人 日本演芸家連合
 公益社団法人 上方落語協会
 関西演芸協会
 一般社団法人 関西芸能親和会
 講談協会
 太神楽曲芸協会
 一般社団法人 東京演芸協会
 公益社団法人 日本奇術協会
 日本司会芸能協会
 一般社団法人 日本浪曲協会
 ボーイズバラエティ協会
 一般社団法人 漫才協会
 一般社団法人 落語協会
 公益社団法人 落語芸術協会
 公益社団法人 浪曲親友協会

■その他（演出・制作等）

一般社団法人 日本演出者協会
 日本新劇製作者協会
 日本児童・青少年演劇劇団協同組合
 公益社団法人 日本劇団協議会
 公益社団法人 日本オーケストラ連盟
 一般社団法人 バレエ団連盟

■スタッフ（ライブ系）

公益社団法人 日本照明家協会
 公益社団法人 日本舞台音響家協会
 一般社団法人 日本舞台監督協会
 特定非営利活動法人 日本レコーディングエンジニア協会

■スタッフ（映像系）

日本映画監督協会
 日本映画撮影監督協会
 日本映画・テレビ照明協会
 日本映画・テレビ録音協会
 日本映画・テレビ美術監督協会
 日本映画・テレビ編集協会
 日本映画・テレビスクリプター協会

本調査にあたっては、芸団協正会員団体、映像関係団体、一般社団法人日本演芸家連合の事務局の皆様にご協力をいただきました。ここに改めて御礼申し上げます。

第10回 芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査

■プロジェクト委員会（実演家部門）

植田 克己	（公益社団法人日本演奏連盟）
上原真佐輝	（公益社団法人日本三曲協会）
大場 泰正	（協同組合日本俳優連合）
○桂 歌春	（公益社団法人落語芸術協会）
桂 文華	（公益社団法人上方落語協会）
◎高島 基明	（日本音楽家ユニオン（中部））
西川扇与一	（公益社団法人日本舞踊協会）
早川恵美子	（公益社団法人日本バレエ協会）

◎委員長 ○副委員長

■プロジェクト委員会（スタッフ部門）

石丸 耕一	（公益社団法人日本舞台音響家協会）
岩城 保	（公益社団法人日本照明家協会）
○小川 洋一	（日本映画撮影監督協会）
◎船引 悦雄	（一般社団法人舞台監督協会）
村越 義人	（日本映画テレビ照明協会）

◎委員長 ○副委員長

■専門委員

勝浦 正樹	（名城大学経済学部教授）
八木 匡	（同志社大学経済学部教授）

■調査協力

兼子 明子	（株式会社インテージリサーチ）
説田 梨奈	（株式会社インテージリサーチ）

●芸団協担当常務理事

福島 明夫

●芸団協事務局

米屋 尚子	（芸団協 実演芸術振興部長）
藤原 里香	（芸団協 実演芸術振興部）
井上 嵩	（芸団協 総務部）
君塚 陽介	（芸団協 法制広報部）

調査の設計、分析、報告書のまとめについては、上記の委員、協力者の皆様にご尽力いただきました。
またお名前は掲載しておりませんが、ヒアリングにご協力いただいた皆様にも心より御礼申し上げます。

本報告書は、2019年度文化庁「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」の一環として実施された「芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査」調査結果をまとめたものです。

＊本書の全部、または一部の内容の無断転載・複写および電子媒体への入力、固くお断りします。

第10回 芸能実演家・スタッフの活動と生活実態調査
—調査報告書 2020 年版—

2020年3月31日 発行

編集 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会〔芸団協〕
実態調査プロジェクト委員会

発行 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会〔芸団協〕
■オペラシティ事務所
〒163-1466 東京都新宿区西新宿 3-20-2 東京オペラシティタワー11F
Tel:03-5353-6600
■芸能花伝舎事務所
〒160-8374 東京都新宿区西新宿 6-12-30 芸能花伝舎2F
Tel:03-5909-3060
E-mail research@geidankyo.or.jp

調査協力 株式会社インテージリサーチ

デザイン・印刷所：合同会社スタジオ・ポリゴン

